

『都倫研紀要』第50集 別冊

# 都倫研50年の歩みと展望

東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会

『都倫研紀要』第50集 別冊

# 都倫研50年の歩みと展望

東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会

## 教養教育としての可能性

会長 及川 良一（東京都立三田高等学校長）

私自身は「倫社」を教わった世代である。昭和46年盛夏、自衛隊機と旅客機の空中衝突という衝撃的な事故が起こった霰石の空の下、全倫研岩手大会が盛岡で開かれていた。私は地元の高校に通う3年生だった。1年生の頃、先輩が部室に忘れていった岩手県の倫社教師編纂の副教材『人間』を眼にしてからというもの、2年の倫社の授業が待ち遠しかった。2年生になってからは『人間』をいつも手元に置いてページを捲っていた。友人の自殺を機にニヒリズムに傾斜し、もがき苦しみながら生きるものの意味や価値を求めていたあの頃の私の精神世界に、「倫社」はなくてはならないものだった。その心模様は東京での浪人生活まで変わらなかった。浪人生活を終えた時、現役時代考えていた理系とは180度異なる哲学科倫理学専攻に進路を変更していた。人生に少なからぬ影響を与えた科目となった。「倫社」の持つ別の意義に気づいたのは「教える」「担当する」側になってからだ。

12世紀から13世紀にかけて誕生した中世ヨーロッパの大学の教育内容はリベラルアーツ(自由七科)であった。言語三科の「文法」「修辞学」「弁証法」と数学四科「算数」「音楽」「幾何」「天文学」の七科である。リベラルアーツの位置づけは、官僚・法律家を養成する「法学」、聖職者を養成する「神学」、医者養成する「医学」といった専門教育に対する「一般教育」、「教養教育」だった。したがって、「実利性」や「職業性」、「専門性」を直接めざすものではなく、思考力を鍛錬し、情操を高め、非定型的、非日常的な事態に対する対応能力を身につけるための教育だった。

明治から大正にかけて、日本の高等教育においてリベラルアーツ型の教養教育を担ったのは、旧制高校だった。1949(昭和24)年、占領期改革として戦前の「帝国大学」「大学」「専門学校」「師範学校」「旧制高校」といった高等教育機関が新制「大学」に一元化され、旧制高校が担っていた教養教育は新制大学の教養課程に受け継がれることになった。この学制改革を主導したアメリカでは、すでにリベラルアーツ教育は「一般教育(general education)」と呼ばれ、第1、2学年の教育をさすようになっていた。この流れで日本の新制大学においても、大学1、2年の教養部で「一般教養」という教養教育が行われるようになった。

「一般教養」の意義は何か。昭和24年新制東京大学第1回入学式で南原繁総長は、「大学(the University)」の使命を「知識の統一」に求め、それを担う「一般教養教育」に新制大学の将来の命運がかかっていると見た。そして、「一般教養教育」が目指すのは「異なる専門分野を総合する力」、すなわち「個々の科学的真理をどこまでも探求し追求することではなくして、むしろすでに知られている知識を各分野、さらには全体にわたって総合し組織化」することであるとした。高度に専門的な知識や技術を文化や社会の全体構造の中で総合する力の育成を担うのが新制大学の「一般教養」だったのである。

しかし、「一般教養」の現状はどうか。大学はユニヴァーサル段階に入ったと言われる。少子化と大学定員の拡大の結果としての「全入時代」の到来し、大学教育は大きく変質した。1991年、大学審議会の答申「大学教育の改善について」が出され、「大学設置基準の大綱化」が打ち出された。一般教育と専門教育の科目区分を廃止して、大学は4年間を通じて一般教育と専門教育を自由に組み合わせた

カリキュラムを編成することになった。この「大綱化」によって、多くの大学が「教養部」をなくした。教養教育は切り捨てられ、高等学校の学び直しの「補習」、「初年次教育」、教養教育を欠いた専門教育が大学1年次に組み込まれるようになった。

教養教育の切り捨ては、「知識の統一」、「知の総合化」を担う最高学府としての大学教育の自殺行為ではないのか。米内光政海軍大将（後の内閣総理大臣）は、海軍と陸軍の教育システムの違いについて、海軍の場合は旧制中学（12歳～15歳）を卒業してから海軍兵学校に入る、陸軍の場合は、中学校卒業前の幼年学校から士官学校に進む、つまり非常に狭い視野の軍事の専門家にしかならないと言ったという。海軍側からの一方の言い分であり、割り引いて考えなければならないが……。南原繁は先の入学式の式辞で「原子力」は、「文化や社会の全体構造の中で総合する力」なくしては文明の崩壊と全人類の破滅を招かずにはおらぬ」と言い切った。

いずれも、狭い専門的知識しか身に付けていないゼネラリストの意志決定が、往々にして広い視野や大局観を欠く間違った判断に結びつく危険性に警鐘を鳴らしている。とりわけ、あらゆる分野でグローバル化が進み、サスティナビリティの実現が求められる現代においては、解決をせまられる問題群は複数の専門的諸領域にまたがっている。狭い専門性に閉じこもっては太刀打ちできない。高度に細分化され、総合的な見通しを失った専門知を結び合わせる総合力、想像力が求められる。それを担うのはリベラルアーツ＝教養ではないのか。

長々と述べてきたが、言いたかったのは「倫社」教育が高等学校教育における教養教育を担ってきたのではないかということだ。哲学や文学の古典に触れ、哲学・倫理思想やさまざまな言説を素養として身に付けるという意味の「教養教育」ばかりではない。「哲学」は、そこから分化していった諸科学を総合するものである。同様のことを「倫社」が担っていたのではないか。すなわち、他の教科・科目を総合する役割だ。これまでの学習歴の中で、教科・科目を通して身に付けてきた知識や知見を総合しながら倫理的課題に向き合わせ、自らの生き方の探究へと誘う役割を果たしていたのが「倫社」ではなかったかと考える。知を総合し対象化する営みは「学ぶ」ことの意義や意味を実感させ、更なる探究心を呼び起こす。このような「学び」こそが、人格の陶冶を促してきたのではなかったか。このような教科・科目は「倫社」「倫理」をおいて他にない。中学校の『道徳』とは決定的に異なる科目の特性である。「倫社」や「倫理」が必修から外された時、「生き方」を学ぶ科目を選択にすると何事かという強い思いが本研究会にあった。あの時、知の総合化を通じた人格陶冶の営みが選択であっていいのか、ともっと声を大にしてあげるべきだったと今さらながら思う。知識基盤社会化、グローバル化が著しく進む現代だからこそ痛感している。

学習指導要領改訂の度に、必修修単位数・科目ともに縮減が進む中、高等学校教育は「底が抜けた高校教育」と言われるまでになっている。学力や学習意欲の低下といった高等学校教育の質は、「多様化」以来ますます劣化し、もはや放置できる状態ではない。高校教育が無償化されたことと相まって、高等学校教育の「質の保証」は喫緊の課題である。今後どうあるべきか。「新しい時代における教養教育の在り方について」（中教審答申 平成14年）は高等学校段階における「教養教育」の必要性を、また「学士課程教育の構築に向けて」（中教審答申 平成20年）は、「専門分野を学ぶための基礎教育や学問分野の別を超えた普遍的・基礎的な能力の育成」に資する「教養教育」の必要性をそれぞれ指摘している。あらためて「倫社」や「倫理」における教養教育の可能性を検証し、新たな高等学校教育における「教養教育」の構築が急がれる。

# 目 次

|   |             |    |
|---|-------------|----|
| 巻頭言 「教養教育としての可能性」   | 会長 及川 良一    | 1  |
| I 都倫研の歩み  |             |    |
| 矢谷先生からの手紙   | 井上 勝        | 7  |
| 都倫研の発足について  | 酒井 俊郎       | 11 |
| 歴史の一端   | 増田 信        | 14 |
| 「都・全倫研の人々」と私  | 小川 輝之       | 16 |
| 思いつくままに — 哲学なき情況 —  | 杉原 安        | 21 |
| 都倫研の理念をどう生かすか・1980年代の都倫研  | 葦名 次夫       | 27 |
| 「都倫研」の思い出   | 鈴木 昭逸       | 31 |
| 今思いおこすこと  | 小笠原 悦郎      | 32 |
| 都倫研わが教育人生 — 第一部 都倫研世に問う自己表現活動の歩み — 回顧                           | 中村 新吉       | 34 |
| 都倫研わが教育人生 — 第二部 忘れ得ぬ師友群像 — 回顧                                   | 中村 新吉       | 41 |
| II ひとつこと・近況   |             |    |
| 倫・社と共に  | 浅川 熙信       | 49 |
| 先哲という世界遺産の次世代への継承   | 石川 久博       | 50 |
| 近況・偶感   | 鈴木 昭逸       | 50 |
| 私と都倫研と教員生活42年   | 平沼 千秋       | 51 |
| ひとつこと   | 紺野 義継       | 52 |
| ひとつこと   | 菊地 堯        | 53 |
| これまでの「都倫研」、これからの「都倫研」   | 小泉 博明       | 54 |
| 都倫研50周年に寄せて   | 多田 統一       | 54 |
| 水仙・菜の花・ひぐらし   | 小河 信國       | 55 |
| 今、記しておきたいこと 二言 三言   | 泉谷 まさ       | 56 |
| III 論文・実践報告   |             |    |
| 倫理・道徳教育の根本を理解するために  | ガエタノ・コンプリ   | 63 |
| 倫理科の位置づけと性格をめぐって  | 工藤 文三       | 73 |
| ジョン・ウィクリフ (John Wycliffe) に学ぶ                                   | 三宅 幸夫       | 74 |
| 新生児医療の現場から「生命倫理」を考えさせる「いのちのライン」の授業<br>— 東京都における「生命倫理」教育史の視座から — | 浅野 麻由・坂口 克彦 | 78 |

|                            |             |     |
|----------------------------|-------------|-----|
| 失われた「問い」を求めて               | 上野 太祐 …………… | 84  |
| 「倫理(学)」について再び考える           | 渡邊 洋 ……………  | 93  |
| 現代の高校生の意識                  | 成瀬 功 ……………  | 97  |
| 哲学的思考力育成のために               | 村野 光則 …………… | 103 |
| 宗教教育について                   | 渡辺 勉 ……………  | 107 |
| 必修「倫理」のための覚え書き             | 菅野 功治 …………… | 111 |
| 「倫理」と公民科教育法                | 河村 敬一 …………… | 116 |
| 生と死についての授業内容の一考察           | 小川 一郎 …………… | 122 |
| 倫理的内容の指導の焦点化               | 金井 肇 ……………  | 129 |
| <br>                       |             |     |
| IV 再録・昭和の巻頭言 ……………         |             | 143 |
| 矢谷芳雄、徳久鐵郎、中村義之、岡本武男、増田 信、  |             |     |
| 佐藤勇夫、寺島甲祐、酒井俊郎、御厨良一        |             |     |
| <br>                       |             |     |
| V 都倫研活動記録・「都倫研紀要」総目次 …………… |             | 155 |
| <br>                       |             |     |
| 編集後記 ……………                 |             | 197 |

# I 都倫研の歩み

# 矢谷先生からの手紙

元事務局長 井上 勝

## はじめに

都倫研は特異な研究会である。私は都倫研、全倫研の事務局を担当した後に全歴研の事務局を担当したが、その経験に照らしても都倫研は特異な研究会であると思う。

都倫研の特異さとは何であろうか。都倫研の特異さを思う時、今も私の記憶の中に鮮やかに甦る一つの光景がある。それはいつ頃のことか忘れたが、分科会終了後、会場校近くでTrinkenを行った折のことである。その席には会長も出席されていた。Trinkenがたけなわになった時、突然、事務局長が真顔になり、「先生、事務局がこんなに好き勝手に会を運営してしまっているのでしょうか」と会長に尋ねた。これに対して、会長は泰然自若、春風駘蕩の言葉そのもののようなにこにこした表情で、「それで何か不都合でもあるのかな、なければそれでいいんじゃないの」と答えた。傍らでこの会長の言葉を聴いた時、私は胸を熱くした。同席していた先生方も私と同じ思いだな、と先生方の表情を見ながら私は思った。

このような都倫研の特異さは、創立以来、多くの先生方の努力によって形成されたものと思うが、その多くの部分は初代会長の矢谷芳雄先生の研究（会）に対する考えや姿勢に負っているものように思う。

私は研究部を担当した時から研究会活動の様子を矢谷先生に報告したが、その都度先生からは研究会活動に対する温かく熱い思いの込められた手紙、葉書を頂いた。今数えると、その数40通程になる。今年は都倫研創立50周年であり、古い箱の中から先生の手紙類を取り出して再読し、先生の都倫研への思いについて改めて考えてみた。以下は矢谷先生の都倫研への思いについての私なりの理解である。

## 1 研究（会）について

矢谷先生が手紙等で度々言及されたことは、個人の研究の大切さであった。初めて頂いた葉書には「研究部は大変な仕事です。しかし、自分自身の研究は常に続けて下さい。お願い申し上げます」と書かれていた。先生が「自分自身の研究」を何より大切にされたのは、この研究の上に授業が成立する、と考えられていたからであると思う。授業は、学習指導要領の定める目標と内容をどのように教えるのかについて、一人ひとりの教員が眼前の生徒の実態に即してその指導方法を工夫することによって、初めて成立するものである。眼前の生徒の実態に即した指導方法、眼前の生徒の課題意識に応える授業を工夫することが、教員にとっての「自分自身の研究」である。平成4年には「体罰肯定のような判決が出たり、授業の多様化案を文部省が出したり、いろいろむつかしくなりましたね」と書かれた葉書を頂いた。生徒の実態に即するのではなく、逆に、各教員の思い込みに即するよう生徒を指導しようとする時、体罰が生じる。また、多様な生徒の実態に即した多様な授業は授業を担当する教員一人ひとりの研究、工夫によって展開されるものであって、文部省が指示するものではない。これが先生の言わんとされたことであると思う。

生徒の実態に即した授業の工夫のための個人の研究の上に都倫研の活動が成立するものであるならば、公開授業や研究発表を軸とする研究例会、個人の研究を交換し普遍化し合う場としての分科会という都倫研の活動の特長、特異さは、そこから自然と生まれて来ることになる。

先生は、都倫研とは生徒の実態に即した授業の工夫のための研究会、他の先生方の経験から互いに



学び合う場、喩えて言えば、「同朋同行」のような集まりと考えられていたのではないかと思う。先生は、特に、先輩の先生方の経験から若い先生方が学ぶことの大切さを常に願っておられたのだと思う。ある時に頂いた葉書には「懇親会に岡本君、金井君が参加して下さいたことは何よりでした。先輩が参加してくれることは本当に嬉しいことです」と書かれていた。

## 2 事務局について

矢谷先生の思い描く都倫研が生徒の課題意識に応える授業を工夫、探求する場であるとするならば、研究会の運営、活動の中心は生徒の立場に最も近い先生方、事務局が担うことはごく自然なことである。このように先生は考えられたのだろう。先生は事務局中心の研究会活動、運営のもつ魅力と、それに伴う事務局が背負う大変さをよく理解されていた。研究例会や大会の後には必ず事務局を慰労する慈愛溢れる葉書を頂いた。平成4年夏の全倫研大会の後、「ごていねいなお手紙をいただきありがとうございます。盛会裡に大会を終了なされましたこと、おめでとう存じます。酷暑の中でしたので、本当に御苦労さまでした。どうぞお疲れの出ませぬようご自愛の上後整理に当たって下さい。お願い申し上げます」という葉書を頂いた。

反面で、事務局の活動や事務作業については、先生から厳しい指摘、指導を頂いた。例えば、「ちょっと気のついたことを。北海道大会の会場の下のあとにさっそく郵便番号を記入して下さい。会計決算書には会長、事務局長の氏名の後にも㊟をつけて下さい。会計監査だけでなく、都倫研も全倫研も両方とも」というような指摘である。先生の厳格な指摘、指導の意図するところは、都倫研、全倫研を他の研究会の範となる研究会にすること、事務局の先生方を他の教員の範となる教員に育てることであったと思う。それ故に、その厳格さには常に慈愛の思いが込められていた。ある年の大会案内状の案文に「御挨拶」、「ご案内」等統一性のない表記があり、先生から統一的な表記に改めるよう指導を頂いた。直ちに訂正した案文と共にお詫びを申し上げたところ、次のような葉書を頂いた。「只今お手紙拝見いたしました。少しきつくひびいたようで、恐縮しています。貴君がりっぱな管理者になってほしいための老婆心ですのでご了解ください。実は私が教育庁に居りました時、各校からの報告書を見ているうちにきちんと出来ている学校、でたらめな学校がはっきりわかるようになったので、校長時代、幹部教員に話したくせです。期末整理と全倫研大会の準備でご多忙のこと、くれぐれもご自愛の程を。さようなら」。これは先生の事務局のすべての先生方への思いであったと思う。

## 3 「倫社」について

矢谷先生は、高校生の生き方に係る科目「倫理・社会」（倫社）に、他の教科、科目にはない、高等学校教育における特別、且つ、重要な役割を課していたと思われる。その特別で重要な役割とは、「倫社」の授業を通して生徒一人ひとりの課題意識に応えること、一人ひとり生徒の内面から意欲や能力を引き出すことである。先生は、その役割を「倫理・社会」（倫社）が果たすためには個人の研究と共に都倫研という研究会が不可欠である、と考えられていたことと思う。先生はいつも「倫社」という表現を用いられた（実際の表記には「」はない）。「倫社」は、このような、先生の思いの込められた呼称であると思う。

昭和53年の学習指導要領の改訂を皮切りに、以後、「倫理・社会」は「倫理」となり、また、社会科から公民科へと教科名も変わり、「倫社」の役割も微妙に変化していった。公民科の設置が告示された際、先生は葉書で「公民科で駄目で倫社になったのです。歴史はくりかえします。倫社を忘れないで研究を積んで下さい」と指示された。また、先生は、これらの一連の変化によって、都倫研、全倫研

の役割や存在自体が変質しつつあることにも気づかれ、心配されていたようである。平成4年に頂いた葉書には「近年は（全倫研夏季大会の）出席者が三百人をわるのですね。その辺りの理由はどこにあるのですか」、「倫社もまがり角に立ちました。大変な時です。どうぞ頑張ってください」と書かれていた。その後も「いま研究会は大変なとき」というような「倫社」を心配する言葉の書かれた葉書を何度も頂いた。

当時の私は「倫理・社会」創設の事情や、戦前の公民科と戦後の社会科の歴史や両者の関連について全く無知であり、上記のような先生の指示の真意を理解できなかった。近年、この辺りの歴史を調べ、先生の指示の意味、その重要性に不十分ながらも気づかされている。都倫研も公民科から社会科へ、社会科から公民科へという教育課程の変化、「倫社」の歴史について検討し、共通理解をもつことが、今後の活動に是非必要である、と感じている。

#### 4 都倫研への思い

都倫研の設立には多くの困難と障害があった。それらを中心となって乗り越えて設立にこぎつけた矢谷先生にとって、都倫研は我が子のような存在であったと思う。平成6年に頂いた葉書には「倫社関係がそれぞれ頑張ってもらえますこと、自分のことのようにうれしく思います」と書かれていた。

晩年の先生はご自身と奥様の病気やけがとの戦いの連続であったが、それらの困難を押して理事会や研究例会に足を運ばれた。理事会等の案内状を送付すると、先生からは「前略 大会も迫り、日夜御多忙のことと存じます。本当に御苦労さまです。よろしく願いいたします。ところで、私、不覚にも駅の階段で踏みはずし、左膝を痛め、目下外科医院に通って居るところです。大会には間にあいそうもありませんので、残念ながら欠席致します。会長さんや各位にくれぐれもよろしくお伝えください。御盛会の程お祈り申し上げます」というような、誠に鄭重な返事を毎回頂いた。

先生の都倫研への思いの一つに、事務局の基金の設置があった。基金の設置について、次のような提案を頂いた。「事務局の費用のための基金のことですが、大学の運動部などで、やめていく先輩に少しずつ寄付してもらったり、御卒業の時に、即ち退職金をもらえる時に、一万円づつ寄付してもらい、先輩たちにたのむ。そして、二年か三年続ければ百万を超えるでしょう。……(略)……年五%以上でまわせば、十万くらいの事務局員費が出るようになるのではないのでしょうか。そうした面でくわしい方も居られるのしょうから、相談されて始められたらよいと思います。貴殿の時には使えるまでには行かなくても、後に続く者は大助かりでしょう」。

この提案は、先生が事務局の台所事情を正確に理解されていたことを示すものである。また、研究会には必ず消長があるので、順風の時期にこそ困難な時期を想定してそれに備えることの必要性を指示されたものであろう。私の力不足のため、残念ながらこの指示に応えることができなかった。今も悔やまれることの一つである。

#### 5 最後の葉書

矢谷先生から最後に葉書を頂いたのは平成6年の年末であった。先生はこの年の10月に奥様を亡くされた。そのお悔みの手紙に対する返礼であった。そして、先生も、奥様の後を追うように、翌年の5月5日に逝去された。先生の訃報に接したとき、私は取り返しのつかない失敗をしたことに気づいた。

私は平成7年4月初めに全歴研の事務局長を務めることが決まったが、正式の就任は5月末の理事会の承認を経てからであった。このため、理事会の承認の後、先生に報告するつもりであった。しか

し、報告に先立って先生は逝去され、永遠に報告することが出来なくなってしまった。何故、4月初めに報告しなかったのか、と悔まれた。

私が全歴研の事務局長を引き受けた理由の一つは、都倫研創立（都社研からの独立）の際に都歴研、特に成田会長に尽力を頂いたことを承知していたからである（詳細は『都倫研紀要』第30集参照）。会長校に事務局の引き受け手がないという事情もあり、私が全歴研の事務局長を引き受ければ、都倫研創立の際に受けた恩に多少なりとも報いることができるのではないかと考え、事務局を引き受けたのである。都倫研創立の際の事情を都歴研の先生方も微かに継承、承知していた。もし、この報告をすることが出来たならば、先生はきっと喜ばれただろう、と今も思っている。

私は通夜に参列し、先生に御礼とお別れを申し上げた。先生の葬儀の日、私は修学旅行の引率のため沖縄へ出発した。

## 終りに

組織には寿命があるといわれる。現在の私は学校教育の部外者であり、部外者の立場から見る限りであるが、都倫研を取り巻く環境は50年前と現在とでは大きく変わったように見える。ネット上に学習指導案が公開され、教材等も受験・学習産業によって開発、市販されており、これらを利用すれば容易にそこそこの「授業」をすることができよう。このような現実からすれば、教科の研究会の役割は乏しくなったようにも見える。

しかし、既述のように、授業とは生徒の実態に即した工夫によって初めて成立するものであり、仮令ネット上に公開され市販された教材等を利用するにしても、それらを眼前の生徒の実態に即したものに改変、工夫すること、すなわち、個人の研究の積み重ねが必要ある。そして、個人の研究を交換、普遍化し合い、互いに切磋琢磨する場としての教科の研究会も、依然として必要なのだらうと思う。

また、（学校）教育は instruction（≒知育）と education（≒徳育）との均衡の上に成立するものであるが、受験・学習産業の隆盛によって instruction だけが教育であるような錯覚が世の人々だけでなく、一部の教員や教育関係者の中にも生じているように思える。現在の学校教育は受験・学習産業に instruction の多くを奪われ、この結果、学校には education のみが残存するような事態が生じている、或いは、逆に、学校が education を棄て、受験・学習産業化を目指す事態も生じているようにも見える。

天野貞祐氏は「知育の徳育性」を強調したが、（学校）教育は知育か徳育か、そのどちらか一方に偏しては成立しない。前述のように、矢谷先生は「公民科で駄目で倫社になった」と「倫理・社会」、「倫社」の意義を指摘されたが、その意味は、「倫理・社会」、「倫社」は知育と徳育との統合の要として設置されたものである、ということであろう。学校教育が知育と徳育の一方に引き裂かれ、偏しようとしている現在、両者の統合のために「倫理・社会」、「倫社」の存在意義、その授業の在り方、そして、それを支えた都倫研の理念、活動等の再検討が、もう一度必要であるように思う。

都倫研創立50周年の今年は、次の半世紀への出発の年に当る。次の半世紀における都倫研の在り方を考えるために、「倫社」、都倫研に対する矢谷先生の考え、姿勢、そして、授業と個人の研究に対する思いについて学び、現在の状況に即して検討することは意義のあることと思う。生徒を眼前にして授業を担当している先生方による検討を切望する次第である。

# 都倫研の発足について

元会長 酒井 俊郎

## (1) 都倫研の発足

### ①「道徳」の時間の開設

昭和32年、都教委は、「生活指導の手引き」を作成することになり、小・中・高別に分科会を構成して、4月から作業を開始した。

一方、文部省は、教育課程審議会の答申に基づき、昭和33年4月から、小・中学校に「道徳」の時間を設けることになり、その指導要領を作成するための委員会を、昭和32年9月に発足させた。

このような状況を反映して、都教委が計画した「生活指導の手引き」は、「道徳教育」と名称を変え、年度末に刊行された。

わたしは、当時、品川区の荏原六中に勤務していたが、都教委の「手引き」には、中学校の分科会の編集委員として参加し、また、文部省の指導要領の作成委員会にも、中学校の委員として参加することになった。

なお、都教委の「手引き」の高校の分科会の編集委員に、当時、玉川高校の教頭をしておられた武藤一良先生がおり、大学の先輩ということもあって、いろいろとご指導をいただいた。

### ②勉強会のスタート

#### 武藤先生の提案

「道徳」の時間は予定通り実施された。しばらくして、武藤先生からお電話をいただいた。「この流れは必ず高校にやってくる。今から勉強会をやっておく必要がある。その世話係をやってほしい」ということであった。

そこで、中学校に勤めて、実際に「道徳」の時間に取り組んでいる仲間3～4名と、高校に勤めていて、道徳教育に関心をもっている仲間3～4名に呼びかけて、勉強会を開くことにした。

勉強会は、主に茗溪会館で、年に2～3回、3年間くらい開いたと記憶している。なお、わたしは、昭和33年4月から立川高校に勤務することになった。

#### 勉強会で取り上げたこと

勉強会で取り上げたことの一つは、中学校における道徳教育であった。当時、「道徳」の時間の特設は、「修身教育」の復活であるということで、日教組を中心に、反対運動が強かった。

わたし自身も、修身教育には大反対で、委員を引き受けるときも、もしそういうことであつたら、内部で大いに反対する覚悟であった。幸い中学校の委員会では、全くそのような動きは見られなかった。

そして、例えば、指導要領の「内容」の冒頭には、「道徳教育の内容は、教師も生徒もいっしょになって理想的な人間のあり方を追求しながら、われわれはいかに生きるべきかを、ともに考え、ともに語り合い、その実行に努めるための共通の課題である」とあり、指導要領の全体が呼びかけの形になっていること。

あるいは、最も注目されたいわゆる愛国心については、「国民としての自覚を高めるとともに、国際

理解、人類愛の精神をつちかっけいこう。……しかし、愛国心は往々にして民族的偏見や排他的感情につらなりやすいことを考えて、これを戒めよう。そして、世界の他の国々や民族文化を正しく理解し、人類愛の精神をつちかひながら、お互いに特色ある文化を創造して、国際社会の一員として誇ることでできる存在となろう」となっていること。

これらのことから、わたしは、「道徳」の時間を、新しい民主主義のモラルを示したものと考えて、積極的に受け入れることができた。そして、今でも、この趣旨を、高等学校における道徳教育にも生かしていかなければならないと考えている。

勉強会で取り上げられたもう一つの柱は、高校生の生活や意識の実態についての話し合いである。この点については、いつも活発な意見交換ができたように思う。

さらに例えば、すでに白鷗高校の岡本先生は、高等学校における道徳教育について研究発表をしておられた。そうした研究が取り上げられたことは言うまでもない。

### ③都倫研の発足

#### 「倫理・社会」の設置

昭和35年に、高校に必修科目として「倫理・社会」が設けられることになった。間もなく、武藤先生の呼びかけで、上記のグループが、池袋の喫茶店で、矢谷先生にお目にかかり、そこで「都倫研」の結成が決まったのである。

それから、このメンバーを中心に、放課後忍岡高校に集まり、夜遅くまで仕事をし、ラーメンを一杯食べて解散するという会合が、何回続いたろうか。やがて、昭和37年11月に、忍岡高校を会場に、「都倫研」は発足の日を迎えることになる。

#### (2) 都倫研が目指したもの

年一回、「お祭り」のような全国大会を開いて事足りりとするような研究会にはしたくない、というのが共通の願いであった。もちろん充実した大会を開くことは大切なことである。しかし、それは、結果として充実した全国大会が開かれるということであって、そのために、大半のエネルギーを費やすということではない。大切なことは、日頃から充実した研究活動を積み重ね、一人一人が教師としての実力をつけることである。

このような考え方から、年に数回の研究会を開き、その内容を、①公開授業、②研究発表、③講演、とするスタイルが次第に定着していった。特に①の公開授業は、小・中学校の研究会では比較的多く取り上げられているが、高校では少ない。この点を重視したことに、都倫研の特色があると言えよう。現在においても、このような内容の研究会が継続している点に、わたしたちは、大いに誇りをもってよい。

さらに、主に夜分、有志が集まってテキストを読み合い、じっくり話し合うような研究活動は、おそらく他に例をみないであろう。

#### (3) 民間研究団体の活躍

もう一つ言っておきたいことがある。それは、わたしたちにとっては当たり前のことであるが、例えば「都倫研」のような民間の研究団体が、活発に活動して、教育に大きな貢献をしている国は、世

界にあまり例がないということである。

例えば、アメリカの場合、公立学校の教師 (teacher) は、授業をするだけである。学校の管理・運営的業務や、学年・学級の経営、生徒指導などにはほとんど関わることはない。ましてや、放課後、勤務時間外に研究活動をするようなことはない。いわゆる先進国の学校の任務は、「知育」であるから、概ねそのような状況であると考えてよい。

わが国の場合は、小・中・高校を通じ、ほとんどすべての教師が、日常的に研究活動を行い、その成果を発表し共有して、教育の発展・向上に努めている。そしてそのことが、わが国の教育の水準を高め、国際的に極めて高い評価を得ているのである。

わが国の教育の現状については、いろいろな問題が提起されている。真剣に対応しなければならぬ。にも拘らず、わが国の教育が世界のトップクラスであることは、疑う余地がない。そして、民間研究団体の活躍が、このことに大きな貢献をしていることに、わたしたちは、大きな自信と誇りをもっている。

## 歴史の一端

元会長 増田 信

佐藤勇夫先生、丸山三郎先生、その後私が事務局をお預かりしました。まず都倫研を発足させて、この次は全倫研だと会長の矢谷先生は深く期しておられたと思います。当時、道徳教育反対だとか、したがって倫社という課目は反対だという勢力がありました。そこで慎重に秘策をねって、全倫研の組織をつくらなければならないということがあったようです。

5月のころに、白鷗高校での文部省の新しい指導要領の説明会に、全国の代表の方が集まりました。その時に、既にお膳立てが出来ていたのだと思いますが、お昼の時間に集まるようにということで、50人位が入る特別室に行きました。30人位が居られ、そこで全倫研の規約・役員の選任など暇疵なく行われ、全倫研が創立されたことを記憶しています。

事務局をお預かりした際に、夏の全国大会の講演講師をどなたにするかが問題になり、話している中で田中美知太郎先生がいいだろうと煮詰まってきました。当時は全倫研は発足早々のことで、都倫研とほとんど一体的に活動していたと思います。

先生はギリシャ哲学の碩学で、ギリシャ哲学を日本語の哲学に直接結び付けた方でした。当時は、小泉信三先生の後を受けて、文芸春秋の巻頭の筆頭論文を書いておられました。天下に名声が伝わっている国民的思想のリーダーのお一人だったと思います。そんなことで、田中先生なら、矢谷先生が私が頼んでくるということで、翌日、京都に向かわれました。お昼前だったのですが訪ねて行かれた所、先生は外出中で、奥様がおられました。矢谷先生は奥様と旧知の間柄でした。というのは、矢谷先生が東京文科大学倫理学科に在籍の頃に、田中先生が法政大学哲学科で教えておられました。また時間講師として文理大の哲学科に、ギリシャ語を教えに来ておられました。

矢谷先生は、当初学究を志していましたので、ギリシャ語を是非習いたいと直談判した所、家に来いということになり柿木坂のお宅に行っておられました。そういう経緯で、奥さんが顔を憶えていて下さっていたということで、先生は非常に感激されていました。田中先生はご承知のように、小泉先生と同じように、アメリカの焼夷弾で顔に大変な怪我をされていました。その関係で身体を大事にされていて、夏は軽井沢に隠れるんだけど折角矢谷が来たから断るわけにはいなくなった、とのことで承諾されたというお話でした。

田中先生の講演（1967年 全倫研第4回研究大会）ということで、テープレコーダーを持ち込んでテープの裏・表に入れました。一人で字に起こしまして、全倫研紀要に記念論文として掲載しました。これが私にとって一つの思い出の仕事になりました。

数年たって田中美知太郎全集が出版して、徳久鉄郎先生（第2代会長）によれば、その中に全倫研大会での記念講演が載っているとお話でした。私はどのように載っているか早速見ました所、私の方でかつてにつけた小見出しの題はすべて省かれていましたが、速記はだいたいそのままでした。

先生はおしゃべりを一段落させると、デーとおっしゃる。それでということなんでしょうね。それがテープに見事に入っているのです、私はその通り“デー”と入れたのです。全集に、この講演の速記が載っていますが、デーは省かれていました。これは私が講演に侍って、碩学のお声を尺寸の間に聞

いた、という思い出であります。また人の全集にあぐらをかきわけではありませんが、私のエネルギーがその全集に、ほんの少しだけ入っているという思いがしています。

事務局にいまして、私は徳久鉄郎先生と和辻夏彦先生に大変お世話になった思い出があります。和辻先生は当時私学会館の理事をされていまして、講演会を行う時にいろいろ面倒をみて下さいました。講師の依頼について、和辻先生に一声お願いするとすぐに向こうに通じてOKになる。和辻哲郎先生のご息だけのことがあるなと思いました。鎌倉の東慶寺の管長さんの話を聞きに行きまして、西田幾多郎先生のお墓を拝んで、それから鈴木大拙先生の文庫を見学させて頂きました。これなども和辻先生の賜物です。私に関った当時の会長の矢谷先生、副会長の徳久先生・和辻先生についての思い出を語らせて頂きました。

【後記】この小文は全倫研の第一回追弔の会で、ぼくが挨拶したものを録音から杉原安先生が文字に起こして下さいました。先生に厚く御礼を申し上げます。



# 「都・全倫研の人々」と私

元会長 小川 輝之

## 1 入会のころ

都立高校に勤めはじめたころは、大学で社会学の研究を進めていた。夜間高校に勤務することが希望だったため、最初の勤務校は定時制課程であった。そこでは社会科の全ての科目を担当した。私の前任者は全日制の先生で、勤務校では非常勤講師の佐藤先生（故人）でした。先生は主として日本史を教えられていたが、時々「倫理・社会」も担当された。私の入都資格は「倫理・社会」だったので、先生は専門外（社会学）の私に「都倫研」という研究組織があるのでそこで勉強した方がよいと、入会を強く勧められた。当時私は、できれば大学の教員としてやっていきたいと考えていたので、先生のご好意をありがたく受け取りながらもどうしようかと悩んでいた。

そんな時に、研究例会の案内状が届き、一応伺ってみようかということになった。社会人経験（大学院に通いながら世論調査会社の嘱託をしていた）があるとはいえ、新採の身分でもあり教務主任に伺いを立てると、「勉強して来い」ということだったので、出張手続きを済ませ生徒への自習課題を出してから、会場校へと向かった。多分秋の例会だったと思う。授業を参観し、高名な講師の方の講演を伺い、夕方には定時制の授業のために帰校した。公開授業や研究発表・協議など数十名の先生方が熱心に協議をされているのを目の当たりにして、現場の先生が授業づくりに取り組んでいる真摯な姿に深い共感を覚えた。東村山高校での例会の時だったろうか、例会後の、いわゆる「トリンケン」の場で、事務局長の村松先生（故人）が「君は入会したばかりだが、社会人経験もあるので事務局に入ってもらおう」とおっしゃられた。大学で勉強を続けており、弟の学費を捻出するなど生活のためと考えていた教員生活に、その後ある方向性を与える出来事となった。

後で分かったことであるが、村松先生は私が高校生活を過ごした高等学校の名物校長先生のご子息であった。私が3校目に勤務した多摩地区の高校の近くに校長先生のお住まいがあった。時々校長先生のお顔を拝見していたが、まさか北海道で公立高校の校長先生だったあの“エンタツ”さんだったとは夢にも思わなかった（当時私たちは村松校長を親しみを込めてそう呼んでいた。示唆に富んだ簡潔明瞭で歯切れのよい話は私たち生徒達には評判の講話だった）。村松先生は父上の校長先生とその風貌がよく似ていらっしまった。校長としての手腕を発揮される前に亡くなられたのは誠に残念なことであった。

## 2 工業高校のころ

定時制高校から昼間の工業高校に異動した。なぜか異動先には前任の「政治・経済」の先生がおられた（5月の連休明けに異動）。私はその代わりのように、「倫理・社会」の先生は別にいらっしまった。吉澤先生（故人）でした。私は主として「政治・経済」の授業を担当し、先生からは倫理、哲学に関するご自身の著書や論文等を頂戴し、さまざまなお教示をいただいた。このころは大学には行っていなかったが、自分の研究はそれなりに続けており論文をまとめて、いずれは大学に戻りたいという希望を変えてはいなかった。

吉澤先生には勉強家の教え子がおり、先生と同じ「倫理・社会」の教師だった。その方は細谷先生

で、吉澤先生と細谷先生、それに私も加わった3人で毎週土曜日に、墨田川高校で勉強会を開いた（この頃からいろいろなグループ間で原典の輪読会が開かれ始めた）。ゲーテの『ファウスト』を原語で読んだり、クラークスの『人間学みちしるべ』や風間敏夫の『碧巖集』などを読んだりした。特に、ドイツ語は大学院の時の第2外国語で大変苦労したので、先生方に導かれて何とか後についていったように記憶している。でも、土曜日の勉強会は楽しかったし、少しは高校の「倫理・社会」の先生に近づいたような気にもなった。今考えると、この時期が3人にとっては一番いい時期だったように思われる。

### 3 新設高校のころ

住宅が神奈川県から埼玉県に変わったため、学校を異動することになった。当時の異動はなかなか大変で、やっと多摩地区の新設校に移ることができた。

私にとっては3校目の学校である。担任の経験は定時制時代の1～2学年の2ヶ年だけで、一度卒業生を出してみたいと考えていた。また、新設校でもあり、是非担任を持たせてほしいと強く希望した。当時の管理職は飯村校長と平塚教頭（共に故人）だった。「都立の星」になる学校を造ろうと燃えていた教職員との出会い、そして何よりもこの二人の管理職との邂逅が、私を大きく変えることになった。生活のための教職から本当の意味での高校教師へと変貌を遂げる契機となったからである。

開校2年目に異動した私は、1回生の2年の担任に配置され7人の先生方と学年団を組んだ。新設校の最初の学年でもあり、先生方は意欲的に生徒指導や教科指導に取り組んでいた。生徒指導のいわゆる“壁”になるベテラン教師や体全体で生徒にぶつかる若手教員、モーニング先生（朝補習）や放課後の補習に取り組む先生などすぐれた教員や献身的な教員など枚挙に遑がないほどであった。私は若手教員の一人と〈文化祭〉の担当を命じられた。新設校における理想の文化祭を創出することが課題であった。1年間研修日（いわゆる週1研修）を返上して課題に取り組んだ。そのときにつくられた基本的な考え方、すなわち「日常の学校生活の延長線上に行事がある」という基本理念は今でもその学校の生徒指導上の一理念となっている。

1回生の卒業式が終わった後の学年の解団式の際、青梅の吉野梅郷で詠んだ「春嵐旅立つ子らの末案じ」の俳句は、当時の私の心境をよく表している。

新設校には、教科指導でも力のある教員がたくさんいらっしゃった。全・都歴研や全・都地研、全・都英連、全・都国研、都数研などのメンバーの方々だった。他教科に学ぶとともに他教科から刺激を受けることも多かった。そのような環境の中で、私も「倫理・社会」の公開授業を行なうことを決意した。校内での授業公開（保護者や校内の教職員対象）は年に1度行なわれていたが、外部の方々を対象とした授業公開は初めてだった。諸先生からのご批判を踏まえて自らの授業を振り返るとともに教材研究の必要性を再確認する機会ともなった。教材研究に関しては、金井、伊藤（駿）、中村（佑、故人）、小川（一）、小笠原、坂本先生達のご推挙で、たくさんの原稿を書かせていただいた。教科書執筆の機会も得た。私の倫社教員としての資質形成に大きな役割を果たしたことはいうまでもない。

社会学を専門としてきた私にとって、入都資格は確かに「倫理・社会」であっても、「倫理・社会」の社会の一部に専門の社会学があるだけで他は殆ど倫理・哲学の領域であり、私にとって一層の研修を必要とするものばかりであった。このころの私は自らの社会学の研究課題より、あるいは殆どの時間は「倫理・社会」の教材研究に費やす毎日であった。吉澤先生や細谷先生との勉強会をはじめとし

て、多くの先生方の研究発表や公開授業等を通じて、自らの力量不足を強く感じながらも、自分自身の資質向上に努め、ようやく高校の「倫理・社会」の先生に近づき始めていた。村松事務局長に事務局入りを求められてから、金井、中村（新）、坂本、杉原事務局長の下で事務局の仕事を担当した。会の運営は勿論のこと、「倫理・社会」の指導内容や指導法など多くのことを学ばせていただいた。

既に大学で社会学を研究しようという気持ちがなくなっていた。手元にあった社会学の文献は、苦勞して購入したグンナー・ミュルダールの『An American Dilemma』やヴァンダー・ザンデンの『American Minority Relations』など数十冊の原書を除いて社会学等の全ての文献を古本屋に売り払ってしまった。高校の「倫理・社会」の教員になるための私なりのけじめであり決意表明でもあった。中には当時1冊1万円の評価をいただいた雑誌も含まれていた。

#### 4 事務局長のころ

杉原事務局長の時に次長をしていたので、次に私の順番が来たようだった。最終的には選考会議が開かれて決まった、と伺っている。組織としては大事な手続きである。会長先生は岡本、増田両校長であった。学校経営者として、さらに倫理・道徳教育のリーダーとしての高い識見と多くの実績をお持ちの方であった。教員としてお仕えすることがなかったので、両先生から学ぶ千載一遇の幸せな機会を持つことができた。増田先生の私的勉強会にもお誘いいただき教育を語り合い、専門分野を異にする諸先生方の研究成果のご講話を受けることができた。振り返ってみると、両先生の側で研鑽を積む機会を得るなど、私の教員生活は実に恵まれていた、と思っている。

「倫理・社会」の教員としては半人前の事務局長として、最も留意したことは多くの先生方に例会や大会に参加をしていただき、充実した研修会を設営することであった。事務局の先生方は研究熱心で、しかも先進的な授業づくりに取り組まれていた。したがって、例会や大会でのテーマ設定も、それにふさわしい講演講師を選定することも容易に進めることができた。私は先生方が全国や都内から収集した情報を整理して、適宜助言者や研究発表者を選び依頼することだけに専念すればよかった。

齋藤先生や佐々木先生、御厨先生（いずれの方も故人）などのベテランの先生からのご教示だけでなく、新進気鋭の及川先生や葦名先生などから独創的で発想豊かな提案をいただいたものだ。会の企画・運営にとってどれだけ有益であったか計り知れない。昭和54年の全倫研秋季大会の前夜白鷗高校近くのホテルで及川先生と二人で徹夜をして領収書作りをしたのも数十年前のことである。

都倫研で思い出深いのは年度最後の例会のことである。通常は公開授業、研究発表、講演の3本柱で、学者の方々の講演が多かった。都倫研は管理職も一般の教員も分けへだてなく共に学ぶ場ではあったが、公式的に先輩が後輩に語りかける場はなかった。昭和37年の都倫研設立以来既に16年経過しており、将来的に多くの仲間が退職の日を迎えることになる筈である。そのときに、全ての仲間が後輩を前に講演という形で最後の「倫理・社会」の授業をしてはどうかというのが私の考えであった。確か、最初の講演者が佐々木先生で、直近は平成22年度の佐良土先生の講演であった。

全倫研に関しては、杉原先生に設営していただいた奈良大会を運営し、500人を超える参加者があった北海道大会を設営することができた。2回目の奈良大会は私が会長のときに設営し、海野会長が運営した。はじめの奈良大会の事前打ち合わせの時に東大寺のご住職のはからいで、奈良県の事務局長の中川先生（故人）と岡本会長、杉原前事務局長の5人で改修中の大仏殿の屋上から奈良の町並みを一望したことが懐かしく思い出される。盛会だった札幌大会で増田会長先生からお褒めの言葉をいた

だいたことも忘れられない。また、秋季大会は都立高校2校にお願いした。全国大会でも都倫研の例会にしても会場校を探すのは大変なことであるが、先生方には喜んで会場校を引き受けていただいた。中でも小笠原先生がいらっしゃった日大二高では7回全倫研の大会を開催した筈だ。困ったときの日大二高頼みだった、ように思う。小笠原先生の教師としての力量と校内での高い評価があつてのことだと推察している。並みの教員では決してできない所業である。都立でも白鷗、上野、航空高専にお世話になることが多かった。所属校の倫理の先生の使命感と献身によるものだと感謝している。特に航空高専の和田先生のご尽力には深く敬意を表したい。

## 5 会長のころ

新設校で都立高の教員としての自覚と責任感をようやく確立し、都倫研では「倫理・社会」の教員としての資質をどうにか身につけることができた。そんな私にとって、会長職は重荷ではあつた。矢谷先生や徳久先生（共に故人）など歴代の会長先生のような役割とカリスマ性を発揮することは土台私には無理なことであつた。できることは研究会の伝統である東京都や全国の「倫理・現代社会」の教師たちが共に学ぶ場を守り続けることであつた。

2年間にわたって事務局を担当していただいたのは、大谷先生（東京都）と佐良土（全国）先生でした。二局体制の始まりである。事務局の構成が困難でしかも事務量が膨大になってきたため東京都と全国の事務局を二つに分ける必要が生じてきた、というのがその理由であつた。正直私は、“えっ”と思つたものだ。新設校の開設準備で忙しくて、都倫研や全倫研には殆ど顔を出さず、しかも事務局の困難さにも通じていなかった私には異論を挟む余地はないし、その資格もない。その後この2局体制は、平成14年度まで続き、全倫研と社全協の合併（全国公民科・社会科教育研究会、略称全公社研）により平成15年度から都倫研中心の事務局となり、今日に至っている。

大谷、佐良土両先生には大変お世話になった。新設校の業務で忙しい私に代わって例会や大会の全ての設営や運営を進めていただいた。どれだけ相談の電話をいただいたのかわからないほどでした。膨大な時間とご負担をおかけした、と思つている。深く感謝を申し上げたい。毎日新聞社から平成11年に出版された『キミの悩みに乾杯！』は編集委員長の海野先生を中心に大谷、佐良土先生によってまとめられた作品であつた。中高校生や教師批判が渦巻く当時の世相のなかで、いじめ、不登校、中退、非行などさまざまなことに悩み苦しむ高校生をしっかりと受け止め寄り添う教師や本来の高校生の姿を世間の人々に知っていただくことが出版の動機であつた。都倫研では教材研究にかかわる出版物は多いが、高校生像にかかわるものは評価の高い『全倫研全国調査』のほかに、昭和48年出版の『現代の高校生像』（第一法規）があるだけである。

都倫研には研究者が多いが、大谷先生や小泉先生は公民教育における生命倫理の権威である。多くの著書や論文を通じて倫理・現代社会の教師に大きな影響を与えていらっしゃる。私はかつて、都倫研の例会や全倫研の秋季大会等で研究発表をしたことがある。多分昭和48年の栃木県宇都宮高校での大会で、環境倫理や文明的視点で公害問題を取り上げた授業実践例で、当時としては類のない発表だった。今では神経生理学の権威であり、当時アメリカで高く業績が評価された友人の科学者からのアドバイスをもらってそれなりに準備して取り組んだものであつた。

学習指導要領の協力者委員で教育課程審議会にも参加していた私は、平成11年に作成された前回の学習指導要領公民科の改訂に加わつた。「倫理」の内容構成を考える際に、大谷先生や小泉先生の論文

や研究のことが頭にあり、「現代の倫理的課題」の一つとして生命倫理の問題を取り上げることを提案したことを覚えている。また、家族と地域社会の問題もこれから重要な課題になるものと考えていた。大谷先生が協力者委員として参加されている新学習指導要領でもこれらの問題は、現代の倫理的課題の一つとして引き続き取り上げられている。

## 6 今日このころ

大学では12年間お世話になった。主として学生指導や教職課程、教員採用等にかかわらせていただいた。高校でもそうであるが、大学での学生指導の難しさを知った。学生（生徒）指導は教職員の共通理解の下で組織的に取り組むことが大切であるが、大学ではきわめて難しく学生指導とは実は名ばかりで、あまり機能していないのが現状である。教職課程では公民科教育法を担当し、公民科教育の歴史や意義、学習指導要領の解説や公民科の指導法等について講義を行なってきた。学生たちには、よく全公社研の大会や都倫研の例会等を照会して参加を強く呼びかけたものだ。全公社研の大会で何人かの教え子に出会ったこともある。

今や私たちは退職者であり、大会等の案内をいただく必要性が薄いのかも知れない。しかし、かつて事務局を担当していたとき、OBの方々から多くのアドバイスをいただくとともに、よく激励の言葉を頂戴したものだ。それが励みになり、次回にはさらによりよい大会を企画・運営しようと考えたものだ。私は今でもご連絡をいただいているが、多くの退職者のなかには全公社研の存在さえ知らない方もいらっしゃる、と伺っている。

今現場は、困難な状況にありさまざまな課題を抱えている、といわれる。とはいえ今日、先生方にとって、これまで全倫研が果たして来たような倫理教育の全国的な研修の場が明確に存在するのだろうか。教職を目指す学生たちが公民科の教師としての資質、とりわけ倫理教育を学ぶ場があるのだろうか。確かに、現在都倫研や全公社研がその役割を果たしていると、いえる。しかし、全国的な視点や充実の度合いなどから公民科教育、とりわけ倫理教育の立場から考えると極めて不十分ではないのか、と懸念している。「全倫研」が存在しない以上、かつて全倫研が果たしていた役割を都倫研が果たすことができないものであろうか。都倫研が例会の中に全倫研の秋季大会的要素を組み込んでいくことも一つの考え方である。

今年は、東日本大震災が発生し多くの犠牲者を出した。教員も含まれている。震災直後には仙台の鈴木（昭）先生や女川高校にいらっしゃった鈴木（敏）先生はどうしているのだろうか、岩手の及川先生のご実家は大丈夫だろうかなどと、心配になった。私が大学で教えていた宮古の学生の所在は今でも分からない。同じような出来事が平成7年にもあった。阪神・淡路大震災である。あのときにも神戸の川崎先生は、山形先生はどうされているのか。ご無事なのかと心配したものだ。全国には全倫研で活躍され多くのことを教えていただいた先輩や仲間の先生方がたくさんいらっしゃる。全倫研はこうした人たちによって育てられ、その中で多くの優秀な公民科の教師が育っていったのである。私も「都倫研」や「全倫研」の人々によって鍛えられ育てられた一人である。（なお、震災に遭われた諸先生方はその後ご無事であることが確認されたが、私が知る限り未だ所在が分からない先生もいらっしゃる。）

## 思いつくままに — 哲学なき情況 —

元事務局長 杉原 安

都立高校を定年退職した後74歳まで、私立校2校（攻玉社学園、細田学園）で教壇に立っていました。教科としては社会科の中の旧「倫理・社会」、現行の「倫理」「現代社会」「政治・経済」を主として教えてきました。そこで、全国と都の「倫理・現代社会研究会」と深い関りを持ち、また教えられる面も極めて多かったです。「倫理・社会」は旧社会科5科目の中で、唯一の必修科目（2単位、2学年）として、昭和35(1960)年の学習指導要領の改訂で新しく設けられた。思想的・倫理的な内容の教材を通して、自己の人生観・世界観の確立に資する科目として、つまり倫理的・哲学的思考の形成などに関りの深い科目であった。私は昭和51（1976）年4月から2年間、上記の全・都の研究会の事務局長をさせて頂いた。「倫理・社会」を担当する教員は各学校に1名、多くても2名という状況でした。しかし新しい科目でありますから、この科目を担当する先生方の授業内容・方法などへの熱意は著しいものでありました。

全国の研究大会は毎年夏（7月末）と秋（11月末）にもたれ、通常、前者には300余名、後者には200余名の先生方が参加され、建設的な示唆に富む討論がなされた。今思うとこんな小規模の研究会で、年2回の全国大会をよく持てたものだと驚く。私が事務局を担当していた当時、今でも心に残る全国大会として、昭和51（1976）年度の第13回全国研究大会（於・青森県立八戸東高校）がある。夜、上野駅から寝台列車に乗り込み朝、目が覚めたら中村新吉（第11代会長）先生の故郷である八戸駅に。今とは隔世の感があります。これまでの全国大会にみられた旅館でザコ寝の状態から、八戸では近代的なホテルに先生方は宿泊されたように記憶しています。全体会の会場となった八戸東高校の体育館が暑いからと、地元の先生方が屋根にホースで水を撒いておられたのも感慨深いことです。

私が事務局をお引き受けした時には、大会の大筋のお膳立ては出来ていまして、御厨良一（第9代会長）先生の配慮で大会の講演講師として、東京大学総長林健太郎先生と東京教育大学教授大島康正先生のお二方をお願いしてありました。林先生は飛行機は“イヤダ”とのことで、私の前の事務局長の坂本清治（第12代会長）先生とご一緒に、列車の乗車券を総長室にお持ちしたのが忘れられません。当時は大学紛争の後遺症でしょうか、事務室の机の間を縫うようにして総長室に入ったことを思い出します。講演講師といえば、私が東高校に勤務していた時、教頭をされていた船本治義（副会長）先生が、大学時代の恩師である東京文理科大学教授の科学哲学で有名な下村寅太郎先生（当時学習院大学教授）をお願いしましたが、“もう年だから”と首をタテに振られなかったのを記憶しています。都倫研・全倫研の歩みを見た時、それぞれの道で一流の先生方が薄謝にも拘らず、よく来て頂けたものだと感謝の気持ちです。

私たち教員の力不足等々の面もあり、「倫理・社会」の必修廃止の動きが出てきました。そこで全国・都の研究会として、現行通り必修科目に残して頂きたいとの「倫理・社会存置と道德教育の充実に関する要望書」（昭和51年2月10日付）を、岡本武男（第4代会長）宮崎宏一（第13代会長）の両先生とご一緒に文部省に持参しました。全生徒に必修の主たる理由として、（1）「倫理・社会」は現代の高校生が直面する人生の課題に対応する科目である。（2）高等学校の道德教育の充実のためには、「倫

理・社会」を全員に履修させることが必要である、等を指摘した。そして、斉藤弘（当時教科調査官）先生のご案内で、菱村初等中等教育局長にお会いして要望書を提出しました。しかし、菱村局長が云われるには“もう遅い、すべて決まってしまった”と。半ば気落ちして、当時の国立教育会館地下の喫茶店でお茶でも飲みましようと思った所、偶然にも荒川潤（当時全国高等学校長協会会長）、増田信（第5代会長）の両先生にお会いして驚きました。奇遇とはいえ、人生にはこういう事もあるものだと思います。

昭和57（1982）年の学習指導要領の改訂で「倫理・社会」は必修科目から選択科目となり、代わりに〔現代社会〕（4単位）が新しい科目として設置され必修となりました。

第1回倫社師友追弔の会（平成18年11月12日）で、清水威（山梨県）先生が、「旧制高校では文科は言うまでもなく、理科の生徒も必ず哲学をやっていたので、人間が奥深く芯が一本通っていたように思います。……」と述べられたのに強い衝撃を受けました。旧制高校の世代は私の少し上でその実情は知りませんが、この5年間に代わった、安倍首相から菅首相までの5人の総理の言動を見聞きするにつけ、むべなるかなの思いしきりです。

この春、平成23年3月（いわゆる3・11）、“千年に一度”と云われている東日本大震災がもたらした被災の惨状、なかでも、東京電力福島第一原発による大規模な放射能汚染は、見るに忍びない、痛ましい限りです。そして、放射能の消失までに天文学的な時間を要する高濃度の放射性廃棄物、それを処理する方法、それらの最終処分場がいまだに不確定なことなどは、大きな不安と同時に暗澹たる気持ちを抱かせます。原発が立ち上がった頃、“トイレのないマンション”としきりに云われていましたが、その後の政・官・財・学・マスコミなど、いわゆる“原子カムラ”の人々による“原発安全神話”の構築の中で、いつの間にか掻き消されてしまいました。

わが国の原発事故を受けドイツのメルケル首相は、「フクシマが私の考えを変えた。事故の映像が脳裏に焼き付いて離れない」として、首相の諮問機関である「倫理委員会」の答申を受けて脱原発に舵をきり、2022年までに既存の原発17基を全廃することを6月6日の閣議で決定し議会の承認を得ました。ここには、原発についての深い洞察と哲学および素早い決断がみられます。その過程をみますと福島第一原発の事故後、早急に原発推進派・反対派を含む17人からなる「倫理委員会」を発足させた。委員の一人であるミランダ・シュラーズ・ベルリン自由大学教授は、次のように記している。「コストやエネルギー供給の面だけではなく、国民が納得する倫理があるかを吟味した」「大地震や津波がないドイツでは福島のような事故は“ほぼあり得ない”と結論付けた。だが飛行機事故やテロの危険性は決して排除できない。仮に事故が起きれば、地球全体に迷惑をかけることになる。これは倫理にかなった態度ではない」「使用済み核燃料、つまり“核のゴミ”は増え続け、その処分の負担を未来の世代に押し付けているのも事実だ。これが倫理的と云えるだろうか」。ここから、原発を「倫理」の側面から考えた思索の跡を読み取ることができる。

それに比して、現在の野田首相の就任当初の「原発の新設は現実的に困難、寿命がきたものは廃止に」との“減原発”の発言からみると、その後の言動には一貫性がなく原発に対する哲学が読み取れない。去る、毎日新聞の全国世論調査（平成23年9月20日）では、“日本の原子力発電を、今後どうすべきだと思いますか”の問いかけに、（1）“危険性の高いものから運転を停止し、少しずつ数を減らす”。（2）“できるだけ早くすべて停止する”の両者を合わせると、73%に達する。明らかに国民の意思は“脱原発”路線と云えよう。またイタリアでは、今年（2011年）6月12、13日原子力発電再開の

是非を問う国民投票を実施した。57%近い投票率で国民投票は成立し、原発反対票が約95%を占めた。イタリア国民は明らかに、原発再開に“ノー”を突き付けたといえる。

日本では2010年国民投票法が施行された。投票で問えるのは憲法改正の賛否だけだが、原発など重要課題を国民投票にかけ、国民の意思を確かめる法律を制定しなければならない段階に来ていると思う。

新設の「現代社会」は、社会科の他の各科目の基礎的科目として誕生した。低学年の生徒を対象として、社会と人間に関する基本的な問題を、多面的・多角的に考えさせる総合的な性格を有する科目である。その意味では4単位という時間の厚みと相まって、理想的には素晴らしい科目の誕生であったと思われる。しかし、高校教育は大学入試に影響される面が極めて多い。そのことでは「現代社会」が当初、大学共通一次試験（大学入試センター試験の前身）の科目に入っていなかったことや、多くの大学が入試科目に採用していなかったこともあり、教育現場において疎かにされた。つまり、「現代社会」をやっていると云うのは帳面づらだけで、実際は「倫理」「政治・経済」に代替して行わないことが、進学校を中心にみられた。また、4単位の「現代社会」を1・2学年で分割履修するなど、「現代社会」の特質が活かされないカリキュラムの学校も多くみられた。

「現代社会」は誕生当初から、制度的にも・内容的にも未熟児であったように思われたし、教育の現場においても育てる意欲に欠けた面があった。平成6（1994）年実施の学習指導要領の改訂で、「社会科」から「地歴科」と「公民科」の2教科がそれぞれ独立し、「世界史」が必修となり今日に至っている。「公民科」では、3科目のうち卒業のために「現代社会」または「倫理」「政治・経済」のいずれかを必ず履修することとなった。ここには当初の「倫理・社会」にみられた、倫理的・哲学的なものを全生徒に履修させようとの考え方から、ほど遠い現状となっていると云えよう。

新設の科目「現代社会」（4単位）の教科書（清水書院版の「現代社会」・昭和57年2月初版発行）の制作に携わった。当時、立正大学教授星野安三郎先生と「現代の民主政治と国際社」の分野を担当した。新しい教科書でもあったのでそれなりに苦労したが、「現代人の生活環境」「現代の経済機構と国民福祉」など他の分野との関りにも骨を折った。ご承知のように教科書には検定制度があって、まず原稿の段階でいわゆる“白表紙本”として文部省に提出します。これについて、教科書調査官による「修正意見」「改善意見」が付けられます。これらをもとに、出版社の編集の人と教科書調査官の間でやりとりがあって教科書として完成する。

当時その状況について、教育評論家の村田栄一氏と京王プラザホテルの一室で対談した。そのことが、「対談・授業の周辺—教科書検定から考える—」のテーマで、10ページにわたって月刊誌「子ども」（1987年9月号・クレヨンハウス社）に記載されている。その中から経済の領域ですが、新しい公害の発生という所で原子力発電について「修正意見」として示された部分と参考までに、修正前（白表紙本）と修正後の叙述部分を転記する。

〔修正意見〕

「指摘の第一は、チェルノブイリとスリーマイル島の原子力発電の被害を同列視しているということ。第二は、原子力発電の安全管理面、そういう面も指摘してほしいということ。それから第三は、原子力発電の表現が消極的だということでした。」今後、原子力発電について教科書の記述がどのように変化していくか、注視していきたい。

〔修正前〕



「第三に、原子力の利用にともなう危険がある。1970年代の石油危機以来、原子力発電が増大したが、1979年におきたアメリカ合衆国のペンシルベニア州スリーマイル島の原子力発電所の事故、1986年におきたソ連のウクライナ共和国チェルノブイリ原子力発電所の事故にみられるように、原子力発電の安全性は、現状では技術的に十分保証されたものとはいえない。石油による火力発電にくらべて経済的に必ずしも有利ではないとする指摘もあり、放射性廃棄物の処理・処分は多くの問題をかかえている。」

〔修正後〕

「第三に原子力の利用にともなう危険がある。新エネルギーとして注目されている原子力による発電は、1975年からの10年間で原子炉数で1.9倍、総発電力で2.8倍とのびた。しかし、1986年におきたソ連のチェルノブイリ原子力発電所の事故は、1979年のアメリカのスリーマイル島原子力発電所の事故をはるかに上回り、世界を放射能汚染の恐怖におとしいれた。原子力発電は安定した電力供給の利点をもつが、放射能廃棄物の処理・処分問題をかかえ、経済的に必ずしも有利ではないとする指摘もある。」

先に述べたように、“大学入試センター試験”は高校教育に大きな影響を及ぼしている。この試験は設問に対する正答を4～6の選択肢の中から選ぶ“4択式”と称する試験で、その意味では客観性はあるが他面、記憶力と条件反射に依存している面も多い。教育は“国家百年の計”と称されるように、将来の社会を担う人間を育成する国家の重要な営みである。それを、このような安易な試験制度をとっている事に、大変な危惧を感じる。

政治の世界も大きく様変わりして、従来の民主権からさらに一步踏み込んで、地域住民を主人公とする地域主権と云うことが強調されてきている。個々の住民にとって何よりも大切なのは、利己主義的でも国家主義的でもない“公民”としての意識を共有することである。したがって、もっと公民科が重視され、少なくとも“大学入試センター試験”において文系・理系を問わず、叙述式の問題を含んだ公民の試験が全受験生に課されるようになることを期待している。その時はじめて“思考する人間”“哲学する人間”の生まれる素地につながると思う。

リタイアすると時間的には余裕が出てくる。いわゆる、“毎日が日曜日”という感覚である。したがって、必然的に地域社会に目が向かっていく。この場合の地域と云うのは、私が昭和6（1931）年から住んでいる新宿区である。区の教育を見た場合これでいいのだろうかの思いが次々に浮かぶ。例えば、区立の小・中学校は実態は都立といえよう。何故ならば、学校長以下教職員の大部分は都の職員である。他方、区の教育委員会は教育長以下大部分は区の職員である。ここから二重行政の弊害が出てくる。

23区が手をつないで小・中の教員を採用すれば、横への移動が可能になり区の教育への自主性・自立性が出てくる。もっと、地域の特色を生かした教育、地域と結び付いた学校造りが出来るのではないか。地域の教育に専念しようとの意欲ある教員がいれば、現在のような都にみられる4～6年の移動の枠に縛られずに、専念してもらった方がいいのではないかと。昔はそういう形で成果を上げた教員をかなり見かけた。日替わりメニューのように教員を移動させている現状からは、特色ある学校もユニークな教育も生まれにくい。行政の本質と教育の本質は根本的に異なる。行政はつまるところ、前例がものを云う現状維持的な、予算消化的な仕事である。他方、教育は一人一人異なる児童・生徒を相手にした能動的な仕事である。昨日のA君と今日のA君が異なる場合も多々みられる。今日の教育行政は

効率とか能率の旗印の下に、教員を行政の末端に位置する者と捉えているのではないか。教育の本質を見つめ、教育行政は再検討されるべきであると思う。第2回倫社師友追弔の会（平成23年4月24日）で、かつて都教委の指導部長をされていた酒井俊郎（第8代会長）先生が、「現在の教育の問題は教育行政の問題である」と云われたのは心強い限りでした。

もう一点、指摘しておきたい。1990年代に入って大々的に推進された規制緩和政策の下に、東京都の23区においては小・中学校は従来の学区制から学校選択制へと変わっていった。現在、学区制をとっている区は世田谷区その他、数区にすぎない。世田谷区では、義務教育の小・中学校は地域の学校であるべきだとの考えの下に、継続して学区制をとっている。勿論、学区制は人工的な区画割りであるから、不便を強いられる児童・生徒には弾力的に対処すればすむ話で、大事なのは原理・原則が何れかと云うことです。A校が高台の木々の多い所に立地している。B校が線路際・河川際で緑も少ないといっても仕方がないことである。子が、親を選べない実存の状況と同じことだ。また、今日の教員の激しい転勤を強いられる状況の下では、私立校と違って校風も育ちにくい。つきつめれば、学校選択制は地域との関りも薄くなり、唯、親のエゴを助長しているに過ぎないように思われる。先の東日本の大震災では、地域の小・中学校が被災者の拠点と成っていることに思いを致すべきだ。もう一度、教育の本質・原点から考え直されるべき制度であると思はれる。

わが国ではひとたび制度・仕組みが動き出すと、いかに弊害が目についても根本から直す動きが鈍い。何故ならば、哲学が希薄だからである。新宿区では“しんじゅくの教育”という区報を出している。その90号（2011、4、25）に制度導入から6年が経過したので[学校選択制度に関する意識調査]（2010年7月実施）の結果が記載されている。その一部分をあげると“学校選択制度”（平成16年度導入）について、（1）あったほうがよい。（2）どちらかといえばあったほうがよい。（3）どちらかといえばなくてよい。（4）なくてよい、の設問に対して、（1）のあったほうがよいと回答した人が小1保護者で46.8%、中1保護者で53.4%、小6保護者で42.2%、中3保護者で46.8%、校長・副校長で11.3%、教員で3.4%である。（4）のなくてよいと回答した人が小1保護者で4.6%、中1保護者で3.3%、小6保護者で5.5%、中3保護者で6.1%、校長・副校長で26.3%、教員で23.1%である。この結果を基に、区教委は制度・運用の充実、課題の解消を図っていきますと云っているが、深い分析も根本的な再検討の姿勢も見えてこない。

平成21年9月初の民主党政権が成立した。永い自公政権に国民がうんざりしていた面もあって、鳩山内閣は熱い眼差しと強い期待をもって迎えられた。しかし、結果は鳩山由紀夫首相自身の“お坊ちゃん育ち”のひ弱さの故か成果を挙げられず、散々たる状況の中で閉幕した。だが当初（平成21年10月26日）の首相の所信表明演説には、久し振りに深い感動を覚え心うたれた。演説には幾つかの点において理念を訴え、深い思索の跡つまり哲学的なものが読み取れたからである。その中から、教育に関する点を指摘したい。首相は新しい社会の在り方として“新しい公共”の概念の下に、人々が支えあい役に立ち合う自立と共生を基本とする、人間らしい社会を提示した。そこに求められるのは、人々の“公民”としての意識ではないだろうか。それに対して、先の（平成23年9月13日）の野田首相の所信表明演説は官僚的な作文に終始し、そこからは理念の一片も読み取れなかった。また、鳩山首相はインドの独立と民族の自由のために行動したマハトマ・ガンジー（1869～1948）の慰霊碑に刻まれた、“七つの社会的大罪”の一文を引用した。その一つに、単に数字で評価される“人格なき教育”とある。今日のわが国における偏差値横行の状況をみると、全くその通りで胸の痛む思いである。どうす

れば地域社会、国家、さらに国際社会に貢献できる人格を持った青少年を育成できるのだろうか。

インドと云えば、旧「倫理・社会」において“思想の源流”の分野が重要性をもち、大きな割合を占めていた。その分野を構成している柱の一つが、ゴータマ・ブッダによる仏教思想である。「倫理・社会」を担当しているならインドに行って、ブッダの足跡をたどりインドの風土に触れる必要があるのではないか、との岡本先生のお考えから3回にわたって「全倫研インド・ネパール歴史・文化研究—四大仏跡を訪ねて—」が、日本海外航空サービス（株）によって計画され実現した。第一回（1973～74年）は岡本先生を団長として、第二回（1977～78年）は船本先生を団長として、第三回（1979～80年）は、桜蔭会との共催で私が勤めた。第一回の都倫研関係の参加者をあげますと、浅香育弘（葛飾高校）浅川計（帝京大学高校）秋山明（前杉並高校長）坂本清治（白鷗高校）鷺見美雄（駒場高校）永上肆朗（府中高校）中村佑二（三田高校）の諸先生方と私です。高校名は当時の所属です。旅程にしたがって、12月31日ヒンズー教の聖地バナラシ（ベナレス）のホテルに宿泊した。新しい年を迎えて皆さんと乾杯で祝福し、中村先生に小唄を披露して頂いた。先生は定年後すぐに亡くなりましたが、写真と小唄の達人でした。私は第一・三回とそれ以前に地理の研究会とご一緒しましたので、集中的に3回インドに行ったこととなります。インドは言語的・宗教的・民族的に多様な、そして混沌とした世界です。同時に宗教性に満ちた風土は、参加した先生方に強烈な印象を残しました。明らかに、日本文化とは大変異なっていました。浅川先生は、その後出家され僧侶（熙信）となり現在、七施精舎主宰として前橋を中心に宗教的・社会的活動を精力的に展開されています。

最後に、ガンジーの“七つの社会的大罪”の残りを記して終わりにします。「理念なき政治」「労働なき富」「良心なき快樂」「道徳なき商業」「人間性なき科学」「犠牲なき宗教」です。

(2011. 10. 23記)

# 都倫研の理念をどう生かすか・・・1980年代の都倫研

元事務局長 葦名 次夫

## 1 1980年代の都倫研事務局の思い出

### (1) 転換期の時代に

1983年に研究部長へ、1984年から3年間、事務局次長、事務局長として都倫研の仕事を担当しました。この時期は、1982年に「現代社会」が発足した転換期であった。ちなみに、研究会の名称も、東京都高等学校《「倫理・社会」研究会》から《倫理・社会研究会》へ、《全国高等学校「倫理・社会」研究会》が、《「倫理」「現代社会」研究会》へと変化し、細谷先生、海野先生、蛭田先生が事務局長として、会の運営や授業実践に新たな模索が始まっていた。

### (2) 倫理的内容をどう生かすか

この時代の研究会は、①新たに発足した「現代社会」をどう定着させるか、②「現代社会」の教科書で扱いが少なくなる「倫理」の内容をどう充実するか、二つの課題を同時に探求する困難な転換期であった。しかし、課題山積の時であっただけに、活発に議論しさまざまな模索や探求が行われ、若い先生方や他科目の先生方の参加もめだつ新しい息吹が感じられた。

### (3) 公民科の発足へ

私が事務局を担当した時に、「現代社会」も「倫理」も必修から外す方向が「中間まとめ」で打ち出された。危機感を持たれた酒井会長は、「倫理的内容を全員の高校生が学べるように」と、全国調査を実施し、要望書を文科省に、1986年5月、1987年1月と2度提出した。結果として、「倫理」は科目として残り、「現代社会」における倫理的内容は減少、「倫理」もセンターテスト対応にする進学高校が増え、「倫理」の内容が変容していく。工藤先生(1987～)、及川先生(1989～)の事務局長の時には、倫理的内容の少ない「現代社会」と履修者の少ない選択科目「倫理」という状況にどう対応するかが課題となっていた。

### (4) 都倫研・全倫研のアイデンティティを求めて

「現代社会」の倫理的内容をどう充実させるか、一方「現代社会」発足によって政治・経済を担当する先生方の参加も目立ってきた。そのため、全倫研事務局を兼ねていた都倫研事務局として、年2回の全国大会と、年4回の例会の研究会のテーマ設定、講師の人選、分科会テーマの構成、研究発表の先生方の人選など、会の運営に配慮が求められた。私は、「倫理」のアイデンティティを拡散せず、どう社会科に生かせるかという、課題が常に頭を離れなかった。その中で、多くの先生方が新たに参加し活発に探求できたことはうれしく、また、先輩の先生方が培ってきた蓄積と伝統のもつありがたさをしみじみ感じました。また、全倫研事務局長を兼務していたので、「倫理・社会」を愛し、「倫理」を大切にしている各県の大会に参加される「全倫研ファン」の先生方の熱意に支えられていることを痛感し、全倫研を支えてきた都倫研の伝統の重みを感じました。ここでも「倫理」発足以来の理念が生きていたと思います。

## 2 都倫研の理念と分科会活動

### (1) 創立の理念を胸に

研究会活動を支えてきたのは、創立の理念であったと思います。特に、お二人の先生の言葉を胸に刻みました。増田先生は、「研究会は大会のお祭りに終わってはならない。授業公開、研究発表、講演を三つの柱に、常に生徒、授業、研究が基本である」。酒井先生は「たがいに本当に勉強できる研究会にしたい。常に自ら学び、その結果が毎日の授業に生かされるような研究活動を中心に据えたい」と。酒井先生は、分科会活動の拠点となった新宿高校同窓会館の集いに常に参加され、その後の「TRINKEN」の宴では人生・教育談義に花を咲かせ、終電間際に帰路につくことがたびたびでした。

### (2) 1980年代中頃の都倫研と分科会

1985・86年度の『都倫研紀要』の「事務局だより」から、当時の研究会のふんいきを伝える、私の文章をいくつか抜粋してみます。

○「黄昏迫る午後6時から、校務を終え三々五々集い、読書会をはじめ、教材研究、生徒指導に熱心に取り組む分科会の華・分科会活動。20数年余、研究授業・研究発表・講演の三本柱を灯として掲げ続けてきた研究例会。研究例会と分科会に、やりくりして駆けつけてくださる先生方の姿と、ご苦勞さんの一言に、事務局一同どれだけ励まされることか。」

○「都倫研は創立以来、生徒の意識と価値観に切り込みながら、よりよく生きる人間形成の教育を一貫してはっきり主張し続けてきた研究会です。そして、互いに学び合い、地道に研鑽を積み重ね、そのテーマを探求し続けてきました。生徒があつての学校であるなら、高校生の生活と意識をしっかりとらえ、流行の中の不易を求めて、青年期における人間教育とは何かを真剣に考えていこうと思います。」

○「生き方の問題を生徒と共に考える」という授業の時間は、教師としての自分の人生を見つめなおし、「わがこととして主体的に関わる」一点に、「倫理・社会」以来の研究会の精力的な活動を培ってきた独特な気風があったと思います。

以上は1985～86年度の都倫研紀要の抜粋ですが、生徒・教育・家庭・人生について率直に語り合う分科会には、特に独特の熱気がありました。「多くの人に支えられ、助けられ、励まされ、生かされていることに感謝し、共に学び探求できたことが心豊かな財産となっています。」の紀要に載せた気持ちは今も変わりません。

### (3) 事務局運営の工夫

研究会活動をどう活発にできるか、研究部長の時に「研究部便り」をはじめた。研究例会の講師の紹介、研究発表の概要、分科会活動の案内などを盛り込んでみた。さらに工夫されて受け継がれていることは、嬉しいです。また、次の世代の先生方の参考にと、事務局の記録を研究紀要に採録し、事務局運営のエッセンスを盛り込んだ手引を作成してみました。その後、井上勝先生が『事務局運営の手引』として、より実務に活用できる手引を作成していただきました。そして、全倫研と都倫研の事務局の仕事を事務局長が兼務することは、しだいに難しい状況もあり、都倫研事務局次長が実質的に都倫研の仕事を、事務局長は全倫研の仕事をとという形に、次の工藤先生の事務局の時から変更しました。

### 3 私にとっての「倫理・社会」「現代社会」「倫理」

#### (1) 倫理の授業は、「情熱が命」

1974年度に、第1回研究例会（育英工業高専）で初めて「私の授業実践」の発表をし、その内容が1974年度『都倫研紀要』に掲載された。生硬な文章ですが、当時の新人3年目の「倫理・社会」への思いが率直に語られている。以下、抜粋してみます。

「自らの生に確信薄きものが、偉大な思想を論じることの戸惑いの問題である。信仰なき者が宗教を、安住した小市民がマルクス主義を、不安・懐疑なく満ち足り埋没しているものがソクラテスや実存主義を論じ、ごちなくこわばってベルグソンを語ることは、アイロニー的な矛盾である。」「確信なくも、困惑し、迷い、緊張と葛藤故に切実に意味を希求すると言ったマージナル・マン的な生き方に積極的な意義を認めたい。この内面的な価値の自覚や切実さ・情熱が希薄な場合、授業は迫力なく白々しくしらけるであろう。そこで、生き生きとした具体的例や比喻によって肉付けし、生徒の心情の深みにはたらきかけることをめざしたい。」

今の授業でもその思いは変わりません。「倫理の授業は、問題意識、情熱、テーマが命である。心の中に、エロス（情熱）があつてこそ生きた授業となる。でも独善的ではいけない。情熱的にテーマを探求しつつ公正で客観的であるように教材を鍛えあげながら、生徒の心に響くものとしていきたい。飽きてはいけない。惰性でなく、心がこもってなければ。未知への憧憬とあくなき探求の精神を持ち続けながら」と念じつつ、授業を行っています。

#### (2) 意味探求のかなたに

私の専攻は社会学ですが、紛争中は、出身大学の講義は2年近く実質的になく、各大学の政治学、歴史学・宗教学・文学などを聴講しながら学んできた。政治学と現代歴史学、宗教社会学に特に魅せられた。紛争中、教育実習の授業テーマは、「波多野精一『時と永遠』と親鸞『歎異抄』」であり、卒論は『ウェーバー・合理化の進展と没意味化・意味探求の彼方に』という実存的なものでした。

新人として、ほとんどが自衛隊員と准看護婦である市ヶ谷商業高校定時制に勤務し、傍ら、講師として進学高の上野高校・小石川高校で「政治・経済」「倫理・社会」を共に4年近く担当した。高いレベルを要求される進学校と職業人の生徒の定時制の授業とを同時に担当したことは、本質的なことを平易に興味深く授業を行うにはどうしたらよいか、鍛えられた日々でした。当時のガリ版に刻みつけながら必死に教材を作成したことが懐かしい思い出です。そのためもあり、40年間、主体的に人生の意味を探求する「倫理」、客観的に社会の問題を探求する「政治・経済」、総合的に課題を探求する「現代社会」、それぞれの授業に魅力を感じています。

#### (3) 多くの先生に啓発されて

そして、大学の卒論以来、マックス・ウェーバーの宗教社会学に魅せられました。「信仰と学問」という主体的な問題を極限まで探求する知的誠実性や公正さが、私の授業の課題でした。「主体的な情熱と客観的で公正さを両立させること」、その緊張や矛盾の中で、独善に陥らず、真実を探求したいと願ってきました。このウェーバー的な「緊張」の間の中で考える大切さを教えていただいたのは仁科静夫先生の都倫研の研究発表であり、そのような啓発や縁を多くの先生からいただいたのも、都倫研ならではの幸いと感謝しています。

#### (4) 「倫理」の先人への郷愁と憧憬

私は、「倫理」「政経」「現代社会」をいろいろ担当しながら、心の奥底で先人の古典的内容を探求する「倫理」への郷愁と憧憬がつねにありました。「客観的な探求や考察でたとえ真理を見出したとしてもそれが私の救いにとって何の意味があろうか」という実存的な意味探求が、40年間の授業への原動力でした。授業が、「脚本、監督、主演、効果」を一身に演じる舞台であるとすれば、生徒と共によい舞台の時間を創造したい。「難しいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことをおもしろく」（井上ひさしの座右銘）は、わたしの願いでもあります。

真善美を探求し続ける情熱のエロース、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして(with all your heart and with all your soul and with all your mind with all your strength)」希求すること、そして、「すべては移ろいゆく。怠らず努めよ」という先人のことばに、促され、励まされ、倦まずたゆまず、生徒と共に探求し、学び続ける。もし、都倫研が独自の光を輝かせてきたとしたらその点にあるのではないのでしょうか。宮沢賢治は語っています。「わたしたちは、まことの幸いを尋ねよう。求道すでに道である」。道を求めることが道である。この言葉をかみしめながら、探求の道を変わず歩んでいきたいと思えます。

#### 4 願いと感謝をこめて

私事にわたりますが、都倫研とは、不思議な縁で結ばれています。1965年の「倫理・社会」発足2年目に、都倫研発足に尽力された丸山先生の「倫社」の授業を受けて感銘したこと、私の在学中に、初代会長の矢谷先生が都倫研発足の中心となった上野高校校長でいらしたことなど、多くのことが寄り添いなごみ合わさる衆縁和合の縁を感じています。

また、毎年都倫研総会が開かれた東京都教育会館に歩いて5分の市ヶ谷商業高校定時制に最初に赴任したことが縁で、先輩に誘われ、教員2年目の1973年から、伊藤、宮崎、市川諸先生に親しく声をかけていただき、参加するようになりました。教員3年目の1974年に研究発表、1975年に公開授業、1976年に増田先生が校長の高島高校へ、その後も増田先生主催の集いで敬愛する先生の譬咳に長く接することができました。

1978年から1983年までは、事務局員として、分科会の世話人、受付、広報、発送作業、大会準備に、杉原（保谷高校）、小川（清瀬高校）、細谷（墨田川高校）、海野（三田高校）の諸先生の事務局校で、他の先生方と作業した日々と分科会での交流をなつかしく思い出します。そして、1984年に事務局次長として事務局長蛭田先生から多くを学び、1985年から2年間豊島高校を事務局高に、教員生活最初の15年は、都倫研と共に私の教員人生がありました。

初代会長の矢谷先生の人格、静謐なお話の佐藤勇先生、闊達な岡本先生、造詣深い碩学の増田先生など創立期の先生方をはじめ、人間的な魅力あふれる先生方に接したことが、私の心の宝となっています。また、お名前はあげられませんが、挫折や困難な問題に直面した時に、励まし知恵を授けていただいた多くの先生方の顔が浮かびます。

1990年代以降、手術や大病等の体調不安から研究会への足が遠のきました。後の世代の支えやお手伝いをお願いしつつ、その役割を果たせなかったことを申し訳なく思います。今まで支えていただいた諸先生方への感謝の念と共に、都倫研の活動が一層発展することを祈っています。

## 「都倫研」の思い出

鈴木 昭逸

平成23年4月24日の第二回倫社師友追弔の会に参列できず全く残念であった。

3月11日の東日本大震災で空港も新幹線も全く途絶したためである。

その上、昨年11月に5期15年勤めた民生委員が定年退職となりこれからは自由な時間が多くなると思っていた矢先にこの災害である。被災者対策と復興事業に一労働力として参加せざるを得なくなり「都倫研」はなお遠くなってしまったのである。

思えば我々の30代は学生運動の最盛期で学校現場の生徒指導は困難を極めた。その後も学生運動の余熱冷めやらぬ学校現場に「倫理・社会」、「現代社会」、新設「倫理」と相續いて新設科目が下され、学校特に社会科教員は混乱の中に右往左往していた。それに当時は組合運動も盛んで社会科教師は組合役員でもあてにされること多く、上下左右からの圧力に喘いでいたものである。それでも社会科の仲間たちの多くは真摯に生徒と対峙し対話し、自分自身は勿論一人でも多くの社会科仲間にな得・共感してもらえるような授業を一時間でも多く創造していくことに愚直な努力を積み重ねたものだった。

そんな多忙と悩みを抱えた地方からの上京者に支えとなってくれた先輩や仲間が「都倫研」を中核とする東京とその周辺の先生方であった。

特に歴代の事務局の方々が素晴らしかった。頼もしかった。

私が上京したての頃の事務局長は杉原安先生で、先生には懇切に新設科目の狙いや教科内容、指導方法それに頼れる先輩友人を紹介、教えて戴き、それらを宮城県に持ち帰っては県内各地の学習会で活用させて戴き、多くの仲間から感謝された。

その上私的にも上京のたびに幾度となく宿まで便宜を図っていただいて、乏しい旅費を助けていただいた。今日までも感謝の念は絶えない。

又、歴代の会長先生方の人格識見、そのスケールの大きさに心打たれた事しばしばであった。

それに「現代社会」の教科書執筆の先生方から教わった学問内容も多大であり、その学識の深さと文章力の巧みさには感嘆したものである。特に中村新吉先生には多く教わった。

そして、「都倫研」関係者から文部省、或いは都教委関係に転出された先生方の要点を外さない、しかも聞く者に混乱や反感を惹き起こさない諄々たる講話や対話力にも感服させられた事も多かった。

それに劣らず地方から上京してきた仲間たちも魅力的であった。ユニークな発想法、洗練された会話・文章力、或いは学習法、生徒指導面での工夫など、教えていただいた先生方御一人御一人の御名前と面影が鮮明に思い出される。特に広島の花本圭司先生は忘れ難い。

正に、「都倫研」は私の少壮時代の学問の土台であり、その後の学校生活での支えでもあった。

旧役員、会員の皆様に重ねて深く感謝の意を表すると共にご健勝を祈る次第である。



# 今思いおこすこと

前日本大学第二高等学校 小笠原 悦郎

## ◆都倫研に参加する

中学2年のころ、「ゴマの木にはゴマの虫しかつかない」という武者小路実篤の文に接し、倫理の方面に興味を持って、大学では倫理学を専攻した。卒業するころは、不景気で就職先がみつけれず、やっとの思いで、日大二高に国語の教師として就任できた。8年くらい経験を積んで、国語を担当できるようになったとき、社会科を持ってといわれた。

都倫研の案内が、私立高校にも配られ、教頭のすすめもあって、総会に参加した。

会の中心になって世話をやいたり、案内したりしている先生方は、教科書に名前がある方や、大学在学中にすでに顔見知りの先生が多かった。武藤一良先生、佐藤勇夫先生、酒井俊郎先生、増田信先生、岡本武男先生などである。

積極的に研究発表や授業を公開される姿に親しみを覚え、せっせと参加した。若いエネルギーで会の発展に尽力されたことによって、その後の都倫研の組織づくりができたものと推察される。

## ◆和辻夏彦先生のこと

設立当初から参加され、副会長として力を尽くされた方に、和辻先生をあげたい。私学にいらっしやったことから、私立学校の先生方が積極的に入会するように誘った方である。

都倫研会報8号（昭和41年7月29日付）に次のような文がある。

題して、「都倫研へどうぞ」

東京都倫理・社会研究会も、満三歳となりました。「倫理・社会」という新しい科目が発足し、たいへん我が意を得たような、しかしどうしてよいかわからないような困ったようなあの頃から、ともかくも一応の軌道にのった今日に至るまでに、「都倫研」の果たした役割は大きいものだったと思います。

同学の土が相寄り相集って開いた大小の集会は、「倫・社」の行く道を、おぼろげながら示してくれました。（中略）「倫・社」の授業を受け持っておられる先生方で、「都倫研」に入会して下さっていない方もまだまだたくさんおられます。ことに私立学校の先生方に、もっともっと入会していただきたいと思います。私立の方の入会が比較的少ないのです。

参考になることが多く、また気持ちのよい連中の集まりである「都倫研」へ入会していただき、「倫・社」の授業をよりよいものとする努力を積み重ねていきたいと思います。

## ◆斎藤弘先生のこと

斎藤先生は、教育大付属高校の先生であったころに、「必修明解 倫理・社会」（富士出版）を出版され、多くの先生方に利用された。文部省の教科調査官になられてからは、「倫理・社会」教育の発展のため、都倫研の成長の陰の力となって、支えてくださった。会長や事務局を担当して下さった先生方のお力はもちろんであるけれど、研究例会や大会の指導的助言講師としてのご活躍は特筆に値する。先生に個人的にお世話になった会員も多くあったと思う。

◆講演講師に恵まれた

なんといっても、当時お目にかかれない文化人の講演を聞くことができたこと。谷川徹三、朝比奈宗源、諸橋徹次、田中美知太郎、清水幾太郎、会田雄次、中村元先生など、感銘深かった。「水戸黄門」の題字の朝比奈宗源老師、人前に出ないというギリシア哲学の田中美知太郎先生も、軽井沢から夏の暑い時期に出ていらっしまった。

# 都倫研わが教育人生

## — 第一部 都倫研世に問う自己表現活動の歩み — 回顧

元会長 中村 新吉

### ○はじめに

先ずもって都倫研が創立50周年を迎えることができますことに心からお祝い申し上げます。この間、20周年のときには、教育庁指導部におりましたが、「都倫研に師あり」と題して、教育実践を通して学び方を実践的に教えられ学んだこと、都倫研は優れた師弟師友に恵まれ教育力のある会であったこと、都倫研は人格的感化を与えてくれる会であったこと、倫社の教師は知的原理的な探求者であり続けると共に主体的な人格形成を求める求道者であり続けなければならないことを常に教えてくれたこと、都倫研は私にとって現代の松下村塾的な存在“同じ釜の飯を食う”共同体的な家族的な存在であったことについて述べた。そしてこれからも人間と人間としての出会いを大事にしていきたいと述べたところである。

30周年の時は都立光丘高等学校長の職にあり、「草創の精神に学ぶ」と題して、新設科目「倫理・社会」（倫社）の指導内容もその方法もゼロからスタートしわが子のように手塩にかけて共どもに育て上げていく歩みだったこと、研究成果を節目節目に一冊の教育実践書として公刊し、世に問うてきたことを改めて確認した。

今50周年を迎えようとしているが、草創の頃20歳代末であった青年教師の私も今もうすでに喜寿を過ぎ、都倫研で勉強し合い仕事をし合い励まし合った多くの師友との出会いと別離があった。初代会長の矢谷先生、第2代会長の徳久先生をはじめとして、村松梯二郎先生、佐々木誠明先生、御厨良一先生、斎藤弘先生、佐藤勇夫先生、石森勇先生、中村佑二先生……と数え上げていくと、次々と多くの師友との出会いと別れが偲ばれてきて、人生の無常、人間の命（いのち）のはかなさに深く思いを致すのである。

都倫研あるいは「倫理・社会」（倫社）のスタート、草創期・成長期・成熟期と私自身の教育人生のスタート、歩みはほぼ重なりあってきたのではないかと思う。限られた紙数の中で忘れ得ぬ事どもを書き留めておきたい。

### ○「倫理・社会」をどうとらえどう展開するか — 都倫研その草創期

昭和39年4月1日から「倫理・社会」（倫社）が必修科目として全国一斉に実施されたとき、ベテランの社会科教師も若手の社会科教師も、倫社を教えるのは初めてであった。同じスタートラインに立っていたと言ってよいだろう。いったい、倫社って科目はどういう科目か、何をどう教えればよいのか、社会科の先生というと、日本史や世界史、地理や社会科「社会」の先生方だったこともあり、学校の事情で必修の倫社をどう教えればよいのか戸惑いとともに、その内容と方法を探し求めていたときであった。都倫研に行って勉強しなさい、と勧められたのがきっかけであった。初代事務局の佐藤勇夫先生（第6代会長）や伊藤駿二郎先生がやかんで参加者一人一人にお茶を配ってまわっていた。後に事務局を手伝うようになって、私もお茶汲みをして回った。研究会に参加して緊張している先生方にとって、一杯のお茶でホッと緊張がとけ、気配りにグッと引きつけられた。話を本題に戻して、その頃、各社の教科書や教授指導書もよい道しるべとなったが、斎藤弘先生（当時東京教育大学付属高

教諭)や岡本武男先生(当時都立白鷗高校教諭)作成の「社会科における倫理的内容の展開試案」が指導計画の基本として、先導的試案として大いに重要な指針となった。同様に斎藤弘先生の著作『必修明解 倫理・社会』(富士教育出版)中村元著者代表『学研 倫理・社会』(学習研究社)の二書は、心理学、青年心理学、発達心理学、文化人類学、社会学、社会心理学、西洋倫理思想史、東洋倫理思想史、日本倫理思想史などを改めて勉強する上で、思考を整理し問題の所在を考察する手引書ともなった。後に斎藤弘先生には生涯にわたってご指導いただくことになり、その人格的感化力と生き方、その大著労作に敬服させられることになったのである。

#### ○草創期 一 都倫研の原型、土台づくり期

初代会長、矢谷芳雄先生の時代が6年間続いたが、その事務局の運営や研究活動の柱となられ、都倫研・全倫研の原型・土台を作り上げたのが増田信先生(第五代会長)であった。『倫理・社会 授業内容の研究—指導事例集—』(大阪教育図書)(昭和39年4月25日)は、都倫研出版事業第1号で、増田先生が中心となつての研究成果であった。昭和40年5月には『倫理・社会の指導と展開—資料編』が講談社から出版された。これが都倫研出版事業第2号で、先生と研究部長の村松悌二郎氏が原動力となったといわれる。研究活動のまとめに“正直な成功を求めたまえ!鈴をならしたてる馬鹿者になつてはいけない”というゲーテの言葉を引用されて、謙虚な研究と地道な努力を強調されていたのが若かった私の胸に刻まれている。先生は先輩からは仕事を安心してまかされ、後輩からは慕われた。

会長の矢谷先生、事務局長の増田先生のおられる都立上野高校までお手伝いに行った。よく一緒に作業したのが石森勇先生、金井肇先生、伊藤駿二郎先生、小川一郎先生、小笠原悦郎先生、私、田中正彦先生たちであった。封筒宛名印刷機を仕入れたがうまくいかず、手書きが多かった。現在のパソコンによる宛名シールとは程遠い手作業で、気の遠くなるような大変な労働だった。夕食は社会科準備室での出前たぬきそばとか中華ラーメン。時には上野駅隣接の日本食堂でビール1、2本、ラーメン一杯、30分くらいで切り上げる、というものだった。後日談を伺ったことがあるが、増田先生は事務局の仕事を神楽坂のお宅に持ち帰って奥さんや娘さんに手伝ってもらって仕上げ、夜中、犬に吠えられながら、発送物をあっちのポスト、こっちのポストと投函作業されていたという。この作業は後に、金井先生や私、坂本先生や杉原先生、小川輝之先生たちへ代々事務局長の言わず語らず引き継がれ、“伝統”となった。

創立五周年記念出版『倫理・社会 指導内容の事例的研究—具象より抽象へ—』(昭和43年3月清水書院)は、矢谷初代会長のご勇退記念を兼ねたものでもあった。これが第3号である。増田先生が事務局長で、抽象的で難解な、哲学的な内容・用語を例話や比喻によって、高校生にいかに具体的にわかり易く教えるか、課題を提示している。この企画も増田先生の提案であった。編集に携わった者は、増田信先生、佐藤勇夫先生、伊藤駿二郎先生、中村新吉、山口俊治先生、小笠原悦郎先生、石森勇先生、金井肇先生、小川一郎先生、佐々木誠明先生、渡辺浩先生の11名であった。私が33歳の時だった。

昭和43年7月の全倫研(大分・別府)大会をもって矢谷先生が会長職を徳久鐵郎先生に推譲されたのであるが、会長ご勇退に当たっての懇親会における「人間五十年下天の内をくらぶれば夢幻の如し……」とうたい舞う幸若舞は華のある武将の凜とした勇姿を思わせた。年重ねる毎に華の舞いと先生の笑顔がひとつに重なってくるようになった。

## ○成長発展期 — 徳久鐵郎会長時代

第2代会長徳久鐵郎先生の時代は、事務局長は順に村松悌二郎先生、金井肇先生、中村新吉、坂本清治先生の4人、8年に及んだ。始めの4年間は徳久会長が東村山高校開設の校長、村松先生は開設要員で、事務局のお手伝いも大変だった。忍岡高校や上野高校は下町の賑わいのある町中にあり、交通も至便であったが、東村山高は武蔵野の農村地帯に学校を新設するというので徳久先生も村松先生も大変な苦勞をされたと思う。駅から20分程砂利道、畑道を歩いて通った記憶が残っている。その後徳久先生は小松川高校に異動になったので、事務局校と会長校が別々となった。村松先生はドイツ哲学、西洋哲学に詳しく専門的知識の高い方で教えられることが多く刺激になった。村松先生がヘーゲル哲学、私がカントの倫理学だったので、フィヒテやシェリング、ゲーテらのドイツ理想主義や、ヤスパースやハイデッガーらの実存主義など、ドイツ人の精神論でデンケンが深まった。

徳久会長時代には三冊の教育実践の研究書を公刊し、広く教育界をはじめ日本全体に問題提起をし、都倫研全倫研の旺盛な活動期といってよかった。

その一冊目が『現代に立つ思想家』（昭和47年2月 現代文化社）で、都倫研の出版物としては第4号となる。事務局長が金井肇先生、編集委員長が御厨良一先生であった。この書は東京都の教師が倫社の時間にどのようなことを生徒に語り問いかけているか、また、思想家が現代に問いかけているものはなにか、を明らかにしようとしたもので、全国の高校生や倫社の先生方に親しまれた。

## ○「ものの考え方の基本的問題」主題的・課題的学習内容の具体化

昭和47年は創立10周年を迎え、記念出版事業を企画し、総勢90名近くのご協力によって『「倫理・社会」教材化の研究』を東京書籍から公刊（昭和48年3月20日）した。徳久会長時代の二冊目の出版、都倫研出版物第5号。事務局長は中村新吉。学習指導要領が改訂され、いわば「倫理・社会」の第二の誕生に当たって、その具体化、教材化の先導的試行の要請に答えようとしたものである。「ものの考え方の基本的問題」は、主題的な学習、課題学習などとして本会で研究実践してきたものをまとめたもので、哲学的なものの考え方（智への愛、など）、倫理的価値と人格形成（善と実践、など）、芸術と人生（美と崇高、など）人生における宗教の意味（永遠と信仰、など）、科学的なものの考え方（社会認識の方法、など）、個人と国家（国民としての自覚、人類愛、など）、民主主義の倫理（自由と責任、平等、など）の七つが例示され、倫社の学習指導内容が、特に教科書をはじめ授業も知識網羅的になり、詰込主義的になっていく傾向に歯止めをかけ、倫社本来の目的や性格を授業において実践していこうとするものであった。出版の趣旨中村新吉、倫社の基本的性格・ねらい、指導上の問題、現代の高校生活と倫社など総論について、増田信氏、斎藤弘氏、酒井俊郎氏、村松悌二郎氏、金井肇氏、佐藤勇夫氏、小笠原悦郎氏、中村新吉が分担執筆し、小笠原悦郎氏、金井肇氏、佐々木誠明氏、御厨良一氏、村松悌二郎氏の諸先生には編集委員として大変なご苦勞を賜った。

## ○新しい高校教育の探求—高校教育の革新

徳久会長時代の3冊目の公刊書（都倫研出版物第6号）が『現代の高校生像—指導の手がかりを求めて—』で（昭和48年4月1日刊 第一法規）、この書は「現代の高校生をどうとらえどう指導するか」の特別分科会中心に研究した成果の上に立ったものであった。

金井事務局長（都立豊多摩高）の下で設置された特別分科会「現代の高校生をどうとらえどう指導するか」が事務局長の中村新吉（都立千歳高）に引継がれ、ほぼ5年に及ぶ高校生と葛藤し苦闘した中で生まれた労作と言える。昭和45年の東大安田講堂封鎖に象徴される全国的な大学紛争、そして“高

校紛争”一部高校生の過激な政治的イデオロギー的言動と暴力的行動、校則撤廃など学校管理・教育指導体制の崩壊、そしてその後ひろがった高校生の無気力化、無関心化、無感動化、無規範化、逸脱化などの問題状況の一般化にどう対応しどのように高校生を指導し学校の教育指導体制を改革していくべきかに応えようとした取り組みであった。鈴木博雄氏（東京教育大学）、酒井俊郎氏（東京都教育委員会）、中野目直明氏（都立教育研究所）からご指導やご助言いただきながら、金井肇、小川一郎、中村新吉の3人が中枢となり、村松悌二郎氏、井原茂幸氏、御厨良一氏、永上肆朗氏、木村正雄氏、大木洋氏、細谷斉氏、沼田俊一氏、菊地堯氏、中村祐二氏、清水洋三氏が分科会世話人や研究部長として苦勞されて出版にこぎつけた書である。これまでの管理・指導の立場から、高校生の自主的・主体的な援助・助言・支援「高校生とともに活動する」学校生活への転換を方向づけた。いわば“高校教育活動の革新、新しい高校教育の創造”を広く日本の教育界に提言する出版物となったといえようか。

金井事務局長は、事務処理能力が優れているだけではなく、研究活動の要でもあった。“高校紛争”時、いち早く高校生問題特別分科会の設置、改訂学習指導要領—ものの考え方の基本的問題—の具体化の全国調査の実施など機を見るに敏であった。先生は仕事を進めるにしても研究を進めるにしても、常に「その考え方見方の拠って立つ根拠は何か」と論拠・根拠と言う深いところからしっかりしたものを把握して進められた。軽薄さや目先の功利を戒め、愚直なまでに知見に誠実であった。よく貴重な時間をさいてやきとり屋などでご指導いただいたが、苦学力行、親孝行、勤勉勤勞された模範的な努力家にして、郷土の誉れ高く、神童とも将来を期待されたい。事務局長後、東京都教育委員会、文部省視学官、大妻女子大学教授など登りつめられて全国的視野から道徳教育中心に日本の教育改革に貢献されている。増田先生と共に金井先生は私にとって畏友であり師友であることを生涯のよろこびと誇りにしている。

私が金井先生から事務局を継承した時、39歳だった。都立千歳高在職時代で、事務局のお手伝いいただく先生方にご不便をかけ大変なご労苦をかけた。京王線千歳烏山駅から15分も歩くから豊多摩高と似てはいたが、特に事務局次長をお願いした菊地堯先生には大変な思いをさせた。先生は授業を終えられて都立国分寺高校からバス、JR、私鉄乗り継いでかけつけて下さった。一番早くおいでいただいて、10数名から20数名かけつけて手伝ってもらう仕事の段取りから後始末、研究主題の設定、研究活動の理論づけなどすべて菊地先生がオピニオンリーダーとして、又、事務処理の要としてのプロモーターとして大黒柱となって下さった。私より3歳年上だったから、よく“姉さん女房”と愛称されたが、中村には菊地さんがいい、という先輩諸先生方の夫婦円満の縁結びの然らしめる配慮だったかと思う。菊地先生に格別感謝している。とにかく大勢の人にお世話になったが、小笠原悦郎氏、伊藤駿二郎氏、杉原安氏、小川一郎氏、坂本清治氏、小川輝之氏、永上肆朗氏、海野省治氏、蛭田政弘氏、葦名次夫氏、工藤文三氏、井原茂幸氏、佐々木誠明氏、渡辺浩氏など多くの皆さんに励まされ助けられたことを記し深くお礼申し上げます。

徳久鐵郎会長時代の最後の事務局長を坂本清治先生（都立白鷗高校）をお願いすることになった。坂本事務局長時代に新学習指導要領に示された「ものの考え方の基本的問題」が新教科書ではどう書かれているか—その課題と方向—のテーマで「教科書研究」特別分科会が設置され、もう一度倫社設置の原点に立ち帰ろうといういわば倫社のルネサンス運動が起きたのであった。

### ○必修科目「現代社会」の新設

さて、都倫研第7冊目の出版が昭和55年7月20日『「現代社会」の資料と展開』と題して清水書院から出版された。第5代会長増田信先生（都立墨田川高校長）事務局長が小川輝之先生（都立清瀬高）で、細谷斉先生（都立駒場高）に引き継がれた年である。高等学校の新学習指導要領が告示され、昭和57（1982）年度から新一年生に広領域科目としての「現代社会」が必修として課されることになったことを踏まえて、具体的な授業内容の展開例を資料活用しながら試みたものである。いわば先導的試行である。全体的な企画と推進役の坂本清治氏、小川輝之氏を中心に細谷斉氏、吉澤正晶氏が編集の労を取られた。出版の趣旨を坂本清治氏、「現代社会」の成り立ちと基本的性格、学習指導の基本についての総論については文部省視学官齋藤弘氏、同教科調査官金井肇氏が執筆されている。都倫研の研究領域が広領域化した始まりとなった。

### ○創立20周年記念特集－歩みと展望「昭和56年度都倫研紀要第20集」

会長が佐藤勇夫（都立府中高校長）第6代会長、事務局長細谷斉（昭和57年3月25日）氏（都立駒場高）この年から本会の研究活動が「倫理」プロパーに「現代社会」を加えた二つの科目が研究活動の領域となり、学習指導内容・方法についての研究活動の多様化、拡散化の問題に直面することとなった。

### ○創立30周年記念特集『平成3年度都倫研紀要第30集』

会長が小川一郎氏（都立豊島高校長）第10代会長、事務局長井上勝氏、広報部長が富塚昇氏。

平成3年度の研究主題設定主旨の中で、今回の学習指導要領の改訂で、高等学校の社会科が「地理歴史科」と「公民科」に再編成され、「現代社会」が必修から選択科目になり、平成6年度から実施されること、新しく高等学校段階の道德教育に「人間としての在り方生き方に関わる教育」という概念が加わることで、様々な論議を巻き起こした。「公民科」は、「現代社会」「倫理」「政治・経済」の3科目によって編成され、いずれも2単位かつ選択科目となったことに注目しなくてはならない。「倫理」がすでに早くに必修科目から外され、結果的に、都倫研、全倫研の活動が、国や都の教育体制の変化もあって徐々に停滞や衰退を余儀なくされ始めたと考えられよう。この特集で記念になるのは「都倫研創立30周年記念座談会－都倫研の歩みと展望－」と題した初代会長矢谷芳雄氏、初代事務局長佐藤勇夫氏、初代研究部長増田信氏の座談会、聞き手小川一郎会長、中村新吉副会長、「都倫研研究活動の記録－研究主題による都倫研30年の歩み」と「研究活動最近10年の歩み」の記録は貴重な資料である。事務局長井上勝氏（都立府中高）、広報部長富塚昇氏（都立大泉北高）はじめとする事務局の皆様の労に感謝したい。

### ○「人間としての在り方生き方についての自覚を深めさせる教育」の登場

公刊物の8冊目が創立30周年記念出版、『公民科「倫理」の指導内容の展開－「人間としての在り方生き方」についての自覚を深めさせる「倫理」－』で平成4（1992）年4月25日清水書院から出版された。会長小川一郎氏（都立豊島高校長）、事務局長井上勝氏（都立神代高）。

本書は新学習指導要領において新しく導入された「人間としての在り方生き方についての自覚を深めさせる」という視点の具体化が課題の一つとなっているが、倫社がスタートした時（昭和35年の学習指導要領によれば）以来長らく「人間の存在や価値についての理解と思索を深めさせる」とあった「倫理・社会」「倫理」の目標として定着してきたものだけに、その目標の変革は論議的となった。これからも論議していかなくてはならない課題である。

「刊行に寄せて」初代会長矢谷芳雄先生がご挨拶を下された。総論的・総括的な方向付けとして小川一郎会長、中村新吉、杉原安氏、伊藤駿二郎氏、小川輝之氏、小笠原悦郎氏、菊地堯氏が論述している。編集委員会代表として及川良一氏（現会長）が「あとがき」を書かれていることに代表されるように都倫研第3世代への世代交代の象徴であろう。編集委員に及川良一氏、小川輝之氏、海野省治氏、葦名次夫氏、井上勝氏、工藤文三氏、細谷斉氏の諸先生を見るにつけても、世代交代の記念碑的スタートであったといえよう。

○全倫研創立30周年に当たり、都倫研記念出版事業として、平成6（1994）年4月25日『公民科「倫理」「現代社会」教材化の研究』が東京書籍から出版された。これが9冊目の刊行物である。第11代会長中村新吉（都立北野高校長）、事務局長は井上勝先生（都立神代高）と水谷禎憲先生（都立大泉学園高）。私はこの事業を終えて定年退職し、会長を坂本清治氏（都立両国高等学校長）にバトンタッチすることになった。

本書は、新学習指導要領に準拠し、「倫理」「現代社会」の授業を「人間としての在り方生き方」を追求する視点から授業展開する指導事例を集大成して、全国の先生方に具体的に提示したものである。先導的試行の書である。就職の時からお世話になった矢谷先生から「刊行に寄せて」の玉稿をいただき万感の思いだった。その中で先生が「私はすでに86歳2度の大病を克服してこの度の快挙を見得たのは、各位のご支援の賜物であり、心から感謝しています。」と喜んでおられた。先生が都倫研の誕生を「長男の誕生」と喜ばれた時、私は28歳であった。先生は翌年（平成7年5月）87歳で永眠された。先生に少しは御恩返し出来たかどうか忸怩たる思いもつる。

本書は、公民科とは何かその性格や目的・公民科教育の意義・理念・課題を明らかにしながら、公民科の全体構想を明らかにしようとした。総論・総括的理論部門は、宮崎宏一先生、小笠原悦郎先生、伊藤駿二郎先生、杉原安先生、工藤文三先生、及川良一先生、葦名次夫先生の会創立以来のベテランの先生方と気鋭の研究リーダーにご執筆いただいた。特に、人間としての自覚と現代社会に生きる倫理、現代の政治・経済と人間、国際社会と日本の役割、公民科の教育的意義と実践的課題、「倫理」「現代社会」の内容構成上の課題、指導計画の作成と教材化の工夫などが具体的に明確化された。

この全倫研創立30周年記念出版事業の主体は、創立期の第1世代から成長期・発展期の第2第3世代へと移行していることを示している。作成者名簿によると100名を越える方々のご協力によって成った。編集企画の労をいとわずとられた井上勝氏、幸田雅夫氏、新井明氏、和田倫明氏、上村肇氏、佐良士茂氏、富塚昇氏、増淵達夫氏、水谷禎憲氏、渡辺安則氏の諸氏に心から感謝申し上げたい。

私の会長時代、事務局長の井上勝氏、井上氏から事務局長を継承した水谷禎憲氏の両氏が、全倫研北海道・札幌大会、次いで全倫研福岡・博多大会を成功に導いてくれた。井上先生は仕事の処理能力が卓越している上に、全体を把握しての判断に優れ、その上で目配り気配りされて束ねて下さった。大学では日本史が専攻で家永三郎教授の『日本道德思想史』を研究されたということで学識にひかれるものがあった。水谷先生は私が事務局長（都立千歳高）時代の教え子でよく「倫理」を勉強された。スポーツマン（ラグビー選手）で、高等学校の「倫理」の先生になりたいという第一志望の教育人生を実現された。そして奇しくも私の時に事務局長の重職の責任を果たしてくれた。水谷さんが一生懸命努力してこの会の束ねる要となり、文武両道の教師道を開拓しながら、師を越える仕事をされていることに教師冥利を感じ嬉しく思っている。

○都倫研公刊物10冊目は、『キミの悩みに乾杯！』で、毎日新聞社から1999（平成11）年2月5日に



出版された。「教師が描いた素顔の高校生」という副題で、都倫研の先生方が生徒たちとどのようにかわってきたかをエピソードでつづった、たいへんユニークな内容となった。第14代会長小川輝之先生にまえがきをいただき、海野省治氏が編集委員長、実務のまとめ役は大谷いづみ氏、ほか編集委員に葦名次夫氏、泉谷まさ氏、小笠原悦郎氏、幸田雅夫氏、佐良土茂氏、成瀬功氏、平沼千秋氏、和田倫明氏が当たった。内容に合わせて「さかみち」「まわりみち」「みちにまよう」「でこぼこみち」「わかれみち」「みちをひらく」という6章に構成し、また成瀬氏、和田氏と引き継いできた全倫研全国調査の内容も紹介している。都倫研の教師たちが教科研究を通じて、現実の高校生たちの「人間としての在り方生き方」に深くつきあい関わってきた証として、高校教師だけでなく、高校生をもつ親や、広く一般の人々にもありのままの高校生像を知って、考えていただきたいと問いかける、そういう意味では最も都倫研らしい一冊かもしれない。

○この出版物でも紹介された全倫研全国調査は、『平成4年度全倫研全国調査報告書「自己評価」と「高校生の意識と生活」』に始まった。そこでは全国の高校生が自分をどのように自己評価しているかを明らかにし、それを踏まえた指導・援助・支援の在り方を明らかにしようとした。『平成6年度全倫研全国調査報告書「高校生一万人の価値観と生活意識」』においては、全国の高校生が現在の高校教育になにを求めているかについても調査して、現在の高校生が人間形成についての教育、人間としての生き方について考える教育を、最も高校教育に期待していることを明らかにし、高校教育の在り方に大きな改善の指針を与えるものとなった。全国調査はこの後も、平成10年度、13年度に実施された。都倫研の先生方が中心となって進めたこの全倫研調査の結果が、マスコミや教育界から大きな反響を呼び、かつ注目され高く評価された事を特記しておきたい。数年にわたってこの調査の企画・実施・集計・分析とレベルの高い報告書のまとめ役の労をとられた成瀬功氏、和田倫明氏の両調査委員会委員長、ご協力いただいた全国の全倫研の先生方に、心から敬意を表したい。

○おわりに

都倫研創立50周年の記念すべき節目に当たり、都倫研創立から創立30周年、全倫研30周年も含めて、この機に書き留めておきたいことがらを、研究出版活動を中心に記し述べてきた。10回に及ぶ研究出版物の公刊、毎年研究紀要の発行、会報の発行に示されるように、本会が旺盛な研究活動を維持してきた証左である。都倫研が、全倫研を含めて公民科（現代社会、倫理、政治・経済）教育と指導を支え育てているという自負があった。実際、都倫研の活動が全国都道府県の高専教育研究会「現代社会、倫理、政治・経済」部会の活動の中核となっていたことを、今一度思い起こし、地方の研究会に呼びかけて全国的な研究活動に広がっていくことを期待している。研究出版事業によって、研究会の活性化、会員相互の授業の工夫、学習指導内容や方法の研究、実践と研究の高揚深化、会の財政面の安定充実などが計られてきたことは言うまでもない。現今、教育界における自主的な研究活動の維持・発展がかつての時代よりもきわめて厳しい状況にあるといわれる。それだけに、都倫研・全公社研を支えておられる会員諸先生方の皆様にとって、このささやかな回顧が少しでもこれからの会のあり方にお役にたてれば幸いである、と願っている。

なお、本稿は記念誌委員長の和田倫明氏から、一部資料提供などのお力添えによって成ったものであることを特に記し、謝意を表するものである。

## 都倫研わが教育人生 — 第二部 忘れ得ぬ師友群像 — 回顧

元会長 中村 新吉

### ○都倫研忘れ得ぬ師友群像 — その一

今改めて初代矢谷芳雄のことで書き留めておきたいことが一つある。私が会長時代、先生から電話をいただいて大泉学園のお宅にお邪魔したら、室内がきれいに整理され、テーブルの上には都倫研全倫研関係の会報など創立の頃のものをきちんと束ねて置かれていた。「中村さん、今度入院することになってね。これを事務局で引き取ってくれないか。いつかにかのお役に立つだろうや」ということであった。後日、事務局長の水谷禎憲先生がすぐ近くの都立大泉学園高に勤務していたこともあり、水谷先生に引き取りに行ってもらった。その後、清瀬の老人医療センターに入院された。何度か見舞いに伺った。先生はいつもきちんと背広にネクタイ姿で現われた。「実は家内もここに入っているのですね。病院内で会うときは、家内には見舞いにきたよ、と言って、心配かけないようにしているんだ」と。最後まで奥様を思いやり、身だしなみを崩さないで逝かれた。次男さんが私と同年で練馬区内の小学校の先生をしていたが40台半ばで先立たれてから、先生は急に力を落とされたようであった。私の後の坂本清治会長が会を代表して矢谷先生を送る弔辞を捧げた。心にしみ込むいい弔辞だった。都倫研の一時代の終りを告げるものとなった。

第2代会長徳久鐵郎先生との面識は、私が大学4年次東京都公立高等学校教員採用選考試験に合格し、当時、都立志村高等学校長だった矢谷芳雄先生を学校に訪ねた折に、「挨拶に行っておいた方がいい」と紹介されたことに始まる。当時、都立城北高等高等学校の黒澤龍雄校長（お世話になった方の一人）の下で教頭をされており、村松悌二郎先生は生徒指導部長かをされていた。矢谷先生はさらに杉山一人先生、間瀬正次先生にも紹介して下さった。矢谷先生、徳久先生、間瀬先生皆様から殊の外可愛がられたことを有難く思っている。就職の際にお世話になった方の下で事務局長をさせていただくというご縁に恵まれたが、その大もとにあったのが私の学生時代の在京保護者が箕泰彦教授（日本倫理思想史、東大教授箕克彦氏の子息）であったご縁による。徳久先生は、心寛くして悠揚迫らず、常に道に依って人に憎まれることなく、方外より人を照らす徳の人であった。『徳久鐵郎先生ご勇退記念

記念誌』（都倫研作成・事務局長坂本清治先生）の自伝で「昭和10年4月東京高等師範三年修了にて東京文科大学哲学科倫理学専攻に入学（…入学の年に矢谷助手にマックス・シェーラーの購読を一对一で始める。）」とあるから、学生時代から矢谷芳雄先生との深い師弟の間柄であったことがわかる。

徳久先生はすべて事務局におまかせされたが、常任幹事会や常任理事会（全倫研）、懇親会のちの経験交流会の会が佳境に入り愈々しめの時に、会長が愛唱歌“西湖の月”（作詞 島田磐也、作曲 能代八郎、昭和13年）「鳴くは虫の音 草枯れて 露は戎衣を濡らさねど 還らぬ戦友は今いづこ 西湖の月よ答えかし……」を歌われてお開きとなるのであった。

先生はまた、正月には都倫研の事務局や役員の方々、東村山高や小松川高などの幹部の皆さんを鷲宮のご自宅にお招きされて振舞って下さった。後進の方々、若い人達に可愛い可愛い気持ちあふれんばかりに目をかけて下さった。ご退職後、千葉県鹿野山に入り禅道場の師家（導師）になられ、多くの弟子を育成された。「三間茅屋 無人而到」と、先生の色紙の一つにある。仁徳厚き哲人教育者。

享年79歳、私も来年はその年になる。

増田先生は組織を束ねる力だけではなく、皆を引きつける魅力を持っておられた。その秘密は深く広い学識・高い識見の持ち主で篤学の士、学究の徒であるとともに、師弟愛に厚い教育者であったといえよう。上野高校で同僚の加藤道理先生の漢文の授業に出席し生徒とともに机を並べ学ばれたという。また、若い先生方を育てることも一貫していた。墨田川高校長時代に時間をみても、渋谷紀雄先生と古典の輪読会を持たれた話は有名である。また、都教育界きっての大変な読書家でかつ文筆家で、『教育人物読本』（学事出版）、『秋川物語』（学事出版）他、私家版本を多数書かれている。都倫研で書いた私の文章を、公にする前にご指導お願いすると真っ赤に推敲のペンが加筆されていて、書き直してはまたご推敲ご指導いただくという良縁に恵まれて今に至っていることを幸せに思う。私にとっては生涯の師である。今、88歳米寿を迎えられたという。岡本武男先生の94歳ともども増田先生のご長寿を嬉しく思う。

金井肇先生とは、創立の頃から事務局の仕事や研究・調査などの仕事をご一緒させていただいた。先生が事務局長になってからは、更になにかとご指導いただくことが多くなった。金井先生は、私にとっては実務の師であった。特に研究会の財政面の充実安定が課題で金井先生がそれに知恵を働かせた。その一つが出版社特に教科書会社をお願いして、広告を取るというアイデアだった。その広告料が大きな収入源となり、特に全倫研の運営が安定的になった。都倫研は都からの研究補助金が支給されたのでそう心配する必要はなかった。都倫研の事務局長が全倫研の事務局を兼ねていたので、お手伝いにきていただいた先生方で、全と都の仕事の一つの場所で連絡、相談し合って出来る効率性が高いというメリットがあった。確かこの体制は創立から平成8年度第13代会長宮崎宏一先生（都立足立東高校長）事務局長増淵達夫先生（都立千歳高校）まで続いたと記憶している。話を本論にもどして、金井先生は広告を研究紀要、会員名簿（全・都）、会報などに掲載し、当時の金額で5千円1万円と頂いたから効果大であった。全倫研関東甲信越大会の存廃問題もクリアした。非常に頭脳明晰で頭の回転が早く、機を見るに敏であった。先生が徳久先生のご意志を体して推し進めた全倫研関東甲信越茨城水戸大会や全倫研岩手盛岡大会は大変な盛り上がりで熱気溢れんばかりの盛会を見せた。昭和46年のこの盛岡大会の時、現会長の及川良一先生が高校生だったというから50年の時の流れを実感できよう。

増田先生は「教師が真の教育者を貫こうとするなら、権力に近づくな」とよく口酸っぱく教え諭された。斎藤弘先生は文部省視学官に登り詰められた人であるが、視学官は文部エリート官僚に比べたら、大部屋にぎゅうぎゅう押し込まれて、みじめなもんだよとよく自嘲されていた。斎藤弘先生はその身は権力の中枢にありながら、その教育者としての魂や探究している教育の理想は権力と無縁なところにあり、増田先生同様に最も教育者の良心を貫いて生きようとした人であった。そして、青年期にある高校生に人間の存在や価値についての自覚を深めさせ自立的な人格形成について、なにをどう学習させたらよいか、最も生涯の探究課題とされて生き貫かれた人ではなかったろうか。

斎藤弘先生は、「倫理・社会」「倫理」「現代社会」「生みの親」の一人であった。先に論述したように、先生の著作『明解倫理・社会』（富士書房）は教師の毎日の授業の最良の伴侶となり、受験生の参考書としてもよく売れた書といわれる。しかし先生はその後受験参考書の類とは一切手を切ってもっぱら教育書を時に金井先生と共著で次々と出版され、社会科から公民科にかけての教育指導の原理、授業展開内容の具体化・教材化に先導的役割を果たされた。『高校教科指導全書 倫理・社会』（学事

出版)『高校教育選書「現代社会」指導内容の構成と展開』(金井先生と共著・明治図書)そして公民科教育への総括と展望を『公民科教育への歩みと課題 人間としての在り方生き方』(富士教育出版)と題して出版された。たまたま私が都立光丘高等学校長に着任して間もなく表敬訪問下さった齋藤先生からその第一冊目をご恵贈に浴したことを覚えている。この書は戦後高校公民科教育への歩みと課題を明らかにした貴重な教育資料として歴史的文献となるだろう。

先生は、倫社も「倫理」も「現代社会」も生みの親であるが、それらの科目がご自身の思いの深い本来的な倫理的教養を深めるあるいは高める、豊かな内容としての性格からかけ離れて、受験一科目化していくのを深く憂いておられ、常の本来のものあり方を考究しその実現を求めた生涯であったといえよう。私自身が先生の構想化しようとした人間教育のロマンを具現化できなかったことを恥じている。文部省におられたことから先生は金井先生と共に、倫社をなぜ必修からはずし選択科目としたのか、機会あるごとに遠慮のない批判・非難を受けた。もちろん、先生お一人の責任に帰せられるものではない。しかしまた都倫研で活動し都倫研の活動を支えている多くの先生方が、理想の「倫理」「現代社会」の教科書作成に苦心し、生徒にとって魅力ある授業の探究に苦心されている多くの先生方と会うにつけ、新しい世代の取り組みと成長を喜んでいるものである。実際に、東京書籍の教科書の編集執筆で小笠原悦郎先生(日大二高)、中村佑二先生(都立篠崎高等学校長)と共に、先生から長く親身なご交誼ご指導をいただいたことは忘れられない。生涯の恩人のお一人である。

先生はまた、画家であり文人であった。そしてなによりも、沖縄の歴史、民俗の研究者であり、先生の桜台のご自宅の書斎の蔵書の殆どは沖縄関係で天井まで並べられていた。沖縄の先生方から頼られ親しまれ慕われて逝かれた。“大和人(やまとんちゅう)”ではなく“沖縄の人(うちなんちゅう)”の偉大な教育者であったと思っている。愛唱歌は「ていんさぐぬ花」だった。79歳で逝かれた。

小笠原悦郎先生とは創立以来の友人で、若くして私学教育研究所の研究奨励金で倫社の教科書を調査分析を中心に膨大な調査研究資料をまとめて『「倫理・社会」授業内容の研究』を発表された。全倫研(東京)大会ではよく会場を提供し助けて下さった。教科書などの文章推敲では、とにかく難解な用語表現をわかりやすい表現内容に改める柔軟な頭脳の持ち主であった。

第4代会長の岡本武男先生は既述したように齋藤弘先生とともに倫社の学習指導要領の作成、先導的試行等ですでに指導的立場の方であった。86歳まで都高野連会長、現在94歳で、ある私立高校の名誉校長としてご勤務されておられる。小学校の教師を6年程されてから東京高等師範学校に入られたという苦学力行の志を貫いた立志伝的生涯の持主。坐禅修行、公案問答、剣禅一如の臨済宗の立場からの修証一如の世界を教えていただいた。先生は国高の校長時代にパンツ一つで放課後ランニングしたり、攻玉社高のマラソン大会では生徒と共に走り、大いに生徒から敬愛されたと語り伝えられている。

都倫研の草創期に倫社の学習指導方法や学習活動で大いに啓発された方に、酒井俊郎先生(第8代会長)、御厨良一先生(第9代会長)、それに鮎沢真澄先生(都立蒲田高校長)方がおられる。酒井先生は当時立川高校で、生徒たちの自主的な学習活動特に生徒自身による研究発表討議方式の授業に驚かされた。後に、先生からは教育委員会の教育指導行政においても上司としてご指導いただいたが、常に温かく見守って励まし育てて下さった。太陽のような大きな器のような先達であった。そしてその頃、単位修得論文活動を工夫実践されておられた御厨良一先生(当時都立北野高校)と自己展開学習を工夫実践されておられた鮎沢真澄先生(当時都立駒場高校)の授業・学習活動の工夫に大いに教

えられた。御厨先生は、思想家・先哲の古典や名著の一冊を研究し論文として提出させ単位認定する、それを発表する、討議するなど読書活動を生かした授業展開でもあった。これに対して鮎沢先生は、自己を見つめる、人生と宇宙の生命、自己とは何か、命とは何か、生と死、神の存在、仏の存在、など主題を設定して論述し、思索を深めて“自己を展開し深化発展させる”自己展開学習活動であった。私は、このお3人の先達の授業展開方法に啓発されて、読書課題「私の一冊」研究発表・グループ研究発表討論方式授業を工夫し実践した。

もうすでに60歳、50歳を超えた教え子たちのクラス会などで、「中村先生の倫社の授業で『ソクラテスの弁明』を読んでまとめて発表したことを今でも思い出します」などと思い出話を聞くと、30歳代の頃のことが思い出されて懐かしいものだ。

都倫研に常に清新な空気を注入し、世界と人間のかかわりについて敬虔なあり方に気づかせてくれたのがキリスト教の信仰者であり、仏教の信仰に生きる師友であった。

キリスト教徒の流れでは、鷺見美雄先生が挙げられる。鷺見先生は創立期から参加され、内村鑑三の無教会主義の信仰を貫かれた方だったと思う。徳久会長の時だった。先生の定期試験時、日本の鎌倉仏教の問題で、他の信仰を否定し自己の信仰のみを正しいとした生徒の答案に、先生は0点をつけて返した。それが問題化され、教育委員会に直訴され裁判問題となった。都倫研でこのことを先生は問題提供され、私たち自身も信仰の自由と評価の在り方、宗教と教育、倫社のテストのあり方の問題で議論し合ったのを覚えている。鷺見先生は極めて純粋な正義を貫く武士道的な孤高のキリスト者であった。

キリスト者として柔順と愛と正義の問題提起をされて、世俗的な権力や強制をきびしく批判されたのが佐々木誠明先生である。イエスの死とパウロ、アウグスティヌスの初期キリスト教とともに、旧約聖書をも深く研究され、いつかヨブ記を取り上げられ、正義と愛の神と神の被造物人間の悪と苦痛との関係を深く論題として提起された事があった。佐々木先生と同様に敬虔なキリスト者たちとして、鮎沢真澄先生、高野啓一郎先生、香川弘先生、沼田俊一先生、ガエタノ＝コンプリ先生たちが挙げられる。香川先生は啓明学園の校長、沼田先生は都立南平高校長として学校づくりに当たり、正門に「汝自らを知れ gnōthi sauton」を掲げられ、哲学者校長としての名声を高めた。ガエタノ・コンプリ先生の存在は極めて大きい。先生が著者代表となって著した『新時代に人間を考える』（または『人間を考える－人間としての在り方・生き方－』）は、私の日々の生き方や心のもち方に光を与えてくれる一冊の本である。本書は、人間、宇宙、神の存在や倫理について考察させる教科書らしい教科書であった。コンプリ先生が都倫研に來られて発言して下さることが何よりの楽しみである。

仏教的な人間観、人生観、宇宙生命観の探究者、求道者としては、徳久鐵郎先生、岡本武男先生、増田信先生、吉澤正晶先生の皆さんが挙げられる。すでに述べたところであるが、徳久先生は自らの退職記念誌の中で「昔日将心求外仏 今将知仏在心停」（昔は心の中で、外へ外へ真理を求めたが、今、気が付いた。真理は自分の心の中にあることに）。岡本先生は、よく「径寸十枚、これ国宝に非ず。照千一隅これ則ち国宝なり」という最澄のことばを語られ、増田先生は「たまたま行信をえばとおく宿縁をよろこべ」（親鸞のことば）に帰依されるが、それぞれのご仏縁を大事にされておられる人生の先達にあやかって、喜寿の山里に遊び傘寿の山に向かってわけいようとする今、ようやく私も父祖の信仰真言宗に帰依し、弘法大師（空海）様の教えに心も魂も体もとき放って、宇宙の大日如来様と一如となるべく、“南無金剛遍照”“南無阿弥陀仏”と祈願するのである。

## ○都倫研忘れ得ぬ師友群像 ― その二

私が大変全倫研調査委員会でお世話になった一人に成瀬功先生がおられる。先生は委員長として全国の高校生が今の高校教育になにを最も期待するかという研究課題を設定し、人格形成の教育、人間の在り方生き方教育への期待が最も高い現状を引き出し、文部科学省はじめ教育課程審議会などに注目され、都倫研の研究が高く評価される原動力となった。また、ソクラテスやルソー、カントあるいは吉田松陰、夏目漱石などの原典の掘り起こしに取り組み、多くの研究論文冊子（私家本）を刊行された。主体的な教師の道に生き、都倫研を大事にされた先生である。

東京都教育庁指導部や都立教育研究所に勤務した関係での出会いでは、新井明先生、工藤文三先生、関根荒正先生、上村肇先生、増渕達夫先生、山本正先生、富塚昇先生、大谷いづみ先生、佐良土茂先生、仁科静夫先生、及川良一先生らがあげられる（順不同）。新井明先生（元都立西高校）は都教育研究員、まだ30歳そこそこの頃だった。研究会に入って勉強したい、どこがいいだろうか、というのですぐ都倫研を勧めたのが縁となった。先生は生涯一教師としての教育人生を貫いた。アメリカの経済教育の研究の紹介など先駆的役割、授業指導法の改善工夫などに貢献した。佐良土先生も生涯一教師としての教育人生を貫き、2人とも都倫研で公開授業と最終講演をされて退職された。仁科静夫先生や関根荒正先生も同様生涯一教師を貫いた。関根先生は母校の先輩らと教師教育や教職研究を深めた。良心の教育と教師としての良心に生きた方々であった。教師として立派な生き方であった。嬉しい。工藤文三先生は早くから明晰な頭脳と誠実かつ手際よい事務処理能力、研究推進能力により、現在国立教育政策研究所部長の要職にあって、全国的視野に立って指導的役割を果たしている。上村肇先生と増渕達夫先生、山本正先生は、新規採用教員研修会などでの出会いであった。増渕先生はその後、私が事務局長をしていた都立千歳高校に異動してきて私と同様に事務局長をしていただいた。今や都教育界の要職にある。上村先生は山本先生とともに都立養護学校における倫理・社会や社会科教育、指導内容・方法の研修を重ね、都立高校に異動してからも教科教育法、教職研修を深められて、今や増渕先生同様、都教育界の要職にある。山本先生は、校長職として一校の最高責任者としてまた教師の教師として、中高連携教育・中高一貫教育の在り方の推進者として活躍している。大谷いづみ先生が生命倫理の研究の道一筋に生きている姿も、都倫研育ちの人間性の美しさも加わって、嬉しいかぎりである。現会長の及川良一先生については全倫研（盛岡）大会の項などでも触れたところであるが、先生との出会いは及川先生が都の人権尊重教育研究奨励（個人の部）研究員の選考に選ばれて、たまたま私が及川先生の担当になったことに始まる。及川先生が25、6歳位だったか。小笠原悦郎先生とは同郷で高校、大学とも先輩・後輩に当たるとされるが、才気縦横さや、東北の質朴・実直も表に出る出ないは個性の違い、まじめで誠実な教育者、青年期的人格形成にかかわる教育の探究者には変わらない。現事務局長の和田倫明先生（都立高専教授）は、都立高校の先生になって間もなく、東京大学教授の小倉志祥先生から、「今度、和田倫明君が君と同じ都立高校の倫理・社会の先生になるそうだから、よろしく」ということであった。和田先生はすぐ都倫研に入り、後に私の携わっていた東書の倫社の教科書編集委員を継承してくれることになり、深い御縁ができた。村野光則先生、渡邊安則先生には倫社師友追弔の会などで大変お世話になっている。

創立50周年を振り返る時、多くの師友・先達が故人となられたが、その“出会い”と“絆”に思いを致すとき、感慨深いものがつきない。この一文がはからずも追悼文ともなったが、あくまでも師友・先達の足跡がこれからの私達や都倫研の新しい歩みの鑑となりますれば、これに優る喜びはありません。

ん。都倫研いな人生の師恩深き増田信先生のことばにならえば、たまたま都倫研において教・行・信を得たことの良縁の教育人生を送れたことを末永く歡び無上の幸せとしたいものである。

わが人生と不即不離の都倫研50周年に巡り合うまで生き抜いてきたことを嬉しく思う。その気持ちだけでいっぱいである。忘れ得ぬ人たちの題で書き綴ったのもその一念からのことである。

## Ⅱ ひとこと・近況



## 倫・社と共に

僧侶 浅川 熙 信

私にとって「倫・社」教育とは何だったろう。それを学んだこと、それを教える側に立っていたこと、過ぎたことではすまされない問題を内包していると思います。教員時代、借り物ではない、「自分で考え、判断し、行動し、その責任を自らのものとする」ことを、心を砕いて教えてきたつもりでいます。しかし、その一部であれ、卒業生が就職してわずかの間に、ものの見事に「会社人間（組織人間）」に変身してゆく姿も見てきました。共に現実です。

「生きてゆく」ためには何を選択すべきか。現実社会の中で教育があまりにも中央集権化し、政治が右も左も「土足」で教育現場に踏み込んでくる姿は改善されているようには思えません。

私の個人的な見解ですが、今日の社会は、平穩無事なときは淡々と物事に対処してゆける能力を持っているように思います。しかし、いったん、その歯車が狂い、想定外の現実の前ではどうしようもなくなってしまう傾向はないでしょうか。「常識」に飼い慣らされてしまったのではないのでしょうか。私は、人間や社会をその外見だけではまったく信用しません。「追い詰められた」状況の中でどう行動するかです。そこで、本物かどうかははっきりすると思っていますのです。

私は、戦後社会がどれだけ「人づくり」をしてきたかについて、はっきり疑問を持っています。そこそこの地位や名声、財産を手にし、そこで安心して、安住してしまう、そのように仕組みられていたのかもしれない。魂を売り渡してしまったかのようです。富の豊かさが人間の幸福をもたらすと信じて疑わなかったのです。つまり、私たちの社会は「経済至上主義」に呑みこまれてしまったのでしょ。私のような、宗教に関係する人間、知識人、文化人と呼ばれる人たちも共にです。

そんな環境の中で、「倫・社」はどんな立ち位置にいたのでしょうか。課目はもちろんですが、それを伝える教師も含めてです。私の独断と偏見ですが、「倫・社」はそれを生徒に伝える人にはより強く、人間性が問われるのだと思います。

「倫・社」を担当する教師と生徒の関係は、むしろ卒業後にその本質が見出されるのではないかと思います。「又野先生」のような先達の実践があるのです。私にとって「倫・社」教育は過去のことではありません。むしろ公教育の縛りから解放されたときこそが、「倫・社」教育の必要性を社会に問うチャンスではないかと思っています。今日の社会では、それが切実に求められていると思うのです。

「教員魂」という言葉があります。それは教育現場で児童、生徒、学生を前に権力者として存在していることではないと思います。むしろ、教育現場を離れたときにこそ必要とされる信念なのではないでしょうか。「倫・社」によって目覚め、さらに育てられ、活動の場は主に「全倫研」であった私も、一時期は東京の私立高校で「倫・社」を教えたのです。

いずれにせよ、生徒との人間関係において、卒業後こそ、その真骨頂があるのではないかという思いは変わりません。ただし、それを証明するのは学校現場ではなくて、卒業生一人ひとりの「評価」でしょう。

とくに2011年3月11日の東日本大震災、さらに福島第一原発災害は、その收拾にいったいどれだけの時間と費用、そして私たちの反省と覚悟を必要とするのでしょうか。社会が大きく転換してゆく、否、

ゆかねばならない節目のときに、かつて「倫・社」を教えてきた者としての真価が問われるときなのだと思います。その上にこそ、「倫・社」と共に、「倫・社」と一体であるという自らの信念が評価されるのでしょう。それは、どこまでも「自らの生き方」に帰することなのだと思います。

合 掌

## 先哲という世界遺産の次世代への継承

石川 久博

都倫研が誕生したのとほぼ同じ頃に、私は、千葉県の教師になりました。あの頃、はじめて「トリケン」という名称を耳にしたとき、ドイツ語の trinken (飲む・飲酒する) を連想して、滑稽な名称だなあと思ったりしました。ところが、この都倫研から、私は、倫理教育のあり方について様々な示唆を与えられることになりました。

年に1, 2回総武線に乗って江戸川を越え、都倫研の先生方の研究授業や研究発表に参加する機会を得ました。そして、一人一人の先生方の熱意に心を打たれ、その都度、大きな収穫を得て千葉に戻りました。この50年、都倫研の先生方の活躍は、東京都の内にとどまらず、広くわが国全体の倫理教育・公民教育の発展に大きな貢献をしてきたと思います。

こんにち、私たちの周囲には、紛争が、環境破壊が、犯罪が、人権の軽視が、生命の軽視が、いたるところに見られます。こうしたなかで、ソクラテスの遵法精神・ブッダの慈悲・孔子の仁・イエスの隣人愛・ラッセルの平和主義・ガンジーの非暴力・シュバイツァーの生命への畏敬……などなど、先哲という無形の世界遺産を次世代に継承していく意義はきわめて大きいと言えます。誕生50周年に当たり、都倫研の一層の発展とわが国の倫理教育・公民教育の一層の充実・発展を願ってやみません。

## 近況・偶感

鈴木 昭逸

3月11日の東日本大震災で多くの死に直面した。直接の被災で友人知人三人を喪い、かつて勤めていた学校の先生方、生徒、児童七名、それに被災後の避難所暮らしの心労で体調を崩し亡くなった地域の高齢者三名等である。

これほどまでに死が身近に感じられ、人生の無常が身にしみた経験はかつてなかった。

そんな度重なる葬儀の合間にふと脳裏をよぎった言葉がある。たしかそれは昔読んだ本のどこかの一節である。

それはわれわれの直近の先輩達、昭和18年に学業半ばにして学徒出陣し戦場に赴いた人達の遺した

言葉である。彼らがどのように死を直視し、超克していったかという事に関してである。

それは多分、こんな内容の文章であったと覚えている。

「アジアの解放、大東亜共栄圏、国体護持といった大義名分に殉じ、自発的に死を受容する覚悟」だけが潔く死に直面できる唯一の道であるというものであった。

そして、ふと又、斎場の椅子の上で思ったのである。昭和20年の敗戦以降我々には殉すべき大義も祖国もないのではないかとすれば我々が生死を直視しそれと対峙する時の心の拠り所はいずれにあるのかと。神仏に素直に頼れない凡俗の一人として。そして思った。

もしあるとすれば、それは一生の或る時期でも、それが短かろうと長かろうと、精一杯情熱を傾けて生きたという経験、記憶があれば、ましてやそれが素晴らしい仲間との出会いや連帯感を伴うものであったとすればなおのこと、それが大きな支えにはなるのではなかろうかとの思いに到ったのである。

そして、ああ今日は震災がなかったならば、上京して懐かしい仲間たちと「第二回師友追弔会」に参列していたのになあとも思った。

その途端、はっと閃いたものがあつた。

この「師友追弔会」を企画・立案・実施している先輩仲間達の深慮と熱き心が。

「そうか、そうだろうな、そうなんだ」と思いを巡らし、頭を垂れながら、倫社の恩師、先輩、仲間の面影と活動を偲び、感謝の念を新たにし、末永き御健勝を祈ったのである。

合 掌

## 私と都倫研と教員生活 42 年

平 沼 千 秋

東京都に「倫理・社会」で採用された年、授業の工夫を学びたいと思って都倫研に初参加、会が終了して帰ろうとした時、「君、〇〇中の卒業生だよ」と声をかけて下さったのが金井肇先生、さらに「君、〇〇高の卒業生だよ」と声をかけて下さった方まであり、それが斎藤弘先生でした。以来、都倫研は私にとって貴重な学びの場となりました。

今年の大震災の日、帰宅すると、退職後も捨てられずにいた大量の本や資料類がなだれ落ちていたため、やっと重い腰をあげて片付け始めました。昔の資料（研究会での発表レジメなど）を積みあげながら、多岐にわたるテーマ、掘り下げればきりのない内容の深さ、授業として生徒たちに伝えることの難しさ等、皆さん、本当に真剣にとりくんできたのだと改めて思いました。

初任校は下町のヤンチャな学校で卒業生はもうアラ還、クラス会では孫の話も。通勤に往復3時間以上かかる所や、工業高校など色々な学校を経験しました。育休なしの産休明けで初めての科目も持つことになり（倫理の教員の宿命ですが）夜は勉強時間がとれないため朝4時起きで授業準備したり、転勤先ではいきなり3科目で、専門外の教科が3年の受験のための選択クラスだったり、倫理だけに集中できないことも多かったです、今振り返れば、他科目の勉強が視野を広げてくれました。

定年の年（60歳の時）は農業高校服飾科の担任でした。都立高唯一、3年間服飾を専門として学ぶ

クラスで、文化祭でのファッションショーは大人顔負けの本格的なものです。生徒たちは半年以上かけてとりくみ（授業とは別なので春休み夏休み放課後と大変な努力）、高三最後の年のショーのテーマは、ニーチェの「永劫回帰」（担任を意識してくれたのかどうか？）。素晴らしい内容で、私にとっても最高の思い出になりました。ファッションショーと永劫回帰、どう結び付けて表現するのか、皆様不思議でしょう？ 生徒たちはすごいです。

今、倫理は科目として必修から外される学校が増え、とても残念です。職業高校では殆ど消えているのではないのでしょうか。社会科としては、小中では学ばない唯一の科目で、大学に進学しない生徒たちにとっては一生ふれることがないかもしれない。文系理系実学系に関係なく、普遍的、根源的内容にふれておくことはとても大切なのにと思います。嘱託で勤めた三田高で授業をもったあるクラスには、中国人、韓国人、ロシア人、スペイン人の生徒がいて、さらにフランスからの留学生が加わり、彼女によればフランスでは哲学は必修で時間数も多いとか。ただし知識を詰めこみ、知識を問う内容ではないようです。

## ひとこと

紺野 義継

「都倫研が50周年」を迎えたとのこと。おめでとうございます。私が当研究会に参加させて頂いたのは、手許にある「都倫研紀要」が昭和62年（1987年）26集から、平成6年（1994年）33集までを紐解けば分かるようにわずか7年です。しかしこれまで少なくとも10年間は在籍したと思っていました。それほどに楽しい待ち遠しい研究会でしたし、今でもそうだろうと思っております。刺激の少ない私立校の教員にとって、公立校の先生の体験談はそのまま倫理学入門であり、教材でありました。分科会で配布される資料も、興味を引きだせるものでした。なにより楽しかったのは二部の trinken、あの饗宴の時空でした。ここで先生がたは新旧の別なく、まさに 都倫研の信徒でした。さらに、終電を気にしつつ、W先生と池袋駅の構内で30分をこえる立ち話をしたこともなつかしく思い出されます。しかし定年一年前、予想もしなかったパーキンソン病にかかり、7年間の闘病生活に入っております。手の振るえと歩行障害が特色ですが、調子の良いきは、ワープロを使うことも出来ますが、加齢とともに難しくなっています。私にとって「都倫研」は、まじめさと楽しさとが両立する数少ない研究会のひとつです。今後はこれまで信奉してきたユニテリアンについて学習を深めたいと思っております。

# ひとこと

菊地 堯

## 都倫研と私

私は都倫研には創立初年度から参加しましたが、それまでは中学校に11年勤務しておりました。参加はしたものの6年間は研究討議が佳境に入る頃には、定時制勤務のため、退出せざるを得ずいつも残念な思いでした。

昭和45年に全日制に移り、以後はできるだけ最後まで残って TRINKEN(単なる呑み会に非ず、真のシンポジウム)を楽しむことができました。これは飾りなく本音で語り合う研鑽の機会でした。そして、ここで先輩や同輩の方々から啓発や叱正を戴くことで、独善や慢心を反省させられ、自戒と奮発の貴重な機会を得、深く感謝しております。

昭和47・48年度には中村新吉事務局長のご指導のもとで次長を務めさせて戴き、会の研究活動・運営の全体像を知る視座を学ぶことができました。

ただ申し訳ないことに、事務局長を務めるべき際に健康問題が起り、お断りせざるを得ませんでした。本当に申し訳なく存じております。せめてもの償いにできるだけのお手伝いと心掛けたつもりですが、今でも痛恨の極みです。

最近ボランティアと言う便利な言葉がありますが、会のお世話を下さっている先生方の無償のご奉仕に、心から感謝申し上げます。それあって初めて会が今日まで存続できたことは間違いありません。

## 閑話休題

私が中学校教員から高校教員への任用変え試験を受けたときの問題に「狼に育てられた子供」\*をいかに教材化するかというのがありました。人の成長・人間形成における後天的要素の重要性を説けば多分OKだったでしょうが、私はこれに加えて、この逆だったら？ と、先天的素質も考えさせる必要を付け加えました。安易に通説をなぞることで満足せず、自らの考察も熟慮の上加える、そこに倫理・社会以来のこの科目の狙いの一つがあるかと思っています。こんなことを私がいうのは不遜かもしれませんが……。

\* (皆様には釈迦に説法でしょうが) 20世紀初め狼に育てられた二人の女の子がインドで発見され、彼女らは行動すべてが狼そのもので、人間としての再教育に長期を要しましたが、より幼い子の方が早く人間の行動を身につけたとのことでした。

高校倫理の教育には、内外ともに困難がありましようが、現役の諸氏のご健闘を念じます。倫理の必要性～必修化を大きく視野に。

## これまでの「都倫研」、これからの「都倫研」

文京学院大学 小泉 博明

これまでの「都倫研」については諸先輩が語るであろう。そして、私を一人前に育ててくれた「都倫研」や、さらには「全倫研」の諸先生の学恩に対しては、まさに感謝の一言に尽きるのである。とは言え、私は未だ半人前であるのかもしれない。ここに御礼を申し上げて、これ以上は語らない事とする。

さて、これからの「都倫研」である。最大の魅力は公開授業である。現状では、年に2回程度である。もう少し増やせないだろうか。中堅の先生の授業よりも、若手の先生の授業実践がのぞまれる。共に学ぶという姿勢で研究協議をすれば、大きな糧となり、今後の成長が一層期待されよう。また、評価問題などの検討も合わせて肝要である。

公民科「倫理」を取り巻く諸課題は改めて語るまでもない。その諸課題の解決を図るための方策や戦略をどう立てるかである。センター試験の動向とも切り離せない。平成25年度から新課程が始まり、新しい教科書が刊行される。しかし、その先の新学習指導要領についての議論も始まっているようだ。少し早いが見据えての議論も必要なのである。例えば「倫理基礎」の開設に向けて智慧を出し合い、討議し、広く発信をすることも考えられよう。従来「倫理」が思想史、哲学史であるという批判への脱却も可能となろう。そして「都倫研」が今までに蓄積した叡知が、より一層活用され、「倫理」復権を期待したいところである。今後は公民科「倫理」の必修化へ向けて多様な場面で発信し、今こそ「都倫研」への役割と真価が問われる正念場なのである。微力ながら、お役に立ちたいと決意している。

## 都倫研 50 周年に寄せて

東京都立荒川商業高等学校 (定) 多田 統一

私は、昭和51年4月に地理の教員として都立高校に勤務した。平成23年度末で退職である。この私が、なぜ都倫研と関係を持つようになったかということからであろう。持ち時間の関係で、専門の地理のほか、倫理社会などを担当してきた。当時の生徒の中には年配者もあり、若い教員にとって思想史を教えることは、大変な苦勞であった。実際に都倫研の集まりに参加するようになったのはずっと後のほうで、現代社会が登場してからだと思う。現代社会は、自由な科目で、特に定時制においては扱いやすい科目である。社会科再編以前は、地理的に扱うことが可能であった。この現代社会への取り組みを通して、積極的に都倫研の集まりに参加するようになった。研究部などの事務局や分科会の責任者を務めたり、全倫研大会へも積極的に協力した。都倫研の活動は、少ない人数の中にも内容の濃い研究が行なわれており、ほかの研究会にはない特色を持っている。定通教育と

の関わりで、都倫研を研修の場として活用させていただいたが、思想史、社会学、教育学など、専門性の高い先生方と知り合えたことは幸いであった。この貴重な体験を今後に活かしていきたい。

## 水仙・菜の花・ひぐらし

小河 信國

男性料理教室を終えて帰ろうとしたら、何となく帽子が重い。頭の具合がおかしい。そこで脳外科で検査をしたところ、どうも脳梗塞だと言う。更に調べた結果、脳の左の首の血管が極めて細いと言う。そこで脳の血管を撮影する為に一泊入院した。次いで左内頸動脈狭窄症を改善する為にステント留置術の手術が必要なので更に入院。全身麻酔でICUに入室した。一週間程で無事退院した。年末年始の慌ただしい日程だった。そこで、あらためて考えたのが私の年齢のことだった。

水仙の咲きのぼりゆく岬かな

昭和53年の冬、「奥の細道」を訪ねて旅立った。日数をかぞえて金沢から能登の輪島に辿りついたのは暮の三十日だった。旅宿には客は私一人きりだった。晦日の三十日とあって番頭、女中も誰も出払って宿の女主人一人が私の面倒を見てくれた。赤海鼠<sup>なまこ</sup>がうまかった。翌日、越前岬をめざして出発した。バスの運転手は途中から乗客は私一人きりになったので越前岬の話が弾んだ。日暮れが近づいていた。驚いたことに岬の入り口でバスは停まった。岬を往復する時間、バスは待ってくれたのだ。燈台に灯りが点った瞬間、シャッターを切った。水仙と燈台をフィルムに収めた。あれから、どれだけの時間を私は費やしたのだろうか。

菜の花や紀ノ川となる吉野川

年号が昭和から変わった年の頃だろう。誘い合わせて吉野の花を見に行った。見頃咲き頃を予想して行ったが、いささか早い時期になってしまった。利休の庭も見た。帰りがけ、川の<sup>ほとり</sup>辺をとぼとぼと歩いていた。すると川の<sup>しるし</sup>辺に、これより吉野川と分れて紀ノ川となるとの標が立っていた。そこから吉野川と紀ノ川をさまよい歩いたことだった。

年号が変わったと思ったら忽ち、あっという間に数年、数十年——。諺の通りです。

ひぐらしや水面にのこる夕明り

私は川の辺を歩いて、ひぐらしや夕月に心を寄せてゆきたいと思う。

## 今、記しておきたいこと 二言 三言

泉谷 まさ

### I 2011年3月11日

あの日、大震災が起こった時、私は横浜駅ルミネの8階でボイストレーニングの教室にいた。ドーンという音と一瞬突き上げるようなたて揺れ、やがて大きな横揺れが来て、室内にあった机、椅子、楽器類が動き始めた。左右に大きくシーソーが揺れるようだった。私は教室のドアを開け、部屋にいた仲間に「柱のあるところに行って！頭を何かで守って！」と叫んでいた。講師の先生を差し置いてである。長年、教職にあった習性なのか、これは何とか切り抜けなければ…という一瞬の思いからだった。

揺れが収まり、横浜駅でJR運転再開を待つ間に大津波の映像を見た。衝撃的だった。経験したことのない地震の揺れと津波の威力に圧倒されたのか、多くの人で大混雑なのに駅の中には混乱は少なく、不思議な秩序があった。そこで、私は仲間の一人と夜明かしをする覚悟だった。地下を避けて階段を上がると、柱に寄り添うように4人の老婦人がいた。立っているのさえ辛そうであった。聞けば「88歳」のクラスメート、クラス会の帰りだそうである。私たちは何故かそこを動けなくなって話し始めた。

「あなた、今日はもう帰れないのだから、あわててもしょうがないわ。戦争ではないから爆弾が落ちるわけもないでしょう、ここには津波も来てないし……」「この大勢の人たち、どこへ行こうとしているのかしら？どこへ行っても大変だから、あまり動かない方がいいのよ」「食べ物は何かあるでしょう 心配ないわよ」「お手洗いがどこにあるのかだけ調べて教えてね」「寒いからセーターを重ね着しましょうよ」

一人が時々不安げであると、リーダー格の人が「大丈夫よ」をくり返す。その落ち着きとチームワークの良さに、何か手助けできないかと思っていた“若い”私たちの方が元気づけられた。避難場所が知らされるまで数時間かかった。その日は「帰宅難民」になった。しかし、彼女たちと過ごしたせいか、あっという間に過ぎた心暖かい時間であった。辛いと感じるより、こんな事態の中で自分の非力を感じつつ、これから「自分は何ができるか」「自分は何をすべきか」ということに思いが飛んで、気持ちが高揚していた。

### II 思い返してみれば……

「先生は何故、倫社の先生になったのですか」、生徒からよく尋ねられた。

多くの生徒が、「『倫社』は何を学ぶのか、またどう勉強したらよいのか解らない、これを教えようとする先生は??？」という疑問をもっていただようである。

私自身、正直に言えば教職に就くこと、また『倫理社会』の担当になること等に明確な目的意識をもっていただけではない。生徒の問いに答えるのは何か気恥ずかしく、難しかった。疎開先から帰京したときに見た戦災の跡、傷痍軍人の姿、そして小学生の時に父が見せてくれた丸木位里、俊夫妻の「原爆の図」、永井隆氏の「この子を残して」などの一連の作品やその仕事を知って、大きなショックを受け何時となく歴史や社会の問題、人間の生き方などに関心をもったこと、そして私自身、学校で



は問題児で、先生と衝突ばかりしていたこと等々。それらが教職を志した私の原点になっているかもしれないと自信なげに話したが、生徒はやはり「???」であった。経験を積み、それなりのやりがいや手応えを感じるようになってからも、生徒のこの問いにはなかなか的確に答えられず、生徒の不思議そうな顔はいつも変わらなかった。

退職後もよくこの問いを思い出すことがある。それは私自身の生き方を問うものだからだろう。

気になりながらも、明確な答えを出せないままである。しかし、大震災をきっかけに私は再び、自分が自然、社会、人間の諸問題にどのように向き合い、生きてきたのか、そして教員として、特に社会科を担当した者としてどのように取り組んできたのかを検証しなければと思った。

それは、大震災、そして福島原子力発電所のトラブルを「想定外だった」と強調する関係者、そしてマス・メディアの報道に強い疑問を持ったからである。大地震、大津波の被害状況も十分に把握できないし、福島原発の状況も深刻だった。行政の迷走も電力会社の無責任さも腹立たしい限り。行政、企業の施策には「安全性より利益の優先」がこれでもかこれでもかと貫かれているではないか。危機対策はほとんど無きに等しいではないか。マス・メディアは政府の責任を声高に言い立て、「打ち出の小槌」があるわけもないのに、首相が替われば現状打開が果たせるとし、誰が次の首班になるのかを連日センセーショナルに報じる。自分達だけが「正義」であるかのような態度は、なんとも不愉快であった。不確かな情報をわけ知り顔に語る「コメンテーター」が登場する新聞もテレビも見たくなかった。

しかし私は、私にもそうした社会を創り出してしまったことに責任の一端があるという痛痒を強く感じた。教職にあった者として、次代を担う人間にどう向き合って、何を教え、どう伝えてきたのか。この大震災、あってはならない原発事故に直面しながら、自分は関係ないとばかりに、第三者を装う冷めた態度はとれないと思った。

### Ⅲ ヒロシマ・ナガサキ そして…フクシマ

震災の翌日だったか、菅首相（当時）が福島原発を視察したとの報道に私は「原発がかなり深刻な事態なのだ」と直感した。メディアの多くは首相の行動に批判的だったが、私は現場を見ることは大切であること、ましてやきわめて大規模な津波被害がある中で、首相の行動は様々な思惑があったにせよ当然だと思った。しばらくすると、いわき市内や相馬に住む知人から「外出できない」との連絡があった。

私たちは広島・長崎への原爆投下を経験しながら、原子力の問題についてあまりにも安易に考えていたのではないのか。これまで私たちは、放射線に撃ち抜かれた被爆者の訴えに耳を傾け、その思いに応えることにどれほど心を砕いたのだろう。私自身、丸木夫妻の「原爆の囟」に啓発されて、被爆問題には強い関心をもっていった。被爆地への修学旅行にも積極的に取り組んだ。しかし、被爆地や辛い体験を静かに語る被爆者の人々とのつながりをその後、育て続けることができなかった。それらの人々の困難な状況に私はたじろぎ、後退していったのである。

1986年4月26日、チェルノブイリ原子力発電所の事故が起きた。ソ連邦（当時）はこの事故を当初公表しなかったが、北欧での放射線モニターの異常な反応、偵察衛星の映像等からこの事故は世界に知られたのである。事故情報がなかったことが、より多くの近隣住民の命や健康を奪い、大気、大地、水、生き物、食物等などありとあらゆるものが放射能に汚染された。「専門家」は、近隣のヨーロッパとは違い、8000キロ離れた日本には放射能は飛んでこないとした。しかし一週間後には日本でも放射

能が測定された。

それまで私は『現代社会』の授業で、「原子力発電所はトイレにないマンション」、排出される放射性物質はいわば「垂れ流し」である。そしてこの廃棄物が人間の手に負えないことは、高まる環境危機の問題としてもくり返し説明していた。核兵器の使用は地球を即座に破滅させる「急性の病」、であり、公害等で引き起こされている地球環境問題はじわじわと忍び寄る「慢性の病」との指摘もくり返した。

しかし、原子力発電など核の平和利用といわれる側面がもつ問題性を指摘することは不十分であった。「暴発した原子力発電所は原子爆弾と変わらない」「“原子力発電は安価に豊富な電力を供給できる”というが、完全にはその危険性を制御できない」し、「事故が起きたら地球にとって、そしてそこに生きるすべてのものに、致命傷をあたえる。多くの時間と莫大な費用をかけても、その取り返しはつかない」と明確に伝えられなかった。何故ならば、私も被爆国日本では原子力へのチェックは厳重であり、「日本の原子力発電所はまさかチェルノブイリのような事故は起こさないだろう」と信じていたのである。そして、「原子のゴミ処理地をめぐって膨大なカネが動く」といった問題などは、『非核三原則』はあるが、日本に核が持ち込まれているのではないか」という疑念と同様、政治性の強い問題に繋がり、授業で取り上げることは難しいという躊躇が私自身にあったからである。

#### IV ミナマタから学んだこと

ヒロシマ・ナガサキと並んで、私はミナマタから大きな影響を受けた。

高度経済成長の中でのんびりと学生生活を過ごした私に、「ネコの狂死」や「激しい痙攣に苦しむ水俣病患者」の姿は信じられないものだった。当初、水俣付近にある風土病であると思っていた。1960年代後半、急激な経済成長のなかで、公害、環境汚染が深刻化した。水俣にあった石牟礼道子さんは、「奇病」といわれ、苦しみ、うち捨てられていた水俣病の人びとを訪れ、その世界を『苦界浄土』に著した。その出版は1969年である。私はこの年の4月、都の教員になった。

『石牟礼さんは、言っていたものです。「悔しいけれども歯が立たない。でも誰も読まないとしても記録だけはしておこう。ゴキブリやネズミが、そのうち知能を持つようになったら、人間はこんなバカなことをしていたんだろうというだろうって」※水俣病問題が社会的な注目を集める以前から、水俣に入り、問題を調べ、後に石牟礼さんとともに水俣病闘争の中心にあった宇井純さんは、彼女との話をそう記している。

私は迂闊にも生徒の書いた読後感想文に触発されるまで、この傑出した著作に気づかなかった。生徒の感想文は「この本を開くと船縁をたたく水音が聞こえてくるようだ……」そんな書き出しで始まっていた。私は生徒の豊かな感性に打たれ、一気に最後まで読んだ。『苦界浄土』を読み返し、水俣病の実相にふれ、被害者や石牟礼さんたちの活動に気づいて愕然とした。まさに水俣病問題は「倫理・社会」「現代社会」で取り上げるべき問題であった。

1968年政府、政府、水俣病を公害病として認定。被害者への補償問題が難航し、水俣病闘争、反公害運動が高揚。1969年水俣病被害者が熊本地裁提訴（第一次訴訟）。1978年、水俣病第一次訴訟判決。被害者の全面勝訴。この公判廷で、隠蔽されていた水俣病問題の真相が明らかになった。私は遅ればせながら、「文明への警鐘」という見出しの新聞記事を教材に、問題の経緯を整理し、加害企業、被害者、行政、研究者（科学者・医師たち）、水俣地域の住民、マス・メディア等問題に関わった人々の対応や一般世論の動向をまとめてみた。すると、そこには現代の科学技術の問題点、企業組織とその社会的責任、マスコミの役割と世論の力、行政のあり方等等、現代社会の仕組み、経済や政治の特色

や問題点が浮き彫りになった。そして、まさに「私たち自身の生き方や考え方、行動の仕組み」が絶えず問われているのだ。石牟礼道子さんの指摘通り、「世の中を見るときすべて、水俣病を通して考える」ことができるのである。

私は、現実をよく見、何が生きる上で必要な知識、知恵であるのかを考える授業をしたかった。そして現実に立ち向かい、その改善を志す、つまり、「よく生きること」の大切さを生徒が感じ取れる授業をしたかった。それが、『倫社』や『現代社会』の勉強だと考えていた。

おそらく私の授業の計画は、指導要領に忠実にしたがえば「認められない」ものだったろう。受験にも役立たなかったかもしれない。しかし、思い切って、水俣病問題を通して「現代社会の特色とその問題点」の単元に8、9時間をあてて展開した。その間、司書教諭の協力を得て図書館では関係図書の展示や提示もしていただいた。

今考えると、水俣はやはり「遠い」し、なかなか自分自身に関わる問題と受けとめるには難しい授業だったろう。生徒は、問題の深刻さを受けとめ、被害者に対しても同情を示し、加害企業への怒りも感じたようである。ただその多くは一過性のものであったかもしれない。しかし、ある時、思いがけなく丸ビルの中で、卒業した教え子に声をかけられた。

「先生！ 私のこと覚えていますか？」「えーっと??？」「私、先生の水俣病の授業よく覚えていますよ。」 思わず顔が赤らんだ。立ち話をして別れたあと、とても嬉しくて興奮した。

「無駄ではなかった。少しでも何か、考え、感じた生徒がいた！」

「水俣病問題」は被害者の公式発見から50年以上の年月が過ぎた。この間、かつてそうであったように何度も「水俣病問題は終わった」とされた。しかし、潜在的だった加害状況が次第に明るみにでて、その被害の総体は未だにはかりしれない。被害者の救済も遅々として進まず、相変わらず被害者がさまざまな差別を受け続けてきた。

水俣病は地方都市水俣の病いとどまらず、現代文明全体の病いである。フクシマの問題もまた、命や安全よりも経済性が優先されたミナマタと同じ社会の構図や人間の意識が引き起こしている。安全対策がきわめて不十分だった電力会社、それを取り巻く科学者、技術者、そして監督官庁や政府の対応は、恐ろしいほどミナマタと類似していると私は思う。

私たちは、フクシマにミナマタの警告を活かさなければいけない。石牟礼道子さんは、「人間は自然の一部である」という確信に立ち、「近代文明は自らの一部であり、源である自然を破壊するという愚かさを通して人間の精神世界を弱め壊しつつある」という警告をくり返されてきた。(山本哲郎) ※そして、「本来の人間の原点に帰ってそこにある豊かな感性やモラルを取り戻すことが社会を変えていくことだ」といわれる。(岩岡中正) ※私は、大震災、原発事故が突き付けている問題を乗り越えるために、ささやかでもミナマタを語り継ぐ行動をしたい。

※参考 岩岡中正編 『石牟礼道子の世界』弦書房

## V あと一言

教職を離れて久しい。この間介護していた母も病に倒れた義妹も亡くなった。私は幸い健康に恵まれている。子育て支援も、水俣問題への関わりも、海外ボランティアも欲張って続けたい。そして旅行やコーラスも…やり残したことは山積みなのだ。

2011年11月5日

### Ⅲ 論文・実践報告

# 倫理・道徳教育の根本を理解するために

顧問 ガエタノ・コンプリ

自己紹介

日本の倫理・道徳教育の危機

学習指導要領の「人間としての在り方生き方」

「人間の」と「人間として」の違い

「在り方」と「生き方」

人間としての在り方

「現実の在り方」と「あるべき在り方」

「あるべき在り方」は空想ではないか

「存在上の要求」と「欲求」

さまざまな「善悪の判断」

「人間の」ある観点からの善悪の判断

人間としての生き方

「人間として」生きること — 道徳的な善悪の判断

「人間として」の善悪の判断 — 「良心の判断」

「良心」、実践の時の「総合的な判断」

「決断」から実践へ — 「善意」

「善意」と「求道心」

人間を感わす誘惑

「悪意」と「罪」

「怠り」という消極的な悪意

罪と間違い

人間は、回心することができる

結論 授業のためのヒント

## 自己紹介

1955年来日し、長年「全倫研」や「都倫研」に関わった者として、会の創立50周年にあたって一言を頼まれました。現在、現場にはいませんが、それでも常に倫理教育の問題に関心を抱き、外国の経験もあるので、日本の倫理・道徳教育についての私の率直な意見を述べさせていただきます。

私が最初に日本の倫理・道徳教育に興味を持ったのは、1959年、道徳の時間が設置された頃でした。その年に玉川大学で倫理・道徳教育についての研究会があり、日本の学校が直面している問題を知りたいと思って参加しました。

イタリアの大学ではスコラ哲学を専門に勉強した私は、当時、沼田俊一氏と一緒に倫理・道徳の問題を研究し、1966年に共著で『道徳の見方、考え方』を著しました。1968年、私が杉並区の育英工業高等専門学校で哲学を担当するようになったので、「都倫研」また「全倫研」に参加し、幾人かの先生が加わって「育英倫理社会研究会」を設立し、1971年共著で『人間を考える』を出しました。この本は学習指導要領の改訂とともに何回も改訂されましたが、毎度一貫して、「人間はどうあるべきか、どう生きるべきか」という立場で書かれたものです。

私が考える倫理・道徳の問題の根本は、「人間としてどう生きるべきか」ということです。「人間である」ことは、国籍や思想を問わず、皆に共通の特徴です。カトリック神父である私もまず「人間」であり、「人間として」生きるべきです。その意味で、こちらが出した『人間を考える』という著書の中に「人間としての在り方・生き方」を追及し、この用語を軸にしてきました。これこそ、日本の倫理・道徳教育の一番重大な課題であると、私は常に主張してきました。

## 日本の倫理・道徳教育の危機

1960年、日本の高等学校で倫理教育が実施されることになりましたが、それを担当するのは「社会科」の教師でした。「社会科」といえば、歴史、地理、倫理、政治・経済という幅広い領域があり、その中に必修の「倫理・社会」が置かれたことで、その内容になじまない多くの教師が戸惑ったのでしょう。内容はずいぶん哲学的であったからです。

1978年、「倫理・社会」が廃止され、必修「現代社会」と選択「倫理」が生まれました。しかし、「倫理」はほとんど選択されず、「現代社会」の倫理的色彩が薄く、結局、高等学校には道徳・倫理教育が皆無に等しい状態になってしまいました。それよりも、経済成長が大切と思われたのでしょう。

1980年代後半、日本のバブルの問題が始まりました。今は、同じ問題は全世界に起こっています。一般に経済の問題だといわれますが、実際、その原因は人間の生き方です。すなわち、倫理の問題です。「価値観の多様化」とはよく言われますが、実際、多様化ではなく、価値観の喪失です。今度、それを乗り越えるために、真の人間とは何か、何のために生きるか、経済活動の正しい営みとは何であるかを問うべき時がきました。もう一度、倫理・道徳教育から始めないといけないのです。

## 学習指導要領の「人間としての在り方生き方」

私が日本の道徳・倫理教育に期待を持つようになったのは、1990年の「学習指導要領」が発表された時でした。教育課程審議会の答申を受けて、小・中・高の学習指導要領が全面改訂され、一貫した計画のもとで「21世紀を目指した社会の変化に対応できる」という教育目標が定められました。私が注目したのは、新「教育課程編成の一般方針」に取り入れられている次の言葉です。「人間としての在

り方生き方に関する教育を学校の教育活動全体を通じて行う」。さらに、「倫理」という科目の目標には「青年期における自己形成と人間としての在り方生き方について理解と思索を深めさせる」と書かれていることです。

以前「学習指導要領」には「人間の」という表現が頻繁に出ていたのに、今度は「人間として」また「人間としての在り方生き方」という表現が記されています。これは新しい道徳・倫理教育のキーワードとされています。小・中学校の「指導書」や、高等学校の「解説書」にもそれが使われるようになったのです。

哲学用語として深い意味を持っているこの「人間としての在り方生き方」という語は、1990年の研究会でよく討議されました。しかし、私が思うには、十分に理解されませんでした。2012年から使用される新しい教科書にも十分に活かされていません。教科書よりも、日常生活にその意味が表されています。人を責めるとき、「あなたの態度は『人間として』どうですか」と言うとき、一番厳しい責めになるのではありませんか。

### 「人間の」と「人間として」の違い

1990年の夏と秋の定例「全国高等学校『倫理・現代社会』研究会」の席でよく「人間としての在り方生き方」が話題になりました。ある発表者は、「在り方教育」という新用語も口にしました。しかし、ある時は「人間としての在り方生き方」、ある時は「人間の在り方生き方」を使い、配られた印刷物にも同じようにその用語が混ざっていました。「同じことではないか」と言う先生もいて、私は、文部省の調査官が臨席していたので、その語句の正しい使い方を確かめました。やはり、「人間としての在り方生き方が正しい」というご返事でした。

実際、道徳の問題は「現実の人間の在り方生き方」ではありません。もし「人間の在り方生き方」であれば、殺人、強盗、いじめなどもみな「人間の在り方生き方」です。しかし、それは「人間としてはよくない」のです。前者は歴史学、社会学、民族学の問題でしょうが、道徳・倫理の問題は「人間としての在り方生き方」です。

### 「在り方」と「生き方」

私が「学習指導要領」に納得できないのは、「在り方生き方」を一つの語にしていることです。「在り方」と「生き方」は、それぞれ別の問題です。

私が若い時によく勉強したスコラ哲学には、「生き方(行動)は、在り方に従う Agere sequitur esse」という基本的な原理を教えられました。これは、あらゆる行動に当てはまります。「在り方」は「生き方・行動」の基準となります。まず、「人間は何であるか」を知って、次に「どう生きるべきか」を知るので。たとえば、今、有害食品の問題があります。なぜ、売って、食べてはいけないのですか。それは、人体の「在り方」に合わないからです。「人間観」が違えば、「倫理観」も違うのです。

このとおり、「在り方」と「生き方」は互いに深い関係がありますが、一つのことではありません。道徳・倫理には、いつも二つの課題が問われる。「人間とは何ですか」と、「人間はどう生きるべきですか」と。「学習指導要領」が言う「在り方生き方」の中に「・」を入れれば、「人間としての在り方・生き方」の意味が明らかになります。

## 人間としての在り方

### 「現実の在り方」と「あるべき在り方」

まず、「在り方」には二つの意味があります。「現実の在り方」と「あるべき在り方」です。「善悪の判断」をするとき、両方ともを把握すべきです。

「現実の在り方」とは、ありのままの存在。そこにはよい面、欠点、欠陥があり、実現されていない多くの「可能性」もある。

「あるべき在り方」とは、かえって、ものの「本来的な在り方、あるべき姿」です。辞書に載っているのは、人間、犬、米の「あるべき在り方」、人間そのもの、犬そのもの、米そのもの。理科で勉強するのも、標準的な姿、「あるべき在り方」です。現実の「在り方」を指すとき、私たちは「この人、この犬、この米」と限定します。私たちが「あるべき在り方」を知っているからこそ、もし「現実」に欠陥があればそれを判断できます。「健康」を知っているからこそ「病氣」がわかるのです。

### 「あるべき在り方」は空想ではないか

ある人は言うかも知りません。「あるべき在り方」は、抽象的で、「空想」ではないでしょうか。

これは、誤解に基づく考えです。もしそうであれば、私たちは物事について善悪の判断ができなくなります。プラトンは言った、「イデア、理想は、空の上の別世界に存在する」。しかし、弟子アリストテレスは言った、「イデアは、この世のなかに存在している」と。「イデア」とは、「あるべき姿」のことです。

確かに、私たちが目の前にしている現実、しばしば「あるべき姿」ではありません。生まれつきの盲人もそうです。しかし、もし「あるべき姿」がないと言え、何に基づいて「盲人」と言えるのでしょうか。やはり、「あるべき在り方」は空想ではありません。自然によって具わっているはずの「構造」「機能」「性質」です。「人間として」要求される特徴、「存在上要求」です。生物学的に言えば、「ゲノム」はそれぞれの生物の特徴を決める。「人間としてのゲノム」があり、「損なわれているゲノム」もある。このことをまだ知りえなかったアリストテレスは、それぞれのものの「形相」があると言っていました。

「あるべきあり方」は、ものの本性、内部に備わっている「性（さが）＝Nature」です。ラテン語の「Natura」とは、「生まれつきのもの」を意味します。中国語の「自然」も、「おのずからそうである」、「他然ではない」、他によってそうなっているのではないことを意味します。それが損なわれていても、それを「存在上の要求」が残ります。

私たちは、観察や比較研究により人間や多くのものの本来の「あるべき在り方」を知っていますが、その判断は容易ではないときがあります。人類は、多くの試しや間違いを繰り返しながら、長い経験を経て「これが真の人間、これが正しい生き方だ」と悟るようになりました。さらに疑問があれば、常に「人間とは何ですか」という原点に戻るしかありません。これに基づいて善悪の判断を下すことができます。

「自然法」という言葉があります。これは「実定法」に対して言われますが、「人間としてのあるべき在り方、存在上の要求」を意味します。これは、本に記されていなくても、人間の存在に刻まれています。本物の人間であるためにそれに従うべきです。法律、風習、学校や会社の規則、個人の行動も「人間としての在り方」に従わなければ、人間を無視することになります。



## 「存在上の要求」と「欲求」

以上のことは、特に生物について目立ちます。生物には、命を維持し成長させるために、「存在上の要求」があると同時に、内部から発せられる「欲求」もあります。食べたい、眠たい、運動したいなどという自然発生的な「欲求」です。

「要求」が「客観的な必要性」であるのに、「欲求」は「主観的な傾向」です。一方は「すべきこと」、他方は「したいこと」です。場合によって互いに対立することもあります。たとえば、麻薬依存症には内的な「欲求」がありますが、それは「存在上の要求」に反します。自滅へ導くからです。

人間の自由意志も傾向の部類に入りますが、自由であるという特徴があります。それを導くのは、人間の判断、「理性」です。これは人間独自の能力です。ある程度成長したら、人間は自分で判断し、意識的に「何をすべきか、何をしてはならないかを判断して自由に決める」という能力があります。それは人間の自由な行動と責任の源です。

日本の教科書には、「欲求」について細かい説明がありますが、「人間としての存在上の要求」、また行動をコントロールする「自由意志」についてはほとんど触れていません。自由意志が存在しないかのようです。

実際、外国語にも日本語にも「要求」と「欲求」を区別します。「要求」は「必要だ」「すべきだ」「しなければならない」などというのに、「欲求」は「したい」「好き・嫌い」「欲しい」などと言います。日本人は「命令形」が嫌いだといわれますが、よく見れば、必要な時にはちゃんと「命令形」を使います。

## さまざまな「善悪の判断」

幼いときから 私たちは「善い・悪い」という言葉を使って「善悪の判断」を下します。成績、健康、仕事、音声、才能、考え方などについて「よい、わるい」と言って、「相対評価」も「絶対評価」もします。

「相対評価」とは、ある観点から物事を「比較」して上下や順位を決めること。それ自体、「善い在り方、悪い在り方」を意味するものではありません。「有限」である、限界があること自体は「悪」ではありません。それは、この世の存在の状態に過ぎないのです

本当の意味の「善悪」の判断は、「絶対評価」です。「ものそれ自体の善悪」を判断するのです。

では、何に基づいて善悪の判断を下すのでしょうか。

それは、物事の「あるべき在り方」に基づいてです。現実の在り方が「あるべき在り方」と合っているなら、「善い」。合っていないなら、「悪い」と。

もし「あるべき在り方」の存在を否定する人がいれば、その人は、本当の意味の「善悪の判断」ができないはずで、どんな在り方でも結構だということになります。無生物の場合も、絶対的な意味の「悪」はありえません。石ころは、どんな形、どんな色でも善いのです。もし「善い・悪い」と言うならば、それは、「用途」として、「手段」としての判断です。存在そのものは、「悪」ではないのです。

## 「人間の」ある観点からの善悪の判断

ところが、ここまで話した「善悪」は、必ずしも「道徳的な善悪の判断」ではありません。むしろ、

あらゆる意味での善悪についていえます。「学習指導要領」には「人間として在り方生き方」の他に、「日本人として」、「公民として」、「家庭の一員として」などがありますが、いくらでも加えられます。「商売人として」、「スポーツマンとして」、「教師として」、「母親として」、「病人として」など。この「何々として」という助詞は、善悪の評価の「観点」を示します。人間は複雑な存在であり、同じ人でも多数の資格があり、同じ行いでも観点によって多数の評価は可能です。私たちが理論的に考えるとき、ある意味で人間を分解して考察します。授業のときもそうです。これは、理論的な善悪の判断になります。

たとえば、私の著書『人間を考える』には、次の順番で人間の各側面を紹介しています。

- 1 「個人としての人間」 身体と精神の在り方の問題（健康、知、情、意、行動、人間として生きる基本的姿勢）
- 2 「他者とのかかわる人間」 人間関係の在り方の問題（人格と人格の対話、真の愛、友情、男女、相互尊重など）
- 3 「社会にかかわる人間」 種々の集団の在り方の問題（家族、学校、地域社会、労働、国家、国際社会、民主主義。そして、その中の役割、責任、法、権利と義務、正義、連帯など）
- 4 「自然と崇高なものにかかわる人間」 存在の中の人間の問題（人生観・世界観の問題、科学と哲学、代表的な思想、自然、美、道徳、宗教、世界観の類型）

私たちは、生きるためにこれらすべての問題について「人間はどうあるべきか」を知る必要があるでしょう。これによって、自分の「人間観」を形成し、「人間としての在り方」を判断しますが、これは、あくまでも「理論上」の判断です。この「人間観」に基づいて毎日生きるようにします。

## 人間としての生き方

### 「人間として」生きること — 道徳的な善悪の判断

これが、「学習指導要領」が言う「人間としての生き方」の問題です。毎日生きている私たちは、ただの会社員、教師、スポーツマンとしてではなく、どんな場合でもいつも「人間として」行動します。つまり、「日本人、銀行マン、スポーツマンである私は、常に『人間として』どうすべきか」と判断をしなければなりません。この「総合的な観点」こそ、実践の時の「道徳的な善悪の判断」です。

### 「人間として」の善悪の判断 — 「良心の判断」

この「人間として」の判断は、実は「良心の判断」です。

私たちは、必ず、商売人、職人、学生、市民、親、また、健康、経済、学習、技術、安全などの立場からも判断しますが、同時に「人間として」も判断します。それは「今の時点で、自分が知っている限り、できる限りの総合的な善悪の判断」です。その中に自分に要求されるすべてのことが含まれていて、私たちはそれに基づいて「人間として」正しく生きるようにするのです。

### 「良心」、実践の時の「総合的な判断」

良心の判断のとき、私たちはとくに次の三つの観点から価値序列の判断を下します。

- 今、私には何が可能であるか。
- 今、私には何が重要であるか。
- 今、私には何が緊急であるか。

この三つの観点から総合したすべての要求の判断は、良心の判断です。これは、研究会の時に行う理論的な判断と違う、実践のための判断です。

実践にあたって、時には戸惑い、また人の意見をきながら、私たちは自分が一番正しいと思うことを決断しなければなりません。その責任を負うのは自分ですが、どんな場合でも自分にとってその判断はその時点において自分にできる最善の判断となります。各自は「人間として」それに従う権利と義務があるのです。

### 「判断」から実践へ — 「善意」

「判断」してから、私たちは「実践」へ移ります。

実践にあたって、自分の良心に従うか、他の判断に従うかを、自分の自由意志によって決めます。人間は、自分の良心に従うことも、背くことも自由です。たとえ、人から強制されても、意識がある限り、心の中で悪に抵抗できるのです。投獄されても正義のために戦う人たちの態度はそれです。自由であるからこそ、私たちは自分の行動の「責任」を負うこととなります。

「良心の判断」に従う人は「善意の人」です。その人は、善を目指して、「人間として」自分にできる最善の行動をとるからです。

これこそ、「人間として」要求される基本的な姿勢、「人間としての正しい生き方」なのです。

### 「善意」と「求道心」

では、「良心の判断」はいつも正しいのでしょうか。

そうではありません。私たちは、だれでも間違った経験があります。「良心の判断」はその時点での最善の判断ですが、不可抗力により間違うことがあります。そのため「善意」のある人は、謙虚な気持ちで間違う可能性があることを認め、常に「求道心」をもって真理を探し求める姿勢を持つべきです。自分は絶対に正しいと思ひ込むのは禁物です。

前述のとおり、善と悪は客観的な「存在上の要求」に基づきます。気持ちの問題ではなく、多数決の問題でもありません。「求道心」に生きる人は、常に真理を探し求め、いつも原点に戻って「人間としてのあるべきあり方」をよりよく理解するように努めます。道徳教育が可能であるのは、人間に「求道心」があるはずであるからです。

### 人間を惑わす誘惑

では、善意を妨げるのは何でしょうか。

それは、心の中に潜む「欲望」です。欲望に従おうとする人は、自分を正当化するために理屈を付けて良心の判断を曲げようとします。しかし、良心は「自分をだますな」とその態度をとがめます。

世の中にはびこるさまざまな価値観も人の判断を惑わします。それに従おうとする人は「皆こうやっている」と自己弁解をします。

人間の心は不透明です。パウロも嘆いていた、「私は、自分がやりたい良いことではなく、自分がや

りたくない悪いことをする」(ローマの信徒への手紙7・19)と。自分の中にもう一人の悪い自分がいるかのようです。

昔から、キリスト教の世界に人間の主な誘惑の源となる「七つの罪源」が教えられていました。それは、「傲慢、貪欲、邪淫、嫉妬、貪食、憤怒、怠惰」です。昔も今も人間には変りないのです。

誘惑に同意しようとする人の良心は、警報機のように「負けてはならない」と知らせます。その声を黙らせようとしても、何年も叫び続けます。心の平和と精神衛生を保つために、私たちは良心に従わないといけないのです。

### 「悪意」と「罪」

人間を悩ませる病気、事故、死、災害などがありますが、人生を暗くし、人間関係と社会を破壊するのは、心の中に潜む悪、「悪意」です。それは「悪に向かう心、悪に同意する心、罪」です。これこそ、人間を破壊し、不幸に陥れます。罪とは「悪意」そのものです。

正しく判断するために、次のことを念頭に置くべきです。

- ・人間は、知らずに、望まないで罪を犯すことはない。
- ・罪とは、悪いと知りながら、意識的に、悪に同意して悪に向かうことです。この三つの条件の一つでも欠けば、罪になりません。たとえば、悪いと知らなかった場合、意識がなかった場合、強制された場合などです。
- ・心の中に悪をたくらみ、実行する前でも、既に「悪意」があります。

### 「怠り」という消極的な悪意

「善意」を保つためには「怠り」も避けなければなりません。

「怠り」とは、努力不足、怠けです。「わざと」悪を行うのではなく、悪を避けるため、また善を行うために十分に努力しないことです。事故のときに過失責任を問われるのは、そのためです。怠りは大きな災いをもたらし、大きな責任を負わせることがあります。任務の重大さに応じて、それに相当する努力が必要です。不可抗力により悪が避けられない場合も、少なくともそれを避けるために十分に努力し、同意しないようにすべきです。「善意」はいつも積極的ですが、悪意には「消極的な悪意」もあります。それは「怠り」です。

いちばん警戒すべき怠りは、真理を探し求めるための「求道心」の不足です。それにより歩むべき道からそれることになるからです。

### 罪と間違い

世の中は、罪という言葉を嫌っています。その代わりに「間違いを犯した」と言いたがりますが、罪と間違いは基本的に違います。

「罪」がわざとであるのに、「間違い」はわざとではない。

「罪」にいつも悪意がともなうのに、「間違い」には悪意はない。

「罪」に良心の呵責があるのに、「間違い」には呵責はない。(残念と思っても。)間違いは、人間の限界、弱さのしるしです。もし謙虚に認めるならば、正しいことを学ぶための機会となる。ただし、同じ間違いをたびたび繰り返せば、努力不足を問われるでしょう。

人間は、回心することができる

私たちは、正しく生きようとしても、悪意が心に入り込む経験があります。その場合「改心」が必要です。罪がゆるされるためには、それは基本的な条件です。

「改心」または「回心」とは、悪に向けた心を、善に向け直すことです。つまり、犯した罪を悔やみ、生活を改善する決心を立てることです。他人に損害を与えたならば、それを弁償し、罪を償う決心が含まれます。

「人間として」正しく生き、「善意」を保つために、「改心する心」は毎日の基本的姿勢です。

## 結論

以上、50年以上日本の教育に携わり、「全倫研」や「都倫研」で共に活動してきた私は、日本の倫理・道徳教育を発展させるために、より明確にすべきものだと思う基本的な原理です。残念ながら、「人間としての在り方・生き方」というすばらしい土台が置かれたのに、常識的でもあるこれらの内容は、現在の日本の教科書にほとんど取り上げられていません。現場の先生方は、より深くこれらの内容を研究すべきではありませんか。

私としては、できるだけ分かりやすい言葉でこれらを表現してみました。これらの原理は、西洋の倫理学の専門書や一般向きの教材にもより詳しく説明され、倫理学の基本とされています。決して、私の独創的な考えではありません。

なぜ「人間として」正しく生きるべきか

ところが、一つの基本的な問題が残ります。それは、「人間としての在り方・生き方」は、どこから来るのか、何の根拠があるのか」という問題です。言い換えれば、「どうして私は人間として存在しているのか。どうして存在上の要求に従うべきか。人間の存在は何の意味があるか。なぜ自分勝手はいけないのか」というより基本的な質問です。

私たちは自分の意思によってではなく、知らずにこの世に生まれ、ある日、自分の存在に気づき、自分のまわりに物が存在し、自分を越える法則、自分を律する「存在上の要求」があることを意識します。なぜ、そうなっているのでしょうか。

これは、「世界観・人生観」の問題、人間にとって避けられない問題です。「学習指導要領」にも「自然と崇高なもの」「人間の力を越えるもの」の問題が提起されています。「倫理」の教科書にもこの基本的な問題が提起され、哲学史を通して参考になる考え方のヒントが載せられています。目的は、ただ過去の思想を学ばせ、知識を得させることだけではなく、自分の世界観・人生観を形成するためです。この問題への答えによって、「人間としての在り方・生き方」の意味は、完全に違ってきます。

—もし、世界や人間は「偶然の結果」だとすれば、「あるべき在り方・生き方」の根拠もなくなります。人間がこのように存在しているのは偶然なら、どうなってもかまわないのではありませんか。自分が満足していれば、どうでもいいのです。

—もし、かえって、神の業であるとすれば、すべては神のこころによるもの、すべてに意味があるということになります。人間は、最終的に神のこころに依って生きるものだということを悟るのです。

— さらに、もしすべては「運命によるものだ」と考えれば、この世に生まれてきたことをあきらめるしかないということになるでしょう。

このとおり、この問題に答えるのは容易ではありません。なぜなら、各自の心の核心に触れることになるからです。これこそ、各自の「求道心」に委ねるべき問題です。私たちは、一人ひとりの信教の自由を尊重し、考えるヒントを提供することに留まるべきでしょう。憲法も、基本的人権として信教の自由を保障します。判断するための種々の考え方の知識は、互いの考え方の違いを理解し、尊重しあうために必要です。

## 授業のためのヒント

「学習指導要領」がいう「人間としての在り方・生き方」の意味を明らかにした上で、これに基づいて、どういう形の授業を展開することができるのでしょうか。

実際、いろいろな教授の方法がありますが、私が思うには、倫理の授業は知識伝達のためだけであってはなりません。目的は「人間としての生き方」を悟らせることです。

まず「人間としてのあるべき在り方」を生徒に理解させる必要があります。その場合、「人間はこうだ」と、教条的に押し付けならば、反発を買うことになるでしょう。押し付けるのではなく、発見するように導くのです。そのために、私の経験では、ヒントを与えながら、次の三つのステップを踏む必要があります。

1. 「人間の現実のあり方を観察する」 人間の一つひとつの問題について、たとえば青年期、家庭、職業、グローバル化、環境、国家、などについて、生徒の経験から出発して、どういう現象、どういう問題があるかを調べる。
2. 「人間としてのあるべきあり方を考える」 取り上げた問題について、人間としての理想的な姿は何であるかを見出すように一緒に考える。
3. 「過去や現在の思想を参考に人間を考える」 場合によって対立した考え方を調べて、歴史の中にどんな結果をもたらしたかを考えることも役立つ。

具体的に言えばきりはありませんが、ご参考のため、観察や考え方のヒントの形で人間の問題をあつかってきている私の著作をご紹介します。

ガエタノ・コンプリ 『人間を考える - 人間としてのあり方・生き方』、454頁、ドン・ボスコ社、1995年、1200円+税

哲学的な裏付けのために

ガエタノ・コンプリ 『現代社会で人間を考える - 新学習指導要領への提言』、350頁、サンパウロ、1991年、1800円+税

最新の著作として

ガエタノ・コンプリ 『NEW ところにひかりを - 分かりやすいカトリック入門書』、300頁、ドン・ボスコ社、2011年9月、980円+税

# 倫理科の位置づけと性格をめぐって

国立教育政策研究所 工藤文三

倫理科の源流は、社会科「社会」の倫理的な内容にあり、その後昭和30年代には科目「倫理・社会」として自立した位置を与えられた。その後昭和50年代の「現代社会」の誕生によって選択「倫理」として位置づけられ、これが平成元年の社会科の再編成に伴って公民科の一科目として設定されることとなった。「倫理・社会」の成立は高等学校における道德教育充実の役割を担ったものであるが、それが社会科に置かれたことや、その後の「現代社会」の設置によって、位置づけや性格が微妙に変化することとなった。以下では、公民科における倫理の位置及び中学校の社会科や道德教育との関連から、倫理科の位置づけや役割に関する課題を整理してみたい。

## 1 公民教育としての倫理、道德教育としての倫理

公民科の「公民」には、民主的、平和な国家・社会の有為な担い手としての賢明な国民や市民といったイメージがある。国民や市民といった概念は社会的規定性を帯びた人間の側面であるが、倫理学習における主体はあくまでの「人間として」であり、必ずしも社会的規定を帯びているわけではない。この問題は昭和20年代に小中学校では、一時道德教育を主に社会科で担うことが行われ、その後昭和30年代に道德の時間が特設されることになったが、高等学校の場合、「倫理・社会」は社会科に位置づけられ、これが引き続き公民科の科目として設置されてきたことと無関係ではない。このことを、中学校との関連で考えると、倫理は中学校社会科の公民的分野の系列に位置づけられるのか、それとも中学校までの道德教育の延長としての役割を担うのかといった課題になる。このように倫理の教育課程上の位置づけと役割には、中高の系統と社会科、公民科との関連といった二重の課題があるといえる。

## 2 倫理の位置づけを整理する視点

倫理の位置づけと役割を整理するためには、仮に中学校との継続性を重視するとすれば、倫理を公民科からはずし、純粋に高校生の特質を踏まえて人間としての在り方生き方を探求・思索させる科目とすることが考えられる。この場合、中学校の道德を受ける教科が倫理であり、一方、公民科は中学校の公民的分野と同様、政治や経済、社会の内容を中心に構成されることになる。道德教育、公民教育としての一貫性はより明確になる。今一つは、公民科を構成する要素である倫理、社会、政治、経済の関連を再検討し、中でも社会の要素を見直して倫理と政治・経済とをつなぐ役割を持たせることである。現行の倫理の社会的内容を充実し、「政治・経済」と組み合わせて履修させる仕組みとする。公民科としてのまとまりは改善されるが、中学校の道德教育との関連は従前と変わらないことになる。

以上みてきた問題の根本には、価値をどうとらえ、整理するかといった課題がある。善や幸福、正といった人間の在り方に関わる倫理的な価値と、自由や平等、効率や公正といった社会的な価値との関連をどのように整理して考えるのかといった課題である。また、「人間としての在り方生き方」と賢明な市民、国民との関連をどう整理するかといった課題でもある。

# ジョン・ウィクリフ (John Wycliffe) に学ぶ

東京都立墨田特別支援学校 三宅 幸夫

## 1 はじめに

今年は、アメリカ合衆国で1861年に南北戦争 (The Civil War) が始まってから150年目にあたる。このメモリアルの年を前に、イギリスのテレビ局は、2004年に『C S A～南北戦争で南軍が勝っていたら?～』という番組を放映して、物議を醸し出している。このように今でもいろいろな意味で取り沙汰されている南北戦争は、合衆国の歴史の中で重要な意味を持っていることは間違いないところである。南北戦争の発端は、1860年11月6日に行なわれたアメリカ合衆国大統領選挙の結果、アブラハム・リンカーンが合衆国の憲政史上初めての共和党の大統領として選出されたことにあった。リンカーンは、人道主義者として知られ、大統領としての功績として「奴隷解放宣言」と「ゲティスバーグ演説」の2つが良く知られている。そこで、はじめにこの2つの功績について触れてみたい。

## 2 奴隷解放宣言

もともとリンカーンは、熱心な奴隷解放論者ではなかった。それを裏付ける資料としてホレス・グリーリーへの書簡 (1862年8月22日) がある。「この戦争における私の至高の目的は連邦を救うことであり、奴隷制度を救うことでも破壊することでもありません。もし私が、一人の奴隷も解放することなく連邦を救えるならば、私はそうするでしょう。(中略) 私が奴隷制度と黒人のために行うことは、連邦を救うのに役立つからそうするのであり、私が行わないことは、それが連邦を救うことに役立つとは思えないから行わないのです。」という考えのもとで、彼は、1863年1月1日に「奴隷解放宣言」を行なった。しかし、この宣言は、合衆国軍によって制圧された連合国支配地域の奴隷を解放するものであって、合衆国軍の統治する諸州の中で奴隷制が認められていたテネシー州、ミズーリ州、ケンタッキー州などでは奴隷の解放は行われなかった。合衆国において完全に奴隷制が廃止されたのは、南北戦争が終結した後のことであった。従って、この宣言は連合国内における奴隷の反乱・逃亡・ボイコットの効果を狙い、南北戦争を有利に進めるために実施されたものであった。

また、彼は、1862年に「ホームステッド法」を連邦議会で可決して、すべてのアメリカ先住民を保留地に定住させ、父系社会のルールのもと一律に母系社会および狩猟・遊牧民族としての文化を捨てさせ、農業を強制させた。この法律に基づいて狩猟禁止の保留地に強制移住させられ、条約で保証された食糧配給を止められて飢餓状態となった狩猟民族ダコタ・スー族が、大統領直轄の「B I A」(インディアン管理局) に対して、「領土と引き換えに条約で保証した年金を支払え」と要求した。しかし、これを連邦政府が無視したために大暴動を起こした。これに対し、リンカーン大統領は、ジョン・ポープ長官に暴動弾圧を命じ、長官は、「私の目的は、スー族をすべて皆殺しにすることだ。彼らは条約だとか妥協を結ぶべき人間としてなどでは決してなく、狂人、あるいは野獣として扱われることになるだろう。」との声明を行ったが、彼はこの声明に何の異議も唱えなかった。当時、先住民は、友好的だった白人達には決して攻撃を加えなかったが、西部開拓の進行と先住民との複雑な関係から、こうした措置を取らざるを得なかっただろうが、彼は、人道主義者とはとても言いがたい人物である。次に触れる彼の有名な演説にある「人民」には、インディアンは含まれていなかったのである



### 3 ゲティスバーグ演説 (The Gettysburg Address)

ゲティスバーグ演説とは、1863年11月19日、ペンシルベニア州ゲティスバーグにある国立戦没者墓地の献納式典において、リンカーン大統領が行った演説である。式典では、はじめに既に政界を引退していたエドワード・エヴァレットが、「古代から現代へと至る自由への英雄的努力は、アメリカの戦場で示された勇気や犠牲へとつながるものである。連邦体制の維持こそが戦争の大義であり、最終的に南北は再び統一されるだろう。」と、2時間にわたっての演説を行った。次に、リンカーンは、英単語272語の短いスピーチを2分間行った。

その内容は、「87年前、私たちの父祖は、この大陸に新たなる国家を打ち立てました。自由を原点として懐胎され、人はみな平等であるとの命題に捧げられた国家です。今私たちは、たいへんな内戦の渦中にあります。その国家が、あるいはそのような原点をもって懐胎され、そのような命題に捧げられた国家一般が、長らえることができるかどうかを試されているのです。(中略) 私たちの前には大いなる責務が残されています。名誉ある戦死者たちが最後まで完全に身を捧げた大義のために、私たちも一層の献身をもってあたること、これらの戦死者たちの死を無駄にしないと高らかに決意すること、神の導きのもと、この国に自由の新たなる誕生をもたらすこと、そして、人民の、人民による、人民のための政府をこの地上から絶やさないことこそが、私たちが身を捧げるべき大いなる責務なのです。」である。

この演説は、彼の演説の中では最も有名なものであり、また歴代大統領の演説の中でも常に第一に取り上げられるもので、独立宣言、合衆国憲法と並んで、アメリカ史に特別な位置を占める演説となっている。しかし、その日の演説そのものはリンカーンが祈るような小さな声で述べ、だれも注目しなかったが、たまたま書き留めていた記者が記事にしたことと、エヴァレットがこの演説を高く評価し、翌日に感想を手紙に記してリンカーン大統領に送ったことにより、有名になったと伝えられている。

### 4 人民の、人民による、人民のための政府

彼の演説の最後の部分に「人民の、人民による、人民のための政府」(the government of the people, by the people, for the people)」という有名な一節があり、民主主義の原点を的確な短い言葉で表現したのものとして、以後広く取り上げられている。しかし、この有名な一節は、彼のオリジナルではないことは有名である。彼は、この言葉を当時の合衆国の著名人から学んだという形跡がある。その一人は、ウェブスター(1782～1852)である。彼は、弁護士から政界に転じ、下院議員、上院議員(マサチューセッツ州)、国務長官を歴任した19世紀前半の合衆国を代表する政治家の一人である。もう一人は、熱心な奴隷解放運動者で牧師のセオドア・パーカー(1810～1860)である。彼は、「民主主義は、全ての人々におよぶ、全ての人々による、全ての人々の為の直接自治である」と言った。リンカーンは、これらの人と直接的あるいは間接的な関わりによってこの言葉を学び、そして演説で使用したと思われる。しかし、それよりもっと前にイングランドの聖職者であるジョン・ウィクリフ(1320頃～1384)が聖書を英訳した著作の序言に“*This Bible is for the government of the people, by the people, and for the people*”(「この聖書は人民の、人民による、人民のための統治に資するものである」と記していた。それでは、ウィクリフとは、どんな人物でどのような意図でこの言葉を残しのだろうか。

## 5 ジョン・ウィクリフに学ぶ

ジョン・ウィクリフと言えば「14世紀後半のイングランドで活躍し、宗教改革の先駆者であるボヘミアのヤン・フスに影響を与えた人物」と、教科書ではごく簡単に紹介されている。しかし、彼は、オックスフォード大学で教鞭をとり、はじめのうちは『論理学』や『存在に関する全書』を著し、実在論者としての立場で哲学の研究を進めていた。また、彼は、生活を維持するために聖職禄を得ると神学の講義も行うようになり、1371年に教皇グレゴリウス11世によりロンドンの北約100kmに位置するリンカーンの司教座聖堂参事会員に任じられている。司教座聖堂参事会員とは、大聖堂（司教座）付きの聖職者で、教区で司教の司牧活動に協力する司祭を示し、具体的には、修道会の規則を読んだり、懺悔、苦行の実施や財産管理等の作業を行うものであるが、彼の赴任した地名がリンカーンだったのは、単なる偶然だったのだろうか。

彼が、教会の実務に関わるようになると、当時、聖職叙任や課税を巡って教皇とイングランドとの間で問題が生じていたため、宮廷や教皇庁の役人と協議する機会が多くなった。彼が問題解決のために果たした役割はほとんどなかったが、しかし、この経験が今後の活動に強い影響を与えることになった。この頃、代表作である『世俗的支配権について』を著している。

## 6 英訳聖書執筆への道

『世俗的支配権について』では、教会の世俗化や教会が財産を持つことを批判し、国家による教会財産没収についても認めるような論を展開した。そのために彼は貴族達の支持を集め、有力貴族の招きによりロンドンで説教を行い、教会財産の没収や世俗化批判を説いた。そこでロンドン司教によって2回裁判にかけられることになるが、有力貴族やロンドン市民らによって救われて、政府の顧問として雇われる結果となった。その後、有力者の保護を受けながら、教皇から独立した国教会を創ることを提案したり、聖書研究の成果をもとに『聖書の真理について』など、活発に執筆活動を展開した。彼は、1379年にパンと葡萄酒がキリストの肉と血に変わるという化体説を批判する『聖餐について』を著し、その結果、有罪であるという判決を教皇庁から受けた。また、1381年にワット・タイラーによる農民反乱が起こり、ワット・タイラーが彼の思想の信奉者であるということで、カンタベリー大司教は教会会議を開いて彼を非難し、反乱と結びつけようとした。彼は、その後オックスフォード大学を追われ、ラタワースへと隠棲した。そして彼は、1384年に死ぬまでここで著述に専念することになった。

さて、肝心の聖書の英訳が、いつ誰によって行われたかというはっきりした歴史的な記録は今のところ見つかっていない。1390年の年代記によると、1382年に彼は福音書の英訳をしたことになっている。学識のある聖職者の占有物であった聖書が「読むことのできる全ての信徒、女性にさえも明らかにされるものである」として、今日に伝えられている。最期は、異端者として攻撃され、彼の死後、死体は40年が経過した1428年に墓から遺体が掘り出されて焼却処分にされた。このことから彼は、歴史の表舞台から抹殺され、現代に至っても功績がはっきりしないと考えられる。また、彼は、聖書を最高の権威として考えていたにとどまり、聖書を訳すというところまでいかずに、彼の支持者達が完成させたとも考えられる。いずれにしても、彼の教会改革に対する情熱が、後の宗教改革に大きな影響を与え、また、民主主義の根本精神として引用されるに至ったことは疑いのないことだと考える。

## 7 おわりに

はじめは、アメリカ合衆国の南北戦争の開戦から150年が経ったことを受けて、エイブラハム・リンカーンの功績について考えてみようという極めて単純な気持ちから取り組んだ。しかし、進めていくうちに話が遠く14世紀のイングランドにまで及ぶことになってしまい、当初イメージしていたものと比較すると、全く異なる内容になってしまった。それは、ジョン・ウィクリフについて触れなければならなくなったからである。彼に関する著作が我が国には少ないこともあって、参考図書を探すことにも苦勞した。多くの方のご指導によって参考図書は何とか見つけることはできたが、本稿の記述を進める上で期待した彼に関する内容に乏しく、満足できるものを期日までに書き上げることはできなかった。今後とも、ウィクリフについては、「哲学者」としての功績と「宗教改革の暁の星」としての功績の2つの面から、私自身、勉強しなおそうと考えている。そのために、もう少しイギリスで出版された書物を参考図書として活用していかなければならないと感じている。

最後に、「都倫研」の先輩の皆様方には公私共に大変お世話になりました。しかし、私自身は、途中から道を外れて全く違う世界に入ってしまった、何の恩返しもできないままに終わってしまいました。このことが悔やまれてなりません。これからも先輩諸氏のご指導を賜りながら、自分でも微力ながら研究を続けていきたいと思っておりますので、今後ともよろしく願いいたします。

# 新生児医療の現場から「生命倫理」を考えさせる「いのちのライン」の授業 — 東京都における「生命倫理」教育史の視座から —

株式会社ドキュメンタリージャパン 浅野 麻由  
東京都立総合工科高等学校 坂口 克彦

## 1. はじめに

筆者ら2名は、2002年から約10年に亘ってテレビドキュメンタリー番組制作者と高校地理歴史・公民科教育担当者という立場をコラボレートさせて、ドキュメンタリー番組を地理歴史・公民科教育に利用する実践を続け、本研究会のほか、日本社会科教育学会、全国社会科教育学会、中等社会科教育学会及び日本グローバル教育学会等において発表をおこなってきた。

ドキュメンタリー番組制作者側としては、通常の視聴者層よりも若年である高校生世代にドキュメンタリーについて興味関心を喚起できるとともに、その反応によって今後のドキュメンタリー制作のヒントとする可能性が得られるメリットがある。一方、高等学校現場側にとっては、通常の一斉講義型授業と異なる形式で生徒をひきつけることが出来る魅力のほか、ドキュメンタリーが人間一人一人を描いてゆく手法を取るため、教科書のような評論的取り扱いのみならず、「社会的事象のすべての中には人間一人一人の営みや姿がある」という新たな視点を与えられる。

筆者ら2名は、都倫研においては2002年度に連名で研究発表し、「都倫研紀要」へ研究報告させていただいた<sup>1)</sup>。今回取り上げるのは、「新生児医療問題」を扱うドキュメンタリー番組を、高等学校公民科倫理及び公民科現代社会における「生命倫理教育」に活かすための教材化の提案と実践報告である。これは近年、筆者浅野が医療問題について特に取材を続けていることから教材化を目指しているもので、国際的な医療問題に関する例は別学会でも発表している<sup>2)</sup>。

## 2. 東京都における「生命倫理」教育史

本稿は都倫研50周年記念誌ということもあり、筆者ら2名の実践報告の前に「都倫研紀要」総目次から、東京都における「生命倫理」教育史のあゆみを【表1】で見ておきたい。ここでは研究論文・研究発表・公開授業テーマから挙げるものとする。

生命倫理教育研究者の石原純（兵庫県神戸市立須磨翔風高校）が日本全国の「生命倫理」教育実践史をまとめているが、我が東京都の授業実践を見学に来たり、「都倫研紀要」の分析も行っている<sup>3)</sup>。そこで、ここでは石原の提起した授業構成区分に従い、【表1】の実践・研究を分類し、石原の分析では残念ながら洩れている実践・研究の部分も加えて【表2】を作成した<sup>4)</sup>。

石原(2008)の授業構成区分は、「生命倫理」教育を内容分析視点と方法分析視点という2面から構造化している点に特徴がある。【表2】のごとく、まず第1に内容を分析する視点から目標論的に見て、「生命倫理主題型」と「生命倫理発展型」とに区分している。第2には教育方法を分析する視点から形成論的に見て、「自己探求的アプローチ」と「社会問題探求的アプローチ」とに区分している。その上で両視点を組み合わせて、Ⅰ型：「自己探求的アプローチによる生命倫理主題型授業実践」、Ⅱ型：「社会問題探求的アプローチによる生命倫理主題型授業実践」、Ⅲ型：「自己探求的アプローチによる生命倫理発展型授業実践」、Ⅳ型：「社会問題探求的アプローチによる生命倫理発展型授業実践」と4

つに類型化している<sup>5)</sup>。

石原は「都倫研紀要」等の分析から、東京都における実践をⅠ型～Ⅲ型に分類し、Ⅳ型はユネスコのダリル・メイサー<sup>6)</sup>が『文化を越えた見識ある市民のための生命倫理』で提唱したプログラムであるとし、自らの実践はそこを目標にしようとしている。

【表1】 「都倫研紀要」にみる東京都における「生命倫理」教育史のあゆみ

|   |
|---|
| <p>第29集 (1991年)<br/>大谷いづみ [公開授業] 代理母契約の背景－依頼者と代理母の関係<br/>大谷いづみ 生命倫理への招待</p> <p>第35集 (1997年)<br/>小泉博明 病いへのまなざし－健康と病気をめぐる－考察－</p> <p>第36集 (1998年)<br/>小泉博明 [公開授業] 健康と病気－生命倫理の諸問題 ハンセン病への差別・排除<br/>及川良一 [公開授業] 一人称の死、二人称の死</p> <p>第37集 (1999年)<br/>田久 仁 [公開授業] 生命科学の進展と人間の在り方</p> <p>第39集 (2001年)<br/>小泉博明 病気をテーマとした生命倫理学習<br/>大谷いづみ 生命倫理教育の&lt;学力&gt;とは何か－市場原理と優生学の観点から－</p> <p>第40集 (2002年)<br/>大谷いづみ 「安楽死・尊厳死」論の現在</p> <p>第41集 (2003年)<br/>大谷いづみ 生と死の語り方－生命倫理教育の組み換えのために－<br/>大谷いづみ アメリカにおける「死の要請」の推移：「尊厳死」の登場－生命倫理教育／<br/>デス＝エデュケーションのための研究ノート－</p> <p>第42集 (2004年)<br/>小橋一久 高校生の「生」と「死」の認識について－「生命倫理」の授業－</p> |
|---|

【表2】 石原純による「生命倫理」教育実践の類型化と、「都倫研紀要」掲載実践の分類

| 目標論 \ 形成論 | 自己探求的アプローチ        | 社会問題探求的アプローチ      |
|-----------|-------------------|-------------------|
| 生命倫理主題型   | 【Ⅰ型】<br>及川実践・小橋実践 | 【Ⅱ型】<br>小泉実践・田久実践 |
| 生命倫理発展型   | 【Ⅲ型】<br>大谷実践      | 【Ⅳ型】              |

以上のように、東京都における「生命倫理」教育実践は、学習指導要領・教科書記述・資料集掲載に先駆けて、かなり早い段階から行われ、さらにその授業構成も多岐に亘っていたことが見て取れる。なお、筆者らが今回報告する実践は、上記Ⅲ型とⅣ型の双方の側面を持ったものである。都内の実践としての空白を埋める位置づけとなろう。

### 3. 新生児医療の現場から「いのちのライン」を考えさせる

#### (1) 新生児医療の現場のドキュメンタリー番組化と教材化の方向性

今回、ドキュメンタリー制作者・浅野が追ったのは、新生児救命医療現場のドキュメントである。このテーマを追うことになった第1の契機は2008年10月、東京で妊婦が複数の医療機関から受け入れを断られた後で死亡した問題であり、第2の契機は2009年に、プロ野球・横浜ベイスターズ球団所属の村田修一選手の長男が新生児救命医療で救われたことをきっかけに、同選手が神奈川県立病院の新生児集中治療管理室の周知イベントに参加したことであった。

そこで映像化されることが殆どなかった新生児医療現場のドキュメンタリー番組化を図り、そこで奮闘する医師の姿を描くことで、新生児救命医療の実態をさらに周知し、それとともに、問題点などを深く掘り出そうとの試みを行い、以下の2番組をディレクターとして制作した。

一方、高等学校での実践家としての坂口は、上記の浅野の試みは、高等学校公民科における「生命倫理」教育でも十分に教材化可能であると判断した。法律上結婚もほぼ可能な高校生世代ならば、新生児つまり出産について強く意識を始めているし、また死も含めた新生児の生命という問題についても、この世代ならではの反応と教育効果が大きく期待できると判断したのである。

#### (2) 「いのちのライン」の教材化

今回の教材化に用いたドキュメンタリー番組は、以下の通りである。

- ① 2009年3月1日放送の日テレG+「医療ルネッサンス NICU新生児集中治療室」30分
- ② 2010年3月1日放送のテレビ朝日「報道発 ドキュメンタリ宣言  
～密着！新生児救命200日～」52分

対象：高等学校全日制課程 3年公民科選択「倫理」2単位

(2010年度選択者12名、2011年度選択者34名。なお3年には必修「現代社会」2単位も設置)

配当時間：4時間 (2時間連続授業×2週)

【表3】「いのちのライン」実践 第1～2時 (連続100分)

| 段階             | 学 習 活 動   | 指 導 上 の 留 意 点   |
|----------------|---|---|
| 導入<br>10分      | <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 横浜ベイスターズ・村田修一選手が参加するイベント写真のICT機器による投影</li> <li>○ 2008年10月の東京都における妊婦たらい回し事件記事の投影</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・何のイベントなのかを判断させる</li> <li>・村田選手が何を訴えたいのかを考えさせる</li> <li>・病院数が日本一の東京で、なぜ妊婦が入院できずに死なねばならなかったのかを考えさせる</li> <li>・実は集中治療室が各病院で埋まっていたことからと理解させる</li> </ul> |
| 展開<br>I<br>15分 | <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 日テレG+「医療ルネッサンス NICU新生児集中治療室」前半部分の視聴</li> <li>・これにより、日本の新生児救命率の高さを知り、欧米では在胎24週以上が救命ラインで、日本では在胎22週から助けるという「いのちのライン」の意味を知る</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・前もってテーマが「いのちのライン」であることを告知した上で、VTRを視聴させる</li> <li>・発問により、「いのちのライン」とは何か、確認する</li> </ul>   |

| 段階             | 学 習 活 動   | 指 導 上 の 留 意 点   |
|----------------|---|---|
| 展開<br>Ⅱ<br>10分 | ○ 「医療ルネッサンス」中盤の視聴<br>・「いのちのライン」拡大の「明」の部分<br>・高い新生児救命率により、出生体重400グラム以下の新生児でも軽度の障がい程度での存命が可能 になると共に、出生前診断で病気などの障がいを持つ患児も早期産によって救命できるようになったことを知る   | ・横浜ベイスターズ・村田選手の長男もこれによって救命されたことを伝える   |
| 展開<br>Ⅲ<br>15分 | ○ 「医療ルネッサンス」後半の視聴<br>・「いのちのライン」拡大の「暗」の部分<br>・救命を追求すれば、障がいのある状況で生育させることになり、強い障がいのある子が生まれると、新生児集中治療室や一般病棟で治療し続ける必要<br>→ 14年入院している例すらもあることを知る  | ・高い新生児救命技術が「明」の部分だけでないことを理解させる<br>・家族の立場と医師の立場にたってみよう促す<br>・2008年妊婦たらい回し事件と新生児集中治療室の関係も示唆する |
| 討論<br>Ⅰ<br>20分 | ○ グループ討論Ⅰ「いろいろな立場にたってみる」<br>・グループに分けて、①家族の立場、②本人の立場、③医師の立場、④組織としての病院の立場、⑤2008年たらい回し事件被害者の立場にたち、「いのちのライン」拡大の明暗について討議→討論メモ作成  | ・展開Ⅲでの指示よりも、幅広い立場を与えて考えさせ、ロールプレイ的に討論させる<br>・自分ならばどうするか、という自己探求の姿勢で                          |
| 展開<br>Ⅳ<br>15分 | ○ テレビ朝日「報道発 ドキュメンタリ宣言 ～密着！ 新生児救命200日～」前半の視聴<br>・「医療ルネッサンス」とは切り口が違うものの、基本的には《救命追求→障がいを持つ子の誕生と救命→新生児集中治療室や一般病棟の占拠→退院できても家族に大きな負担》であると示される<br>・特に強い障がい胎内にいるうちに発見された場合、助けるべきか否かは大きな問題だと示される | ・本番組は、日テレG+「医療ルネッサンス」よりも社会問題的アプローチをしてくる構成になっており、その部分にも注目して視聴するように配慮する                       |
| 討論<br>Ⅱ<br>15分 | ○ グループ討論Ⅱ「出生前診断で強い障がいが発見されたら」<br>・グループに分けて①家族の立場、②医師の立場、③組織としての病院の立場、④国の立場にたつて討議させる→討論メモ作成  | ・現段階では「国の基準」がないことを示した上で、左記の④「国の立場」役の者には基準自体を決めること自体の可否も考えさせる                                |

【表4】「いのちのライン」実践 第3～4時（連続100分）

| 段階               | 学 習 活 動   | 指 導 上 の 留 意 点   |
|------------------|---|---|
| 導入<br>10分        | ○ 前時の復習<br>・前時の2回分の「討論メモ」の概要をICT機器によって投影  | ・新生児救命技術の進歩は素晴らしいことだが、良いことだけではないことを再確認  |
| 展開<br>V<br>20分   | ○ 「報道発 ドキュメンタリ宣言」中盤の視聴<br>・神奈川県立こども医療センターにおけるスーパー<br>ドクターと地方の病院から派遣されて来た新生<br>児救急医療研修医の日常を見せる<br>→ 医師の姿をとらえる視聴メモの作成   | ・スーパードクターの生き方・信条をとらえさせ<br>る<br>・派遣されてきた研修医の考え方や苦勞をとらえ<br>させる  |
| 展開<br>VI<br>30分  | ○ 「報道発 ドキュメンタリ宣言」後半の視聴、<br>および「医療ルネッサンス」冒頭部の再視聴<br>・医師という職業を目指すのに影響を与えたり、<br>番組作りをするにあたって思い入れが入ると<br>いう事例に気づかせる<br>→ 医師および番組進行をする記者の姿をとらえ<br>る視聴メモの作成<br>○ ベイスターズ村田選手が長男を救命された「恩<br>返し」の姿をICT機器による投影で紹介<br>①2009年12月20日「子ども達に笑顔を！<br>— 新生児医療応援シンポジウム」参加、②新<br>生児救命に関わる家族と医療スタッフを野球観<br>戦に招待、③シーズン中の本塁打数に応じて寄<br>付金、④新生児医療を側面支援するNPO法人<br>の立ち上げに参加 | ・研修医の一人も、実は自分自身が新生児救命医<br>療で助けられていたことから医師を目指し、さ<br>らに新生児救命専門医を目指している点に注目<br>させる<br>・実は日テレG+の番組の進行をしていた読売新<br>聞記者も自分の子どもが新生児救命医療により<br>子どもが救命されたという経験者だった点を確<br>認させる |
| 討論<br>III<br>15分 | ○ グループ討論III「研修医と記者及び村田選<br>手の思い」・視聴メモに基づき、①救急医<br>療研修医の立場、②番組進行記者の立場、③<br>ベイスターズ村田選手の立場にたってグルー<br>プ討論<br>→ 討論メモ作成   | ・研修医の一人と番組進行記者が実は新生児救命<br>関係者だったことに気づく前と気づいたあとに、<br>生徒自身の見方がどう変わったかについても議<br>論の対象とさせる   |
| まとめ<br>記述<br>25分 | ○ 意見表明「いのちのラインの拡大について、<br>社会問題として認識し、自らの意見を論じたり、<br>提案してみよう」<br>・グループ討論I～IIIの論題それぞれについて、<br>論点をまとめ、感想を述べたり、解決策を提案<br>する   | ・討論時にグループ分けされたパート以外の立場<br>について必ず記述することで視野を拡大する<br>・討論IIは、自分のパート以外を1つ記述するほ<br>か、④の「出生前診断で強い障がいが発見され<br>た時の、国の立場」は全員が記述   |



#### 4. 「いのちのライン」実践の結果

##### (1) 横浜ベイスターズ・村田選手について

勤務校は野球が盛んで100名もの野球部員を抱え、授業では部員たちの影響力も大きいですが、授業冒頭にイベントに参加する村田選手の画像を提示しただけで大きな盛り上がりを見せた。またスタジアムへの招待や本塁打による寄付金については、他選手でも事例ありとの報告もあった。

##### (2) 2008年の救急車「妊婦たらい回し」事件について

古い事件ながら、東京で起きたこともあり、この事件に関してはかなりの認知率で、医療機関数日本一の東京で…と大きなショックを受けた記憶のある生徒もいた。その時のニュースでは理由が分からなかったが、この授業によって、こんな「裏」があったのかという声が多くあった。

##### (3) 「いのちのライン」拡大の「明」部分について

全体に、日本の技術に誇らしいとの印象の声が大勢を占めた。ただし番組内では全く扱っていなかったのに、中絶と在胎期間の関係に女子生徒が強く反応するという傾向が見られた。

##### (4) 「いのちのライン」拡大の「暗」部分について

「暗」ということ自体が想定外だった生徒が多かった。今まで常識としてきた「いのちの重さ」至上主義が正しいのかということに、生まれて初めて疑問を持ったという生徒も多くいた上、すぐにインターネットで「新生児医療の『影』の部分」というサイトを発見してくる生徒も見られたことは、この授業が新しい視点を与えた証拠でもあり、一定の成果を挙げたものと言えよう。

##### (5) 「人の姿を描く」ドキュメントの利用について

1つ目の番組で読売新聞の記者、2つ目の番組で研修医が、ともに自ら深く新生児救命医療に関わっていたことについて生徒たちは初め、気づいていなかった。しかし教員側から、恣意的になるが上記の情報を伝えた途端に、生徒たちの見る目が変わった。これは題材が「人の姿を描く」ドキュメントだったからこそ、生徒の見方を変えたものと考えられる。

#### 【注】

- 1) 浅野麻由・坂口克彦「新しい視点からボランティア教育を考えるーボランティア活動の問題点を教育現場から考えるー」、都倫研紀要第40集、2002年。
- 2) 浅野麻由・坂口克彦「高校地歴・公民科における『医療の空洞化』の教材化ードキュメント番組にみる新たな日比関係を事例としてー」、日本グローバル教育学会第18回全国研究大会（鳴門教育大）、2010.9.11 共同発表。
- 3) 石原純「生命倫理を視点とした高校公民科の授業開発」、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科教科教育実践学専攻社会系教育連合講座 博士論文、2008年。
- 4) 石原は及川良一実践・小泉博明実践・大谷いづみ実践のみを扱っており、大谷実践については「都倫研紀要」以外の研究雑誌を用いている。
- 5) I～IV型というネーミングは筆者による便宜的なもの。石原自身は「自己探求型アプローチによる生命倫理主題型授業実践」などと、省略せずに用いている。
- 6) ニューージーランド出身のユネスコ・アジア太平洋社会人間科学地域アドバイザー。元・筑波大学助教授、国連大学客員教授。ユウバイオス倫理研究会代表。

## 失われた「問い」を求めて

東洋女子高等学校 上野 太祐

### 一、「問い」を吟味すること

高校のころ、私は「世界史」に熱中していた。「倫理」を勉強したことはない。それは、やる気がなかったからではない。そもそも、授業がなかったからである。だから、本来ならば、私は「倫理」という科目など知らずに卒業するはずだった。ところが、友人に独学で「倫理」を勉強している変わり者がいて、私は、彼からたびたび質問されることがあった。このとき、初めて「倫理」という科目のあることを知った。それにしても、なぜ私に質問するのだろうかと思い、友人の教科書を開くと、合点がいった。そこには世界史で習う思想家たちの名前とそのキーワードが載っていた。「なんだ、「倫理」とは、要するに思想の歴史じゃないか」と思った。これが、私の「倫理」に対する初印象である。

「倫理」の奥深さを知ったのは、倫理学原論という大学の講義でのことだ。この講義は、教員免許を取得するための必修単位だったのだが、無事に単位を取れるのは全体の三割という噂。まわりの友人たちが特別に警戒するなか、「どうせソクラテスあたりから始まる思想史なのだから、世界史を勉強してきた私には有利なはずだ」と奇妙な自信をもっていた。ところが、この自信は、すぐさまつき崩されることになる。

人間には、生きる意味などない—開講一番聴かされた、最初にして最大のテーゼが、これである。以来、講義を通して私は、人間の生の無意味さと格闘し、徹底的に「人間存在とは何か」を考えた。ソクラテス以来の思想史が話題にのぼったことなど、一度もなかった。だからこそ、私は、無い知恵を全力でふりしぼって考えぬかなければならなかった。結局、やっこのことで手にした単位は「可」、しかも、あと二点足りなかったら、落第点であった。

このとき私は、ほんの少しだけ生の危うさを味わったわけだが、それと同時に、すっかり「倫理」のとりこになってしまった。あれほど苦労した「倫理」に、なぜ惹かれたのか。それは、「倫理」の講義を通して、「問う」ことのおもしろさ、発想の豊かさを知ったからである。

そもそも、「倫理」と思想史との違いは、なんだろうか。その違いをざっくり指摘すると、「倫理」は、思想家同士の影響関係よりも、「問い」そのものを大切にする。それに対し、思想史の場合には、思想家Aと思想家Bとの影響関係がしばしば重く扱われる。たとえば、フッサールのもとで現象学を学んだハイデッガーが、独自の現象学の手法でもって存在哲学を編んだ、そのハイデッガーの影響を大きく受けているのが和辻哲郎やレヴィナスであって云々……というように。

しかし、「倫理」では、思想家同士の影響関係は、必ずしも大切でない。乱暴を承知で言えば、思想家の名前さえも、あまり大切でないように思う。そうやって、夾雑物をのけて大切なものを方法的に追い求めていくと、最後に残るのは「問い」そのものであろう。たとえば、ハイデッガーが「存在とは何か」と問いかけるとき、この深刻な「問い」をほったらかして、ハイデッガーという人物を重くみることはないだろう。「存在とは何か」という「問い」そのものを丁寧に吟味し、議論して、考えぬくこと、これが「倫理」だと思う。だから、逆にいえば、「問い」を味わうことなく、ただただ思想家同士の影響関係を羅列することだけに気をとられては、「倫理」とは名ばかりの、思想史の授業になってしまうのである<sup>1</sup>。

こうみると、「倫理」は、確かに特異な科目だ。「日本史」・「世界史」ならば、歴史的な出来事とその因果を教え、「政治・経済」ならば、世の中のしくみとその背景を教える。ところが、「倫理」は「問う」ことを教える。「日本史」・「世界史」や「政治・経済」などは、ある程度教える内容があらかじめ設定されているが、「倫理」は、その科目の本性上、教える内容があらかじめ設定されえないはずである。教科書に載る事柄は、あくまでも有名な思想家の出した「問い」に対する、有名な思想家なりの「答え」であって、模範解答ではない〔模範解答などない〕。ましてや、生徒自身の「問い」でもなければ、生徒自身の「答え」でもない。

では、「問う」ことを習うとはどういうことか。私たちは、習うまでもなく、日ごろ問うことをしている。たとえば「今日の夕飯はなにがいいか」「スピーチのとき、どんなことを話したらいいか」……など。しかし、こうした問いは、なにか根本的なことに対して出された「問い」ではない。問いのなかには、もっと、人生、社会、人間の根本に切り込むたぐいの「問い」があって、それを吟味することが「倫理」の眼目なのである。

だから、「倫理」という科目を学ぶには、その下準備として「問う」ことをよびさます必要がある。何も知らない子どものころを思い出そう。あの頃は、日常が謎にあふれていて、純粋に疑問を抱いていたのではないだろうか。「ぼくはどうやって生まれたのか」「どうして（他でもない）このひとが、ぼくのお母さんなのか」……と。ところが、成長するにつれ、せつかくの疑問を心の奥底にしまいこみ、忘れ去ってはいないだろうか。「倫理」の入口は、そうやって、知らず知らずのうちに遠のいていったのである。だから私は、しまい込まれた疑問のとびらを開くことをまずは目指そうと思う。

生徒にとって《はじめての「倫理」の授業》で、私はいつも「問い」をよびさますことを実践する。というのも、「問う」ことに対して、生徒の共感（共通の感情）＝共関（共通の関心）を得られなければ、その後の「倫理」の授業などちっともおもしろくならないだろうから。《はじめての「倫理」の授業》は、「倫理」という科目の根本的な魅力をもっとも伝えられる時間だ、と私は考えている。そこで、つたない実践報告ではあるが、次節に私の《はじめての「倫理」の授業》を載せてみた。

## 二. 「問い」をよびさますこと ― 実践報告 ―

### 〔導入〕(20分)

一年間の最初の授業という特殊な場面で、自己紹介をかねて、子どものころから考え続けてきた私なりの疑問を、自分の人生と重ねながら語る。導入のねらいは、この時間にやってもらう作業の方向性をつかんでもらうことにある。以下は、私が、実際の授業で述べた「私の疑問」の一部である。

- ・ 人生は、劇場の演劇ではないか（客がどこかで上野の人生を鑑賞）。 【6歳・小1】
- ・ 自分の見ている景色と他者の見ている景色は同じか。 【11歳・小5】
- ・ 偽善者は悪者か（偽ってでも善を成すのだから、善人ではないか）。 【14歳・中3】
- ・ バスの運賃は何に対して支払うのか（移動でなぜ価値が生まれるのか）。 【19歳・大2】
- ・ 3次元以下しか認識できない人間が4次元以上の生物に殺される可能性。 【21歳・大4】

1 理屈は立派だが、実践は難しい。教員の技術的な問題もさることながら、単位数の問題、生徒の理解力、受験への対応、職場環境での制約など、厳しい現実がこれを阻むのである。

- ・もし太陽がなかったら、人間は「時間」の存在に気付くか。 【23歳・院2】

〔展開1〕（7分）

どんなに些細なものでもよいので、思いつく限りの疑問を、各自簡条書きで挙げてもらう。アイデアが出ない場合は、前後・左右で話し合いながらでも構わない。

〔展開2〕（18分）

生徒同士で疑問をシェアしあう時間。ランダムに指名し、生徒自身の疑問を発表する（学級の状況が許せば、発表した人が次の人を指名するリレー方式で疑問を共有）。以下は生徒から出された疑問の一部。

- ・宇宙（ないし世界）は、どうやって始まったのか。
- ・人は死ぬとどうなるのか。
- ・人はどうして生きるのか。
- ・「中心」はどこか。（「中心」の「中心」の「中心」の「中心」の…）
- ・神はいるのか。あるいは、なぜ神を信じるのか。
- ・運命はあるのか。
- ・なぜ「良い子」にしなければならないのか。
- ・空はなぜ青いのか。

〔まとめ〕（5分）

こうした素朴な「問い」には、人間や社会の本質を的確についたものが多い。展開での作業を振り返って、「問う」ことのおもしろさを知り、誰もが子どものころに持っていた貴重な「問い」の体験をよみがえらせ、「問う」姿勢を見つめ直させる。

「倫理」で扱う先哲の思想も、すべては「問う」ことから始まった。ところで、「問い」が生まれたきっかけは、何だろうか。私自身の過去を振り返ってみると、それはひとえに「躓き」の体験だったと思う。子どものころの私は、ほかの子ができることを、普通にこなすことができなかった。たとえば、「りんごとバナナが一つずつありました、足したらいくつですか」という問題に、みな「二つ」と答えていたのに、私は「そもそも質の異なるりんごとバナナを、どうして足すことができるのか」ということを気にして躓いてしまい、算数でだいぶ遅れをとったことを思い出す。

いまとなっては、私の「躓き」のからくりも分かったから、むしろ、みなよりも私の方が騙されなかったのだとさえ思っている。つまり、教師は巧みに、りんごとバナナの質を捨象して、抽象的な数の概念だけを取り扱うように仕向けていたのである。そうした教師の誘導にうまく乗ることのできた子どもたちは、感覚的に数を導き出せた。しかし、そうした誘導になじめなかった子どもは、私のように落ちこぼれてしまったのである。

ある意味「倫理」という科目は、このように躓けた子どものための科目といってもいい。そして、こうした「躓き」こそが「問い」の源泉であろう。「躓き」を素直に認められないひとや、躓いても素

通りしてしまうひとには、「倫理」という科目は難しい。そして、まったく躓けないひとにとっては、もっとも難しい科目ではないだろうか。言い方を変えれば、一見「分かった」ようでありながら、実はよく「分かっていない」という素朴な「躓き」の自覚こそが、「倫理」という科目のほんとうの始まりを意味するのである。少なくとも、いまの私はそう考えている。

たった一時間の授業で、これらのすべてを伝えることは不可能である。ただ、これまで学校で習ってきた科目とは少し質が異なるのだ、ということを感じてもらえれば、初回の授業としては成功であろう。

この実践は「倫理」の根本に関わることを、まず扱おうと考えた結果の授業である<sup>2</sup>。生徒のなかには、私のような発想をもつ教員（大人）がいることに、戸惑いを隠せない者も少なからずいた。しかし、科目の内容や方向性、および科目を担当する教員の個性に興味を持ってもらう題材としては、適切であろうと思う。

### 三. 実践から見えてくる課題

繰り返し述べるが、この実践を行うことの意義は、「問い」をよびさますことにある。しかし、この実践は、より一層注目すべきもう一つの意義の存在をも浮き彫りにするのである。つまり、「倫理」に適性のない生徒を見つけ出すことができる、ということである。

先にも少しふれたように、「倫理」という科目は、「躓き」の自覚がまず大切になる。このような科目の特性上、受け入れられるタイプの生徒と、そうでないタイプの生徒とが、はっきり分かれる。この場合の「受け入れられる」とは、好き/嫌いという次元ではなく、「倫理」という科目の本質を捉えられるか否か、ということである。一般にいわれるところの“センス”の有無といっても良いのかもしれない<sup>3</sup>。“センス”という語をあえて使うのなら、第二節であげた実践は、生徒の“センス”を見極めるひとつの目安になるのである。

誤解の無いようにつけ加えておくと、私は“センス”のない生徒がダメだと言いたいのではない。むしろ事態は逆である。「倫理」という科目に対し“センス”のない生徒を、どのように指導していったらよいのか、これを考えていくことこそが、教員の課題だと言いたいのである。そしてこの課題は、取りも直さず、本実践から見えてくる多くの課題と重なる。そこで本節では、多くの課題のうちから特にいま論じうる重要な二つをとり挙げ、それを詳述したい。

#### 第I項 疑問の質の問題

本実践を行うと、まったく「問い」を挙げることのできない生徒や、教員が意図している「問い」とは質の異なる問いを挙げる生徒が、必ずいる。たとえば、「なぜ、何ページの計算問題が解けなかったのか」といったように、哲学的な《なぜ》に結びつかない問いを挙げるものは後者の極端な例であ

2 この授業は、永井均『〈子ども〉のための哲学』（講談社現代新書）を参考に構成したものである。なお永井氏は同著のなかで子どもという語に〈〉をつけて表記している。これは、年齢的な意味での子どもではなく、哲学的な「問い」を発する者としての〈子ども〉という含みがある。そうした背景を理解しつつも、実際の授業では、混乱を避けるため、あえて「子どものころ」という言い方でまとめた。ただし、補足として、高校生になっただけでもこのような哲学的「問い」を持っているひとは、それを書いてもらって構わない、という趣旨の助言を述べるようにしている。

3 同じような現象が起こる科目に「物理」がある。「物理」と「倫理」は、しばしば高校生の天敵であり、どちらも“センス”の問題で処理されてしまうことが多い。しかし、この場合の“センス”とはなんだろうか。

る。こういったとき、本来ならば、「問い」の質の違いを理解してもらえよう丁寧に説明するのが筋だが、これはしばしば大きな困難を伴う。このことをより深く追究するためには、高校のころ「倫理」を受講したことのある大人の話が示唆に富んでいる。

先日、同じ職場の生物の教員が、「私は、高校のとき、倫理だけはどんなに勉強してもいい点数がとれなかった」と言っていた。事情を詳しく聞くと、定期試験のたびに、習った語句や思想家を片端から丸暗記して試験に臨んでいたらしい。その教員は続けて、「私は、授業の内容を分かっているつもりで、実際には、まったく何も分かっていなかったのだと思う。倫理は、理解を試される科目だから」といった。この認識について、私も同感である（なにせ、私も大学の講義で同じく痛い目に遭っているのだから）。

私は、この理科の教員の意見から、こんなことを考えた。仮に、《センター試験型の倫理》（マークシート型のもの）と《学校試験の倫理》（記述・論述が主のもの）との点数の関係を以下のように整理してみたとしてしよう。

- 【1】《センター試験型の倫理》＝○ — 《学校試験の倫理》＝○
- 【2】《センター試験型の倫理》＝○ — 《学校試験の倫理》＝×
- 【3】《センター試験型の倫理》＝×
- 【4】《センター試験型の倫理》＝×

この分類はあまりに形式的かもしれないが、それでも「倫理」という科目に潜む独特の難解さをあぶりだすには十分である。【1】と【4】の組み合わせは分かりやすい。【3】は少し注意が必要だろうか。【3】はセンター試験で成果の出せない生徒である。この結果が意味するのは何か。この結果の原因は、たとえば、教員がセンター試験の倫理に照準を合わせて授業をしていない、生徒が既習事項を忘れてしまった、生徒が問題の形式になれていない、などが考えられるであろう。だとしたら、こうした原因は、決して「倫理」に限ったものではなく、他の科目にも起こりうるように思う。

もっとも注意深く考察すべきは、【2】のタイプである。【2】の結果が意味することを考えてみよう。たとえば、学校の倫理の試験では、異常に細かい知識が出題される、という場合などはこうした結果を生むこともあるだろうが、はたして原因は「試験そのもの」にあるのだろうか。

ために、過去5年分のセンター試験を分析してみると、問題の種類はおおよそ次の3種類に分けられるように思う。

- ①単純な知識の確認
- ②思想内容の理解
- ③グラフ・資料（リード文）の読解

①は、思想家の名称やキーワードを補充させる「穴埋め」が主である<sup>4</sup>。②は理解と分類したが、主として語句の正確な理解を問うて、正誤を判定させるものが多いように思う<sup>5</sup>。③のグラフや資料（リード文）の読み取り問題は、センター試験の英語のグラフ問題や国語の読解問題のような設問であり、

4 たとえば、「…空海はそれを真言密教として体系化し、13と一体化することで即身成仏できると説いた。」〔2010年本試第3問の問題13〕など参照。

5 たとえば「自我同一性を見失っている心理状態の例として最も適当なものを一つ選べ」〔2009年度本試第1問の問題2〕など参照。

標準的なグラフ理解力や文章読解力さえあれば、特別な勉強は要らないように思う<sup>6</sup>。

センター試験の分析は本稿の主題でないから、これ以上立ち入らない。ただ、こうした簡易な分析からでもおおむね理解できるのは、センター試験は、思想家と用語をセットできちんと覚え、標準的な読図力・読解力があれば、高得点が取れるということである。

そこで、【2】のタイプの生徒の分析に戻ろう。このタイプは、具体的にいうと、用語はきちんと分かっているのに、学校の試験では成果が出せないということである。センター試験型の問題と学校試験の問題の最大の差は、やはり論述の有無であろう。学校試験の問題では、授業担当の教員が、独自の論述問題を出すことが、往々にしてある。この場合、教員が発する「問い」に対して、自分なりのアイデアを持って答えていかななくてはならない。ところが、このとき「問い」の意味を誤解したり、「問い」そのものを理解できなければ、どれだけ倫理の用語を覚え、思想家の名前を覚えていたとしても、まったく点数には結びつかない。これこそ本節の最初に触れた、“センス”のない生徒である。

こうしたことは、今さら書くまでもなく経験的に分かりきったことであろう。だが、分かりきっていても、あえて文字におこして確かめておく周到さは、無駄ではあるまい。そして、こうした確認から導き出される議論点は、形式的に点数をとることができていても、本当は「問い」をつかめていない生徒に対し、どのような指導がありうるのか、ということである。

これについては、先に挙げた理科の教員の話のなかにヒントがある。この教員は、高校を出て十年以上経って振り返ってみて、「実際には、まったく何も分かっていなかったのだ」という反省に行き着いた。もし、このことを高校のときに心の底から自覚できたとすれば、それが「躓き<sup>つまづ</sup>」となって、変わることができたかもしれない。つまりは、なるべく早く「躓き」を認められるようになることが、第一である。

そして次に肝心なのは、「躓き」の対象を探ることであろう。すなわち、何に躓いたのかということである。教員の助力が活きるのは、まさにこの場面である。「分かっていない」ということを自覚した生徒に対し、その「分かっていない」事柄の核心をずばり指摘し、教員が発する「問い」と生徒自身が誤解していた問いとの本質的差異を際立たせることができれば、この生徒の理解は大いに深まっていくに違いない。

ところが、誤解の核心を的確に見分けることは、なかなか困難なのである。たとえば、自分で英文を読むとき、各々の単語の意味や構文の構造も、正確につかめているはずなのに、なぜか訳せない、という経験はないだろうか。これは、「分かっていない」部分の核心が見えないから、最後の一步に到達できないのである。

自分のことでさえこうなのだから、相手の「分かっていない」部分の核心を鋭くかぎ分けるのには、よほどクリアな頭脳が必要だと思う。ところが、クリアな頭脳<sup>だけ</sup>があっても、そう簡単にこの困難を解決することはできないのである。というのも、永井均氏が著作のなかで指摘しているように、「〈子ども〉の疑問」は、往々にして、疑問を持ったその個人にしか分からない類の「問い」なのである。だから、その疑問を、単なる外側からの説明によって理解へ導けるということはまずない。それどころか、生徒の「分かっていない」部分の核心を教員が捉えきれていないのに、無理に生徒へ説明しよ

6 たとえばグラフの読み取りとしては〔2008年度追試第5問の問題35及び36〕、資料（リード文）の読解としては〔2008年度本試第3問の問題21〕など参照。

うとすると、かえって生徒の傷口を広げてしまうことがある。教員の説明が的を射ないから、生徒の分からなさはどんどん悪い方向へむかい、生徒は分からないことを次々に教員へ質問し、かえって自分の傷口を自分で広げてしまうのである。結局、当の教員も、実は生徒の「分かっていない」部分の核心をつかんでいないから、まったく的外れな答えをし、双方混乱状態という終末を迎える。

こうした困難を乗り越えうる手だては、教員が「躓き」まくることであろう。つまり、生徒が躓くだろうところに、生徒よりも先に躓いておく必要があるということだ。そうでないと、生徒の「分かっていない」部分に、教員の方が 共-感=共-関 できないのだから。クリアな頭脳だけを持っていても、「躓き」のない教員では、「倫理」の教員はつとまらないのである。この意味で器用な者よりも、不器用な者の方が、立派な「倫理」の教員になれるといえるのかもしれない。

## 第Ⅱ項 本実践を活かした今後の授業展開の可能性

さて、もうひとつの重要な課題は、この実践がどのように今後の授業へとつながるのか、を具体的に考えることであろう。この点について、以下で一定の見通しを述べていこう。

繰り返し述べているように、「問う」ことこそが「倫理」の入口だとすれば、「倫理」の授業では、先哲の根本的な「問い」をおさえることが、やはり必須であって、またそのことが、難解な思想の理解の手助けになるはずである。

たとえば、ハイデッガーの根本的な問いを理解せずに、「ハイデッガーは実存主義の哲学者で、人間を「現-存在」とし、現-存在を「世界-内-存在」として規定した……」と教えたところで、いったいそれは何の授業なのだろう<sup>7</sup>。

そもそも、ハイデッガーの根本的な「問い」は何だったのか、なぜハイデッガーは人間存在の分析をしたのか、どうして人間を「現-存在」としたのか、「現-存在」がなぜ「世界-内-存在」と規定されると考えたのか、こういったことに着眼していかなければ、「倫理」の授業としては、不十分であろう。そして、こうした着眼のあらゆる源泉は、結局、最初に挙げた「ハイデッガーの根本的な「問い」は何だったのか」ということに帰着する。もっと理想的なことをいってしまえば、生徒自身にハイデッガーの根本的な「問い」（つまり「存在とはなにか」）を考えさせるような授業を目指す必要があるだろう。

ところで、倫理学や哲学で使われる用語は、しばしば奇妙な語感を伴う。ためしに山川出版社の『倫理用語集』を開いてみると、「世界-内-存在」以外にも、「アガペー」「理気二元論」「悪人正機」「方法的懐疑」「弁証法」「エポケー」「実存」「問柄的存在」「言語ゲーム」「脱構築」などなど、日常とはかけ離れた奇怪な言葉がずらりと並んでいる。見るからに難解だが、これとて思想家の根本的な「問い」をよく吟味して教材研究をしてみると、むしろ、「こうとしか言えないのかもしれない」という気持ち芽生え、その言葉がじんわりと理解されてくることもある。

だから、「倫理」の授業において、編年的に思想家を追って授業するのなら、出発点としてまず思想家が持った「問い」を丁寧に吟味し、しかるのちに、そうした独特な言葉を使わざるを得ない背景をきちんと踏まえ、納得していく必要があるだろう。そのうえで、思想家の「問い」を生徒の内発的な

<sup>7</sup> そもそも、ハイデッガーを実存主義の哲学者として扱うことは正当かという問題もあるが、それについては、ここでは触れない。



「問い」と呼応させることができれば、これほどいきいきした授業はないと思う。

そこで、実際に授業準備をするにあたって、教員の努力すべきことが、少なくとも二つはあると気づいた。一つは、思想家の根本的な「問い」を、教員が身を以ってその著作の内側から発掘することであろう。もう一つは、思想家が残した言葉（キーワード）を、みずみずしい状態で保つことであろう。紙面の都合上、前者については割愛し、後者について、具体的に考えてみたい。

その例として、ここでは「実存」という言葉を取り上げてみよう。「実存」という言葉が説明される時、しばしば「かけがえの無い《この私》の存在のことだ」というのを耳にするが、果してそれでよいのだろうか。

「実存」とは、もともと existence という語の訳で、人間存在に特有の「現実存在」のことを指す。その「特有さ」は、「外へ」(ex-)、「立つ」(-sistere) ということであって、すなわち、《いまの己れ》から外へ出て立つ(脱自)というあり方にある。道具にも「現実存在」はあるのだが、道具は自ら外へ出て立つというあり方をしない。人間存在に特有のとは、こういうことである。

そして、サルトルのいう「実存は本質に先立つ」という言葉も、この文脈から理解されなければならないであろう。つまり、本質が先に決められて「現実存在」する道具とは違い、人間の場合は「現実存在」が先にあり、そこから外へ出て立つことで、己れを決めていくという仕方で存在する。これは別の言い方で、「あるところのものであらず、あらぬところのものである」ともいえる。

こういった含みのすべてが、「実存」というたった二文字の言葉に収まっている。しかも、「実存」は脱自という動的な作用を捉えた言葉だから、その動きを動きのままとらえてきちんと説明する必要がある。言葉のみずみずしい状態で保つとは、こういうことである。そして、こうした言葉の扱いは、とりもなおさず思想家の「問い」と有機的に結びつく。

しかし、こうした努力には大きな困難も伴う。第一に、本稿では割愛したが、根本的な「問い」をうまくつかむことのできない思想家がいることである(この点は、今後都倫研の例会等での議論を通して学びたい)。第二に、自分の理解が果してどの程度正しいものなのか、ということ計れないということだ(現に、この「実存」の理解さえ正しくないかもしれない)。「倫理」の授業で特定の思想家の思想を説明するとき、教員の思考でつじつまを合わせることは、極力さげねばならないだろう。ある思想の内容を説明する際に、自分の思考を混ぜてしまったら、それは思想家の思想ではなく、教員の思想が入り込んだ混雑物になってしまう。もちろん、完璧に自分の思考を入れ込まないということは不可能だが、この危険性を意に介さぬままでは、まったく独りよがりな授業になりかねない。ときには誤読すれすれの状態で説明してしまう虞もあろう。何が正しく、何がまちがっているのか、また、どのようにそれを判断したらよいのか。このあたりは、今後の課題である。

#### 四. 終わりにかえて — 「倫理」が養う能力はなにか—

一般的に、「頭がいい」と評される人には、次の二種類が想定されているように思う。一つは、勉強ができる・知識が豊富、というタイプ。もう一つは、人の考えないことを考える・独創的なことを成し遂げる、というタイプである。たとえば、クイズで上位の成績を取るタイプは前者、日ごろ人が気付かない視点から問題点を鋭く指摘するのは後者である。後者の場合、「頭がいい」と評価されることもあるが、その考え方があまりに“ふつう”の人と異なると「変わり者」と言われたりもするだろう。仮に、この二種類の意味で「頭をよくする」学習があったとすれば、「日本史」・「世界史」などは前者、

「倫理」は後者の力を磨くことになるのではないかと思う。こう考えてみると、「倫理」の授業を通じて養うべき能力が一先の実践で「問い」を一切書けなかった生徒や、質の異なる「問い」を書いた生徒の学びの方向性が一、なんとなく見えてくるように思う。

こうした生徒に倫理的思考力を身につけてもらう一番の近道は、そういう思考をする教員と接することであろう。だとしたら、「倫理」の教員は、いつも新鮮な哲学的「問い」をもち、それを追いつける姿勢が必要となる。しかし、「問い」をもち続けながら仕事をするには、なかなか難しい。大人になった今では、ある程度社会に適応して生きることを強いられるからである。この意味で、「問い」をもち続けることは、まともな大人（仕事のできる大人）になることとは、正反対のように思う。しかし、こと「倫理」の教員とあっては、そうとは言えないだろう。

ここに小気味よい<sup>イロニー</sup>皮肉な結論をみる。すなわち、まともな「倫理」の教員であるためには、まともであってはいけない〔できる「倫理」の教員は、できてはいけない！〕のである。こんな結論は、あまりもお粗末だろうか。とはいえ、いまの私は、真剣にこう考えているのである。

好き勝手に筆を走らせてみれば、既に一万字を超えている。議論すべき課題は山積みゆえ、これより先は trinken の場にて大方の御叱正と御麦酒を仰ぐ次第である。

## 「倫理 (学)」について再び考える

東京都立南葛飾高等学校 渡邊 洋

私は現在、都立高等学校の「公民科」を担当している。特に主担当である「倫理」をどのように実践しているのかといえば、歴史系統的な形態をとりながら、著名な思想を展開した古今東西の思想家及びその歴史を精選して紹介することとなるのだが、素朴な疑問として、このような「先哲の思想」を通じての「人間の生き方」、「テクニカルターム (ジャーゴン<sup>(1)</sup>)」の一方向的紹介は、時に価値・生き方の押しつけ、いわゆるインドクトリネーション (注入による教化)<sup>(2)</sup>にもなるし、何よりも生徒の「主体的」に考える、ということに阻害するのではないか、という問題を常々私は考えてきた。とりわけ、「知育」と「徳育」の二領域に深く入り込む「倫理」という科目は、その指導方法や内容に日々改善が求められていることがいうまでもないということは十分理解して、である。

このようなジレンマのなかで、私が「倫理」の教員となって、はや四半世紀が経ってしまったが、「倫理 (学)」そのものについて深く調べる、また問い直すことが日々薄れてきてしまっている。それで今回、その反省の意味もこめて上記のことについて今後のあり方も踏まえつつ、以下に若干述べさせてもらいたいと思う。

英語“ethical”、ドイツ語“ethisch”、フランス“éthiqu”などの言葉は、「倫理的」という意味でもあれば、「倫理的」という意味でもある。ギリシア語の「タ・エティーカ“ta etika”」がラテン語「エティカ」になり、後に近代ヨーロッパ語になったという。また、「倫理学」あるいは「倫理的な諸問題」を、「タ・エティーカ」と呼んだのは、かのアリストテレスが初めてであるとされ、そもそも「エトス“ethos”」という語に由来し、語義から翻訳すれば本来「人間に関わることども」すべてを意味する<sup>(3)</sup>。欧米の学問的伝統を物語るものである。

これに関連して、いわゆる「徳倫理学 (Virtue Ethics)」という言葉がある。これは、与えられた状況で人がいかに善い行為をするべきかを定めるための行為原理を与えようとする、「規範倫理学」の主要なアプローチのひとつであるとされる。当初、それは義務や規則 (義務論) や行為の帰結 (帰結主義) を強調するものと対比され、徳やその性格を強調するものとみなされていた。この理論の起源もやはり古代ギリシアの哲学者プラトンやアリストテレスにさかのぼり、後の近代の「徳倫理学」は、必ずしもすべてが古代ギリシア的な伝統を引き継いでいるわけではないが、多くのタイプが古代ギリシア哲学に由来する三つの概念、「アレテ (卓越性や徳)」、「フロネーシス (実践的もしくは道徳的知慮)」、「エウダイモニア (幸福)」の影響を受けているといわれる。

ところで、アリストテレス倫理学では、人間が行為の反復によって獲得する持続的な性格・習性を指し、「エトス“ethos”」という言葉は、「習慣 (ethos)」としてそれにふさわしい行為を実践するなかで体得される「習慣によって形作られた」行為性向である。「エトス“ethos”」の研究は近年、「学習された行為の統合形態」という心理学や教育学、さらには文化人類学などにおける「文化パターン cultural pattern」の概念としても重視されてきている。人間と社会の相互規定性をとらえる概念として最初に用いたアリストテレスから、社会認識の基軸として再びとらえようとしたのが近代の社会学者 M. ウェー

パー<sup>(4)</sup>に発展されたと考えてもいいかもしれない。

このようにして近年、「倫理学」は「規範倫理学」「応用倫理学」「メタ倫理学」の3つからなるといわれる。先述した「規範倫理学」は「どのような行為が本当の意味で善い行為といえるのか」という問いに答えようとする試み、「応用倫理学」は生命倫理・環境倫理など、現代社会が生み出す諸問題に倫理的観点からアプローチする学際的領域であり、「メタ倫理学」は1903年にG. E. ムーア<sup>(5)</sup>が『倫理学原理』を出版したことを起点とし、倫理の基本的用語、例えば「善い」「正しい」「べし」などの意味や用法を概念的、道德心理学的、形而上学的に分析する学問であるという。

私は、個人的な意見ではあるが高校教諭の役割として、高校生に、これら高度に専門的な学問として発達した各「倫理学」からのアプローチをするためには指導や研究不足をつねに痛感している。したがって私が現状で「倫理学」に託すものは、ひとことでいえば一般の生活レベルに生きるための「倫理」である。この場合の「倫理」の能力とは、授業でいかに創意工夫があったとしても、他の学問、たとえば自然科学や数学の場合とは違って、教わる者は何も専門的に知らなくても、「健全な常識」さえあれば、基本的な理解を持ちうるものであると私は考えている。いいかえれば、専門的な「倫理学」などまったく知らなくても、日常の「生活世界」<sup>(6)</sup>のなかで「誠実」で「信頼」すべき人間として行動し生きることが出来ればそれを習得した、といえるものである。これは『ニコマコス倫理学』<sup>(7)</sup>において『「ポリスにおいて善い人」とは「生活を共にする（コイネー）もの」「自足している・生活を共に出来るもの（共同体）」であり、そうでないものは動物か神かのいずれかである、つまりポリスを形成できない人間はほとんど人間とは認められない』とするアリストテレスの「自足」の獲得に帰着するものだといえる。

しかし、アリストテレスの立場によれば、「自足」についての知識を有することも重要ではあるが、結局はそれが実践として正しく現実化されていくことが必要である。当の知識だけが単なる机上の理論であって、実践的にはまったく無効であるとすれば、それは私の想定する「倫理」にとってまったく無意味なことである、と考えられる。

結局、「倫理（学）」とは、慣習としてのエトスの意義の反省に始まり、徳としてのエトスの把握に終わるという理念的構造を持つ。現代においては徳としてのエトスを単純かつ明確な理念的構造として把握しがたいことはいうまでもない。私見であるが、私は「エトス“ethos”」の本質とは、「追憶」ではないか、と考えている。これは、昨日を顧みてより改善すべき事柄が出来ていなかった後悔にも似たものである。このことはカリキュラムにもあてはまるのであり、「倫理」のカリキュラムとはその形成・計画に関して本来の理念的構造を完結することが難しい課題について日々反省・後悔をつねに負い続けるものである。

しかし、大切なことは、このような「倫理」の問題に対して、たとえばM. ウェーバ一流の「にもかかわらず」<sup>(8)</sup>という肯定的なヴァイタリズムを持った理念、「答えのない旅」「終わりなき旅」にたとえられるようなたゆまぬ思考や実践の改善が絶えず持ち続けていかなければならないのだとも私は考えている。

欧米の「倫理学」は、過去の長い歴史を通じて「個人」や「ロゴス」を軸として「善（幸福）」や「徳」に関し重要な地位を確保してきたが、資本主義や科学技術の発達、特に20世紀の二度の大戦を経て、

その意味や価値がかなり変容してきている。さらには現代のニヒリズム的状况や人間の不条理などにより、「善い働き」である「徳」の問題は形式的になり、現在のような物質優先の世にあっては「徳」が「得」だけの意味しか持たなくなっていると感じられるようになってはいないだろうか。

さらに、「倫理(学)」自体も専門化、技術化を続けてきており、現代日本は戦後から現在まで圧倒的なアメリカの影響のもとで「倫理(学)」を検討していると思われるが、はたしてそれが正しい方途であるのだろうか。

最近の傾向として、科目としての「倫理」の位置づけも揺らいでいる。将来、発展と研究が望まれる日本における「公共の精神」のための教育は、政治・経済はもちろん、新しい倫理的課題、生命倫理、情報倫理、環境倫理、その他、日本国内から広く国際的に広がる、多く存在する「在り方生き方」にかかわる諸問題に対して「個(私)」を「公」にかかわらせる(=「公共」)カリキュラムの開発が重要である。これらこそがこれからの「公民科」としての役割になると考えている。そして、それを教える学校教育の教科の全体の中心がより大きな「社会科」であり、そこで得られたものを含む能力の全体性こそが「公民的資質」なのではないか、と私は考える。

このような現代だからこそ大切なことは『人倫日用当行の路<sup>(9)</sup>』の原点に戻り、「人間」をとらえ直すことや、反復的な「徳」の問い直しが必要だと私は考える。それによって「倫理(学)」はさらなる使命を持ち、国内の学校や生涯教育における「道徳」や「倫理」も意味や価値を持ち続けるのではないかと、「倫理」について考えるのである。

#### <参考資料・引用資料及び注釈>

- (1) ジャーゴン(jargon)については『岩波応用倫理学講義6』(越智貢他編 岩波書店 2005)参照。
- (2) インドクトリネーション(indoctrination 注入による教化)。この語が教育用語に転じたのは近代以降であり、主として社会教育分野で権力による人心統制の方法として使用されるようになった。その特徴は、大衆の人格全体を包み込んである価値・生き方を信じ込ませる方法である。
- (3) 『倫理学を学ぶ人のために』(宇都宮芳明・熊野純彦編 世界思想社1994) p.31
- (4) M.ウェーバーによれば、エトスの行為性向は次の3つの性質を併せ持つ。
  - (ア) ギリシア語の「習慣(エトス)」に名称が由来していることからうかがえるように、エトスは、それにふさわしい行為を実践するなかで体得される「習慣によって形作られた」行為性向である。
  - (イ) その行為性向は意識的に選択される必要がある。「主体的選択に基づく」行為性向がエトスである。
  - (ウ) 行為を選択する基準は何か。それは「正しさ」である。選択基準は、行為に外在する(行為の結果)か、内在する(行為に固有の価値)かのいずれかであるが、「正しい」行為とは、内在性の基準が選択され、目的達成の手段ではなしに行為それ自体が目的として行われるような行為のことである。行うことそれ自体が「自己目的になった」行為性向がエトスといえる。外的な罰や報酬なしには存続しえない行為性向はエトスではない。エトスの窮極的支えは個人の内面にある。ウェーバーは価値合理“Wert rational”と目的合理“Zweck rational”という対比で、自己目的あるいは正しさの契機を強調し、社会学の伝統を形作った。(『社会科学における人間』(大塚久雄 岩波新書 1977)に関する厚東洋輔の分類資料を参考にして作成)

このM.ウェーバーの影響を受け、日本近世における儒教道徳(エトス)を「文化パターン“cultural pattern”」とみて先行研究をした、有名であり重要な文献が丸山眞男の『日本政治思想史研究』である。第二次世界大戦中に執筆した本著は、「自然」-「作為」のカテゴリーを用いて儒教思想(朱子学)から荻生徂徠・本居宣長の「近代的思惟」が育ってきた過程を描いたものである。

- (5) 『倫理学原理』(G. E. ムーア 深谷昭三訳 三和書房 1977)  
「善い」を経験できるような対象と同一視するのが自然主義的倫理、「善い」を形而上学的対象(たとえば「神が命じている」と同一視するのが形而上学的倫理である。前者における善と自然的対象の同一視を「自然主義的誤謬」であるとした。(『倫理学原理』p.39)
- (6) 「生活世界」とは専門的には深く現象学に関係する用語であるが、ここでは学説的な意味としての利用はしていない。
- (7) 『ニコマコス倫理学』上・下(アリストテレス 高田三郎訳 岩波文庫 1971-1973)
- (8) 『どんな事態に直面しても「それにもかかわらず!」と言い切る自信のある人間。そういう人間だけが政治への「天職」を持つ。』(『職業としての政治』マックス・ウェーバー著 脇圭平訳 岩波文庫 1980) p.106
- (9) 『伊藤仁斎 伊藤東涯』(吉川幸次郎, 清水茂校注 日本思想体系33 岩波書店 1971)『語孟字義』(巻の上・道・凡五條) p.27

本拙稿は、「平成19年度新教育大学院, 大学院設置基準14条適用大学院派遣研修」研究報告  
「日本における『公共』の精神と『徳』の育成に関する研究」(上越教育大学)の序章をベースに再構成  
したものである。

# 現代の高校生の意識

成瀬 功

## 1. はじめに

1990年12月～2月にかけて『全国倫理現代社会研究会』が、国、公、私立高校54校、12,547名に対してアンケート方式で意識調査を行なった。この調査を基に、高度経済成長移行に生まれ育った現在の高校生の「意識と生活」を分析してみたい。

バーナード・ショウは「最大の敵と最悪の犯罪は貧困である。」と述べている。しかし、飽食の国に住む私たちは、今や子供たちも糖尿病に蝕まれているという。飽食の時代に生きる高校生は、現実をどうとらえ、生きようとしているのか。

## 2. 『自己評価』について

高校生の意識をより構造的に浮かび上がらせるために、ローゼンバーグの『自己評価』尺度を使いクロス集計をした。「自己評価」とは、自分の頭の中に思い浮かべられた自分自身の姿、つまり「私」をもう一人の「私」がどう見ているかということである。

私たちは他者を鏡にして自己を映し出している。メンケン「良心とは、誰かが見ているかもしれないぞ、という心のささやきである。」と述べている。「自己評価」は単なる内的感覚、あるいは心理的前提というだけでなく、周囲の人たちとの人間関係のあり方に依存している。つまりわれわれの自己像や感情は、われわれの普段接触する他者が、我々をどのように判断しているかに、大きく依存している。

精神医学者のR・D・レインは「女性は、子どもがなくては母親になれない。彼女は、自分に母親としてのアイデンティティを与えるためには、子どもを必要とする。愛人のいない恋人は、自称恋人にすぎない。見方によって、悲劇でもあり、喜劇でもある。『アイデンティティ』にはすべて、他者が必要である。誰か他者との関係において、また関係を通して、自己というアイデンティティは現実化される。」(『自己と他者』)と述べている。

精神医学者の木村敏氏は「自分を自分たらしめている自己の根源は、自己の内部にはなく自己の外にある。」(『人と人との間』)と述べている。

日本の高校生は「自己評価」が低く、精神構造は極めて不安定である。アメリカの青年と比較して、日本の高校生の「自己評価」が著しく低いのは何故であろうか。考えてみなければならない。吸い込み穴のように学校教育を解して社会的上昇を迫られる渦巻き構造の中で、高校生は仲間と共有する目標を見定められず、自分は脱落者になるのではないかという不安がつきまとっている。そして建設的な社会参加の方法を本気に探求しようとしめない態度、自己の生活の内に埋没している点、アメリカの青年と比較して著しく幼児的であることは否定できない。「自己評価」の低さは人格の未成熟と深くかかわっているといえよう。

母親というのは子を愛し包む、父親はあるべきものとして愛し導くが、日本の現代において、父親もしくは父親的原理の不在、母性的原理の支配的なあり方は、高校生の育つ場としていえば、往々にして自立、自律の機会を失いがちである。

### 3. 家族について

家族との生活に「満足している」のは全体33.9%だが「自己評価」の高いグループでは54.5パーセント半数をこえているのに対し、低いグループは19.4%にとどまる。

「ここ二、三年の間親にとっても歩み寄れそうにないほどの意見が対立した」のは、全体25.4%である。「自己評価」の高いグループ18.0%、低いグループは32.0パーセントと高い。

家族での人間関係は、子供の人格形成に大きくかかわってくる。例えば進路の問題「迷った時どの程度父母に相談するか」を尋ねたところ「父親に全然打ち明けない」が全体34.9%、「自己評価」の高いグループ25.9%、低いグループは43.0%である。

「自己評価」の高いグループ生徒の方が親子関係でコミュニケーションは率直で解放的である。低いグループが家庭の中でもコミュニケーションが希薄であり孤立していると言える。「自己評価」は、高校生を取り囲む大人や仲間たちの態度を反映したものである。彼らは、親たちに信頼されている場合には自信と安心を得る。「自己評価」も高くなるが、一方親に受け入れられず拒否的、疎外的であれば「自己評価」は低くなり、精神的に不安定となる。

### 4. 学校について

「他の学校に変わりたい」「学校を休みたい」「学校での生活に疲れを感じる」全体56.8%、「自己評価」の高いグループは34.4%、低いグループは74.7%にもなる。「自己評価」の低いグループが学校に対しても消極的であり、否定的であると言えよう。

「学校での生活が楽しい」「学校に誇りを感じる」「先生に親しみを感じる」「学校は自分の能力を伸ばすのに役立っていると思う」全体40.8%である。「自己評価」の高いグループは61.3%である。低いグループは34.3%である。

すべての人間が、世界にまたとない独自の個性を生まれながらにして持っていて、しかも、過去、現在、未来を通じて一回きりのものだとすると、これはなかなか大変なことである。そして、そのことに気づいたら、自分の生命の一瞬一瞬がかけがえのない貴重なものに思えてくるだろう。子供たちにそのことをさとらせることは教育の最も大切な仕事の一つになる。ところが消費社会は、ものを買うことが豊かさだと教え、学歴社会は受験に成功する子どもが優れている子どもだとささやき、産業社会は出世し儲ける人間が勝者という。そうした価値観に「学校」も「家庭」も抵抗できる力を失っている。公害問題の先駆者明治時代の志を持ったすぐれた政治家田中正造は「サテサテ よの中も腐レバ腐るもの。今ハ官も民も西も東も腐レタルモノノ如し 日本ハダメダ」という書簡を友人に送った。

「競争主義」「物質中心主義」「自己中心主義」の今の世の中にやりきれない思いを抱いているのが今の高校生である。生徒と生徒とを結びつける絆を弱め、家族、学校、社会、政治に対して消極的態度を生み出す一方では絶えざるエゴイズムの要求に脅かされている。この歯止めなきエゴイズムは「自己利益中心主義」は、家族、学校、社会、政治そのものを掘り崩してしまうのではないかと思える。今、日本の経済、社会の組織のあり方全体を見直すことが必要であろう。思いやり、寛大さ、協調性、弱いものや困った人にすすんで手を差し伸べる。こういう社会的な態度を身につけても、成績とみなされず、点数評価の対象にはならない。教室で障害を持つ同級生とつき合うというのは、立派な学習プロセスだと思う。しかし、今は何しろすべてを決定するのは知的成績である。量とスピードに遅れる子は、切り捨てていく。日本の社会構造は健康な青年と壮年が基準になっていて、社会のほとんど



の価値はそれによってできている。社会的有効性や生産が優先され、教育も生産の効率性が優先され非人間化されてきている。それがますます加速されてきている。

「今日、日本に必要なものは、より一層の知的誠実さであろう。自らの夢にリアリズムを加え抜けない商業的、工業利益の追求にもっと人間らしさを加えることだ」（『超大国ニッポン』）

学校教育への期待は「人間の生き方など人格形成についての指導」全体36.7%である。自己評価の高いグループ38.1%、低いグループ38.3%である。大きな違いはない。一方「今の世の中は金や物を重視するので、心の豊かさがおろそかにされている」全体51.2%、自己評価の高いグループ57.6%、低いグループ46.4%である。社会に広がりをもつ批判力を持っているのが自己評価の他下位グループである。

「今の世の中は自分のことばかり考えて他人のことに無関心な人が多い」全体53.2%である。自己評価の高いグループ55.6%である。低いグループは45.7%である。ここでも前問と同じ傾向が見られる。

「自分を本当に理解してくれる人はいないと思う」全体26.9%、自己評価の高いグループ12.8%、低いグループ42.5%。特に低いグループの孤立感が強い。

多くの人間が一緒にいても「心が通っていない」時、自分以外の人間は風景の中の「モノ」にすぎない。そして孤独とは、他人を「モノ」としてしまう精神の反映であると同時に、人間が相互にモノとして存在するシステムの反映である。こうした疎外感「自己評価」の低いグループに強く現れている。閉ざされた世界に自己評価の低いグループはあると言える。

人生は如何に生きるべきか、幸福とは何か。誰もが若い日々、あるいは年を経てからも、繰り返し確認し納得したいと強い思いに駆られるものである。

ある生徒は「最近よく思う。受験勉強で頭が麻痺しているせいもあるか、『自分とは何か?』、『何のために生きているのか?』などと…。答えは全くもって見つからないのです。そこまで深入りしたこともない。考えるまでにはいたらず、ただボーっと頭の中で思う。

この疑問は、有史以来、人類に繰り返し問われてきた問題です。現代人、このような疑問を抱えている人は多いに違いない。最近よくニュースなどで目にする、耳にする『自殺サイト事件』。私が思うに、こういうようなインターネットのサイトを通じて仲間を見つけて自殺をしてしまうという人は、自分を見失っている。

自分は何かという質問に対して悪戦苦闘しながら、答えを導き出すのは簡単なことではない。どれが答えなのかも分からない。

自分が何であるのか、分からず苦しんでいるときに他人から口を出されてしまっただけは、痛い。きっと彼らは、その途中段階という、何とも不安定な時にそうされてしまったのだろう。自分というのが何か分からないにせよ、意識をしっかり持つのが大切だと思う。それ以外、私には何も分からない。」（「高校三年」女子）と。

主体を賭けた問いを共有していない者の間に、コミュニケーションは成立しない。教師と生徒の間の疎外された状況が克服されるためには、どうあるべきか。

「先生が授業中におっしゃっていた『本当の勉強をしなければならない』という言葉を考えてみた。私は今、1ヵ月後に控えたセンター試験、その後の私大入試などに向けて勉強をしている。どの科目も必要であって、無駄なものは一つとしてないと思う。でも、これは本当の勉強ではないようにも思う。本当の勉強をした大人は世の中にどれほどいるのだろう。

今の日本は、一流大学出身のエリートが国内の政治、外交、経済を動かしている。私たち高校生の

多くは受験という波に呑まれ、偏差値という数字だけにとらわれて、何か大事なものを見失っているのではないだろうか。私は、どういう大人になってどんな仕事をし、どんな生き方をしたいかということに出身大学や偏差値は関係がないのではないだろうかと思う。しばらくこのようなことを考えたが、だからといって受験勉強をやめない自分がある。受験勉強を始める前に、上のようなことを考え、自分なりに答えも出したつもりでいた。倫理の授業を受けながら何度かその答えがぐらつき、先生の言葉は耳が痛かった。」(「高校三年」女子)と。

内村鑑三は「私の教育の目的は人を作ることにある。そして人たるは学者たり、智者たり、成功者たることではない。己を知りて他を求むる必要なく、窮乏の内に在るも感謝の生涯を続けるものである。」(『家庭と教育』)と述べている。

## 5. 実存的空虚

「毎日の生活にハリがない」34.8%と悩みの中って二番目に多い。一番多いのは「勉強する気になれない」38.2%である。フランクフルは、人間は快樂への意志、権力への意志だけでなく、「意味への意志」を持つ存在であると述べているが、人生の主要な目標はお金をたくさん稼ぐことや、出世することとは生徒は思っていない。

「今の世の中には自分のことばかり考えて他人のことに無関心な人が多い」53.2%「今の世の中は、金や物を重視するので、心の豊かさがおろそかにされている」51.2%である。何が一番大切か、「人間の生き方など人格形成」36.7%で、「進学指導」18.3%にもそれが見られる。

人生の生き方、人格形成、自己探求に関心を寄せている。しかし、「ハリがない」と圧倒的に多く答えている。フランクフル著『夜と霧』は英訳タイトルでは Man's Search of Meaning である。あの極限状況で、フランクフルは、人間の意味を探求していた。

今日本の豊かな社会の中にあって、一体何が欠如し、何が失われ、高校生がもっているものすべてにはどのような意味があるのか。

大多数の生徒が「毎日の生活にハリがない」と感じている。無意味であるという感覚が、今日ほど若い人たちに蔓延したことはない。内面の空洞からくる空虚感と関係がある。

フランクフルが「強制収容所」で、問いかけていたのは、意味を捜し求めるだけでなく、意味を実現することにあつた。ニーチェが「人間的な、あまりにも人間的な」の中で「生きるべき理由を持っている者だけが、ほとんどあらゆる生きる事態に耐えられるのだという。フランクフルは「私は生きることに疲れ倦んだが、ただ一度だけそのことを克服できたある人間を知っている。即ち彼は生きることに疲れた或る一人の少女に出会い、彼女のその状態を慰めて癒そうとすることに彼の使命を感じた時、…その瞬間に彼の存在は再びもう一度だけ意味を得たのであつた。」「強制収容所で私は、自分は人生からもはや何もかも期待するものがないと訴える二人の人間に遭つたことがある。私はしかし彼らに、人間は本来、人生から何が期待できるかと問うべきではなく、むしろ誰が、或いは何が…ひとりの人間であれ、仕事であれ、…私を待っているかを問うべきだということを理解させようと試みた。」(『神経症Ⅱ』)と述べている。

高校生たちは自分の価値、存在の意味を疑ってみることが、大人になるためにどうしても必要ことである。存在の意味について思い煩うのは、人間の特権である。それは人間としての成就であることを認めなくてはならないし、知的誠実さである。

## 6. 日本の将来は「灰色、黒」

ドストエフスキーは「死の家の記録」の中で「…ところが、たとえば、水を一つの桶から他の桶へと移し、またそれからもとの桶にもどすとか、砂を搗くとか、土の山を一つの場所から他の場所へ移し、またそれも元へ戻すとかいう作業をさせたら、囚人は、おそらく、四、五日もしたら首をくくってしまうか、あるいはたとえ死んでも、こんな屈辱と苦しみから逃れたほうがましだと考えて、やけになって悪事の限りを尽くすかもしれない。」「死の家の記録」の主題の一つは「人間は目的と意味のない生活と労働とは耐えられない。目的と意味を持って限り、どのような環境にも耐えぬく」ことであった。

真の生きがいを見失い、未来への希望をなくし、そして人と社会に対する不信、その隙間を埋めているのが、物質的幸福と多忙、バブル経済の中での大人の姿である。

フランクは「我々は金銭を所有し、権力を所有し、幸福を所有する。ところが我々は人間である。つまりあとに残る物は何かという、それは人間自身、つまり、人間的なものとして人間にそなわってあるところのものだけでした。…強制収容所の中で、いずれの場合においても決定的なのは人間なのだ。という真理を知ったのです。人間とは一体何であるのでしょうか。」(フランク『識られざる神』)と述べている。

真摯に人間とは何だろうか我々は問いたずねただろうか。

「毎日の生活にハリがない。」全体34.8%「自己評価」の高いグループ21.7%である。低いグループは39.4%である。低いグループの空虚感が高いのに注目する必要がある。

生きがいは幸福の一種であるが、生きがいは現在に安住できず未来へ向かう姿勢である。前申したように「ハリのない生活」低いグループ39.4%の悩みは、重要である。

虚無的な学校の状況のなかに高校生はある。学業成績以外「価値のないもの」とみなされ、そのようにして生きる多様な価値は、葬り去られてしまった現代の教育に問題がある。

様々な価値のうち真に人間的なすべての価値、つまりその生産性、効率性を超えて、人間を価値あるものとし、また一般に生徒一人一人の存在をはじめて人間にふさわしいものとするところのものはすべてが、もはや全くかえりみられることがなくなったところに問題がある。フランクは「夜と霧」の中で「彼自身の未来は信ずることのできなかつた人間は収容所で滅亡していった。未来を失うとともに彼はそのよりどころを失い、内的に崩壊し身体的にも心理的にも転落したのであった。」と述べ、未来への希望を失うことは、実はそのまま死んでいくことにつながり、あるいは発狂するような極限状況の中で生を支えたものは、未来への希望を持つことであった。

## 7. 何故生きるかを知っている者はほとんどあらゆる如何に生きるかに耐える

「人間は、自分の求めることを目標に立て、苦しいことをすることによって達成感、満足感そして求めるものの大切を感じるのである。」(「高校一年」男子)

「一生懸命な人は輝いて見える。学校行事の準備をクラスの皆でしていたときのことである。皆一生懸命準備をしている中、数名だけはやる気がなく、結局帰ってしまった。私はそれを見たとき、その数名が本当に格好悪く見えた。普段どんなに格好よく見える人でも、協力して頑張らなくてはならないときに、やる気がなくダラダラした態度をとって、周りに迷惑をかける人は、人間として格好悪いと感じた。」(「高校一年」女子)

人間は常に共同体のために決断し、人間の自由と人間の共同体との間には、一つの基礎的な関係が

成立している。エゴイズムに覆われたこの時代における希望の兆候は、精神性への憧れであり、仲間との助け合いである。

「人生は苦勞の連続だ。さらにその果てには死という最大の恐怖が待っている。僕は『いっそ生まれてこなければ良かった』と思ったことがある。しかし、生まれてしまったからには、苦勞や死の恐怖だけでなく、(人生に苦勞や死の恐怖は切り捨てられない)人生の中にある楽しみや幸福を手に入れる努力をしてもいいと思う」(「高校一年」男子)

「俺の理想とする生き方は、目標を決める事は決めるが、あれこれ宣言するのではなく、途中でほうりだしたりせずに、貫き通す事である。一つの道を通すというは大変に困難である。しかし、それに向かって努力する人間が格好よいと思う。たとえどんなにくだらないことでも、それに向かって努力することは素晴らしいと思う。」(「高校一年」男子)

「挫折があってこそ人生である。旧約聖書のヤコブと神との戦い、神のヤコブへの祝福の話である。人は自分の夢の実現が完全に不可能だと悟った時、大半の人間は落胆する。自分の人生を決め込んでいたからだ。ここで二通りに別れる。臆病な者はまた挫折を恐れ人生に戦うことをやめ、心に輝きをなくしていく。勇敢な者は自分の、挫折へと導いたもの(運命など)に戦いを挑んでいく。神と戦ったヤコブのように。そして彼らは、自分が忘れていた手の内にあるものの価値を思い出し(なぜならその価値を忘れていたものを失うことによって落胆するのだから)、それを生かし新しい人生を造り始める。流れに従っていた前の人生と全く違い、自らが求めて生きることによって自分の可能性や心の輝きに気づき、自分の命の価値を知る。これは、私の独断的思想ではあるが、私はこうした結論。『挫折とは、心の解放である』と。」(「高校一年生の作文」男子)

必死に生徒は自分探しに、真摯に挑戦している。一人の人間がこの世においてなしうることは、そんなに多くはないが、しかし、自分のことしか考えられない一生は、あまりに情けない。他の誰かのために本当に意味あるものを何かしたいと想うとき、人生を生きる意味が輝いてくる。フランクは「人生があなたを待っている」と語った。

ニーチェは述べている。「何故生きるかを知っている者はほとんどあらゆる如何に生きるかに耐えるのだ。」と。未来に向かって開かれた時間を持ち、生きる努力を要する時間、生きるのに苦しい時間の方がかえって生存充実感を強めることができる。生の流れはなめらかであるより、抵抗感がある方が、充実感がある。

「例外が生きていない社会は、不健康である。」と言えよう。管理社会の圧政は、徹頭徹尾、生徒を偏差値で輪切りにし、例外の排除を基礎にして「学校」を成り立たせている異常さに私たちが慣れてしまっている。例外の排除は、生活の中から未知なる事態との遭遇の機会を奪い、物事とそれぞれが私達に与える個別的抵抗の現われを一掃し、想像力を貧しいものにしてしまう。

他者への豊かな想像力、思いやりを喪失した「日本の将来は『灰色』『黒色』」である。全体54.5%、「自己評価」の高いグループ47.9%であるのに対して低いグループ64.3%である。

自己の能力を能動的に発揮し、他者とともに生きることの喜びを確信できる『学校』を求めてゆきたい。展望ははるかに、実行は足もとから。

# 哲学的思考力育成のために

お茶の水女子大学附属高校 村野光則

## 1. はじめに

2003年のPISA（OECD生徒の学習到達度調査）ショック以来、日本の教育界では主に小・中学校の国語科を中心に論理的思考力の育成が図られている。また、国際化するビジネス界においても、論理的思考力・表現力の習得が喫緊の課題ととらえられており、近年、論理的思考力に関する書籍が多数発行されている。

一方、ソクラテス以来、弁論術や哲学の豊かな伝統がある欧米では、論理的思考力に対する取り組みは学校教育にしっかりと根づいている。例えばフランスでは、バカロレアにおいて哲学が必修となっており、筆記試験の時間も4時間と長く配点係数も最も高い<sup>(注1)</sup>。さらにフランスでは、映画『小さな哲学者たち』<sup>(注2)</sup>で描かれたように、幼稚園の3、4歳児に対する哲学教育も試みられている。アメリカでは、1960年代末から1970年代にかけて、コロンビア大学教授マシュー・リップマンによって「子どものための哲学」が提唱され、哲学対話教育プログラムが開発された。現在、「子どものための哲学」はアメリカ国内だけでなく、ヨーロッパ、中南米、オセアニア、アジア、中東の学校でも広く取り入れられている。

一方、日本では高校現場における論理的思考力育成の取り組みはほとんどなされておらず、ようやく新学習指導要領に盛り込まれたばかりである<sup>(注3)</sup>。学習指導要領では論理的思考力という言葉が使われているが、ビジネスの世界ではクリティカルシンキングという言葉がよく使われる。それらに対し、哲学的思考力という言葉は提示しつつ、グローバル化する社会において高校生が自ら思索を深め、現代の倫理的諸課題に取り組んでいくために必要な能力について考えてみたい。

## 2. 哲学教育の必要性和哲学的思考力

### (1) ユネスコの哲学教育の取り組み

ユネスコは1995年に「哲学を支持するパリ宣言（The Paris Declaration for Philosophy）」を出している。そこには、哲学教育とは、「それぞれの個人が独力で考えることを学ばせる」ことであり、哲学を学ぶことが「公平さ、至民の責任、個人や集団の間の理解や寛容を促進する」と記されている。そして、「教育や文化的な生活において哲学的討論を発展させることが、いかなる民主主義においても基礎となる判断の能力を鍛えることによって、市民の訓練に大きな寄与をなす」として哲学教育の重要性を強調している。<sup>(注4)</sup>

この宣言を基盤として、ユネスコでは「哲学についての間域戦略（UNESCO Intersectoral Strategy on Philosophy 2006）」を策定している。その中で哲学を、「正義、尊厳、自由といった鍵概念を分析し理解するための知的ツールを発展させる。哲学は、そのスキルを、自立して思考し判断する能力を開発することにより、また世界と世界が直面する課題を理解すると同時に探究する、批判的思考のスキルを向上させることにより、さらに価値観と根本原則に対する反省能力を涵養することにより発展させる」と位置づけている。そして、哲学は平和と文化のための基礎としての「自由の学校である」と規定している。<sup>(注5)</sup>

また、ユネスコのアジア・太平洋地域のリージョナルアドバイザーであるダリル・メイサー (Darril Macer) は、「哲学教育の目標 (Goals of Education of Philosophy)」というユネスコの文書<sup>(注6)</sup>の中で、知性と知恵の探求のために次のことを奨励している。すなわち、(1) 学際的知識の開発 (2) 概念の明確化 (3) 理性的議論において知識、原理、議論法を統合する能力の向上 (4) 問うことの力の理解 (5) 知性の地平の拡張 (6) 異他的共同体における文化的価値観についての知識 (7) 意味の探求 (8) 生活向上の実践、である。そしてそのために育成すべき能力として、(1) 質の高い思考と反省的プロセス (2) 賢明な判断力と意思決定スキル (3) 適切な問いを定式化する能力 (4) 創造的思考 (5) 洞察力 (6) 合理的選択 (7) 知識の解釈、構成、コミュニケーション (8) 根拠と明証性の尊重 (9) 現実のより適切な理解、を挙げている。さらにこうした能力を育成するための習慣形成として、(1) 知識とスキルの善用 (2) あらゆる形態の生命の漸進的尊重 (3) 連帯の精神のもとにおける他者の利益と環境への配慮 (4) 感情移入と共感 (5) 寛容、包摂、思慮分別の実践、を挙げている。そして、「自由の学校」であることが哲学教育の究極的な目標であると述べている。

## (2) マシュー・リップマンの「子どものための哲学」の取り組み

子どものための哲学 (Philosophy for Children) は、1960年代末から1970年代にかけて、アメリカの哲学者マシュー・リップマン (Matthew Lipman 1922-2010) が開発した子ども向けの哲学対話教育プログラムである。このプログラムの理論的背景にあるのは、J・デューイの教育思想と批判的思考 (critical thinking) とヴィゴツキーらの共同学習理論であるといわれている。このプログラムはスローガンとして「探求の共同体 (the Community of Inquiry)」を掲げている。その具体的な学習の目標は、論理的・批判的思考力 (Critical)、創造的思考力 (Creative)、状況に即して考え、経験に意味を見いだすこと (Contextual, Committed)、自他をケアする (Caring)、協働する (Collaboration)、公共的対話の訓練、市民教育 (Citizenship) であり、これら頭文字と合わせて子どものための哲学はP4Cと呼ばれている。一般の哲学教育では「読むこと」「書くこと」が多いのに対し、P4Cの教育では、むしろ「話すこと」が重視され、言葉を介した思考の共有、他者への配慮など、「協働的思考」を目指したプログラムと教材が使われている<sup>(注7)</sup>。ここで掲げられている能力、すなわち、論理的・批判的思考力、創造的思考力や協働的思考力は総称して哲学的思考力とよばれている。

## 3. 論理的思考力から哲学的思考力へ

高等学校の新学習指導要領には、ようやく論理的思考力・表現力の文言が盛り込まれたものの、論理的思考力は万能ではなく、この能力さえ身につければあらゆる倫理的課題に対応できるというわけではない。論理的思考 (ロジカルシンキング) は、明確な根拠に基づいて筋道立てて思考していくものである。また、相手の主張を合理的に理解することでもある。しかし、そこではその根底にある自己の価値観が問われることはない。重要なことは考え方の筋道が論理的であるかどうかということである。そのため、論理的思考によって導き出された結論が必ずしも倫理的正しいとは限らない。極端な場合、論理的に思考した結果、殺人が正当化されてしまうこともありうるのである。

このため近年では、論理的思考力よりも、自己の思考の道筋を批判的に検証する批判的思考力 (クリティカルシンキング) が重視されるようになってきている<sup>(注8)</sup>。クリティカルシンキングは、批判的思考 (力) と訳されるが、日本語からイメージされるような他者の主張を批判的に分析するのではなく、

自分自身の思考を批判的に分析するものである。楠見孝は批判的思考を次のように定義している。「批判的思考 (Caring)、協働する (Collaborationcritical thinking) は合理的 (理性的、論理的) 思考であり、人の話を聞いたり、文章を読んだりするときに働き、さらに、議論をしたり、自分の考えを述べるときにもはたらく。これは日常語である『相手を批判する』思考ではない。むしろ、自分の推論過程を意識的に吟味する反省的 (reflective) な思考であり、何を信じ、主張し、行動するか決定に焦点を当てる思考である。」(注9)

こうした論理的・批判的思考力は、より合理的で適切な1つの正答を導くタイプの思考である。それに対して、今までとはまったく違った多くの新しい解決案を生み出す思考を創造的思考という。メイヤーによれば、狭い意味での創造的思考は、ある問題に1つ以上の斬新な解を見つけ出す認知的活動であり、批判的思考は、ただ1つの適切な解や仮説を導き出す思考であるが、広い意味では批判的思考は創造的思考を構成する要素でもあるとしている(注10)。現代におけるさまざまな倫理的課題に取り組んでいく上では、論理的・批判的思考力だけでなく、創造的思考力も必要となってくるのである。

さらに、現代の倫理的課題に取り組む上では、P4Cが目ざすような他者とともに対話を通じて思考する協働的思考力も必要である。グローバル化する社会においては、文化や宗教の異なるさまざまな人と対話をしながら問題を解決していかなければならない。その際には、競争的でも無批判な共感に基づく共同でもなく、お互いの主張を批判的かつ建設的に検討しながら、協働して問題解決にあたっていく能力が必要なのである。そして、この協働的思考には、論理的・批判的思考力や創造的思考力も含まれる。

以上の思考力は、すべてユネスコの哲学教育や子どものための哲学が目ざしているものである。

日本の学校教育においてもこうした哲学的思考力を育成する体制が早急に整備される必要があると思われる。

#### 4. おわりに

PISAの結果、日本の高校1年生は選択肢や短答式の問題は得意でも、自分の意見を論理的に述べる能力が他の地域の高校1年生に比べて低いことが明らかになった。このため、論理的思考力の育成が小・中学校において取り組まれているが、ユネスコの文書でも明らかのように、これからの国際社会に必要な能力は、哲学的思考力なのである。論理的思考力は国語や数学などの教科においても育成は可能であるが、批判的思考力や創造的思考力、協働的思考力は倫理という科目においてこそ育成できる能力である。倫理という科目の中でいかにして哲学的思考力を身につけさせていくか、そのカリキュラムと教材の開発が倫理の教員には求められているのである。

#### 【注】

1. バカロレアとは、フランスにおける大学入学資格を得るために統一国家試験である。フランスではバカロレアを取得することによって、原則としてどの大学（約80校の大学）にも入学することかできる。バカロレアは「一般バカロレア」「専門バカロレア」「工業バカロレア」に分かれており、一般バカロレアは文系、理系、経済・社会系に分かれている。哲学の筆記試験は最初に受験する科目である。問題は3題あり、そのうち1題を選択して論述する。2011年度の問題は、「科学的な仮説を証明することはできるのか」「人間は自らの幻想を抱いてしまう定めなのか」「ニーチェ『喜ばしき知』抜粋の注釈」であった。
2. 原題「JUST A BEGINNING」,2010年フランス, 配給ファントム・フィルム, 監督ジャン=ピエール・ポッジ, ピエール・バルシェ, 102分
3. 「第2倫理 2目標 (3) -イ 現代の諸課題と倫理 生命, 環境, 家族, 地域社会, 情報社会, 文化と宗教, 国際平和と人類の福祉などにおける倫理的課題を自己の課題とつなげて探究する活動を通して, 論理的思考力や表現力を身に付けさせるとともに, 現代に生きる人間としての在り方生き方について自覚を深めさせる。」『高等学校学習指導要領』(平成21年3月告示, 文部科学省, pp.49-50, 下線部筆者)
4. 「哲学教育に関するユネスコの宣言」(「国内外における『子どものための哲学』の教室から配布資料」土屋陽介, 2011.6.4 第2回信州大学哲学懇話会大会ワークショップ「子どもは哲学するか」より)
5. <http://unesdoc.unesco.org/images/0014/001452/145270e.pdf>
6. <http://philosophy-japan.org/download/658/file.pdf>
7. 大阪大学大学院・臨床哲学の研究チームのウェブサイト  
([http://web.mac.com/tricot\\_iWeb/pc/2FE5CC31-C595-44F4-94AB-A52BC561D54F.html](http://web.mac.com/tricot_iWeb/pc/2FE5CC31-C595-44F4-94AB-A52BC561D54F.html)) より
8. 日本に紹介されているクリティカルシンキングは、認知心理学に基づいたものとビジネスマンのための2種類に分けられる。認知心理学に基づいたクリティカルシンキングは、自己の思考を省察することが中心となるが、ビジネスマン用のクリティカルシンキングは、仕事の生産性を上げるための思考法である。
9. 楠見孝「機能的推論と批判的思考」(市川伸一編『認知心理学4 思考』東京大学出版会, 1996)pp.50-51
10. Meyer,R.E. 1992 *Thinking, problem solving, cognition*, 2nd ed. W.H.Freeman. p.363

#### 【参考文献】

- 市川伸一編『認知心理学4 思考』東京大学出版会,1996
- アレク・フィッシャー『クリティカル・シンキング入門』ナカニシヤ出版, 2005
- 松丘啓司『論理思考は万能ではない』ファーストプレス, 2010
- グロービス・マネジメント・インスティテュート『新版MBAクリティカル・シンキング』ダイヤモンド社, 2005
- 浅野楯英『論証のレトリック』講談社現代新書, 1996
- 後 正武『わかる、使える「論理思考」の本』PHP研究所, 2010



# 宗教教育について

渡辺 勉

社会学者橋爪大三郎東京工業大学教授の伝えるエピソードが興味を引く。友人のところへ、ある深夜ロンドンの「地球環境の国際会議」に出ていた役人から本省へ電話で、「stewardship」という語について問い合わせがあり、そこでわからず、教授に質問の電話があったのだそうだ。「stewardship」は「管理責任」と訳されるが、神が世界を創造したあと、その管理を人間に任せたという聖書の記事が背景になっている。要するに、人間が自由に自然を・改造していい（だから責任もある）という考えで、ここから品種改良や捕鯨禁止や生物の多様性保護といった考え方が出てくる。日本の一流官庁や国際交渉の担当者が、欧米社会の行動の根底にある哲学・宗教について、基本的なことを知らない。日本人は、人間も自然の一部と考えるので、「stewardship」の考え方はなじまない、文案から外してくれ、と交渉することも考えつかなかったと（橋爪大三郎・98東工大文系「宗教社会学」授業のレジュメより）。

「宗教教育」として（1）宗派的教育、（2）宗教（一般）知識教育、（3）宗教的情操教育の三つが挙げられるとすれば、このエピソードは、（2）の知識教育の必要性を示していよう。（1）の宗派的教教育は、「日本国憲法」第20条第2項「国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない」と、「教育基本法」第15条第2項「国及び公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育その他の宗教的活動をしてはならない。」との規定から、公立の学校教育においてはあり得ない。しかしことはそうかんたんではないだろう。現実の教育実践の場でこの三つの領域が截然と分けられるかどうかは、教育担当者の心構えのみではすまない局面もあるだろう。

シェフラー (I.Scheffler) の「三つの図式」を基に、実践としての宗教教育の可能性を追求した小山一乗氏の論文『国際理解の基礎としての「宗教の教育」の「教授」概念検討』（『仏教経済研究・第17号』昭和63/4所収）が、問題の根本を洞察しているので、依然として有効な考察となっている。

「三つの図式」とは、動詞「教える (teach)」と「告げる (tell)」を対比させ、それを三つに範例化したものである。A：XはYに～だということを告げる。B：XはYに～だということを教える。C：XはYに～するように告げる。D：XはYに～するように教える。E：XはYに～の仕方を告げる。F：XはYに～の仕方を教える。この六つである。「告げる」とは、そもそもは学習することを意図しない行為であり、「教える」とは結果・効果はともかく、学習することを意図した行為である。Bの「XはYに～」のところ、「事後的言明文」が入る場合は、「行動規範・行動パターンの獲得を学習の不可欠要素とする行動的解釈」は不可能で、この教授（教育）にはあいまいさがない。「stewardship」について教えればよいわけである。ところがここに、たとえば、「聖なる超越的存在は畏れ敬うべき」などとの「規範的言明文」が入ると、「聖なる超越的存在は畏れ敬うべき」と志向した行動パターンの獲得を期待しているかのような、つまりDの範例のような行動的解釈も可能となり、あいまいさが残る。

「教育基本法」第15条第1項「宗教における寛容の態度、宗教に関する一般的な教養及び宗教の社会生活における地位は、教育上尊重されなければならない。」との理念を具現すべき「教授概念」が、宗教（一般）知識教育および宗派的教育とどう異なるのかは、解決済みの問題ではないのである。小

山一乗氏がこの論文でかつて述べているように、『従って、教授者 X は、学習者 Y に対して、その「教授」が、「事實的言明文」でか、「規範的言明文」でかの明示徹底、「行動的解釈」でか「非－行動的解釈」でかの周知徹底が、必要不可欠条件となる』。

さて「教授」概念をめぐる原理的考察の迷路から出て、仮説あるいは推論も含めて「事實的言明」にあたる事柄に関して、不覚にも現場を離れてから学んだことをメモ代わりに書いておきたい。もとより現場で倫理教育の任にあっている方々には、ほとんど自明のことではあろう。

○カントの「目的」について－「きみ自身の人格における、またほかのすべての人格における人間性を、常に同時に目的として使い、けっして単に手段として使わないようにせよ」という定言命法の第2式は、カントの「人間は創造の究極目的である」との、広い意味でのキリスト教的人間観を前提としなければ「到底理解できないもの」だということに、鈍感であってはならないだろう。さらに、この場合の「単に手段として使わない」とは、非適法的行為にむけて使わないという意味であることにも注意したい。(中島義道『悪について』岩波新書)

○シュヴァイツァーについて－若きころザイル国立大学キンシャシャ校客員教授であった聖書学者の田川建三氏は アルバート・シュヴァイツァーのつくった病院では、アメリカやスイスの製薬会社提供の開発中の新薬の人体実験も行っていたらしいとのことで、「あの時代に彼なりに懸命にやったこともあって、それは評価されていい」が、現地の学生にとっては、名前を言ったとたんに「帝国主義者(アンペリアリスト)！」との合唱が起こった、というシュヴァイツァーの一面は知っておくべきだろう、と述べている。(季刊誌『考える人』新潮社2010年春号)

○「stewardship」と現代キリスト教思想－齋藤かおる氏によれば、現代キリスト教思想において注目されるサリー・マクフェイグ(McFague)は、従来のキリスト教の自然的存在者へのかかわり方を「主体－客体モデル」だと断じ、「主体としての神と隣人に向けられるキリスト者の愛は自然的存在者へと拡張されねばならないと述べている」そうである。少なくとも「委託管理者精神(stewardship)」を主張する方向性は、マクフェイグにはない。ただし、人間以外の自然的存在者の法的権利の確立や公的強制的保護を主張する方向性も、マクフェイグにはない。そしてそれは、マクフェイグが自然的存在者の権利の拡張を強力に求める環境保護運動・環境倫理学の主要な流れの延長線上に位置しており、しかもその主要な流れとは一戦を画していることを示している。(小松美彦・土井健司編『宗教と生命倫理』ナカニシヤ出版)

○明治におけるキリスト教の受容と陽明学－小島毅氏によれば、陽明学者は陽明学を師匠から伝授される必要がない、と。中国でも日本でも、高名な陽明学者は朱子学の学習によって陽明学者になる。教祖・王守仁(陽明)にしてからがそうである。彼は熱心に朱子学を学び、その精神を実践しようとし、挫折し、悩み、そして悟った。「理を心の外に探し求める朱子学のやり方は根本的に間違っている。理とはわが心のはたらきにほかならないのだ」と。

小島毅氏の「陽明学的心性」は、マックス・ウェーバー風には「結果倫理」ではなく「心情倫理」にあたるものであろう。明治になって、この「陽明学的心性」は、キリスト教(プロテスタンティズム)やカント哲学そして社会主義思想の受容まで基層で支えていたのではないかと分析している。(小島毅『近代日本の陽明学』講談社新書メチエ)

○カトリックの「謎の地点」－スラヴォイ・ジジエクは、文化には「謎の地点」が重要であって、カトリック教会が賢かったのは、『聖書』が近年までラテン語で書かれたままであったことだとし、次の

ように述べているのは考えさせる。

……外国の人類学者がカトリック教を研究するうえで「それでは聖書を分析しよう」と言ったとします。完全に的外れですね。カトリック教徒であるためには、ラテン語として、理解不能なものとして扱わなければならないのです。現地の文化を理解しようと試みる人類学者は、肝心な点を見落としています。その文化が自らをわかっていない様子を把握しなければいけません。ただ単にミステリーを構成しているという側面が重要なのですから。ラテン語のミサを噛み砕くのではなく、一般のカトリック教徒がミサを理解していない具体的な形を見定めること、こちらのほうがよほど困難なのです。(スラヴォイ・ジジェク『人権と国家—世界の本質をめぐる考察』集英社新書)

○日本の多神教—久保田展弘氏によれば、日本においては、特定の神に対して祈りを捧げるというよりは、神が鎮もっているらしい、その地の気配や雰囲気におき、いまの生の現実の延長線上に願いの成就を願ってきたのだという。「一神教を一神教として支えている根本規範というべきものは、日本人が伝統的にもってきた神の認識、日本人の宗教観の根底にはない」から、「緊張感とは別の信仰の甘さが当然生まれる」反面、古来の神道や山岳信仰、アニミズムなどの土台に外来の仏教および道教が融合して「神仏習合」や「修験道」などの宗教文化を定着させたのである。現代世界の血で血を洗う宗教対立の現実を思うにつけ、わが先人の知恵に感動させられる。人間まで神として祀られてしまうが、これは、死霊や未知の靈魂への恐れに促されて、靈魂信仰と神信仰が融合したものである。(久保田展弘『日本多神教の風土』PHP新書)

○大乘仏教の成立—保坂俊司氏は、インドにおける大乘仏教の興隆をクシャーン朝(1～3世紀)の下でガンダーラ文明と呼ぶべき文明の融合が成立し、それを背景に捉えるべきであると提言している。これまでの日本の(大乘)仏教研究は、あまりにも「インド純潔主義」に傾いていたのかもしれない。「大乘仏教の発展は、非インド系信者とその思想に負うところが大きかった、としても不自然ではない。つまり、外来の民族がインドに定着するときの社会的な要請において、仏教、特に大乘仏教に特有な普遍性を彼らが求めた」という面もあったということである。

クシャーン朝下において、他民族・他宗教の融合が実現したことと、大乘仏教の「空」思想の成立とは関連があるのではないかと仮説も面白い。打ち破るべき「自我への執着」の「自我」を、「広く集団や社会において共有される主義主張、あるいは宗教と考えれば、宗教的な原理であった空の思想は、多種多様な思想の融合原理として有効であることがわかる」。(保坂俊司『国家と宗教』光文社新書)

○仏教における死者との対話—末木文美士(ふみひこ)氏によれば、たとえば、極楽浄土が西方十億億度(十億億)にあり、死んだらそこに行くとか、死んだら神に召されて、天国で永遠の幸福を享受するとかいう死後観を、そのまま単純に信ずることができれば、それが悪いというわけではない。しかし、たとえばそのように信じる人でも、親しい人の死は、やはり無限の不在感として圧倒されるのであり、それは理屈ではない。理屈から出発するより前に、避けようのない感覚的事実から出発すべきだというのである。死者との関わりは、どうしても生者との関わりと違っている。生者と同じようなコミュニケーションは成り立たない。「人の間」のコミュニケーションの不可能なところで死者と関わるのであり、それは理屈でもないし、特定の信仰の立場でもない事実である。なぜ仏教なのか? 末木文美士氏は『法華経』を取り上げている。第二類「見宝塔品(けんほうとうほん)」において、釈尊は、はるかな過去(東方無量千万億阿僧祇)に亡くなっている多宝如来の宝塔に多宝如来と並んで坐り(二宝並座)、

死者と一体となることによって力を得た、という話がある。つまり仏教思想において死者を受け入れるという「超・倫理」が成立しているのである。古代日本の宗教の特徴をアニミズムとして捉えることは判断留保すべきで、「山川草木すべてが神（仏）であるというような見方は、むしろ仏教が入ってきてから、草木成仏説や密教理論などのもとに成立したものではないか」と考えられるとのことである。また柳田国男のいう先祖崇拜も、実は「葬式仏教によって形成されたところが大きい」ということにも注意すべきであろう。（末木文美士『仏教 vs. 倫理』ちくま新書）

以上非系統的ではあるが、いくつかの問題の所在についてあるところまで明示できたかと思われる。山崎正和氏は、「同性愛や妊娠中絶など、倫理が変わりながら、決着のついていない問題もある。医学の倫理にしても、人工生殖から臓器移植の問題まで、誰もが簡単には解答の出せない難問が山積しています。そう考えてみれば、学校で普通である教員が、内面に根ざした道徳をどうして教えることができるでしょうか（『文明としての教育』新潮新書）」と、道徳の「教授」については懐疑的である。その一領域としての宗教教育は、「規範的言明文」を含む上に「行動的解釈」の「教授」をも求められるとすれば、さらに困難を伴うであろう。サンデル風の対話形式をとろうと、そのむずかしさは変わらない。しかし考えなければならぬ倫理的課題があることを提示し、多くの場合それらと宗教あるいは宗教的なるものが関連をもつと知らしめることことじたいに、教育上の意義があると認めたい。

# 必修「倫理」のための覚え書き

東京都立立川高等学校 菅野 功治

あと何年あと何回、高校生に「倫理」の授業を行うことができるのだろうか？ そんな思いで日々を過ごしているつもりだが、改めて自分の授業を振り返ってみると、いくつかの点で思想の理解が足りないため、授業内容の深みに欠けていることに気付く。歩みは遅々として進まないが、今後の自分の仕事の指針としてメモしておきたい。

## 1. 経験論の系譜：英米系哲学

維新政府はプロイセン国家をお手本として国造りをすすめ、日本の哲学はカントやヘーゲルのドイツ哲学を輸入することで成立してきた。その思潮に抵抗した若者達も、マルクスやニーチェ・ハイデッガーを学んできたのだろう。「倫理」の教科書も、依然その屋台骨をドイツ哲学に頼っているように感じられる。逆に、極めて冷遇されているのが功利主義や分析哲学などに代表される英米系の哲学である。本稿では、これを「経験論の系譜」と呼び、そのテーマの授業を行う際のポイントをまとめていくことにする。現在の勤務校では、3年ほど前より、理系の学部に進学を希望する生徒が過半数を超えるようになってきている。理系の生徒が「倫理」の授業を納得し楽しみながら受けることができるようになるためにも重要なテーマであると考えられる。

### ① 経験論の「経験」という言葉の定義について

経験論を意味する empiricism は、「試みる、企てる、努力する」を意味するギリシア語の形容詞「エンペイロス」と、「～において、～の中に」を意味する「エム」に由来する。よって、「経験」という言葉を「努力し試みることの中において」という意味で理解していきたい。これは、日本語の「経験を積む」という言い方とほぼ同じ意味である。ところが、「経験」を「感覚」や「知覚」を通じた経験という意味に定義づけをしてしまっている場合が多い。これは、カントの用法であり、誤りである。<sup>1</sup>

### ② ロック『人間知性論』における生得観念批判

ロック哲学は、無時制的に成り立つ純粋悟性という要素を置き、経験に先立つア・プリオリな位相によって認識をとらえようとするカント哲学の対極に立つ、経験論哲学の代表である。カントの認識論の中に、年齢差による認識の相違といった観点を見出すことは困難であるが、ロックはしばしば年齢差や文化差に言及している。あかちゃんは、同一律や矛盾律をまったく認知していないのである（タブラ・ラサ）。<sup>2</sup>

### ③ ヒュームの懐疑論

同一物の存在に対する信念：いったんコップを見て、目を閉じて、また目を開くと同じコップがある。見ていなかったあいだにも、このコップが存在しつづけていたということは証明できない。コッ

1 一ノ瀬正樹2011『功利主義と分析哲学』（日本放送出版協会） p18-19

2 一ノ瀬、前掲書 p33、36

ブが意識に与えられたのは「さっき」と「いま」で、その間も存在し続けていたというのは、二つの表象が「似て」いるということ（「類似」）から「推定」されたもので、一つの信念にすぎないのである。

習慣的信念としての因果性・必然性：Aが原因となり、結果としてBが起こるとというのが因果性であるが、そこには「必然性」の観念が伴っている。しかし、この「必然性」の観念は習慣的な信念にすぎず、二つのことがいつも相並んで生じる（「接近」と「先行」）いうことを何度も経験しているうちに「必ずそうなる」と思いこむだけなのである。<sup>3</sup>

#### ④ 功利主義（ベンサム・ミル）と義務論

現代の二大倫理学説と言える功利主義と義務論の対立を、具対例を示しながら生徒に提示していきたい。功利主義の最大の利点は、義務の衝突やモラル・ディレンマを「幸福計算」することによって、相応の解決策を探ることが出来るという点にある。つまり、功利主義は経験論の本質を体現している思想であるということが出来る。他方、功利主義は個人個人に対して冷淡になりがちであるという短所を持つ。なぜならば、幸福計算は社会全体の幸福度をあげるためになされるからである。<sup>4</sup>日本における功利主義の受容は、ミルの精神的快楽を重視する側面<sup>5</sup>を強調するなど、カント的視点からの勝手読みになってしまっていたように思える。ミルは主著『功利主義論』においてカントの倫理学説を功利主義に対立する理論ととらえ議論を展開しており、以上のような道徳的偏向の解毒剤となる。イエスの黄金律は、抽象的な社会全体に対して適用されるわけではなく、私的なごく少数の人々の幸福や利益を考える際に適用されれば充分なのである。<sup>6</sup>

#### ⑤ パースの仮説形成 (abduction)

既に、帰納法 (induction) と演繹法 (deduction) を学習した上で、新しい科学探究法としての仮説形成 (abduction) を紹介する。abduction の例として、「a) どこから来たものかわからないが、机の上に一固まりの白い豆がある。b) その近くにおいてある袋の中には、白い豆だけが入っている。c) 机の上の豆は、その袋からこぼれ落ちたものであろう。」を挙げる。仮説は信念にすぎず、常に間違えるかもしれないという危険性にさらされており、探求者間で疑念が示されない場合のみ、当面の真理ということになる (可謬主義)。<sup>7</sup>

#### ⑥ ポパーの仮説演繹法

帰納法と演繹法の短所を補いながら、長所を生かす方法としての仮説演繹法を紹介する。それは、現在経験科学の領域で行われる有力な方法の一つであり、次のような手順によって進められる。a) 観察に基づいた問題の発見 → b) 問題を解決する仮説の提起 (abduction) → c) 仮説からのテスト命題 (予測) の演繹 (deduction) → d) テスト命題の実験的検証 (induction) → e) テストの結果に基づく仮説の受容、修正または放棄。最終的な結論はその結論に対する反証に開かれている (反証可能性)。<sup>8</sup>

3 ヒューム 2010『人性論』(中公クラシックス) 及び、一ノ瀬 前掲書 p79-82を参照せよ。

4 一ノ瀬 前掲書 p104

5 この点は、後にムーアによって、「自然主義的誤謬」として糾弾されていくことになる。何を「望ましい」価値であるかはそもそも定義できないはずなのに、各人の主観的な感情に訴えることで、事実として多くの人々から「望まれる」のは精神的快楽であると定義してしまったというものである。(一ノ瀬 前掲書 p124)

6 J.S.ミル1967『功利主義論』『世界の名著38 ベンサム J.S.ミル』(中央公論社) p478-480

7 魚津郁夫 2006『プラグマティズムの思想』(ちくま学芸文庫)

及び 伊藤邦武 1985『パースのプラグマティズム』(勁草書房) p190-213 を参照せよ。

8 ポパー 1980『推論と反駁』法政大学出版会を参照せよ。

## ⑦ ウィトゲンシュタイン（ラッセル）の真理（値）表

われわれの経験的な思考も論理に依存せずにはいられない、経験的思考の限界という位置付けで真理（値）表に触れておきたい。

| p | q | $p \wedge q$ | $p \vee q$ | $p \supset q$ |
|---|---|--------------|------------|---------------|
| ○ | ○ | ○            | ○          | ○             |
| × | ○ | ×            | ○          | ○             |
| ○ | × | ×            | ○          | ×             |
| × | × | ×            | ×          | ○             |

理解が困難なのが、 $p$ ならば $q$  ( $p \supset q$ あるいは $p \rightarrow q$ と表す) という条件命題である。この命題で大切なポイントは、仮定 $p$ が偽ならば、結論 $q$ の真偽に関わらず、 $p \supset q$ が真になるところである。これは、「もし君が試験に合格すれば、私は君にごちそうする」という条件文の例で説明する。この文は、試験に合格したのにごちそうしないときに嘘をついたことになり偽となるが、試験に合格しなかったときにはごちそうしたとしてもしなかったとしても嘘をついたことにはならないので、真となるのである。<sup>9</sup>

※ なお、英米倫理思想を従来にはない直観主義という視点からまとめた、児玉清2011『功利と直観』（勁草書房）が、生命倫理学などの論争も紹介しているため有意義であると思われたが、今回は検討する余裕がなかった。

## 2. 西洋形而上学：プラトニズム

ニーチェや、そしてフーコー・ドゥルーズなどのポストモダン系の現代哲学書をかじってみると、西洋思想におけるプラトニズムの占める位置の大きさに気づく。そして、現代哲学の大きな課題はプラトニズムとの訣別にあることに思い至る。ところが、「諸行無常」の国に生きる私のウェットな身体感覚と勉強不足が相俟ってしまい、プラトニズムを解体する以前に、朝日に輝くその美しきアールを生徒の前に提示することができていないことを痛感せざるをえない。解体する以前に、既に崩れているのである。これではいけない。雲一つなくシーンと乾いた冬の東京の朝。バッハが流れる喫茶店でコーヒーを頂きながら、森有正<sup>10</sup>を読もう。

### ① プラトン哲学

何しろ、勉強が足りない。斎藤忍髓の入門書<sup>11</sup>から入り、想起説やアイデア論が登場する『パイドン』へと進みたい。フーコーのプラトニズム批判<sup>12</sup>が念頭にあるので、『アルキピアデス』へと進む。ストア派<sup>13</sup>とキュニコス派<sup>14</sup>も読んでみたい。

9 一ノ瀬 前掲書 p150

10 森有正 1999『森有正エッセー集成Ⅰ』ちくま学芸文庫

11 斎藤忍髓 1981『プラトン』講談社学術文庫

12 フーコー 2004『主体の解釈学』（筑摩書房）及び2010『自己と他者の統治』（筑摩書房）

13 マルクス・アウレーリウス 2007『自省録』（岩波文庫）が神谷美恵子訳であることを最近知り、驚きがく然とした。

14 研究書も少ないようだ。山川偉也 2008『哲学者ディオゲネス』（講談社学術文庫）

## ② ルネサンスとネオ・プラトニズム

教科書に出てくるピコは、そもそもメディチ家がパトロンとなって開かれたプラトン・アカデミーで学んでいたのである。同門に、ローマ時代のネオ・プラトニストであるプロティノスを研究し、男女間の関係にもプラトニック・ラブを持ち込んだフィチーノがいる。ポッティチェルリの『春』は、そのフィチーノの圧倒的な影響下に描かれたものである。

## ③ スピノザの形而上学

プラトニズムではないが、西洋形而上学の最高到達点と言えるスピノザの美しさを何とか授業で伝えられるようになってほしいものだ。到底『エチカ』を一人で読めるとは思わない。ドゥルーズ<sup>15</sup>が先導役となってくれることを祈る。

## ④ ヘーゲル弁証法とネオ・プラトニズム

今のところ、加藤尚武が「ヘーゲルはプロティノスに弁証法のヒントを得た」と書いている<sup>16</sup>のを読んだだけだが、直観的に「なるほどな」と納得した。

## ⑤ ニーチェのプラトニズム批判

### 3. 和辻倫理学の評価をめぐる

「倫理」の教科書を読んでも、日本の哲学者が戦争とどう向き合ったのかが全く伝わってこない。特に、天皇制ヘーゲル主義者であった和辻への肯定的評価が目には余る。現行教科書では、実教出版版に、唐突だが「彼は、戦中に書かれた『倫理学』では、著しく国家主義に傾いた」という記述が見られる<sup>17</sup>。彼は、人間を「間柄的存在」と規定したが、その人倫体系には「家族」と「国家」があるだけで、「市民社会」というものを捨象しているのが大きな特徴だ。多くの研究書<sup>18</sup>が出ているが、自分でもいつかまとめてみたい。

### 4. カリキュラムについて

私自身が、哲学専攻ではなく社会学専攻であったからかもしれないが、生活の中から学んでいく「現代社会」が公民科の基本であると考えている。しかしながら、大学への進学を志す者は、「現代社会」ではなく、クラシックな科目である「倫理」を学ぶべきであると考えている。ところが、現在、都立高校の進学指導重点校で「倫理」を必修としている学校は、日比谷と立川だけとなってしまっている。その他の戸山・青山・西・国立・八王子東では「現代社会」を必修としてお茶を濁している状況だ。「総合的な学習の時間」と週休二日制が導入された際に、「倫理」が押し出されてしまったのだろう。日比谷では45分・7時間授業の形をとりコマ数を増やすことで、立川では「総合的な学習の時間」を毎週の時間割の中に位置付けずに学期当初や学期末にまとめ取りする形をとることで、何とか「倫理」を維持してきた。言いにくいだが、当時の教育課程編成に直面した先輩方には猛省して頂きたいと考える。必修「倫理」をなくす代わりに、「倫理」担当者が「総合的な学習の時間」を積極的に担っていくという

15 ドゥルーズ 2004『スピノザ 実践の哲学』（平凡社）

國分功一郎 2011『スピノザの方法』（みすず書房）

16 長谷川宏他 2010『ヘーゲル入門』（河出書房新社）

17 古田光他 2008『高校倫理』（実教出版）p111

18 熊野純彦 2009『和辻哲郎 文人哲学者の軌跡』（岩波新書）

菊部直 2010『光の領国 和辻哲郎』（岩波現代文庫）

子安宣邦 2010『和辻倫理学を読む もう一つの「近代の超克」』（青土社）



ような方針自体が間違っていたのではないだろうか。現在、土曜授業が復活しつつあるが、一度廃止したものはそう簡単に元には戻らないだろう。問題点は三つほどあったと考えられる。①大学進学希望者が「倫理」という科目を学ぶ必要性を、正面から訴えなかったこと。②その半面、受験とは全く関係ない授業を展開し、センター試験「倫理」への対応を怠ってしまったこと。③社会科の教員の間でも「倫理」は異質な科目であり、「倫理」維持への支持者が得られなかったこと。①の観点からの訴えが通るためには、授業を受けている生徒が「倫理」の授業は楽しいと感じられるよう普段から努力する必要があるだろう。②は、わかりやすく言えば、「倫理」での受験者を増やすということだ。センター試験と無関係に必修が維持できているのは、学習指導要領で必修と定められている「情報」「家庭」「芸術」「体育」以外には存在しない。今回の改定で「倫理・政経」という4単位科目が新設され、東大などではセンター試験で2単位科目を選ぶことができなくなった。一見、「倫理」に追い風が吹いたようにも見えるが逆である。文系の二次試験で、「倫理・政経」の出題がないからだ。賢明な受験生の多くは、自分の興味・関心とは別に「地理」へと流れているという。東大の人文・社会科学系の教授たちよ、「倫理・政経」の入試問題をつくってくれたまえ。「地理」の教授の数は少ないだろうに、頑張って問題を作っているのではないか。③は、教員免許制度の問題でもあろう。例えば、文学部出身の国語の教員にも「倫理」を教える資格を与えるなどしなければ、「倫理」の担当教員のマーケットが狭すぎるので、担当者がいなくなってしまうだろう。逆に「倫理」の教員に国語の「現代文」の授業を担当させれば良いのではなかろうか。「社会科」という限定が「倫理」の首を絞めているように思われる。

# 「倫理」と公民科教育法

福岡市立福翔高等学校 河村 敬一

はじめに

半世紀の節目でもある都倫研50周年を迎えた記念として一文を、という依頼を受けた。私としては突然のことでもあり、都倫研との繋がりが無いと思っていたので、事務局長和田先生にお尋ねしたところ、全倫研との関係だということが分かったこともあって、引き受けただいである。

私が所属する福岡県高等学校公民科研究会も2000年には、創設50周年記念特集号として「研究紀要」第34号を発刊した。

そこで都倫研50周年という喜ばしい歩みを記念して、拙い内容であるが、現在、携わっていることに触れ、お祝いの一文とさせていただきます。

私が全倫研にはじめて参加したのは、1977年の大会からであり、翌1978年には夏の全国研究大会で、「倫理・社会」の第二分科会で問題提起をして以来、何度か全体協議での問題提起をはじめとして司会、さらには全倫研最後の北海道大会では総会の議長を務めさせていただいた。また、1993年には全倫研福岡大会を開催し、200名以上の参加者を得て成功裡に終わったことも、よい思い出となっている（2008年度には全国公民科・社会科教育研究大会福岡大会を開催）。

この間、教育課程の変遷もさることながら、全国の多くの先生方と接し、知り合いになることができ、日々の実践に邁進されている姿から多くを学んできたことは、今日の私を形成しているといっても過言ではない。

そこで、社会科「倫理・社会」、「倫理」、公民科「倫理」と変遷しながらも、教育課程の関係で必ずしも一貫して「倫理」を担当することはできなかったものの、現在に至る中、少なくとも何らかの形で「倫理」に関わりを持つことができたことを報告して、50周年のお祝いとなれば幸いである。

## I 公民科教育法に携わって

### 1-1 経緯と内容

本県の研究会会員の一人から大学での（社会科）・公民科教育法で「倫理」を担当してほしいという打診を受けたために、2000年から大学のGT（ゲストティーチャー）として「倫理」の必要性、授業のあり方等々を含めた講義を果たし、現在に至っている。必ず最初に聞くようにしているのは、履修状況である。当初、「倫理」の履修経験者はかなりいたのだが、近年では単位数などの関係からか、極めて少ない状況となっている。2011年度は、すでに終了したが、25名程度の学生の中で、「倫理」を履修した経験者はまったく存在しなかったのである。これにはかなりの驚きをおぼえたのであるが、これも現在の教育課程の一端かもしれないとやや落胆せずにはいらなかった。しかし、将来、公民科教師として教壇に立つことになるであろう学生に「倫理」の必要性を理解してもらいたい、との思いで講義をつづけている。公民科教師の志望者に「倫理」を語るができるのは、私にとって悦ばしい限りである。

2000年度からの講義を多少振り返っておくことにしたい。内容的には、最初に導入をいろいろと試みることであり、その日のメインとして実際の授業展開を講義中心で行っていくという方法である。

取り上げていく授業内容は、ほとんどが「源流思想」を中心とするものである。思想の源流であることから、まずはその源流思想の概説をした後、実際の授業をやっていくのである。使用する教材は、事前にプリントしていただいております、教科書、研究ノート（福岡県高等学校公民科研究会発行のもので重要ポイント〔要点整理の形式になっている箇所〕の一部分。また、昨年から自主教材のプリントであるITサブ・ノートの一部を使用）の一部、資料集からの抜粋（第一学習社「倫理資料集」）、必要に応じて原典資料の一部となっている。これらを利用して、実際の高校での授業内容ということで、私の日頃の授業方法と何ら変わらない内容で行っていくのである。そうして、90分間の中で、60分～70分程度が授業展開、他の残りが若干「倫理」に纏わって私の考え方を述べたり、質問を受けたりといった具合である。

ただ、実際の授業展開では、源流思想に拘ることなく、西洋近代思想であったり、日本思想であったりするのだが、内容を年度によって変えたりしている。学生のレポートから判断する限り、総じて源流思想は好評である。もちろん、キリスト教・仏教・イスラームなどを取り上げた際には、視聴覚教材として録音テープなどを使用する（「クルアーン」の読誦など）のだが、やや不十分であったのか、宗教の単元では「倫理」を宗教教育の一貫であると誤解した学生がいた。また、中国思想を取り上げた場合は、実際に私が中国で購入した原典資料、特に「論語」の一節を使い、中国語を選択している学生に読んでもらうなどした。

西洋思想においては、学部・院生に法学部の学生が多いと聞いた際、「社会契約説」の中でもホッブズとロックを中心に取り上げてみた。これは概ね理解してもらうことができた。

一番、失敗したともいえるものが、「日本の思想」の鎌倉仏教であり、法然、親鸞、道元を扱った単元である。レポートから見た限り、大方の学生が「日本史」とそれ程変化がないという勘違いをしまっていることであった（2009年度）。レポートからは、「日本史」を受験科目に選択していたので、馴染みの人物が出てきてよかった、といった内容がほとんどだったことである。一部、「日本史」を学習したものの、彼らの生き方が少し伝わってきたという程度のものであった。この点は、一貫した授業のほんの一コマであったからか、誤解を与えてしまったようである。

したがって、2010年度からは再び源流思想に変更していき、2011年度にはサンデルの正義の授業に仮託してアリストテレスの思想を中心に展開してみた。

## 1-2 伝えようとした思いとは

このような拙いものであっても、私が学生に伝えようとしたものは幾つかの視点がある。最初は時代的なものを感じるかもしれないが、次のようなものであった。社会科「倫理・社会」「倫理」の目指したものと、公民科「倫理」の目標との違いをいかに捉えていくかである。参考にしたものは、阿部謹也著『「世間」とは何か』『「教養」とは何か』（いずれも講談社新書）、その後の同著『学問と「世間」』

（岩波新書）に触発されて、学問、教養、そして世間から倫理教育を考えてみようというもので、大学受験という壁から少数派になりつつある「倫理」の生きる道というものであった。さらには、西部邁著『国民の道徳』（産経新聞社刊）が教えようとするものは本当の倫理なのかである。そして、2003年度から新教育課程となる中で、公民科「倫理」とはどのような科目でなければならないか、である。

かつて「倫理・社会」は必修であったが、この科目で目指したものは倫理的思索と理解が中心であって、青年期の一時期における思索と理解への役割を果たす重要な科目になっていたと自負するも

のがあった（ここには全倫研の活動がそれを支えていたといえる）。その後、「倫理」は選択となる中、思想を中心とする学習は「倫理」だけでしかできないものであり、1990年代にはカントなどの思想家の名前さえも知らない学生がいる、高等学校の「倫理」教育への批判を述べた法哲学者の論文が出たりした（水波朗「日本国憲法解釈論と二十世紀の哲学」『自然法と実践知』所収、創文社）。しかし、公民科「倫理」となっていくと、思想を手掛かりとしての学習はかなりテーマ性の強いものに変化したのである（思想史という枠組みが排除されたともいえる）。従前の4つのテーマ（省略）に、「民主社会における人間の在り方生き方」がプラスされ、最近では応用倫理学の分野から環境倫理、生命倫理、情報倫理、企業倫理などといった最新の学問成果の上に立った興味・関心を中心とする学習が重要視されるようになってきている。このことは、授業内容が深く関係しているのではないだろうか。いずれにしても、現代社会の諸課題について深く考察していく必要から、このような思想的課題があることを理解させることは、現代に生きる人間にとって最も重要な意味があると思われる。そこに「倫理」が思想を大切にするという意味があるだろう、というようなことを説いたものである。

倫理教育の現状認識は、先述した教養・学問・世間の違いが倫理教育にも反映しているのではないかと、とやや説得気味に述べたのである。教養は、一部の者にしか理解できないのか。専門の専門となってしまう、学問ではなく、専門の細分化であり、専門知の状態を作り上げている。学問は、知の営みを自らのものにしていったところに形成されるものであり、今ではすべての人が求めるものになっているし、あるいは敢えて言えば、その必要もない状況である。しかし、生涯学習社会の形成といわれるのはこのことをもっとも端的に言い表しているといえなくもない。世間は、教養が邪魔をして、と言われる時、一種の軽蔑的な意味合いがあるが、世間で通用するものと通用しないことがあるのではないだろうか。このようことがあって、実は公民科「倫理」は少数派となってきたといえるのではないだろうか、というような内容を問題提起してみたのである。

現実的に大学入試を例とすれば、センター試験で「倫理」を選択する生徒は少数であり、私大入試では「倫理」を選択科目として設定しているのは皆無とも言ってよいが、入試だけの問題だけではなく、「倫理」そのものに原因があるのだろうか、と問うばかりであった（近年では高得点が可能な「倫理」への傾斜もみられ、しかもセンター試験も変容していくなかで「倫理、政治・経済」が再び出題される）。

大学での公民科教育法では、このような思いを学生に問いながらも、私自身が行っている授業を展開してみたのである。そこから見えてきたものは、「倫理」の履修状況がしだいに減少してきた焦りのようなものがあつたともいえるのである（2003年度の福岡県における公民科授業の実態として、教育課程の移行実施中の中で、私が調査した限り、190校中、「現代社会」153校、「政治・経済」84校、「倫理」51校であり、その後もしだいに減少していった。但し、2010年度以降には再び履修状況がセンター試験絡みで変化しようとしている）。

### 1-3 公民科の担う役割とは

こうした思いがあつて、「思索と理解」を要求する倫理教育の意味を再度考えていく必要があるのではないだろうか。各教科科目の持つ目標や意義は大切なものであるが、「倫理」に求められる思索と理解を引き出す工夫は今後ともなされていかなければならないのである。そこで、「思索」とはどのようなものでなければならぬかを考えると、原典を読む、しかも興味・関心を培うことであり、他教科

科目とはもっと違った内容を提供できはしないだろうか。地歴科などもそうであるが、知識の定着（いわゆる暗記）を問うことだけに終始しているのではないかを反省してみることはないか。2011年度にはじめて『倫理 IT 授業サブ・ノート』（東京書籍刊）を作成発行したが、これを GT を勤める大学のある先生に献呈したところ、次のようなご指摘を受けた。多くの思想家が登場しており、大学入試に必要なものではあっても、知識中心となっているのではないか、取り上げている思想をどのように定着させていくかではないかというものであり、さらにこれを活かしながらも将来の学問に繋がるようなものが必要だということである。私がかつてに捉えている「思索」の持つ意味からすれば、「倫理とは何か」「哲学すること」の意味が必要条件となるのではないかということである。そして、「理解」という点では、よく「わかる授業」といわれるが、思想を理解し、それらを生徒自らの「在り方生き方」や社会との関連で結びつけていくことができこそ、「倫理」としての意義が発揮できるといえないだろうか。こうした課題が浮き彫りにされている昨今でもある。

## II 「倫理」教育に期待されるもの

### 2-1 3つの視点から

そこで、3つの視点から考えてみたいと思う。一つは「人間（自己）理解」であり、二つには「社会認識」、三つには価値観に対する疑問（あるいは価値への疑問と信頼）といったものである。

第一点の「人間（自己）認識」とは、人間あるいは自己をどのように捉え、発見し、見いだしていくかであり、生徒の琴線に触れる、というような心に残る授業の展開をしたいものである。いずれの教科科目であっても同様であろうが、主として「倫理」の特性からすると、単なる思想家の羅列になることなく、思想を手掛かりとして「人間としての在り方生き方」に迫っていくことができるのが「倫理」であると考えられる。

第二点の「社会認識」は、文字通り社会を見る眼であって、社会への透徹した見方を、さまざまな角度から見えていく視点を提供していくことである。例えば、インターネットなどの利用を考えると、便利でしかも多くの情報が獲得できるものの、ホームページへの悪戯、ハッカーなどに代表されるような犯罪行為をどのように捉え、しかも対処するだけでなく、本来の在り方を考えさせていかなければならないだろう。さらには、「現代社会」や「政治・経済」ともリンクするが社会そのものをどのように捉えていくかなどの認識を持たせなければならないだろう。そこには社会への判断なり、社会的批判力も必要になってくる。いわば社会科学的な観点ともいえるようなものが必要である。

第三点の価値への疑問と信頼であるが、生徒の価値観の多様性に対してさまざまにいわれることだが、単に価値観の多様化があるとしても、ここに何ら答えようとしえない事実である。生徒がどのようなものに興味・関心を抱いているかであって、青年期という一時期を考えてみる必要性があるだろう。よく言われている「自己実現」という言葉などを通じて何が自らの課題であり、それをどのように解決していくかにかかっているとわなければならない。この点については、大学での GT を実施した後のレポートから判断することができる。高校時代に「倫理」を履修していない学生が持つ「倫理」へのイメージはほとんど乏しい状況にあるとともに、道徳の押しつけとしか考えていないのである。講義では、これを打ち破るべくそれこそいろんな方法を駆使しながら、思想の展開を果たし説明していくと、その後のレポートには「倫理」の必要性を理解してくれた内容のものが多くなる。もちろん、高校生と大学生との違いがあるであろうが、ほとんどが現代の社会を踏まえ、倫理のおもしろさに気

づくのである。

したがって、これら三つの視点に応えようとするのが「倫理」でなければならないのであるが、学校や生徒の実態に即しながらも、今日的な課題を追求していくべきではないだろうか。それこそが生徒が抱く価値観への信頼に応えていくことになると思われる。すべてがこのように上手く運ぶわけではないが、生徒の持つ課題に少なくとも一つのヒントを与えつづけることが可能であるといえなくもないのである。

ただ、現実はその簡単ではないが、少なくとも上述したような内容を組み立てていくことで、「倫理」の授業が展開されてしかるべきだと思われるのである。

## 2-2 新教育課程を見つめながら

2013年からの教育課程について、若干考えてみよう。「倫理」と「道徳」との関連がまずはあるだろう。さらには新教育課程では、道徳教育だけでなく、キャリア教育の実践、さらには言語活動の充実など新しい目標が設定されている。周知のように、道徳教育については「倫理・社会」の頃からすでに論議されていたが、今回は学校教育活動全体に求められ、各学校の全体構想を作り上げられなければならないようになってきている（私も一昨年勤務校の全体計画を作成したばかりである）。これを「倫理」との関係で捉え直すということであるが、かなり問題が多いといえるのではないか。というのも、「道徳」の時間が設定されていないとはいえ、道徳教育が前面に押し出されるとなると、どうしても「倫理」に注目がいくからである。少なくとも、「倫理」を教える立場の者に矛先が向き、学校によっては押し付けるという傾向が生まれるのではないかと危惧するものである（この点はかなり議論されなければならないものがあるだろう。かつて私も1996年に全倫研も共催の第48回日本道徳教育学会で発表したことがあるし、藤原聖子著『教科書の中の宗教』岩波新書でも倫理教育との関係が若干論じられている）。

もう一つ新たなものとして導入が決定されているキャリア教育という視点である。四領域八能力をいかに教科科目に導入すべきかというものである。本来は、学校全体の教育活動でという理念であるが、これを単なる教科の問題としてしまいがちとなるのではないか。生徒にキャリアプラン（あるいはライフプラン）を立てさせることは大切なことかもしれないが、それがやはり一部の教科科目へと押しつけてしまいがちになりはしないかというものである。キャリア教育の実践がすでに進行しているものの、単なる受験指導となると、これまた問題である。この点を「倫理」との関連で考えていく必要が出てくるといえるのではないだろうか。

いずれにしても、大きな問題を抱えており、新たな模索が必要である。

今後、「倫理」の履修状況がどのように変化するのか、不透明であるが、「倫理」が生き残るような視点を自ら実践・構築していくしかないようにも思われる。

## 結 語

公民科は、全教科科目さらには学校教育活動の中心でなければならないとされているが、果たしてどの程度の役割を担い、教科としての意義を持つことができているだろうか。センター試験ではそれ程比重が大きいものではないが、公民科でしかできないことを理解するとともに、できないことも多々あるであろう。例えば、「総合的学習の時間」が設定され、様々な実践が行われているが、勤務校では

1年生に「日本語コミュニケーション」というものを設定している（これは従来、総合学科特有の学校設定科目であったものが「総学」に位置づけた科目）。科目の構築から現在まで携わっているが、この科目を構築する際にも「倫理」で培われた内容が反映している。スピーチ、書くこと、グループワークなどを取り入れており、全倫研で発表された内容を踏襲しながら、担当者の誰もが実践可能な内容に仕上げたものである。現在まで12年間にわたり担当し、今後もつづけていくであろう。この科目の名称からすると、国語科の内容かと思われていたものであるが、意外にも従前の社会科「倫理・社会」「倫理」及び公民科で作りに上げてきた内容が活かされているのである。

公民科そのものについては、社会科の分離・解体・再編成という問題を抱えながら、新科目「現代社会」が誕生して以来、私としては「現代国語」のようにすぐになくなる科目ではないかと思っていたのであるが、今日まで多くの実践に支えられて、現在では公民科の主流科目になっている（この点については検証の必要があるだろう。同時に、それはセンター試験との関連ともいえるし、4単位から2単位となったことにも一因がある）。

また、今後の教育課程では公民科教育というよりは、道徳教育としての比重がしだいに増すようになり、それに傾斜していくかもしれないと思っている（改正教育基本法とも関連する）。再び「倫理」の授業を担当していくことになるものの、やや不安が付き纏う状況にある。

以上、最近の私自身の報告とはなったが、これからも「倫理」教育の持つ意義を説きながら実践していかなければならないと思っている。私見ばかりの内容とはなったものの、これからの倫理教育への問題提起ともなれば幸いである。

全倫研で学んだことは多い。今日、教師自らの課題・研究を容認しないなどの厳しい教育情勢の中にあって、着実な実践に基づきながら研究・教育活動が進められている都倫研に対して敬意を表するとともに、今後の益々の発展を祈念してお祝いの一文とさせていただきます。

# 生と死についての授業内容の一考察

元会長 小川 一郎

はじめに

生命をもつものには、死は必ずやって来ますが、それがいつ来るかは誰にもわかりません。『論語』（「顔淵編」）に「死生、命あり」とあり、人の生死は天命で決まっており、人力ではどうすることもできないと説かれています。人は殆ど死を予見できません。また、人はふだん、死を意識することはないと言ってよいと思います。そのため、大きな災害による人々の死や、病気や事故などによる身近な人の死に遭遇すると、驚きあわててしまいます。そして、死に対する不安や恐怖にさらされます。

現代社会は、死を覆い隠し、ふだん死は人の目に触れなくなりました。20世紀の残りの4半世紀あたりから、日本では家庭より病院で亡くなる人が多くなり、現在では、90%以上が病院で亡くなっています。医療器具に囲まれ、医療が死の間際まで続けられ、患者は身近の人との人間的な接触が断たれ、近親者でさえも死に立ち会うことができないケースが多いのです。このように、死は人の目から隠されています。まして、子どもの目に触れることは少なくなりました。

高校倫理においても、「生命の畏敬」など、生と死を扱いますが、上記のことを考え合わせ、生と死について改めてその内容を考え直す必要があると考え、倫理や道徳など高校の授業内容として、死を中心に考察することにしました。

そこで、死への対応を、二つの側面から考えたいと思います。

第一に、直接、不安や恐怖を与える死への対応です。阪神淡路大震災や、今回の東日本大震災は、突然やって来て、多くの人々に死をもたらしました。住居も流され、人々は言葉を失いました。このように、死を間近に経験した人に、死は不安と恐怖を与えます。

元上智大学のアルフォンス・デーケン教授は、「死の準備教育」を1980年代に唱え、大学のみならず社会人にも、実践して来ました。氏は、不安や恐怖から死を真正面から見つめることができず、避けているのは問題であると考えます。

第二は、死を積極的に考え、よく生きることです。生と死は表裏をなすものです。私たちは、ふだんはそれほど死を意識していません。死は暗いもの、忌まわしいものとしてむしろ考えることを避けていると言ってよいでしょう。しかし、死は必ずやって来ます。人間にとって避けられません。生と言えば死があり、生と死は表裏をなすものです。「メメント・モリ」（死を思え）ということは古くから言われています。有限の生をよく生きるためです。〈よく生きる〉という言葉は、ソクラテスの言葉としてプラトンがよく使います。死への対応は、分けて考えにくいこともありますが、一応、ここでは、次に一と二の、二つに分けて二つの側面から「生と死」を死を中心に考察を進めていきたいと思っています。授業の場合もそのほうが扱いやすいのではないのでしょうか。



## 一 死の不安や悲嘆・恐怖への対応について

この度の東日本大震災は、先述のように、人々に大きな衝撃を与えました。千年に一度と言う大災害は、人々から多くのものを奪いました。身近な人、肉親や知人を奪ったのです。慣れ親しんだ生活の場は瓦礫の散乱するところとなりました。家屋が奪われ、故郷が奪われ、職場が奪われたのです。また、福島の東京電力第一原子力発電所の事故により、近くの住民は広い範囲で避難を余儀なくされています。また多くの生産物が放射能によって汚染され、人々を不安と恐怖に陥れました。

### (1) 悲嘆の過程としての十二段階

多くのものを喪失する中でも、身近な人を亡くすことは最大の悲しみであり嘆きです。死の準備教育の中でも、悲嘆の教育は大きな位置を占めています。元上智大学のアルフォンス・デーケン教授は、悲嘆には十二の段階があると以下のように示しています。この問題の先駆者スイスのキュプラー・ロスは医者として人生の最終段階にある二百人に直接面接して取材し、悲嘆の過程の五段階など発表していますが、デーケン氏は十二段階をキュプラー・ロスをはじめ、いろいろの人の意見を参考に、総合して決めたと述べています。ここで取り上げた段階は、必ずしもこの段階通り進むわけではなく時には複数の段階が重なって現われることもあります。また、それぞれの段階を必ず踏むというわけではありません。典型的な例として示されたものです。

#### ① (最初の段階) 精神的打撃と麻痺状態

愛する人の死という衝撃により、一時的な現実からの逃避が起り、現実感覚が麻痺状態に陥る。あまり長くこの状態にとどまるのは健康上好ましくないとされる。

#### ② 否認

死という事実を受け入れられない。この事実は本当のはずがないと思う。

#### ③ パニック

身近な死に直面しての激しい恐怖は、人を麻痺させ、集中力を奪ってパニックとなり、日常生活の妨げとなる。速やかにこの状態を脱却する必要がある。パニックを未然に防ぐことは悲嘆の準備教育の大切な目標のひとつである。

#### ④ 怒りと不当感

この状態の根底には、何かしら不当な仕打ちを受けたという感情が存在している。不健康な怒りの激発を予防することは、悲嘆の準備教育の大きな使命である。

#### ⑤ 敵意とルサンチマン (うらみ)

残された人はやり場のない感情をぶっつけるところを必要としている。公的機関や病気の場合は病院や医者に、あるいは亡くなった人に敵意を向ける場合もある。不注意を責めるのである。敵意を向けられた人は理解と思いやりを示すことが必要である。

#### ⑥ 罪の意識

亡くなった人にもっと暖かい思いやりを示せばよかったと考えて悔やむのである。自分がなすべきことをちゃんとしていただろうか悩むのである。

#### ⑦ 空想形成、幻想

空想の中で、死者がまだ生きているように振る舞う。

## ⑧ 孤独感と抑鬱

孤独の苦しみである。これはあくまで一時的なものであり、克服できるものであることを忘れてはならない。周囲の人々は一人ぼっちにしないよう心掛けたい。

## ⑨ 精神的混乱とアパシー（無関心）

日々の生活目標を失った空虚さから、どのように振る舞えばよいか、何をなすべきかが分からなくなるという精神的混乱が生じ、生活のあらゆることに無関心になり無気力になる。

## ⑩ あきらめ — 受容

自分の置かれている状況が分かり、現実を積極的に受け入れる。

## ⑪ 新しい希望 — ユーモアと笑いの再発見

## ⑫ 立ち直りの段階 — 新しいアイデンティティの誕生

以前と同じ状態に戻ることを意味するのではなく、より成熟した人間となる。

以上のような、悲嘆のプロセスが考えられますが、現実にはいろいろな事情を勘案して臨機応変に適用することが大切だと思います。

私は、この記述を今回の大震災の発生から半年経過した時点で記述しています。上記の悲嘆の過程から考えると、現在の時点は今回の大震災を直接経験された人々に適用すると⑥、⑦、⑧以降に当たるだろうか。亡くなった人々との対話はずっと続くに違いない。その際、特に一人で考えるとき、悔やむなど罪の意識にとらわれることもあると思われます。孤独感が迫り、何とも言い知れぬ寂しさに襲われ、身の処し方を相談する人があればよいと思っているケースが多いに違いなく、ケアが必要とされます。

震災直後の早い段階や子どもの場合は、特に直接的なケアが必要です。ケアに当たる人は先述の悲嘆の過程を参考に、それにこだわることなく、当人の気持ちに寄り添うことが必要です。気持ちが安定して積極的に前進しようとしている機会を見て、このような「悲嘆の過程」の説があることを知らせることも生活の見通しを立てることに役立つものと考えます。当事者の理解力や気力など見定めないと仇になることもあることをケアに当たる人は考慮に入れておくべきだと思います。

悲嘆の過程を学ぶ本筋は、ふだんの生活における危機管理として学ぶことにあります。死は見る人の位置によって違います。自分の死、二人称の死、三人称の死、それぞれ受け止め方が違います。人は誰も自分の死は経験できません。考えると不安や恐怖に襲われるので考えないようにして避けてしまします。二人称の死が悲嘆の最たるものです。理屈は通じません。悲嘆の過程を心得た人のケアこそ大切です。

今回の災害で、悲嘆の過程に、当てはまる事例は多くあると思います。二人称の死は直接のケアが必要と思いますが、学校の授業で扱うのは、直接の被災地を除いて三人称の死が多く、いろいろな事例を収集し、〈悲嘆の十二段階〉を適切に適用して授業を進めることができると考えられます。

## (2) 子ども（幼児・児童）と死の教育

先述のキュプラー・ロスは、子どもの死の教育について、「子どもにしても、不幸があった家にいさせてもらえ、会話や議論や恐怖の仲間に入れてもらえさえすれば、悲しみのときでもひとりぼっちでない気持ちになれるし、責任を分担し、共に悲しむことで慰めが得られる。そのことで徐々に心の準備ができ、死もまた人生の一部なのだということを学んでいく。これは彼らの成長・成熟にとって貴

重な経験である」（『死ぬ瞬間』中公文庫）と述べ、「それとまったく対照的なのが、死をタブー視して、死を忌み嫌い、『ショックが強すぎる』という先入観や口実にもとづいて子どもを除けものにする社会である」（『同書』）として、あまり死を隠すのは子どものためにならないとしています。

ただ、今回の震災のように、両親を失ない孤児になってしまった児童について死の教育は、刺激が強すぎて不安や動揺を強めることになってしまいます。時間が必要と思います。死を隠しすぎる現代社会の傾向を踏まえながらも、子どもの心に配慮して対応することが大切です。

金子みすずは、こんな詩がある。

＜ さびしいとき ＞

私がさびしいときに、よその人は知らないの。

私がさびしいときに、お友だちは笑うの。

私がさびしいときに、お母さんはやさしいの。

私がさびしいときに、仏さまはさびしいの。

子どもが悲嘆にくれているときは、お母さん、仏さまのところで接することが大切だと思います。

### (3) 死が家庭から離れ、覆い隠されていることの弊害（重病人と病院）

急病人は病院に運ばれ、多く医療関係者がベッドの回りにいながら、全員の関心は彼の心拍数、脈拍、心電図、あるいは肺機能、分泌物、排泄物にだけ向けられ、人間としての彼には誰も目を向けようとしません。これらはすべて患者の命を救うための処置なのです。患者をまず人間として考えたりしては救命の好機を失ってしまうという、この救急医療の根本原理は、医療の正当性を示しているのであろうかと、先述のキューブラー・ロスは疑問を投げかけています。

このような機械化され、人格を無視した医療は、さし迫った死を認めまいとする必死の試みは知識のすべてを機械にゆだねてしまうものではないでしょうか。患者の苦痛、それも肉体的苦痛でなく精神的苦痛がより大きくなったことは確かであると思います。ここには、幾つかの考えるべき問題、患者本人への病名告知（以前は本人に隠すことが多かった）や延命第一の現代医療が含まれています。

### (4) お前は今、死ねるか

宗教学者の山折哲雄氏は、その著書『わたしが死について語るなら』（ポプラ社）の中で、わかいころから多くの病気に見舞われて、病気をくり返しているうちに死の恐怖にとりつかれたことがいくどもあった、と述べています。ところが、死に対して「今なら、いいぞ」という気分になった体験を次のように述べています。

「私は長い間散歩することを趣味にしてきました。……あるとき天の方から、『おまえは今、死ねるか』という声が聞こえるようになりました。……たいていの場合、私は『今はダメだ』と答えることにしています。……ところが不思議なことに、『ああ、今ならいいぞ』と天に向かって答えていることがありました。……するとそのとき、私は散歩しながら、自分の身体が自然の中にそのまま静かに入って融けこんでいくような気分になっていたのです。……人間というものは、自分をとり巻いている自然と融け合って一つの気分になったとき、静かに自分の死というものを受け入れることができるのでは

ないかと考えるようになったのです。」

宗教学者として、さまざまな死について学んできた山折氏が受け入れることのできる死は自然と一つになるということでした。私たち人間のいのちは、無始の過去につながり、広大な自然とつながりその一部と考えられます。

#### (5) 災害は忘れたところにやって来る。

この標題の言葉は理学者であり随筆家でもあった寺田寅彦が言われた有名な言葉です。日本の過去には、古くは鴨長明の『方丈記』鎌倉期1212年（建暦2）成立。これによると京都を中心に大火、大飢饉、大地震などの大災厄を叙述し、世の無常を説いています。

また、近くは明治29年の大津波、大正の関東大震災、昭和の室戸台風、伊勢湾台風、平成に入って阪神淡路大震災、今回の東日本大震災と続き、日本列島は震災列島と言えます。

寺田寅彦は「文明が進むほど天災による損害の程度も累進する傾向があるという事実を十分に自覚して、平生からそれに対する防御策を講じなければならないはずであるのに、それができていないのはどういうわけであるか。その主たる原因は、畢竟そういう天災が極めて稀にしか起こらないで、ちょうど人間が前車の転覆を忘れたところにそろそろ後車を引き出すようになるからであろう。」（寺田寅彦『天災と国防』講談社学術文庫）と述べています。

## 二 よく生きるため、死を積極的に考える。

人間としての在り方生き方について自覚を深めるため、先哲はいろいろ生や死について、参考になる意見を述べています。例えば、ソクラテスは「無知の知」、「よく生きること」（プラトン『ソクラテスの弁明』）をいい、死を誰も経験していないにもかかわらず知っているかのように言っていて怖れている、死は最高によいものかも知れないと言い「よく生きる」ために死刑を恐れませんでした。孔子は「未だ生を知らず、いづくんぞ死を知らんや」（『論語』）と、孔子とソクラテスとは、お互い同士全然知らないにもかかわらず、結果的にまったく同じ考え方を示しています。

これらは、人がよく知ることができるのは、生だけである以上、人ができるのはその生をよりよく生きること、生を最高に輝かすことに他ならないと言っているのです。

### (1) 死の自覚は生を深める。

#### ① 吉田兼好『徒然草』—「存命の喜び」、「死を忘れずに」

「されば、人、死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び、日々楽しまざらんや。愚かなる人、この楽しみを忘れて、いたづがはしく（＝わずらわしく思い）外の楽しみを求め、この財（たから）を忘れて、危く他の財を貪るには、志満る事なし。生ける間生を楽しまずして、死に臨みて恐れば、この理（ことわり）あるべからず。死を恐れざる故なり。死を恐れざるにあらず、死の近き事を忘るるなり。」

「存命の喜び」ということが言われています。日々楽しまなくて他によいことがあるだろうかという意味です。死を意識してこそ、生きている幸せを実感として味わうことできることを強調していま

す。死ぬことを忘れていては、生はずっと続くと思うわけですから、生はいつでも味わえるという気持ちになります。死を意識することは若い者には、なかなか難しいかも知れませんが、次にあげるセネカの言葉に耳を傾けましょう。

## ② セネカ『人生の短さについて』— 生の浪費

「諸君は永久に生きられるかのように生きている。……すでにどれほどの時間が過ぎ去っているかに諸君は注意しない。満ち溢れる湯水でも使うように諸君は時間を浪費している。ところがその間に、諸君が誰かが何かに与えている一日は、諸君の最後になるかも知れないのだ。」

傘寿になって、私は人生の短さを感じています。もう十年ほど歳を引き戻せないかと思えます。

## (2) 今を豊かに生きる — 生きていてこそ味わえる

### ① レヴィナス『全体性と無限』— 享受・生きていることの内容・幸福

「われわれは〈おいしいスープ〉、大気、光、風景、労働、観念、睡眠、等々によって生きている。われわれはそれによって生きているのだ。……幸福とは呼吸すること、見ること、食事をする、労働すること、ハンマーや機械を操ることで得られる喜びないし苦痛である。……しかも、これらの内容を生きる活動それ自体が生の内容なのである。……そして、このような生の内容が私の価値なのだ。」……観想と実践の背後には、観想および実践の享受、すなわち生の自我中心性が存している。享受、幸福が究極的な関係なのである。」

わたしたちは自然の恵みを受けながら生活しています。生きる活動、生活の内容をよく見ると、自然との深いかかわりがあることが分かります。よく心の眼を見開いて、私たちが自然から享受しているものを見つめてみましょう。無限に開かれた大自然との関わりを大切にして、その幸せに感謝して生を輝かせたいものです。

### ② 竹田青嗣『ハイデガー入門』— 人間を頹落（墮落）させるもの

「人間は、あるいは人間だけが、〈死への不安〉を持って生きている。その意味で人間は、本質的に〈死へとかわる存在〉である。ちょうど誰も太陽を直視できないように、この死という恐るべき可能性を直視できず、そのため自分を世のさまざまな気散じごとの中に〈頹落〉させている。人間が必然的に〈頹落〉の中を生きているその本質的な理由は、〈死の不安〉ということにあったのだ。……人間は〈世人一般的な世の中の人間〉へと頹落することによって、自己存在の〈最も固有な〉可能性から身を引いている。実はこの可能性に目覚めることによってその存在の本来性をつかみうるのだ。」

「易きにつく」という言葉があります。辛いことは避けて楽な方へ楽な方へと流されていくのが人間の常です。そこには頹落という墮落が待っています。人間は死を免れることはできず、死に至る存在ですが、その必然的にやって来る死を見つめることを避けているから墮落がやって来るのです。〈不安の死〉を見つめることによって人間本来の本質に目覚め、人間としての在り方生き方についての自覚を深めることができると、ハイデガーは、説いています。

## まとめ

以上、直接的な死の不安や恐怖への対応と、積極的に死を見つめる（生の充実・よく生きる）の二つの側面から、生と死についての授業の内容になることを考えてきました。仏教では、法を説くに当たって方便ということがよくいわれます。法を説く対象である人が受け入れることができるように法を相手にあわせて適切に話すことを言っているのです。「人を見て法を説け」ということです。

子どもの発達段階や置かれている環境などを考慮に入れて教育に当たることが、死のような心に微妙な動揺を与えることが多いことについては特に必要と思います。今回の震災では、両親を失い孤児となった子どももかなりの数に乗ると伝えられています。人々はさまざまな立場で、受け止めていると思われませんが、適切な対応、教育が求められています。

# 倫理的内容の指導の焦点化

元文部省視学官 金井 肇

## 1 指導の課題の明確化

教育の課題は大きく分けて二つの面がある。一つは生徒が生きていくために自分の外の世界を正しく知り、その外の世界を自分が有利に生きるために有効に活用する能力をもつことと、生きる主体としての自分自身を、満足できるように生きぬくことができること、つまり自己実現を果たすことである。そのために必要な能力をもつことである。

教育と言えば「教える」とだけイメージする人たちがいる。しかし、教育の専門的立場から見れば、自分の外側にある自然や社会や文化などを正確に理解し、自分や社会の人々が生きていくのに役立つようにすることは大事なことであり、これらについて学問的に解明し、それを教えていくことは教育の重要な側面である。

教育はそれだけでは済まない。被教育者の生徒たちが、自己の人生を最大限満足できるように、自分自身の能力をつくっていかなくてはならない。生きる主体としての自己を最大限の満足を得ることができるよう、そのため必要な能力をもつことができるようにすることと、教育の課題は、この両面にわたってはつきりとらえておかななくてはならない。

主体を育てるといふことは何を、どうすればよいか。学習指導要領はどのような能力を目指しているのか。学習指導要領は、人生観・世界観ないし価値観を育てることが主体を育てる中心課題であるとしている。学習指導要領倫理の目標は、「人間尊重と生命に対する畏敬の念に基づいて、青年期における自己形成と人間についての在り方生き方について理解と思索を深めさせるとともに、人格の形成に努める実践的意欲を高め、他者とともに生きる主体としての自己の確立を促し、良識ある公民として必要な能力と態度を育てる。」となっている。

ここが中心であるが、もうひとつ、外の世界をみるとき 物を見る座標軸もしっかり見ることができなくてはならない。物を見る座標軸が歪んでいては正確に対象をとらえることができない。

## 2 人間としての在り方生き方の指導

その目をもって、公民科の各科目を見れば的確に指導事項をとらえることができ、学習指導要領に沿った的確な指導をつくることができる

まず『倫理』を見よう。「目標」は上述した主体の形成を目指している。では「内容」はどう指導すればよいか。内容の「(2)人間としての在り方生き方」の教育では、「自己の生きる課題とのかかわりにおいて、先哲の基本的な考え方を手がかりとして、人間の存在や価値について思索させる。」となっている。先哲の基本的考え方をそのまま受入れるのではなく、それを手がかりとして人間としての存在や価値について生徒に思索を深めさせ、先哲の基本的な考え方を手がかりとして生徒自身の考え方を深めさせるのである。

例えばそのひとつ、古代ギリシャの考え方を先ずとらえてみる。

ソクラテスは「無知の知」で知られるがそれは知一般ではなく、「善美な事柄」についてであった。

つまり、「よく生きる正しく生きる美しく生きる」生き方が最も大事で、これを人々に呼びかけて生きた（『ソクラテスの弁明』、『クリトン』）ソクラテスの問いかけたものを、今日に生きる私たちへの問いとしてとらえれば、この問いに答えようとすれば、当為としての人間、価値の課題に取り組むことになる。ソクラテスの問いかけに答える答えを子どもが自ら見いだしていくことによって、価値高い生き方を見いだす力を高めることになり、学習指導要領の示す倫理的価値の自覚を深める指導に生かすことができる。

高等学校ではそのまま教材として生かすことができる。

ソクラテスの問いかけを、深く探求していけば、プラトンのイデア論やアリストテレスの形相と質量や知的徳と倫理的徳などの方向になっていくであろうが、その方向は学問的な探求の方向である。

当時のポリスの民主制が衆愚政治に墮し、問題が大きかったところを理論的に探求していけば、プラトンのイデア論や理想国が、理論上考えられる。

倫理教育の観点に立って、例えば理想国を取り上げれば、理論的な探究の仕方とともに、自然のままの人間から価値を求めている人間へと、これらの問いを生かして、価値の自覚を深める指導を工夫していくことができる。生徒の課題に結びつく緻密な指導を工夫することができる。

プラトンの理想国、哲人政治を例にとってみる。

哲人政治は、多くの優れた研究がある。高校生レベルの指導で考えれば、多くの優れた研究の成果を紹介して理想国の考え方として理解させていく方向もあろう。知識を受入れさせる方向もあろう。しかし、学習指導要領は、知識集約型の指導を目指してはいない。また、当時のポリスの諸問題を、理論的に解決の道を探求していくのでもない。それとは別に、プラトンが説いている哲人政治を成立させる条件を基に、どうすれば人間がその条件を実現することができるかを吟味して、哲人政治が提起している課題を、その知識を重視するのではなく、生徒の生きる課題と結びつけて思索を深める。

プラトンは、ポリスの在り方として、善のイデアを見ることのできる哲学者が統治者となり、私利私欲を完全に排除して、知をもってポリスに善のイデアの実現のために尽くすこと、軍人は完全な勇気をもってポリスを防衛すること、生産者階級は徹底して自分の職分を守り生産に励むこと、これを節制と言った。その3者がそれぞれに知、勇気、節制の徳を実現すれば、正義のポリスができると考えた。統治者が哲学者となるか、哲学者が統治者になるか、いずれにしろ政治を行うものは、善のイデアを見ることができて、ポリスに善のイデアを実現し、全ての人がよいと考えるポリスを実現しようとした。

哲学者を育てるには、生まれたときからポリスが育てなくてはならない。個人の立場で善のイデアに達するまで学ぶとすれば、統治者になったとき、個人で支出した教育費を取り戻そうとすれば、完全にポリスに尽くすという条件から外れることになる。そうならないように生まれたときからポリスが育てるのである、

この哲人政治を教材として高校生を指導する場合で考えよう。

ありのままの人間を基にして価値の方向を求めるということは、提示されている価値をそのまま受入れ、その価値を前提にして、子どもに受入れさせるということではない。例えば、プラトンの正義についての考え方を、これを前提として受入れさせるのではなく、プラトンの四元徳を、ありのままの人間から、人間の本性（ペスタロッチの用語を借りて自然性と言ってもよい）から理論的に考えて、もし同じ考えに到れば、子どもたちは、無理なくその価値を受入れることになる。



プラトンの四元徳は、理想国の形をとることによって実現する。理想国は、全ての人々が善と考え、四元徳が実現する国家だから、理想国は、善のアイデアを見ることのできる哲学者が統治者となるか、統治者が善のアイデアを見ることのできる哲学者が統治者になることによって実現する、その論義のなかに生徒を入れてみる。生徒が理想国に触れて自分の課題をしっかりと考えるようにするのである。生徒は、人間の生の気持ちや将来の社会生活の在り方から考えることになる。

理論的な探求の仕方を先ず学ぶ。次に、人間の本性、自然性から価値の方向を考えるようにする。

理想国では、哲学者としての統治者を育てるために、生まれたときから親の手を離れて国家が養育する。そこに問題がないかどうかまた、統治者になったときに完全に私利私欲を離れることができるかどうか。この点の吟味には、プラトンがシケリアで理想国を実現しようとして、借主ディオニュシオス2世をめぐる争いなどから実現できなかった。このことも、人間の私利私欲が離れがたいものであることを示している。

もし人間が完全に私利私欲を離れることができないとすれば、統治者が自己の利益になる行動をとることができないように、ガラス張りですべての統治者の行動を見ている必要がある。そのような見方ができれば、現実の政治、行政の在り方を見る能力を高めることになる。

### 3 公民科倫理的内容指導の視点

上述したように、ここは、主体の形成を目指す指導になるため、知識集約ではなく、生徒の価値観の形成に結びつく指導が役目である。したがって、生徒自身の考え方を育てるように指導する。

高等学校では、人間としての在り方生き方に関する教育を通じて「道徳性」を養うと規定されている。その、『高等学校学習指導要領解説 総則編』には「生きる主体としての自己を確立し、自らの人生観・世界観ないし価値観を形成し、生きる主体として主体性を持って生きたいという意欲を高めていく」、発達段階に合わせて、「選択可能な幾つかの生き方の中から自分にふさわしいしかもよりよい生き方を選ぶ上で必要な、自分自身に固有な選択基準ないし判断基準」をもつ主体を形成するもので、「生徒一人一人が人間存在の根本性格を問うこと、すなわち人間としての在り方を問うことを通して形成されてくる。」とあって、高等学校段階では、道徳性は、自分自身に固有な選択基準ないし判断基準、言い換えれば自分自身に固有な人生観、世界観ないし価値観を意味している。「徳は得なり」この言葉が示すように、倫理的価値を心に受け入れたときに道徳となるとされている（『禮記』）。

公民科の倫理的内容は、道徳教育と同じ教育作用をもっている。

その育成の方途は、高校では、生徒一人一人が人間存在の根本性格を問うこと、すなわち人間としての在り方を問うことを通して形成されてくる。又、このようにして形成された生徒一人一人の人間としての在り方についての基本的な考え方が自分自身の判断と行動の選択基準となるのである（『解説 総則編』）。

ここでは、基本的な内容について、その趣旨や取り上げ方、取り扱いかが明確に述べられている。

つまり、公民科倫理的内容の指導は、先哲の思想を、生徒自身の課題に結びつけて思索を深め生徒自身の価値観を形成するように指導するのである。公民科は何をどのように指導すればよいか。特定の価値を受入れさせるという指導ではなく、『解説』の「ア人間としての自覚」について、「指導の課題の明確化」にも引用したように、「ここでは、人間の精神の深い営みである哲学や宗教や芸術の人生

にもつ意義を理解させ、人間の存在や価値にかかわる基本的な課題を多面的に思索させ、生徒が人間としての在り方生き方について自ら考えを深め、自己形成に努める実践的意欲を高めることをねらいとしている。」

生徒にとって、「人間としての自覚」は、生徒自身が当面している自らの生き方にかかわる課題に真剣に取り組むことを通してはじめて人間としての自覚が生まれ、生きる意味の探求、生きがいと希望、理想と現実との葛藤から生ずる悩みや挫折、劣等感や焦燥感、不安感など、生徒の当面する具体的な問題に即して、自分はどのような人間なのか、どう生きればよいかなど、あくまでも自己への問いとして考えるように指導する。

「人生における哲学、宗教、芸術など」については、まず、生徒一人一人のもつ生き方にかかわる課題が、多くの先哲によって真剣に探求されて来た課題に通じており、その課題解決のために哲学や宗教や芸術が誕生してきたことに気付かせ、これらが人生にもつ意義について理解させる。そこから、哲学や宗教や芸術が何を問い、どのような答えを見いだしているか考えさせ、これらを手がかりとして思索を深めさせる。生徒自身の課題と重ね合わせて考えさせ、哲学や宗教や芸術を、単なる知識の集積として学ばせるのではなく、「人間としての自覚」を深めさせる契機となるようにする(『解説公民編』)。

「人間存在や価値にかかわる基本的な課題」については、哲学や宗教や芸術における先哲の考え方が、人間とは何かを問い、どう生きるべきか、どうあればよいかという価値への問いをもち、これにかかわる思索を深めていることに着目し、これらを手がかりとして生徒が自らの課題について思索を深めるように指導することを目指している。この大項目の解説の冒頭部分に述べたように、生徒の生き方にかかわる課題を、人間の存在と価値の両面から生き方を考えるよう、その視点を示しているのである(『解説公民編』)。

「1」にも引用したように、「内容の取り扱い」解説から引用したように先哲の扱いは「知識の集積」にならないよう、「ギリシャの思想、キリスト教、イスラム教、仏教、儒教などの基本的な考え方を代表する先哲の思想」を「倫理的な観点を明確にして取り上げる」とある(『解説公民編』)。

『解説』では上に引用してきたように、指導の中心は生徒が自らの生き方を見いだしていく生徒自身の思索であって、上記解説を基に、このことについて思索を深めさせる具体的指導をするよう、教材の整え方をはっきりさせることが必要になる。教材研究の中心はここである。

#### 4 道徳教育とのかかわり

道徳教育は、豊かな心をもち、人間としての在り方生き方の自覚を促し道徳性を育成する教育活動であり、価値観を育て、主体の形成を目指す教育で、倫理と同じく生徒の価値意識を育てるものである。社会の変化に主体的に対応して生きることのできる人間を育成する上で重要な役割をもっている。社会の変化に主体的に対応して生きるためには、一定の行為を自分自身の選択基準ないし判断基準をもたなければならない。このような選択基準ないし判断基準は、倫理では生徒自身が人間存在の根本を問うこと、すなわち人間としての在り方を問うことを通して形成されてくる。自分自身に固有な判断基準ないし価値観を育てる人間存在の根本を問うことができる人間を育てる教育活動である(『解説総則編』)。倫理教育は、道徳教育と同じ教育作用をもっている。高校での倫理教育は、小中学校の道徳教育が内容項目の道徳的価値を心に受け入れさせて道徳性を育てるものであるのに対して、高校では上記のように、生徒が人間存在の根本を問うことから形成されてくる、とされており、小中学校と

の方法の違いは生徒の発達段階の違いによるもので、道徳性を形成させるという、同じところを目指している点に変わりはない。

教育基本法、学校教育法の目標、学習指導要領の道徳教育の規定などはみな、我が国社会の道徳的規範ないし倫理の課題である。

我が国社会の道徳的規範ないし倫理だからといって、それを上から説き聞かせても、子どもが受入れるとは限らない。どんなに優れた価値でも、子どもの心が受入れなければ教育として成立しない。価値に関わる教育内容は、子どもの心が、指導する事項を「確かにそう言える大事なことだ」と受入れたとき、教育として成立する。客観的事実を教える場合は、子どもがそれを理解できたかどうかで教育の成否が決まるが、価値に関わる教育内容は、子どもの心が受入れたかどうかで教育の成否が決まる。

道徳的規範ないし倫理は、それを受入れさせるには、子どもの心が受入れるように考えなくてはならない。昭和33年3月の、道徳の時間発足のときの文部次官通達には、「一般に、子どもが道徳的規範を尊重するのは、その規範が行われている集団に対する所属感を持ち、集団の成員に対する連帯感があるからである。」とあって、単に教えただけでは子どもの心が受入れてくれるとは限らないこと、自分の所属する集団が自分にとって大事であれば、その集団の道徳的規範も大切にされることを指摘している。つまり、価値的な教育内容は、それを単に教えるのでなく、子どもの心が受入れる条件を見極めて、その条件を生かしながら指導することによって、必要な価値規範を受入れさせることができると、指導の着眼点を指摘している。

子どもの心が受入れるためにはどうすればよいか。ありのままの人間に必要な価値をしっかりと考えさせるように指導する。自然のままの人間のとらえ方や価値の求め方がいろいろ考えられるので、我が国の倫理的課題を正しくとらえるのに役立つと思われる考え方を、思想の源流、または基軸時代といわれている古代ギリシャの思想、中国古代の儒教などの思想、仏教の考え方、キリスト教の考え方の概略を見ながら、価値観を育てるための着眼点として、「かくあるべし」という倫理をとらえやすいところを見いだし、道徳教育の筋道を見い出すことにしたい。また、イスラム教はこれまで、我が国では思想の源流として扱われてこなかったが、今日、国際社会でも大きな影響力をもっていることもあって、高等学校の「倫理」の一項目として扱われることになっている。

更に思想の源流によって、人類の最初からの倫理的課題を見ることになれば、我が国の古代の人々がどのような倫理的課題をもっていたかを知ることは我が国の子どもたちにとって重要なことと考えられる。そこで、国学の大成者、本居宣長を取り上げて考えさせることができる。

## 5 倫理的課題を見い出す

### (1) 思想の原流

先哲の思想は、人類の歴史上はじめて、人間にとって普遍的な問いに基づいて「人間としての自覚」を示したもので、普遍的、人間的な問いに基づいて、「人間としての自覚」の原型を示したものである。

### (2) 古代ギリシャの考え方

ここでは、ソクラテスの言行やプラトンなどの先哲が、この問いの重要性を告げ、ここの問いの重要性や人間の存在や価値について、生徒自身の課題と結びつけて考えさせる。

道徳教育では、高い価値に触れて全人格で受け止めることも、一つの道である。家庭でのしつけれ

どは、分析的ではなく、人格全体への働きかけであるが、一定の効果があると言える。ありのままの人間から倫理的課題へという方向で考えさせることが、子どもの心が倫理的価値を受入れる筋道の一つと言える。古代ギリシャの考え方を、通説として紹介するのではなく、その中の誰かを選んで、先にプラトンの哲人政治を例に挙げたように其の基本的考え方を生徒の課題に結びつけて思索を深めるのである。

### (3) 古代中国の考え方

儒教では、孔子や孟子の言行を取上げ、儒教が人間をどのようにとらえているか、どう生きるかについて、自己の生きる課題を結びつけて考えさせる。その際、望ましい人間関係を築きながら社会生活をおくるにはどうすべきかということを考えさせることもできる。その際、性善説や性悪説などを取り上げるにより、今後の思索を深める視点とすることもできる。ともすれば自己や身近な仲間内のみ関心が向きがちな生徒に、良識ある公民としていかに生きるべきかについて思索を深めさせる。自己そして人間についての深い洞察や共感の重要性に気付かせるようにする。共感的理解や共感の重要性についても気づかせる（『解説公民編』）。

### (4) 仏教

仏教では、仏陀の言行をとり上げ、仏教が人間をどのようにとらえているか、どう生きることを目指しているかについて、自己の課題と重ね合わせて思索を深めさせる。自己が単に自己にとどまらず、自己の生きる課題や社会に生きる視点としていかに生きるべきかについて、個人として生きる課題や公民としていかに生きるかに思索を深めるようにする。

仏教の中からも生徒が自分の課題として取り組む考え方を取り上げて思索させる。例を挙げてみる。

仏陀とは真理を悟り、涅槃の境地、絶対の平穩に達した者を意味する。

いまの世に生きている現実の人々は、生・老・病・死の四苦を怖がり、愛する者と分かれなければならない「愛別離苦」、嫌な相手と出会わなくてはならない「怨憎会苦」、望んだものが手に入らない「求不得苦」を皆が経験して苦を感じており、人間の心身を構成する五つの要素（五蘊）の活動が苦しみに満ちている。なぜなら、永遠不変の自己（我）を持っているのではなく、永遠不変でない、現れては消える五つの要素（五蘊）が集合していま現在の姿をとっているだけで、五蘊自体も生成しては消えていくものであり、その五蘊が一つにまとまって、人間や万物をつくっている。

『ミリングダ王の問い』では、ミリングダ王の問いに対して、長老が焚き火の例や手押し車の例を挙げて答える。焚き火は、いま燃えていたことは確かだが、燃えつきたとき、いまの焚き火はどこに行ったかと探す人はいない。焚き火がいま燃えていたことは確かで、燃え尽きた薪も永遠のものではなく、生成変化するものだが、ある時間焚き火をつくっている。人間も同じだと答える。ある時期生きているのは確かだが、五蘊の変化に応じて変化していく。

手押し車も、引き手や車輪を車とはいわない、それが組み立てられたとき、車になる。同様に、人間もどこかに永遠不変の我があるのではなく、生成変化する五蘊がまとまりをもっていま人間としてあるのだと説明する。全てが相対的存在で縁起していて、寄りかかり合っていて、何かが変われば自分も変化する（諸行無常）。

全てが生成変化するものなのに、自分に最も望ましいところで変化しないことを願う（無知）から深刻な苦が生ずる。縁起の法が支配する存在の実相を知らない（無明）ことから煩惱が生じる。煩惱は正しい知を持つことによって涅槃（煩惱が吹き消された境地ニルバーナ）に到る。

涅槃に達した人が仏陀（真理を悟った人）になる。

仏陀は、涅槃に到る方法として、四諦（4つの真理）と八正道を説いている。

仏陀になって、物事に対する執着がなくなれば、真に自由な身になり、生命あるもの全てに対する慈悲の心をもって接することになる。仏教の根本の大切なところを、言葉で説明すれば、上記のように説明することができるのだが、現実の自分が涅槃の境地に至ることは容易ではない。ゴータマ仏陀以後の教団の修業でも容易ではなかったし、仏教が各国に広がってからも、修行する者は多かったが、仏陀になり得た人がどれだけいたかは、分からない。

しかし、修行する人たちがどのように考えて修行していたかを知ることは、道德教育を考える上でも重要だと考えられる。ここでは道元の弟子懐奘が、師の道元が折に触れて弟子たちに教えた言葉を記録しておいたものが基になり、懐奘の死後、懐奘の弟子たちがまとめた『正法眼蔵随聞記』から、修行の一つの例を挙げてみる。

#### 『正法眼蔵随聞記』この十（現代語訳、全文引用）

夜話にいわれた。

師が、法を説かれる席で、禅の法話を聞いて、よく理解するための心得として大切なことは、自分がもとよりよく知っていると思う気持ちを、師の言葉に従って、段々と改めていくことである。例えば、仏というのは自分が前から知っているところでは、そのすぐれた顔かたちや光り輝く光明をそなえ、法を説き衆生を済度する徳のあるお釈迦様・阿弥陀様のことだと理解していたとしても、もし師が、仏というのはひきがえるやみみずだといったら、ひきがえるやみみずを、これが仏であると信じて、日ごろの理解を捨てるのだ。みみずが仏であるといわれたからといって、みみずのうちに、仏の顔かたちや光明や仏がそなえているさまさまの徳を探しもとめるようでは、なお自分勝手な考え方が改まっていないことなのだ。ただ現在見えるところを、そのまま仏と心得るのだ。もしもこのように、師の言葉に従って、自分勝手な見方や本来的な執着心を改めてゆけば自然と仏道にかなうところがあるはずである。ところが、近頃の修行者は、自分勝手な考えに固執し、自分の見解と違うときには、「仏とはかようしかじかのものであるはずである」とか、自分が考えている見解とは違っていると、「そんなはずはない」などといって自分の推量のあてはまるところがないかと、あちこち探しあるくので、まったく悟りの道での前進がないのだ。

また、自分の身を惜しんで、「百尺の竿の先に昇って手足をはなし一步を進めよ」と言われたとき、「命あってこそ、悟りの道を学ぶこともできよう」などといって、師に心から従わないのである。よくよくこのところを思いみるべきである。

ここからは、仏道修行には厳しい師弟関係があったこと、また、人間は先入感が抜きがたく、客観的にありのままに物事を見ることができない場合が多いことがえぐり出されている。このことは、道德教育にもあてはまる。道德の時間の指導を、ある型で行っている場合、学習指導要領の指し示す優れた指導の筋道を提示しても、それが指導の結果で実証されても、自分の型にとらわれている姿に共通する。なにごとも、先入観によって、真に正しいものを見いだすことがむずかしいのが人間である。

道德教育では、ありのままの人間をとらえることが、真に子どもの心に受け入れさせるための基本となる重要な点である。上に引用した修行者の姿を見て、そこから指導の在り方を見直すことも重要

である。

価値的課題は、教育の面から考えれば、人間の本性、自然のままの人間から考えれば、課題となっている価値を実現する道が開かれる。自分の行動が思わぬ結果を生じることもある。また、人間には自己中心的なところがあり、それを自分自身の力では克服できないところがある。仏教でいう「業」やキリスト教でいう「原罪」は、これらのことを含めて人間が制約された存在であるということを言っている。たとえば、『歎異抄』の中に次のようなくだりがある。

親鸞が唯円に問いかける。「お前は私の言うことに背かないか」「すべて師の仰せの通りに致します。「それでは人を千人殺してきなさい。そうすれば成仏できる。」「仰せではございますが、私には千人どころか一人も殺せそうにありません。」「なにを言うか。たった今私の言うとおりにするとおっしゃるばかりではないか。」と言った上で、親鸞はさらに言う。「これで分かったであろう。何でも思い通りにできるものなら成仏のために千人殺せと言われれば殺すこともできよう。しかし、一人も殺せないような条件付けの下にある人は、殺すことはできない。逆に、私は絶対に人を殺さない、と、思っている人が、条件付けによっては、人を殺してしまうこともあるのだ。」(分かりやすく意識)

親鸞のこの言葉は、たとえば自動車を運転する人にとっては、目の前に子どもが飛び出してきたときのことを考えれば、どきりとさせるものをもっている。

このように、人間は、自分がしたい、また、しようとすることをなしうるとは限らず、また、したくないことをしてしまうこともある。自分の意志の通りに物事を行うことができるとは限らないのである。

#### (5) キリスト教

キリスト教が人間をどのように生きることを指し示しているかについて、自己の課題と結びつけて考えさせる。例えば神について考えさせたり、パウロの原罪の思想に見られるキリスト教の人間観と結びつけてとらえ、どのよう生きることを指し示しているかについて、自己の課題と結びつけて考えさせることもできる。そこから、神の愛や隣人愛について自己の課題と結びつけて考えさせ、人間としてよりよい生き方について思索を深めさせる)。

(原罪)

キリスト教の『新約聖書』の中の、パウロによる「ローマ人への手紙」に、次のように書かれている。

「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いが、いつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善は行わないで、かえって、したくない悪を行っています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行っているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。」(世界家庭聖書会日本支部訳)

ここに書かれているのは、キリスト教で言う原罪である。人間は、身体を持つものであるから、自分の意志の通りに物事を行うことができない、制約された存在であるということを言っているのである。

(神の与えるもの)

求めよ。そうすれば与えられるであろう (マタイによる福音書)。

「求めよ、そうすれば与えられるであろう」という言葉は、我が国でも早くから伝えられ、広く知

られてきた。

日本語で書くと、求めているものがそのままえられると受けとめられるが、英文でみると、極めて深い内容が現れてくる。英文ではつぎのようになっている。

Ask, and it shall(will) be given you.

求めなさい。そうすれば it が与えられる。となっている。It は求めていたものかどうかは分からない。この言葉を、ある大会社の社長 A さんの半生記で考えてみる。学生時代は科学者を夢見ていた。父親が急死したので、長男である A さんは、家計を背負って、科学者を断念し、ある会社に入った。夢はあきらめ、会社では配属された会計課で全力を尽くした。やがて企画課長さんから誘われた。会計課の仕事をしている間に、他の部署も知る必要があるので、会社全体の業務を勉強していたので、A さんは会計課の仕事だけでなく、プラス  $\alpha$  の能力が育っていた、そこを企画課長が見て、企画課長としては、自分の課の成績を上げる為に A さんを引き抜いた。そのようなことが繰り返されて、気がついてみれば社長になっていた。科学者を断念して違う人生を歩んで、不満だったかと言えば、そうではなく、現在に満足している。考えてみれば、自分には会社の経営が一番合っている。と書いている。

A さんは会社の中での動きだったが、広く社会を見ても、例えばスポーツの世界では、スカウトが社会の隅々まで目を光らせていて、優れた選手をスカウトするのが常識になっている。スカウトは利己的な動きをしてそれが結果としてスカウトされた者を思いがけない地位に就かせることがある。スポーツでいえば分かりやすいが、他の世界でも皆そのような結果になっている。自分の ask していたものとはちがうかもしれないが、結果として与えられた it は、自分に最もふさわしいものだったということになるようである。

キリスト教では、it は、神が与えたものであろうが、キリスト教以外の立場の人にとっても、周囲が利己的な動きをし、その集積が自分に最もふさわしい結果となることは、理解できる筋道であろう。筆者が大学生を指導していたときは、この言葉を深く理解させたところ、学生たちは将来に意欲を持ち、挫折しても次に向かって頑張る原動力となったようである。道徳教育の手がかりを求めるよう、思想の源流を調べ始めたが、聖書のこの言葉は、単なる Sollen でもなく、Sein でもなく、人生を言い当てている言葉なので、例えば上記のようにとらえさせることによって、特に中学校、高等学校の道徳教育に生かすことができる。

## (6) 国学

第 2 節冒頭にのべたように、我が国古代の人々の生き方を知ることは、我が国の倫理を考える上で重要だと言える。また、道徳授業に当たって、子供の反応が、日本古来の生活感覚がでてきたときのために、取り上げておきたい。小学校では、6 年生の歴史的分野で古事記や日本書記・風土記のような神話時代の内容を学ぶことになっているが、古代の人々の生活感覚まで深めることが十分とは言えない。

古事記や日本書記などを、歴史としてではなく、風土記のように、当時の人々の生活感覚を表している面を取り上げることは、倫理の観点からすれば大切だと言うことができる。

その意味で、国学を、代表者の本居宣長を取り上げてみる。

本居宣長は、『うひ山ぶみ』で見ても学問的方法論がしっかりしているので、その『古事記伝』ほかから日本人の生活感覚を取り上げてみたい。

宣長は、古道説で知られている。宣長の言う古道とは、我が国の古典（古事記など）の解釈などで得られる一筋のまことの道で、仏教や儒教などが入ってきてこざかしい理屈を立てているが、それらは皆空論で、我が国に言い伝えや文字伝えなどで伝わっている古代の道である。古道は、儒教・仏教どの「さかしら」を廃し、感じたまま大事に生きることが大事だと考えられた。

日本人の生来の生活感覚が失われているが、日本人は小賢しい理屈を立てず、感じたままを大事にするところがあった。そこを「もののあわれ」と言っている。感じたままを大事に受け止め、素直な心情を大事に生きる真心を大事にした。このことも、道徳の指導において、子どもの反応がどのように出るか、見ておいてよいと思われる。

## 6 茨城県の高校道徳教育

茨城県では、平成21年度から公立高校1年生に道徳の時間を必修として課している。この準備段階をよく知るものとして、問題を指摘しておきたい。茨城県教委では、平成17年12月22日午後、県教委幹部の道徳教育研修会を持ち、筆者の講話が出発点となった。平成18年度を準備期間として県教委は高校教育の資料を作成し準備を進めた。筆者は多忙のため、準備委員会には入らなかったが、信頼に足る教師を推薦し、県教委は委員会をつくって指導資料をつくった。その課程で準備されている資料が高校生には、拒否反応を生じさせる小・中学校向きの内容であるため、実施すれば生徒の拒否反応がでて成功しないことを高校教育課長や教育長にも文書で警告してきたが、高校課長や教育長の立場では配下の職員が組織を作って生み挙げてきた資料を立てなくてはならない立場と見えて、そのまま実施され、思わしい成果が上がってきていない。この資料は冒頭に高校の学習指導要領の道徳教育の『解説』を載せているが、それだけで内容は小・中学校の道徳教育で満たされていて、高校の道徳教育は『解説総則編』からの引用が巻頭に挙げられているだけで、指導の視点も何もなく、典型的な羊頭狗肉となっている。

本論で紹介している高校の道徳教育が、人間の存在や価値について多面的に思索を深めるものであるが、小・中学校道徳教育が道徳教育だと思い込んでいるアタマでつくられたものであることがわかる。高校の道徳教育がまったく理解されていないものである。

このようなものが参考にされては、道徳性をそだてることにならない。この資料が、参考にされては、高校道徳教育は、本論で述べた、人間としての在り方について思索を深め、生徒自身の人生観、世界観ないし価値観をつくることにならない。固有の価値観を育てることにならない。期待されている主体性も育たない。『解説』及び本論に即した指導の展開が期待される。

### まとめ 都倫研の研究活動への期待

学習指導要領の趣旨を具体的に生かす指導をするためには、都倫研のような専門教師集団による研究活動が極めて重要である。研究団体を維持していくには時間と労力が必要になるが、多くの専門の教師の研究活動は、生徒に重要な力を育てることができる。

筆者は豊多摩高校のとき事務局長を1970年から2年つとめた。前任の村松先生から引き継ぐとき会費が公費負担になったため資金不足で全倫研の年2回の研究大会はできないという引き継ぎを受けた。しかし研究活動は重要であるから、従前通り関東地区大会と全国大会をもつことにし、資金は通知文に出版社の広告を取ることにし、昭和42年度の秋の水戸大会と翌年夏の盛岡大会をもった。この2回



の大会とも、それ以前の大会よりも参加者が多数であったのが印象的であった。

事務局の集まりの後には、Trinken はごく当たり前で、景気づけに「故郷」などをうたったものだ。

事務局長のとき、各県の研究活動を知ることができた。地方の各県が生徒の心に結びつく指導を進めているのを知り、東京本部でも生徒の心に結びつく指導に関心を高めようと呼びかけたことがある。現在の学習指導要領は、知識の教育ではなく地方の各県が生徒の気持ちに結びつく角度から指導を進めている例を知り、本部の研究活動も生徒の魅力を高める方向を目指してきた。

この研究会も、今日の学習指導要領は、思想史ではなく、先哲をめぐる知識でなく先哲の基本的な考え方に触れて生徒自らが思索を深める学習をすることになっている。そのためには各内容にわたって、『解説』も思想史上の概説的な流れや知識でなく先哲の基本的な考え方に触れて、『解説』が具体的に指示しているように、指導をすすめるべきではないであろう。本論の中でもプラトンの理想国を例に述べたところも、そのような指導の在り方を明確にとらえたものである。本論に『解説』に記されている内容を引用しているが、この『解説』に書かれている内容を生徒の課題に結び付くように具体的に構成することが教材研究の課題である。研究活動が会の研究活動を活発化させ、すぐれた指導を展開するよう期待している。

都倫研の研究活動の際に講師を依頼することが例であるが、一般にどのような講師を選んでいるかで、その会の研究活動の現状を知ることができる。その講師をそれぞれの学問分野の専門家を選ぶとすれば、教材研究以前の教材をえらぶ前提となる素材研究にとどまることになる。都倫研の先生方には、教材研究に力を注ぐ方向を期待したい。教材研究に力を注ぐことは、先哲の思想が生徒のどのような課題に結びつくかという課題をはっきりさせることで可能になる。このような扱いは、本論の中で、プラトンの哲人政治を例にした扱い方が参考になる。生徒の必要性と関連させて指導する。プラトンの専門家が学問的にとらえたところとちがって、生徒の必要とする生き方の課題と関連する扱い方である。『解説』に載せられているのは、全て生徒の課題から考えさせることである。プラトンの専門家が学問的にとらえたところとちがい、生徒の必要性から考えるのである。生徒の必要性をどこにとらえるか、それをどのような思想をどのように活用するか。ここが教材研究の要である。そこを都倫研の先生方がどうとらえ、どのように活用するか、生徒の必要性とどう関連させて指導するか、ここが倫理教育の要である。

都倫研も、素材研究にとどまらず、教材研究に十分力を入れていくことが求められよう。

## IV 再録・昭和の巻頭言

『都倫研紀要』の巻頭には、はしがき、はじめに、巻頭言、あるいはその都度のタイトル付きで、その時の会長先生が1～2頁の文章をお書きになっている。いずれも、短い中に会長先生のそれぞれのお人柄がにじむ文章ばかりである。

総目次作成の作業をしていると、すぐその前に書かれている巻頭言は自然に目に入る。単純作業にいささか飽きてきても、巻頭言を読むことで、リフレッシュできたこともしばしばであった。この楽しみを、会員の皆様にも分かち合っただけでないかと、編集作業中に思いついたのが、この巻頭言の再録であった。

本来ならすべての巻頭言を再録したいところではあるが、それは無理なので、都倫研紀要も古いものになると、手元にない会員も多いであろうから、「昭和」の時代に会長をつとめられた先生方の巻頭言を、僭越のそしりは覚悟の上一篇ずつ選ばせていただき、掲載させていただくことにした。

もともと紀要に公開されたものであるから、特に許可をいただくなどはしていない。初代の矢谷芳雄先生はじめ、すでに故人となられた先達のお言葉をこの記念誌に記したいという思いもあつてのことであるから、どうか勝手をご容赦いただければありがたく思う。

事務局長 和田 倫明

## 第4集（昭和40年度） 「はじめに」

初代会長 矢谷 芳雄

顧みれば、東京都高等学校「倫理・社会」研究会が創立されたのは、科目「倫理・社会」の新設に先立つ昭和37年11月でありました。

以来3年有半、熱心な会員諸先生の研究活動に支えられて、会も順調に発展を遂げてまいりました。とくに本会は、当初より、多数会員の参加による分科会組織によって、地道な相互研讃を進めてきたのでありますが、その成果は、すでに「授業内容の研究」と「指導と展開」によって、世に問うたところであります。さらに「倫理・社会」の実施初年度を終ったところで、「この一年をかえりみて」と題する調査報告書を公にしましたから、都倫研の成果としては、本書は第4冊目に当ります。

最初の2年間は、学習指導要領に示された内容を、教科書に沿って忠実に消化していくというたてまえて、研究を重ねてまいりましたが、昨昭和40年度には、その結果どのような問題が提出されつつあるかという問題意識に立って、研究を進めてまいりました。その成果が、この紀要であります。どこまでこのねらいが達成されたか、大方のご高評をいただきたいゆえんであります。

いうまでもなく、われわれの研究は、専門学者のそれではありませんから、未熟不十分な点も多いであろうと思います。しかしまたわれわれは、高校「倫理・社会」を担当する教師として、指導上の問題点を、実感として持っているものであります。同僚・専門家のあたたかいご叱正を多数いただくことによって、研究をいっそう深化し、問題点をいっそう明確にして、任ずるところの責を果したいと考えております。本書の発行にさいして、一言お願い申しあげるとともに、この研究活動に参加された先生方と本書を前にして、実りのよろこびを分かちあいたいと思います。

最後に、とくに、全体のまとめ役をされた鮎沢真澄先生を始め、分科会の世話係や代表して執筆された諸先生の労を多としてお礼を申しあげるとともに、この研究活動に参加された先生方と本書を前にして、実りのよろこびを分かちあいたいと思います。

## 第7集（昭和43年度） 「はじめに」

第二代会長 徳久 鐵郎

「倫理・社会」の科目が設置されてすでに6か年を経過し、研究会としては7年を数えるわけである。この科目は社会科の一科目として誕生したが、その実施の段階を振り返ってみると、社会科的色彩を帯びてはいるものの、心理・倫理・現代社会の三分野、とくに中心テーマとなる思想史の研究に集中してきたことは争い難いように思う。いいかえると、現代の社会的思想的現象の背後にひそむ原理的歴史的教材研究に専心していた傾向を反省することができるように思う。

戦前の修身科の専門家がこうした研究に研究会を組織して研鑽したという話も余りきいたことがな

いし、旧制高校の場合にあっても専攻科目は分離していたためひとりの先生によってこうした追求がなされる例はすくなかったものであろうと思う。思えば、新しい形態の研究分野が次第に醸成されていくのではないかと思われる。いったい何と名付けたなら適当であろうか。

青年の現代の意識は混迷の極にきているといつてよかろうと思われる。大学の学生の各派閥の争いは激化して行きつく所を知らない。背景となっている思想や人生観の手がかりさえつかみ難い現状である。われわれののぞみは、成人後の生徒に、もう少し徹底して倫社の時間に勉強しておきたかったとなげかせないですむためには[どう]すればよいかであろう。「人生」とでも名付くべき内容が盛り込まれるのが至当であるかもしれない。はしがきとして適当か否か疑問のまま機会をみて、会員の皆さまと話合うための素材に、名称と主題についてしるした次第である。

## 第14集 (昭和50年度) 「はしがき」

第三代会長 中村 義之

今年の正月、戸山高校の卒業生から何通かの賀状をもらった。その中に次のようなものがあった。少し長くなるが、そのまま、まず引用させてもらうことにする。「小生、昭和27年戸山高校入学、先生に『ソクラテスの弁明』を習いました。夏休みの後試験があり、『悪法もまた法である』について賛否いかん。またその理由いかん、を問われました。その時私は悪法は認められない、と答え、これには自信がありましたが、その理由(根拠)については、自分でもわけのわからないことを書き、それが心にかかっておりました。その後東京医科歯科大医学部を卒業、大学院を経て2、3の大病院に勤めましたが、ようやく数年前35歳過ぎになって、あの時の試験の解答ができました。これは満点をとれる自信があります。悪法は法と認めない。理由、ソクラテスは自分自身が悪法の犠牲になったのであるが、もし他人がその立場に置かれていたら、果して悪法もまた法なりというであろうか。自己一身の犠牲ですまない時、多くの人々が犠牲になる時そういうだろうか。小生は〇〇の〇〇病院という小さな病院に勤務しています。今は答えが(人生の答えも)出て、すっきりした気分です。」

悪法もまた法であるかどうかは、実定法の立場をとるか、自然法の立場をとるかによって結論が違ってくる。実定法の立場をとるにしても内容的に悪い法は悪法なのであるから、それを無効にする制度が具体的に考えられなければならない。自然法の立場をとり、悪法は法にあらずと主張するにしても、各人に、任意に法を悪法と設定して、それへの服従をこばむ権利を与えれば、救いがたい混乱が生ずるであろう。そこで、実際問題としては、だれが、いかなる条件のもとで、悪法として認定するかという現実の制度の方が問題となる。ソクラテスの場合を「クリトン」の中で、ある程度この辺のことにふれ、国家こそ悪いのだといって勝手に国法に従わない人がいること、国法を改めさせるには改めさせ方があることに言及している。それらを十分に検討し、さらに、不正を行なっても自覚のない市民に不正を自覚させ、ポリスを本来の正しい姿にもどそうとする、国民的使命のために、死を恐れず、国法にあえて従うのである。この辺の事情を考え合わせてゆかないと、満点の解答は書けない。

しかし、上の卒業生は、専門は医学でありながら、人生の問題として、こちらが、とっくの昔に忘れ去っていた問題を真剣に受けとめ、その後10年以上も考え続けて、体験と思索を通して、それなりに実感としての結論を出し、人生の指針もえてくれたことを、うれしく思うのである。

さて、以上のことから私のいいたいことは、次のことである。

- ① 教育、特に倫社教育では、人間にとって重要な問題をいくつか投げ与える。その結論や効果はすぐ出るとは限らないが、蒔いた種はいつか実を結ぶ。蒔く時期は、一般的にはやはり高校生以上であらう。
- ② 私は25年から「クリトン」と「弁明」を15年近く教えてみたが最初5年ほどは、自分も一生けん命研究しながら教えた故か、影響は大きかった。それ以後は調査してみた結果それ程でもなかった。教師がたえず研究し、自分自身を深めていないと教育効果は上らない。
- ③ 角川文庫の「クリトン」や「弁明」は口語訳であるが、それですら今の生徒は論理を追ってゆけないという。昔の生徒と雲泥の差である。教育は生徒に応じて教える。つまり教え方を考えなくてはならない。

都倫研では、本年度の研究主題を「教材内容の平明化」とし、4分科会をもうけるとともに、教育課程の改善に即して特別分科会をもうけ、研究を進めてきたが、その研究成果をまとめて、今回紀要14号を刊行できた。これひとえに、各会員の精進の結果と感謝するとともに、研究の推進役をつとめられた先生方には、特に御礼申し上げる次第である。

## 第15集（昭和51年度） 「はしがき」

第四代会長 岡本 武男

つい一年ばかり前であったと思うが、当代高名の倫理学を担当しておられる大学の教授とお茶をすすっていた。その時この高名の先生は「あんな難しい倫理・社会はやめた方がいいんじゃないか。」と何気なく言われた。僕は全くびっくりしてしまって、「先生、生徒たちにとっては、数学も英語も理科も国語もなんだってみんな難しんですよ。難しいからやめるといふなら、全部やめてしまわねばなりませんね。」と笑いながら反論したことを思い出す。「倫理・社会」は難しくて生徒たちの身につけていないから、役に立たないという声はあちこちで耳にした。現場の学校にも、こういう意見がないわけではない。

昨年の8月、全国「倫理・社会」研究会の大会が終ってから、教育課程の改善について、大会の意を受けて文部省に陳情にいった。高等学校教育課長や視学官や教科調査官等にお会いした。僕は「教育課程審議会の方々には、やはり倫理・社会は難しいからやめるといふ考えが強く働いているのではないですか。」と言ったら、課長さんは「絶対にそんなことはありません。審議会で決まったことですから一課長など何もできません。」というご返事が繰り返された。視学官や教科調査官の方々からは、「高校進学者が中学卒業生の90%以上にもなっている現状を踏まえて、これらの生徒に社会科教育を

どう進めるかということを経済的に考えてほしい。」という意味の発言があった。文部省の課長さんが、「難しいからやめる。」という考えは全くないといわれたけれども、先に書いたような高名の先生やちらほら耳に入ってくる世間の声を聞くとともにしに聞いていると、僕はやはり「難しいからやめた方がいい、身につけていないし、役に立たないからやめた方がいい。」という考えが強く審議会の方々の意識に働いているように思えてならないのである。そのほかに「倫理・社会」という科目をやめねばならぬ理由が不敏にして見つからぬのである。

中学を卒業して高等学校に入ってきて、分数の加減乗除ができない生徒が数多くいることは、世間の常識である。そういう生徒に高等学校の指導要領に基づいて造られた教科書をもろにぶっつけている先生はまずいないであろう。やはりそれらの生徒の学習能力に応じて、教材を与え、わからせる工夫をするのが、教育現場の姿である。数学は難しいからやめる、90%以上のものが高校に入ってくるから、数学の総合科目をつくるなどという議論が成り立つであろうか。

身につかないとか役に立たないという考えは、分らぬわけではない。戦後は修身教育と言ったら、悪い教育の典型のように言われた。しかし僕は必ずしもそう思わない。修身の教科書にもあったし、先生からも教わった「よく遊び、よく学べ。」ということは、今も忘れることはできないし、年を重ねるごとにそのことがよく生きるためにどんなに大切なことかが、切実さをもって迫ってくる。しかし現実の僕はとてもじゃないが、よく学びもしなければよく遊びもしないのである。いうならば身につけていないし、したがって行ってもいけないのである。人からみると役に立っていないのだ。しかし僕はこの教えが僕をダメにしたとも悪い教育だったとも思えないのである。

ソクラテスは知行合一を説いた。それを僕は教えてきたし、この研究会の先生方も一生懸命教えてこられたに違いない。その結果の生徒の言動が知行合一になったなどと誇らしげに語る先生は一人もいないであろうし、そういう生徒がいないからといって、ソクラテスの教えを取りあげることは役に立たないといったら、物笑いになるだろう。

今から15～6年前に「倫理・社会」という科目の独立について文部省は滔々の論を組み立てて、全国の現場教師を説得して回った。今その論は不用になったとして、この科目はなくなろうとしている。しかし人類の教師の言説は、後にくる若い世代にどうしても伝えねばならない。このために努力しておられる先生方に心から敬意を表し、このための推進役をつとめておられる事務局の杉原先生を中心とするスタッフの先生方に、心から御礼を申しあげ、敬意を表する次第である。

## 第18集（昭和54年度） 「はじめに」

第五代会長 増田 信

先生たちの話を聞いていると、生徒にはずいぶんできる子とできない子の差があるけれども、先生はみんなそろって聡明者ぞろいのように聞こえます。また先生は教える者、生徒は学ぶ者と、その役割はきまっているといわんばかりです。できるとかできないとかいっても、それは学生時代だけの格

付けで、学校を出れば、そんなことはいわれなくなるということは、だから学校時代のできるできないなど、たいしたことではないんだという教訓になります。それはそれとして、先生は生徒に対して、いつも自分を完全の位置におくという職業的習性に、ここでは注目したいと思います。

しかし客観的には、決してそんなことはないのであって、先生にもずいぶんできる先生とできない先生がいて、先生もまた大いに学ばなければならないといわれます。そして学ぶということにおしまいはなくて、どんなベテランといわれる先生であっても、学ぶことをやめてもいいということにはならないようです。もちろん先生の中には、そのことを十二分に自覚している人はたくさんいますので、先生たちのおしゃべりに出てくる完全主義的口ぶりと、心の中の研究熱の燃えぐあいは、おのずから区別されるべきものなのでしょう。まだずいぶん怠け者で、給料のためだけに先生をしているという人が、ぼくらの周りに一人もいないとはいえないのは、残念というほかはありません。

ぼくらのこの研究会は、勉強する団体でありたいということで発足しました。そしてその実績をあげてきました。ことしもここに、ことしの勉強の成果をまとめあげることになりました。参加された先生方に敬意を表するとともに、上来述べてきたことは、誰よりもまず会長たるぼく自身のことと、省みて忸怩たる思いをする次第です。

## 第20集（昭和56年度） 「はじめに」

第六代会長 佐藤 勇夫

昭和37年に発足した、私たちの研究会は、本年で満20周年を迎えることになりました。

この間、研究会の充実のため、ひたむきな努力を続けられた歴代の会長先生はじめ、よく研鑽された諸先生、本会発展のためつねにご指導ご鞭撻をいただいた多くの方々に厚くお礼を申し上げたいと思います。

20年の歩みといいますが、それはちょうど高校教育の激しく揺れ動いたなかでの研究活動でした。学校群制度・高校紛争・90パーセントを越える進学率と、何れも私たちの担当する科目の本質に迫るような事実の連続でした。ひきおこされた問題もさまざまであり、しかも困難なものでした。しかし、そのような時代背景のなかでの研究会の活動でありながら、多くの先生方の心を喚起し、先駆的な意味を担ってきたことは間違いございません。それは、研究会としての独自の原則を堅持しながら、なお、当面する具体的特殊な状況によく対応してきたからであると申すことができましょう。また、この時期には、その日その日の風の吹くまゝに過ごすのではなくて、確固とした自己の生き方が教育者の基本であることを身に染みて知らされました。教育者としての自分が厳しく現実から試されていたようです。教育の中心的課題が人間教育であるなら、教師としての自己のあり方と、教師と生徒との信頼関係こそが基盤となるものと考えます。この強固な地盤は、まず教師の人格、力量をいっそう高める研修・研究によって形成されるものと思います。

20年におよぶ研究・研修の内容は、分野からみましても方法からいってもバラエティに富み深



みも加わってまいりました。とくに、正しい判断力や価値観を養うための教材の研究や、授業中の生徒の反応に対する呼応の仕方などは、進学率が高くなってきたことによって、極めて重要な課題となってきました。倫理・現代社会の指導にも質的な変化を促さなければならないと思っています。

これからの教師は、指導方法や教材研究に優れた感覚と技術とをもたねばなりません。その授業のなかに「花」であり、どうしたらその「花」をとらえることができるのかが教師にとってのギリギリの問題であります。私たちは、お互いの体験を精練して「花」をとらえるための秘訣をさらにまとめあげようとしています。たしかに、教師の教材に対する強い問題意識と、ひとりひとりの生徒についての味のつけ方は、先生の独擅場です。それだけに、各地域から、精一杯に勉強し研究した結果がもちよられる研究会の存在は大きいと思われまます。

20周年を迎え、この研究会も一層の発展をなしとげようとしていますが、ここで、お亡くなりになられた事務局長丸山三郎先生（二代目）、副会長和辻夏彦先生（初代）、会長中村義之先生（三代）、お三方それぞれの温顔が思い出されてなりません。

新しい歩みをなすにあたり、諸先生方、ならびに、各方面の方々のご協力を心からお願いいたします次第です。

## 第23集（昭和59年度） 「研究活動の充実・活性化を願う」

第七代会長 寺島 甲 祐

本年度の研究活動も2月4日の四谷商業での第44回の例会で一応幕を閉じることになった。年々歳々人同じからずで若い人が多く出席してくださり嬉しい事この上ないものがあり、また、世代交代の感を一入強くさせられるものである。さて、本年度の研究課題は「現代社会・倫理の課題と指導内容の基礎的研究」となっている。本年度で新教育課程も完成し、われわれは「現代社会」と選択の「倫理」を指導し研究しなければならなくなった。そこで、第三分科会として選択倫理の研究を行い以て現代社会と倫理の関連を追求することになったのである。何か二足のわらじを履くような気がしてならないが、われわれの研究会は飽くまでも人間・倫理の研究にその主体を置かなければならない。昨今、共通一次より現代社会が姿を消すとの噂が流れているが、（そんな事はないと考えるが）そんな噂に左右される事なく、われわれは、両科目に就いて真摯に研究を積まなければならない。われわれの科目は戦前よりいろいろ名称も変えられ、その内容も一寸ばかり入れ替えられて、その都度新規蒔き直しの感を免れぬものであるが、一貫して必須科目として設定されてきたものである。

人間は精神生活をするものである。そこに精神の哲学が誕生するのは当然である。それを無視しよう、権言より除外しようと思っても所詮出来ないものである。われわれの担当する科目は人間教育の根幹をなすものである事を自覚し誇りに思わなければならない。自我に目ざめる高校生にとって、生徒の心を育成し、人生観・世界観の形成に寄与する科目は他に存在しないのである。人間存在の現実を目を開かせ、現存在に意味と理解を与え、価値と理法を認識させ、それを把握させなければならな

い。即ち、単に法則を認識する対象意識の段階より、自己の内面を対象とする自己意識に、更に両者を止揚した理性の段階に迄、精神を昂揚させて行かなければならない。それが、現代社会、倫理の科目なのである。精神科学は難しいものであるが、それなくしては、われわれは一日も安心立命できないものである。

われわれは今後とも大胆にかくあるべき理念・提言・提案を行わなければならない。臨教審に振り廻されている昨今、教育課程の改訂は当分ないものとする。われわれは、地道に研究を行い、お互い、同学同志の仲間としての良き友となり、切磋琢磨する研究会として益々都倫研を発展させて行かなければならない。

## 第24集（昭和60年度） 「生徒から出発する研究を」

第八代会長 酒井 俊郎

都倫研の分科会の開会は午後6時である。といってもこの時間に間に合う人は2～3名である。6時半くらいまでに5～6名が集まって勉強が始まる。7時半くらいになっても駆けつける人があって大体10名前後の参加者となる。取り上げるテキストはさまざまであって、最近では、「イエス伝」（ルナン）、「近世における私の自覚史」（朝永三十郎）などが取り上げられており、今回は「プロテスタンティズムと資本主義の精神」（マックス・ウェーバー）をめぐって話し合うことになっている。

チューターは、数枚から時には10数枚に及びプリントを用意して熱心に発表し、それをめぐって活発な話し合いが9時過ぎまで続く。その熱心さにはまことに敬服する。そして、これが都倫研の伝統だとしみじみ思う。都倫研が発足してから20余年間、一貫してこのような勉強会が続いているのである。「年1回大会を開くだけの研究会にはしたくない。お互いがほんとうに勉強し合える研究会にしたい。」ということでこの会を設立した先輩の初志が、今も脈々と受けつがれていることは、ほんとうにありがたいことだと思う。

勉強会が終りに近づくころになると、「きょうのこの勉強の成果をどのようにしたら生徒に伝えることができるだろうか」という話になる。そして、今の高校生の生活や意識の実態をどう捉え、どう評価したらよいかということめぐってさまざまな意見が述べられる。

今の高校生を、いわば古典的な青年期論の立場で理解できるのかどうか。高校生の意識や行動が変わったというが、いったいどこがどのように変わったのか。変わったとすれば今後どのようなアプローチをしていけばよいのか、等々、真剣な意見が次々に展開されて時の経つのを忘れてしまう。

確かにこの問題こそが最も重要な課題であると思う。生徒が、何を考え、何を求め、何を願っているかを理解することなしに、適切な指導をすることはできない。生徒の生活や意識の実態から出発し、生徒と共に考え共に語り合い、生徒と共に自らの考え、生き方を求めるという在り方を基本にしたいと思う。生徒の実態に迫る調査・研究を、もっと広い立場からもっと深めたいと思うがどうであろうか。

## 第27集（昭和63年度） 「巻頭言」

第九代会長 御厨 良一

新学習指導要領の発表を前にして、一方ではこの指導要領についての研究一案が発表されない段階であったので、研究とは言えないが、「こうあるべきだ」という理想を語る研究を続け、他方ではそれぞれの分野で校務が終って、夕方から各分科会が精力的に研究会をもってきたこの一年であった。

校務を終えてからの研究会、実質的には公務に近い勉強会であるが、手当をいただくわけでもなく、交通費を支給されることもなく、まさに自主研究であったが、精力的に研究を続け、その成果をまとめたこの紀要である。

学習指導要領の改訂を「革命」にたとえようという気持ちはさらさらないが、歴史をたどっていくとフランス革命前夜にはルソーの活躍があったし、アメリカ独立革命の前にはJ. ロックの活躍があった。そして、辛亥革命や中国革命の前には、孫文や毛沢東の哲学があった。

これにくらべてみて、わが国には革命そのものがなかったものの、大化の改新とか建武の中興とか、江戸時代の三大改革、そして明治維新、太平洋戦争後の民主改革など、革命に匹敵する改革が行われたものの、それらの改革に先行する思想がほとんどみあたらないように思うのは、誤りであろうか。

私どもは、新学習指導要領の魁となるような考え方を模索してきたのではない [か] と思う。なぜなら都倫研の長い期間にわたる研究成果があり、授業体験がある。これらを反すうしながら新しい学習指導要領への対応と、同時に現行の指導要領を深める研究を続けてきた。

さきに述べた諸外国の改革に先行する思想と比較すべくもないが、しかし、わが国の静かな改革を引きおこすような隠れた先行研究を続けてきたと言えるのではないだろうか。

最後に、会長の座にとどまること二年、会長らしき働きをすることがなかった、私個人の事情を述べれば、都立高校の改革と大学入試制度への対応にあけくれたこの二年間であり、そのため都倫研の仕事に直接関与し、会長職としてのリード役割を果たすことができなかったことを、深くおわび申し上げたい。来年度は新学習指導要領の改訂に応じた今年以上の活発な研究が行われることを念願してやまない。

（平成元年1月30日記）

V 都倫研活動録  
・『都倫研紀要』 総目次

「都倫研活動録」は、都倫研紀要20集・30集に掲載されたものをもとに「師友の会」配布のために作成されたものをもとにして、本年度までの内容を追加した。『都倫研紀要』総目次は、この記念誌に掲載するために、新たに作成した。

本年度から、広報部長の村野光則先生のお骨折りで、著者の了解が得られた紀要論文を、ホームページで公開するようになった。最近では紀要編集が電子化されているので、このようなことも比較的容易に可能なのだが、それ以前の紀要論文については、これまで埋もれたままであった。

時折、紀要論文についてお問い合わせをいただいて、コピーをお送りすることがあるのだが、本人あるいはどなたかが参考文献として引用してはじめて、その存在がわかり、それを読んだ方が原資料に当たるために、お問い合わせになるのである。私も自分の研究に際して、いわゆる学会誌に掲載された「洗練された」論文ではなく、教室でどのような授業が行われていたのかわかるような「新鮮な」資料が欲しいことがある。そのような観点から「都倫研紀要」は貴重である。ここであらためて総目次を作ることは、単に記念的な意味ではなく、ホームページに掲載することで、インターネット上の検索にヒットするようにして、成果を広く活用していただけるようにとの願いがある。テーマを俯瞰するだけでも、この50年間の教科教育研究の流れを見ることができるだろう。

なお「都倫研紀要」のタイトルを冠したものは4号からである。そのいきさつについては、再録した4号の矢谷芳雄初代会長の巻頭言にもあるので、ご参照いただきたい。さらに中村新吉先生、杉原安先生からも、詳細なご案内をいただいた。

実際の作業は、目次をスキャナで読みとり、パソコンのOCRソフトウェアでテキスト化するのだが、当然変換ミスがあるので、その修正を繰り返す事になる。慎重を期したつもりではあるが、見落としがあれば次号以降で訂正したいので、お気づきの点ご指摘いただければありがたい。特に、お名前の訂正の見落としがあれば、たいへん失礼をしてしまったことになるが、事情ご賢察の上ご寛恕いただければ幸いである。

各号の目次に統一した書式があるわけではないので、この総目次にもある程度不統一が残った。目次に所属が書かれていなかったり、ある期間はタイトルも書かれていなかったりしたが、基本情報としてこれらは補った。学校名の略し方もいろいろだったが、ある程度統一した。他にも、「」か『』か、－（ハイフン）か・（中黒）か、お名前の字体も、旧字を使っている場合とそうでない場合もある。明らかな間違いと気づけば直してあるが（ある号では途中からページがずれていた）、最終的には、元の形式にできるだけ手を入れずにおくことにした。検索という目的ではそれで十分というのは言い訳がましいが、労力と効果を秤にかけた結果とご容赦いただきたい。

この作業が功を奏して、紀要論文についての問い合わせが多少なりとも増えて、研究会の50年の成果がさらに生かされることを願っている。

事務局長 和田 倫明

## 都倫研・全倫研（全公社研）の歩み

| 年次               | 会長                      | 事務局長             | 全倫研・全公社研活動<br>大会開催地、大会テーマ  | 都倫研活動<br>総会会場、研究主題  | 研究成果刊行物  |
|------------------|-------------------------|------------------|--|---|--|
| 昭和37年<br>(1962年) | 初代<br>矢谷 芳雄<br>(忍岡高校長)  | 佐藤 勇夫<br>(忍岡高)   |  | 都倫研創立総会(11月20日)<br>(都立忍岡高校)                                     |  |
| 昭和38年<br>(1963年) | 初代<br>矢谷 芳雄<br>(忍岡高校長)  | 佐藤 勇夫<br>(忍岡高)   |  | 総会・研究発表大会<br>(都立白鷗高校)   |  |
| 昭和39年<br>(1964年) | 初代<br>矢谷 芳雄<br>(忍岡高校長)  | 佐藤 勇夫<br>(忍岡高)   | ・全倫研創立総会<br>(都立白鷗高校)   | 総会・研究発表大会<br>(日大第二高校)   | 『倫理・社会授業内容の<br>研究―指導事例集―』<br>(大阪教育図書)                              |
| 昭和40年<br>(1965年) | 初代<br>矢谷 芳雄<br>(上野高校長)  | 丸山 三郎<br>(上野高)   | ・第2回全国研究大会<br>(国立教育会館)<br>研究討議 望ましい人間像と<br>は何か<br>・第1回関東甲信越大会<br>(東京・千代田女学園)   | 総会・研究発表大会<br>(都立上野高校)<br>「倫社」学習上の問題点をさ<br>らに実践的に掘り下げる           | 『倫理・社会の指導と展開<br>―資料編―』(講談社)<br>全倫研第1回全国調査<br>「倫理・社会」指導の問題<br>点をさぐる |
| 昭和41年<br>(1966年) | 初代<br>矢谷 芳雄<br>(上野高校長)  | 増田 信<br>(上野高)    | ・第3回全国研究大会<br>(私学会館)<br>パネル・ディスカッション「倫<br>理・社会」教育の問題点と改善<br>の方向について<br>・第2回関東甲信越大会<br>(都立赤城台高校)<br>研究討議 授業研究とテーマ<br>別学習における放送教材の利<br>用について                                 | 総会・研究発表大会<br>(都立上野高校)<br>指導内容の構成はどうある<br>べきか                    | 全倫研第2回全国調査<br>「倫理・社会」の指導に関<br>連する生徒の生活と意識<br>の基盤をさぐる               |
| 昭和42年<br>(1967年) | 初代<br>矢谷 芳雄<br>(上野高校長)  | 増田 信<br>(上野高)    | ・第4回全国研究大会<br>(私学会館)<br>研究協議 教育課程における<br>倫社の位置づけについて<br>・第3回関東甲信越大会<br>(都立白鷗高校)<br>研究協議 「倫・社」の授業形<br>態について   | 総会・研究発表大会<br>(都教育会館)<br>「倫理・社会」授業の事例的<br>研究                     |  |
| 昭和43年<br>(1968年) | 2代<br>徳久 鉄郎<br>(東村山高校長) | 村松 悌二郎<br>(東村山高) | ・第5回全国研究大会<br>(大分県別府市ホテル北泉)<br>パネル・ディスカッション 倫社<br>が難しいのはなぜか―どのよ<br>うに授業をし、どのように評価<br>をしたらよいか―<br>・第4回関東甲信越大会<br>(都立戸山高校)<br>合同討議 近代思想の扱い方                                  | 総会・研究発表大会<br>(都教育会館)<br>倫・社指導内容の深化のた<br>めに―原典資料をどのよう<br>に理解するか― | 『倫理・社会指導内容の<br>事例的研究』(清水書院)<br>全倫研第3回全国調査<br>「学習指導要領の改訂に<br>のぞむもの」 |
| 昭和44年<br>(1969年) | 2代<br>徳久 鉄郎<br>(東村山高校長) | 村松 悌二郎<br>(東村山高) | ・第6回全国研究大会<br>(私学会館)<br>研究討議 これからの「倫・社」<br>はどうあるべきか<br>・第5回関東甲信越大会<br>(日大第二高校)<br>座談会 「倫・社」の50年をか<br>えりみる  | 総会・研究発表大会<br>(都教育会館)<br>倫理・社会の指導内容の精<br>選について                   | 全倫研第4回全国調査<br>「倫理・社会」授業から生<br>徒は何を得たか                              |
| 昭和45年<br>(1970年) | 2代<br>徳久 鉄郎<br>(小松川高校長) | 金井 肇<br>(豊多摩高)   | ・第7回全国研究大会<br>(私学会館)<br>研究討議 I 高校生をどうとら<br>えるか<br>II 改訂「倫・社」をど<br>うとらえるか<br>・第6回関東甲信越大会<br>(茨城県立水戸第二高校)<br>研究討議<br>I 先哲の思想を生徒の中に<br>どう生かすか<br>II 先哲の思想の現代的意義<br>とそれを生かす指導法 | 総会・研究発表大会<br>(都教育会館)<br>新学習指導要領をどう具体<br>化するか                    | 「高校生をどうとらえるか」<br>―指導のあり方をさぐる―<br>(高校生問題特別分科会<br>報告第1集)             |

| 年次               | 会長                      | 事務局長           | 全倫研・全公社研活動<br>大会開催地、大会テーマ  | 都倫研活動<br>総会会場、研究主題  | 研究成果刊行物   |
|------------------|-------------------------|----------------|--|---|---|
| 昭和46年<br>(1971年) | 2代<br>徳久 鉄郎<br>(小松川高校長) | 金井 肇<br>(豊多摩高) | ・第8回全国研究大会<br>(岩手県盛岡市産業会館)<br>研究協議 改訂「倫・社」をどう<br>とらえ、どう具体化するか<br>・第7回関東甲信越大会<br>(都立白鷗高校)<br>大会テーマ 生徒の思索を深<br>める授業をどう構成するか          | 総会・研究発表大会<br>(都教育会館)<br>改訂指導要領の具体化ーも<br>の考え方の基本的問題ー         | 「高校生をどうとらえ、どう<br>指導するか」<br>(高校生問題特別分科会<br>報告第2集)<br>全倫研第5回全国調査<br>「改訂指導要領をどう受け<br>止め、どのように展開する<br>か」                |
| 昭和47年<br>(1972年) | 2代<br>徳久 鉄郎<br>(小松川高校長) | 中村 新吉<br>(千歳高) | ・第9回全国研究大会<br>(日大第二高校)<br>大会テーマ 生きがいと倫理・<br>社会の指導<br>・第8回関東甲信越大会<br>(都立赤城台高校)<br>研究討議 学習指導内容の焦<br>点をどこに求め、どのように指<br>導するか           | 総会・研究発表大会<br>(都教育会館)<br>資料を中心とした学習への<br>取り組み                | 「高校生をどうとらえ、どう<br>指導しているか」<br>(高校生問題特別分科会<br>報告第3集)<br>『現代にたつ思想家』<br>(現代文化社)<br>全倫研第6回全国調査<br>「現代の高校生の意識と<br>生活について」 |
| 昭和48年<br>(1973年) | 2代<br>徳久 鉄郎<br>(小松川高校長) | 中村 新吉<br>(千歳高) | ・第10回全国研究大会<br>(日大第二高校)<br>新指導要領に示された「もの<br>の考え方の基本的問題」と教材<br>化をめぐる<br>・第9回関東甲信越大会<br>(栃木県立宇都宮高校)<br>現代の諸問題に「倫理・社会」<br>は どう取り組むべきか | 総会・研究発表大会<br>(都教育会館)<br>評価を中心とした授業研究                        | 『「倫理・社会」教材化の<br>研究』<br>(東京書籍)<br>『現代の高校生像』<br>(第一法規)  |
| 昭和49年<br>(1974年) | 2代<br>徳久 鉄郎<br>(小松川高校長) | 坂本 清治<br>(白鷗高) | ・第11回全国研究大会<br>(日大第二高校)<br>いかに授業に取り組んでいる<br>か<br>・第10回関東甲信越大会<br>(都立戸山高校)<br>「倫理・社会」のねらいをどこに<br>おくかーその原点を求めてー                      | 総会・研究発表大会<br>(都教育会館)<br>「倫理・社会」への新たな取<br>組みー授業展開の工夫と実<br>践ー | 「教科書はどう書かれて<br>いるかーその課題と方向<br>ー」<br>(「教科書研究」特別分科<br>会)  |
| 昭和50年<br>(1975年) | 2代<br>徳久 鉄郎<br>(小松川高校長) | 坂本 清治<br>(白鷗高) | ・第12回全国研究大会<br>(東京都立教育研究所)<br>転換期における「倫社」教育<br>・第11回関東甲信越大会<br>(東京学芸大学附属高校)<br>今後の「倫社」教育のあり方を<br>さぐる                               | 総会・研究発表大会<br>(都教育会館)<br>教材内容の平明化ー今日の<br>生徒に適合する「倫社」へー       |   |
| 昭和51年<br>(1976年) | 3代<br>中村 義之<br>(目黒高校長)  | 杉原 安<br>(保谷高)  | ・第13回全国研究大会<br>(育森県立八戸東高校)<br>「倫理・社会」のねらいと今日<br>の課題ーわかりやすい授業を<br>めざしてー<br>・秋季研究大会<br>(駒沢大学高校)<br>高校教育と「倫理・社会」の意<br>義               | 総会・研究発表大会<br>(都教育会館)<br>テーマ学習を中心としたわか<br>りやすい授業展開           |   |
| 昭和52年<br>(1977年) | 4代<br>岡本 武男<br>(国立高校長)  | 杉原 安<br>(保谷高)  | ・第14回全国研究大会<br>(日大第二高校)<br>「倫理・社会」指導の新しい方<br>向をさぐる<br>・秋季研究大会<br>(神奈川県・サレジオ高校)<br>「倫理・社会」をいかに生かす<br>べきか                            | 総会・研究発表大会<br>(都教育会館)<br>教材内容をどうしぼり深めて<br>いくか                |   |
| 昭和53年<br>(1978年) | 4代<br>岡本 武男<br>(国立高校長)  | 小川 輝之<br>(清瀬高) | ・第15回全国研究大会<br>(奈良市・県文化会館)<br>「倫理・社会」指導の新たな展<br>開を求めて<br>・秋季研究大会<br>(都立竹早高校)<br>全体協議 「現代社会」の諸問<br>題                                | 総会・研究発表大会<br>(都教育会館)<br>「倫理・社会」のねらいをどう<br>生かしていくか           |   |

| 年次               | 会長                       | 事務局長           | 全倫研・全公社研活動<br>大会開催地、大会テーマ   | 都倫研活動<br>総会会場、研究主題                                      | 研究成果刊行物                      |
|------------------|--------------------------|----------------|---|---|------------------------------|
| 昭和54年<br>(1979年) | 5代<br>増田 信<br>(墨田川高校長)   | 小川 輝之<br>(清瀬高) | ・第16回全国研究大会<br>(都立教育研究所)<br>「倫理・社会」発展の方向を<br>求めて<br>・秋季研究大会<br>(都立白鷗高校)<br>社会科における「現代社会」<br>の位置づけ           | 総会・研究発表大会<br>(都教育会館)<br>生徒の意欲を高める授業展<br>開の工夫            |                              |
| 昭和55年<br>(1980年) | 5代<br>増田 信<br>(墨田川高校長)   | 細谷 斉<br>(駒場高)  | ・第17回全国研究大会<br>(札幌市教育文化会館)<br>「倫理・社会」の成果と「現代<br>社会」への構想<br>・秋季研究大会<br>(都立上野高校)<br>「現代社会」の実践に向けて             | 総会・研究発表大会<br>(都教育会館)<br>「倫理・社会」の現代化と「現<br>代社会」への対応      | 『「現代社会」の資料と展<br>開』<br>(清水書院) |
| 昭和56年<br>(1981年) | 6代<br>佐藤 勇夫<br>(府中高校長)   | 細谷 斉<br>(駒場高)  | ・第18回全国研究大会<br>(日大第二高校)<br>「倫理・社会」から「現代社会」<br>へ<br>・秋季研究大会<br>(都立蒲田高校)<br>「現代社会」への積極的な取<br>り組み              | 総会・研究発表大会<br>(都教育会館)<br>「現代社会」の内容構成と教<br>材化の研究          |                              |
| 昭和57年<br>(1982年) | 6代<br>佐藤 勇夫<br>(府中高校長)   | 海野 省治<br>(三田高) | ・第19回全国研究大会<br>(長野県勤労者福祉セン<br>ター)<br>「現代社会」の理念と実践<br>・秋季研究大会<br>(都立清瀬高校)<br>「現代社会」の授業展開とそ<br>の課題            | 総会・研究発表大会<br>(都教育会館)<br>「現代社会」の理念と授業展<br>開の研究           |                              |
| 昭和58年<br>(1983年) | 7代<br>寺島 甲祐<br>(田園調布高校長) | 海野 省治<br>(三田高) | ・第20回全国研究大会<br>(都立蒲田高校)<br>「現代社会」のねらいと指導<br>の工夫<br>・秋季研究大会<br>(東京学芸大学附属高校)<br>「現代社会」の充実した授業<br>を求めて         | 総会・研究発表大会<br>(都教育会館)<br>「現代社会」「倫理」指導の具<br>体的展開          |                              |
| 昭和59年<br>(1984年) | 7代<br>寺島 甲祐<br>(田園調布高校長) | 蛭田 政弘<br>(白鷗高) | ・第21回全国研究大会<br>(神奈川県箱根湯本ホテル)<br>生徒の課題に取り組む「現代<br>社会」<br>・秋季研究大会<br>(都立上野高校)<br>文化と人間の生き方を考える                | 総会・研究発表大会<br>(都教育会館)<br>「現代社会」「倫理」の課題と<br>指導内容の基礎的研究    |                              |
| 昭和60年<br>(1985年) | 8代<br>酒井 俊郎<br>(新宿高校長)   | 葦名 次夫<br>(豊島高) | ・第22回全国研究大会<br>(奈良県文化会館)<br>新教育課程における「倫理」<br>「現代社会」の定着と課題<br>・秋季研究大会<br>(東京・玉川聖学院)<br>現代の課題から人間の生き方<br>を考える | 総会・研究発表大会<br>(都立新宿高校)<br>現代に生きる課題を探究さ<br>せる指導方法の研究      |                              |
| 昭和61年<br>(1986年) | 8代<br>酒井 俊郎<br>(新宿高校長)   | 葦名 次夫<br>(豊島高) | ・第23回全国研究大会<br>(東京・鷗友学園女子校)<br>「現代社会」「倫理」指導の新た<br>な展開を求めて<br>・秋季研究大会<br>(神奈川・サレジオ高校)<br>高校社会科の歩みと倫理教育       | 総会・研究発表大会<br>(都立新宿高校)<br>よりよい生き方を探究させる<br>「現代社会」「倫理」の研究 |                              |



| 年次               | 会長                      | 事務局長             | 全倫研・全公社研活動<br>大会開催地、大会テーマ  | 都倫研活動<br>総会会場、研究主題  | 研究成果刊行物                            |
|------------------|-------------------------|------------------|--|---|------------------------------------|
| 昭和62年<br>(1987年) | 9代<br>御厨 良一<br>(白鷗高校長)  | 工藤 文三<br>(三鷹高)   | ・第24回全国研究大会<br>(兵庫・神戸舞子ピラ)<br>高校社会科における「現代社会」「倫理」「政治・経済」教育の役割と課題<br>・秋季研究大会<br>(都立三田高校)<br>現代の教育課題と「現代社会」の再構成                  | 総会・研究発表大会<br>(都立白鷗高校)<br>現代社会の基本的な問題の理解を踏まえ、自己の生き方を考えさせる指導の研究           |                                    |
| 昭和63年<br>(1988年) | 9代<br>御厨 良一<br>(白鷗高校長)  | 工藤 文三<br>(三鷹高)   | ・第25回全国研究大会<br>(東京・目白学園)<br>高校社会科の“再構成と倫理教育・公民教育”の在り方を考える<br>・秋季研究大会<br>(都立南平高校)<br>新学習指導要領と授業改善の工夫                            | 総会・研究発表大会<br>(都立一橋高校)<br>生徒の身近な問題の教材化と生き方の研究                            |                                    |
| 平成元年<br>(1989年)  | 10代<br>小川 一郎<br>(豊島高校長) | 及川 良一<br>(江北高)   | ・第26回全国研究大会<br>(茨城県・勝田ホテル・ニュー長寿荘)<br>新学習指導要領と公民科の課題<br>・秋季研究大会<br>(都立京橋高校)<br>現代の課題に応える公民科をめざして                                | 総会・研究発表大会<br>(都立新宿高校)<br>現代社会が直面する問題の理解を踏まえ、人間の生き方を考えさせる指導の研究           |                                    |
| 平成2年<br>(1990年)  | 10代<br>小川 一郎<br>(豊島高校長) | 及川 良一<br>(江北高)   | ・第27回全国研究大会<br>(都立九段高校)<br>公民科の在り方を探る<br>・秋季研究大会<br>(都立白鷗高校)<br>「人間としての在り方生き方」を通して公民科を考える                                      | 総会・研究発表大会<br>(都立新宿高校)<br>現代社会の諸問題を課題として担う人間としての在り方生き方について考えさせる指導の研究     |                                    |
| 平成3年<br>(1991年)  | 10代<br>小川 一郎<br>(豊島高校長) | 井上 勝<br>(府中高)    | ・第28回全国研究大会<br>(北海道・北海道経済センター)<br>社会科の実践から公民科の課題へ<br>・秋季研究大会<br>(東京学芸大学附属高校)<br>社会科における魅力ある生き方の指導を考える                          | 総会・研究発表大会<br>(都立新宿高校)<br>現代社会の課題を考えることを通して、生徒に人間としての在り方生き方を探究させる指導の研究   |                                    |
| 平成4年<br>(1992年)  | 11代<br>中村 新吉<br>(北野高校長) | 井上 勝<br>(府中高)    | ・第29回全国研究大会<br>(都立三田高校)<br>公民科教育の理念と構想について考える<br>・秋季研究大会<br>(都立千歳高校)<br>公民科教育の実践に向けて   | 総会・研究発表大会<br>(都立新宿高校)<br>「人間としての在り方生き方」をふまえた「倫理」「現代社会」の指導の研究            | 平成4年度全倫研全国調査報告書―「自己評価」と「高校生の意識と生活」 |
| 平成5年<br>(1993年)  | 11代<br>中村 新吉<br>(北野高校長) | 水谷 禎憲<br>(大泉学園高) | ・第30回全国研究大会―創立30周年記念―<br>(福岡市博物館、西部ガスミュージアム、福岡市民防災センター)<br>公民科のねらいを生かす学習指導計画を考える<br>・秋季研究大会<br>(都立江北高校)<br>現代の課題を踏まえた公民科教育を求めて | 総会・研究発表大会<br>(都立上野高校)<br>生徒が人間としての在り方生き方を自覚し、社会を主体的に生きる生き方を探究するための指導の研究 | 『公民科「倫理」「現代社会」教材化の研究』(東京書籍)        |

| 年次               | 会長                        | 事務局長   | 全倫研・全公社研活動<br>大会開催地、大会テーマ   | 都倫研活動<br>総会会場、研究主題  | 研究成果刊行物  |
|------------------|---------------------------|--|---|---|--|
| 平成6年<br>(1994年)  | 12代<br>坂本 清治<br>(両国高校長)   | 水谷 禎憲<br>(大泉学園高)                                   | ・第31回全国研究大会<br>(都立航空工業高専)<br>公民科としての資質を養う学習指導を求めて<br>・秋季研究大会<br>(大妻女子大中野女子高校)<br>公民科の指導とその課題を探る                                 | 総会・研究発表大会<br>(神楽坂エミール)<br>生徒に現代の諸問題についての理解と関心を深めさせ、広い視野に立って人間としての在り方生き方を考えるようにさせるための指導の研究     | 平成6年度全倫研全国調査報告書<br>-「高校生1万人の価値観と生活意識」-   |
| 平成7年<br>(1995年)  | 12代<br>坂本 清治<br>(両国高校長)   | 増淵 達夫<br>(千歳高)                                     | ・第32回全国研究大会<br>(栃木県・総合文化センター)<br>高校教育における公民科の役割を考える<br>・秋季研究大会<br>(都立上野高校)<br>高校生の意識を踏まえた公民科の指導を考える-「人間としての在り方生き方」に関する教育の充実を求めて | 総会・研究発表大会<br>(東京芸術劇場会議室)<br>人間としての在り方生き方について主体的に考える能力と実践的態度を育てる指導の研究                          |  |
| 平成8年<br>(1996年)  | 13代<br>宮崎 宏一<br>(足立東高校長)  | 増淵 達夫<br>(千歳高)                                     | ・第33回全国研究大会<br>(日大第二高校)<br>公民科における「人間としての在り方生き方」指導の充実を求めて<br>・秋季研究大会<br>(都立国立高校)<br>現代の高校生の課題に応える公民科教育                          | 総会・研究発表大会<br>(国立オリンピック記念青少年総合センター)<br>生徒の主体性を育てながら、他者との共生をめざす生き方を考えさせる指導の研究                   |  |
| 平成9年<br>(1997年)  | 14代<br>小川 輝之<br>(晴海総合高校長) | (都)<br>大谷 いづみ<br>(国分寺高)<br>(全)<br>佐良土 茂<br>(田園調布高) | ・第34回全国研究大会<br>(都立晴海総合高校)<br>現代の高校生の課題に応える公民科教育の在り方を求めて<br>・秋季研究大会<br>(東京・麹町学園女子高校)<br>「人間としての在り方生き方」に関する教育の新たな展開を求めて           | 総会・研究発表大会<br>(都立晴海総合高校)<br>現代の諸問題を自らの課題として、自分自身の人生を生きる力を育む指導の研究                               |  |
| 平成10年<br>(1998年) | 14代<br>小川 輝之<br>(晴海総合高校長) | (都)<br>大谷 いづみ<br>(国分寺高)<br>(全)<br>佐良土 茂<br>(田園調布高) | ・第35回全国研究大会<br>(福島県・郡山女子大学附属高校)<br>「生きる力」を育成する公民科の在り方を求めて<br>・秋季研究大会<br>(都立飛鳥高校)<br>公民科教育の新たな展開を求めて-倫理的自覚を深める学習指導-              | 総会・研究発表大会<br>(都立晴海総合高校)<br>現代社会において「主体的に生きる力」を育む指導の研究   | 平成10年度全倫研全国調査報告書<br>-高校生1万人の自己意識・価値観・生活意識-<br>(全国高校生1万人調査)<br>『キミの悩みに乾杯!』<br>(毎日新聞社) |
| 平成11年<br>(1999年) | 15代<br>海野 省治<br>(永福高校長)   | (都)<br>本間 恒男<br>(育梅東高)<br>(全)<br>渡辺 安則<br>(飛鳥高)    | ・第36回全国研究大会<br>(奈良県社会福祉総合センター)<br>公民科は現代の課題にどう取り組んできたか<br>・秋季研究大会<br>(都立航空工業高専)<br>公民科の理念と新たな実践を求めて                             | 総会・研究発表大会<br>(都立九段高校)<br>変化する社会において、創造的に生きる力を育む指導の研究  |  |
| 平成12年<br>(2000年) | 15代<br>海野 省治<br>(育山高校長)   | (都)<br>本間 恒男<br>(育梅東高)<br>(全)<br>渡辺 安則<br>(飛鳥高)    | ・第37回全国研究大会<br>(都立三田高校)<br>新学習指導要領とこれからの公民科を考える<br>・秋季研究大会<br>(日大第二高校)<br>公民科教育の新たな意義と位置づけを考える                                  | 総会・研究発表大会<br>(都立九段高校)<br>現代の社会を主体的に考察し、自ら問題設定・問題解決のできる力を育てることによって、人間としての在り方生き方についての自覚を育む指導の研究 |  |

| 年次               | 会長                        | 事務局長   | 全倫研・全公社研活動<br>大会開催地、大会テーマ   | 都倫研活動<br>総会会場、研究主題  | 研究成果刊行物   |
|------------------|---------------------------|--|---|---|---|
| 平成13年<br>(2001年) | 15代<br>海野 省治<br>(青山高校長)   | (都)<br>西尾 理<br>(小平西高)<br>(全)<br>渡辺 安則<br>(飛鳥高) | ・第38回全国研究大会<br>(都立航空工業高専)<br>生徒の生き方にせまる公民科<br>—新教育課程の中で果たす役割—   | 総会・研究発表大会<br>(都立九段高校)<br>「生徒が変化の激しい現代<br>社会に振り回されないため<br>に、社会の将来を担う立場<br>にあることを自覚し、自ら問<br>題設定、問題解決できる力<br>を育成する授業方法の研究」       | 平成13年度全倫研全国<br>高校生意識調査<br>—高校生の自己意識・価<br>値観・生活意識— |
| 平成14年<br>(2002年) | 15代<br>海野 省治<br>(青山高校長)   | (都)<br>広末 修<br>(北野高)<br>(全)<br>渡辺 安則<br>(飛鳥高)  | ・第39回全国研究大会(最終<br>回)(全倫研・公社全協共催)<br>全国公民科・社会科教育研究<br>会(全公社研)創立総会(全倫<br>研と公社全協の統合による)<br>(札幌商工会議所附属専門<br>学校)<br>新教育課程の公民科の授業を<br>こうつくる | 総会・研究発表大会<br>(都立九段高校)<br>生徒が現代の社会の諸問題<br>について、自ら問題設定・問<br>題解決のできる力を持ち、人<br>間としての在り方生き方につ<br>いての深い自己洞察を行え<br>るような指導の研究         |   |
| 平成15年<br>(2003年) | 16代<br>喜多村 健二<br>(国分寺高校長) | 広末 修<br>(北野高)                                  | ・第2回全公社研全国研究大会<br>(新潟市万代市民会館)<br>21世紀の公民科・地歴科教育<br>の課題—新学習指導要領の本<br>格実施を受けて—  | 総会・研究発表大会<br>(麹町学園女子高校)<br>生徒が市民社会の一員とし<br>ての自分を見つめつつ、学<br>習の主人公となって主体的<br>に取り組めるような授業と教<br>材の研究                              |   |
| 平成16年<br>(2004年) | 16代<br>喜多村 健二<br>(国分寺高校長) | 村野 光則<br>(お茶の水女子<br>大附属高)                      | ・第3回全公社研全国研究大会<br>(都立工芸高校)<br>生徒が主体的に学ぶ公民科教<br>育の推進   | 総会・研究発表大会<br>(都立九段高校)<br>生徒に公民科への関心を高<br>めさせ、さらに社会の中で<br>主体的に生きる態度を養わ<br>せるための授業方法、教材<br>開発の研究                                |   |
| 平成17年<br>(2005年) | 16代<br>喜多村 健二<br>(国分寺高校長) | 村野 光則<br>(お茶の水女子<br>大附属高)                      | ・第4回全公社研全国研究大会<br>(都立工芸高校)<br>生徒の主体的な「学び」を深め<br>るために—新学習指導要領実<br>施3年目を迎えて—  | 総会・研究発表大会<br>(都立九段高校)<br>生徒が現代社会の問題につ<br>いて理解を深め、人間とし<br>ての在り方生き方についての<br>自覚をもとに主体的に生きる<br>態度を育成する指導の研究                       |   |
| 平成18年<br>(2006年) | 17代<br>及川 良一<br>(向島工業高校長) | 村野 光則<br>(お茶の水女子<br>大附属高)                      | ・第5回全公社研全国研究大会<br>(横浜市海港記念会館)<br>生徒の主体的な「学び」を深め<br>るために—社会の変化に対応<br>する公民科・社会科教育の展<br>開—   | 総会・研究発表大会<br>(都立九段高校)<br>生徒が現代社会の問題につ<br>いて、理解を深めるととも<br>に、人間としての在り方生き<br>方についての自覚にもとづ<br>いて主体的に生きる態度を<br>育成する指導の研究           |   |
| 平成19年<br>(2007年) | 18代<br>辻 勇一郎<br>(葛飾野高校長)  | 村野 光則<br>(お茶の水女子<br>大附属高)                      | ・第6回全公社研全国研究大<br>会<br>(水戸市・常磐大学)<br>公民科における人間の在り方<br>生き方教育の活性化をめざし<br>て   | 総会・研究発表大会<br>(お茶の水女子大学附属<br>高校)<br>人間としての在り方生き方<br>についての自覚にもとづいて、<br>現代の社会について理解を<br>深めるとともに、主体的に生<br>きる態度を育成する指導の<br>研究      |   |
| 平成20年<br>(2008年) | 19代<br>立石 武則<br>(若葉総合高校長) | 村野 光則<br>(お茶の水女子<br>大附属高)                      | ・第7回全公社研全国研究大<br>会<br>(福岡市・都久志会館)<br>公民科・社会科における知識<br>の習得・活用・探究とは何か—<br>在り方生き方の学びのために<br>—  | 総会・研究発表大会<br>(お茶の水女子大学附属<br>高校)<br>国際社会の一員としての自<br>覚にもとづいて、現代の社会<br>について理解を深めるととも<br>に、よりよい未来を目指して<br>主体的に生きる態度を育成<br>する指導の研究 |   |

| 年次               | 会長                        | 事務局長              | 全倫研・全公社研活動<br>大会開催地、大会テーマ   | 都倫研活動<br>総会会場、研究主題  | 研究成果刊行物 |
|------------------|---------------------------|-------------------|---|---|---------|
| 平成21年<br>(2009年) | 19代<br>立石 武則<br>(若葉総合高校長) | 和田 倫明<br>(産業技術高専) | ・第8回全公社研全国研究大会<br>(東京都立工芸高校)<br>新学習指導要領における公民科のめざすもの                      | 総会・研究発表大会<br>(お茶の水女子大学附属高校)<br>現代の社会について主体的に考察させ、理解を深めさせるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を育てる指導の研究                |         |
| 平成22年<br>(2010年) | 20代<br>及川 良一<br>(三田高校長)   | 和田 倫明<br>(産業技術高専) | ・第9回全公社研全国研究大会<br>(日本大学)<br>新学習指導要領の実施に向けた指導内容と指導方法の改善                    | 総会・研究発表大会<br>(都立三田高校)<br>現代の社会について主体的に考察させ、理解を深めさせるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を育てる指導の研究および新学習指導要領の実施に伴う指導の改善 |         |
| 平成23年<br>(2011年) | 20代<br>及川 良一<br>(三田高校長)   | 和田 倫明<br>(産業技術高専) | ・第10回全公社研全国研究大会<br>(ポートプラザちば)<br>新学習指導要領の実施に向けた教材研究と授業実践～3.11後の公民科教育を考える～ | 総会・研究発表大会<br>(都立三田高校)<br>現代の社会について主体的に考察させ、理解を深めさせるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚とよりよく生きる意欲を育てる指導の研究            |         |

## 『都倫研紀要』総目次

・先行する出版物をカウントしたため、『都倫研紀要』の名を冠して発行されたのは第4集(昭和40年度)からである。  
 ・「分類」「タイトル」「所属」「執筆者」「頁」の順である。頁は号数(2ケタ)頁(3ケタ)の5ケタ表示としている。

### 第4集 (昭和40年度)

|                         |          |       |         |
|-------------------------|----------|-------|---------|
| はじめに                    |          |       | [04001] |
| 参加者名簿                   |          |       | [04003] |
| 研究活動の経過                 |          |       | [04007] |
| 研究報告                    |          |       |         |
| 「人間性の理解」の指導上の問題         | 江戸川高校    | 高橋定夫  | [04025] |
| ソクラテスの幸福観について           | 都立教育研究所  | 小島章一  | [04039] |
| アリストテレスの幸福論             | 杉並高校     | 秋山明   | [04046] |
| イエスキリストによる幸福のとらえかた      | 桜水商業高校   | 佐々木誠明 | [04052] |
| エピクロスとストア派の幸福論          | 桜町高校     | 西村忠   | [04057] |
| カントの幸福論について             | 大山高校     | 中村新吉  | [04062] |
| ベンサム幸福について              | 日本大学第二高校 | 小笠原悦郎 | [04071] |
| 仏陀の根本思想                 | 羽田工業高校   | 吉沢正晶  | [04077] |
| 徳心本尊鈔・歎異鈔・正法眼蔵随聞記の倫理    | 葛飾野高校    | 菅原又七郎 | [04081] |
| 現代の思想とどうとり組んだらよいか       | 砧工業高校    | 沼田俊一  | [04090] |
| 自己展開学習の実際例—生徒の手記を中心として— | 駒場高校     | 鮎沢真澄  | [04103] |
| あとがき                    |          |       | [04134] |

### 第5集 (昭和41年度)

|                              |          |       |         |
|------------------------------|----------|-------|---------|
| はしがき                         | 会長       | 矢谷芳雄  | [05001] |
| 本年度の研究体制と研究主題について            |          |       | [05005] |
| 研究活動の経過および参加者名簿              |          |       |         |
| 第一分科会                        |          |       | [05007] |
| 第二分科会                        |          |       | [05009] |
| 第三分科会                        |          |       | [05013] |
| 第四分科会                        |          |       | [05017] |
| 研究報告                         |          |       |         |
| 第一分科会                        |          |       |         |
| 鎌倉仏教—特に親鸞を中心として—             | 千代田女学園   | 岩下栄次  | [05020] |
| 中国思想—老子・孔子—                  | 八潮高校     | 小島次郎  | [05024] |
| 「古代インドの思想」指導の試案              | 駒沢大高校    | 市川仏乗  | [05030] |
| ヒューマニズムの立場                   | 東京女学館    | 潮安    | [05035] |
| 功利主義で何を教えるべきか                | 九段高校     | 菊川忠夫  | [05042] |
| 倫理・社会教育のためのカント               | 武蔵高校     | 小島章一  | [05046] |
| マルクス                         | 赤城台高校    | 鈴木宣雄  | [05055] |
| 第二分科会                        |          |       |         |
| 主題別学習の意義                     | 豊多摩高校    | 金井肇   | [05061] |
| 主題学習の展開と思想史・時代背景の関連          | 大山高校     | 中村新吉  | [05065] |
| 現代の思想をどのようにおさえるか             | 井草高校     | 渡辺浩   | [05072] |
| 主題別学習にさいし、東洋・日本の思想をとり扱う場合の一例 | 桜水商業高校   | 佐々木誠明 | [05079] |
| 第三分科会                        |          |       |         |
| 主題別編集の教科書批判                  | 日本大学第二高校 | 小笠原悦郎 | [05084] |
| 主題別学習の隘路とその克服について            | 荻窪高校     | 小川一郎  | [05090] |
| 第四分科会                        |          |       |         |
| 倫社思想教材の取扱い(中国思想)             | 両国高校(定)  | 古沢三郎  | [05097] |
| 年間指導計画の試み                    | 江戸川高校    | 高橋定夫  | [05104] |
| 私の年間授業計画と反省                  | 忍岡高校     | 村松悌二郎 | [05109] |
| 年間授業計画                       | 深川高校     | 田中正彦  | [05116] |
| 第一分科会                        |          |       |         |
| 主題別学習による倫社指導内容の構成について        | 小平高校     | 井原茂幸  | [05121] |
| あとがき                         |          |       | [05132] |

### 第6集 (昭和42年度)

|   |        |      |         |
|---|--------|------|---------|
| 編集者註：この号は『「倫理・社会」授業の事例的研究 付 生徒作文による授業反応』と題され、項目ごと |        |      |         |
| はじめに  | 会長     | 矢谷芳雄 |         |
| 執筆者名簿   |        |      |         |
| 研究テーマと研究体制  |        |      |         |
| 研究活動の経過報告   |        |      |         |
| 研究報告  |        |      |         |
| 第一分科会『人間性の理解』                                     |        |      |         |
| 自己の形成   | 王子工業高校 | 仙崎武  | [06001] |

|                       |            |       |         |
|-----------------------|------------|-------|---------|
| パーソナリティの発展と情操         | 練馬高校       | 山口俊二  | [06005] |
| 友情                    | 王子工業高校     | 仙崎武   | [06009] |
| 第二分科会『古代人の思想』         |            |       |         |
| ソクラテスの思想              | 忍岡高校       | 村松悌二郎 | [06013] |
| プラトンの思想               | 雪谷高校       | 小鹿山隆  | [06017] |
| アリストテレスの思想            | 杉並高校       | 秋山 明  | [06021] |
| エピクロスの思想              | 桜水商業高校     | 佐々木誠明 | [06025] |
| ストア派の思想               | 桜町高校       | 西村忠   | [06029] |
| イエスの思想                | 府中高校       | 沼田俊一  | [06033] |
| 釈迦の思想                 | 墨田川高校      | 細谷齊   | [06037] |
| 孔子の思想                 | 小岩高校       | 坂本清治  | [06041] |
| 孟子と荀子の思想              | 赤城台高校      | 御厨良一  | [06045] |
| 老子と荘子の思想              | 日本大学第二高校   | 小笠原悦郎 | [06049] |
| 第三分科会『近代人の思想』         |            |       |         |
| ルネサンスの思想              | 千歳丘高校      | 渋沢芳三  | [06053] |
| 宗教改革の思想               | 大山高校       | 中村新吉  | [06057] |
| デカルトの思想               | 深川高校       | 田中正彦  | [06061] |
| カントの思想                | 四谷商業高校     | 永上肆朗  | [06065] |
| 自然法の考え方(ホッブス・ロックを中心に) | 荻窪高校       | 小川一郎  | [06069] |
| ルソーの思想                | 赤城台高校      | 鈴木宣雄  | [06073] |
| 功利主義(ベンサムとミルの比較)      | 杉並高校       | 新井清   | [06077] |
| ヘーゲルの思想               | 町田高校       | 寺島甲祐  | [06081] |
| 第四分科会『現代人の思想』         |            |       |         |
| 実存と自由                 | 小平高校       | 井原茂幸  | [06085] |
| キルケゴールの宗教的実存          | 豊多摩高校      | 金井肇   | [06089] |
| マルクスの思想               | 三田高校       | 菊地堯   | [06093] |
| ガンジーとネールの思想           | 大東文化大学第一高校 | 佐原一宇  | [06097] |
| 第五分科会『日本人の思想』         |            |       |         |
| 現代の倫理学                | 上野高校       | 石森勇   | [06101] |
| 親鸞の思想                 | 向丘高校       | 米田成夫  | [06105] |
| 日蓮と日蓮宗                | 江戸川高校      | 高橋定夫  | [06109] |
| 伊藤仁斎の思想               | 戸山高校       | 渡部武   | [06113] |
| 西洋近代思想の受容             | 井草高校       | 渡辺浩   | [06117] |
| 西田哲学                  | 都立武蔵高校     | 小島章一  | [06121] |
| 第六分科会『現代社会と人間関係』      |            |       |         |
| 大衆社会と個人               | 都立城北高校     | 籠原幸一  | [06125] |
| 現代の社会病理               | 葛飾商業高校     | 浅香育弘  | [06129] |
| 大衆社会と個人               | 北高校        | 吉田大蔵  | [06133] |
| 現代の日本社会               | 深川高校       | 道広史行  | [06137] |
| 家族の諸問題                | 葛西工業高校     | 綿貫博   | [06141] |
| 職域社会の人間関係             | 蔵前工業高校     | 木村正雄  | [06145] |
| 会則                    |            |       | [06149] |
| 事務局を担当して              | 事務局長       | 増田信   | [06150] |
| あとがき                  | 事務局        | 石森勇   | [06152] |

### 第7集(昭和43年度)

「原典・資料をどう理解するか」

|                                  |          |       |         |
|----------------------------------|----------|-------|---------|
| はじめに                             | 会長       | 徳久銃郎  | [07001] |
| 参加者名簿                            |          |       | [07002] |
| 研究主題と研究体制                        |          |       | [07007] |
| 研究会の全般的活動の概要                     |          |       | [07008] |
| 各分科会の研究経過報告                      |          |       | [07010] |
| 研究報告                             |          |       |         |
| 第一分科会 人間性の理解                     |          |       |         |
| 宮城音弥「性絡」、相場均「性格」                 | 忍岡高校     | 高瀬康好  | [07026] |
| 宮城音弥「人間性の心理学」                    | 忍岡高校     | 高瀬康好  | [07030] |
| 島崎敏樹「感情の世界」                      | 練馬高校     | 山口俊治  | [07034] |
| S. I. ハヤカワ 「思考と行動における言語」(大久保忠利訳) | 都立城北高校   | 松崎千秋  | [07038] |
| 第二分科会 西洋の思想                      |          |       |         |
| プラトン「クリトン」(久保勉訳)                 | 葛飾野高校    | 秋山明   | [07042] |
| トマス・アキナス                         | 洗足学園第一高校 | 高野啓一郎 | [07046] |
| マキャヴェリ「君主論」(池田廉訳)                | 雪谷高校     | 小鹿山隆  | [07050] |
| モンテーニュ「随想録」(関根秀雄訳)               | 四谷商業高校   | 永上肆朗  | [07054] |
| パスカル「パンセ」(津田穰訳)                  | 四谷商業高校   | 永上肆朗  | [07054] |

|         |   |          |       |         |
|---------|---|----------|-------|---------|
|         | F・ベーコン「新機関＝ノウム・オルガヌム」(服部英次郎訳)                 | 小平高校     | 井原茂幸  | [07058] |
|         | ホップス「リヴァイアサン」(田中弘訳)、「宗教的寛容に関する書簡」(浜村正夫訳)      | 安田学園高校   | 香川弘   | [07062] |
|         | モンテスキュー「法の精神」(根岸国孝訳)                          | 井草高校     | 中村佑二  | [07066] |
|         | カント「道徳哲学」(白井、小倉訳)                             | 大山高校     | 中村新吉  | [07070] |
|         | ヘーゲル「小論理学」(松村一人訳)、「大論理学」(武市健人訳)               | 町田高校     | 寺島甲祐  | [07074] |
|         | ベルクソン「哲学入門」(河野與一訳)                            | 井草高校     | 渡辺浩   | [07078] |
|         | スピノザ「エチカ＝Ethica」                              | 都立武蔵高校   | 小島章一  | [07082] |
| 第三分科会   | 東洋の思想   |          |       |         |
|         | ベック「仏教(上)」(渡辺照宏訳)                             | 墨田川高校    | 細谷齊   | [07086] |
|         | 「論語」(金谷 治訳註)                                  | 葛飾商業高校   | 浅香育弘  | [07090] |
|         | 「論語」(金谷 治訳註)、「孔子」(山下政治)                       | 羽田工業高校   | 沢沢正晶  | [07094] |
|         | 「老子」  | 白鷺高校     | 坂本 清治 | [07098] |
|         | 「孟子」  | 日本大学第二高校 | 小笠原悦郎 | [07102] |
|         | 「歎異抄一附現代語訳」(梅原真隆訳註)                           | 千代田女学園高校 | 岩下栄治  | [07106] |
| 第四分科会   | 日本の思想   |          |       |         |
|         | 親鸞「歎異抄」                                       | 井草高校     | 増田信   | [07110] |
|         | 道元「正法眼蔵随聞記」(侍者、懐奘編)                           | 東村山高校    | 村松佛二郎 | [07114] |
|         | 日蓮「開目抄」                                       | 江戸川高校    | 高橋定夫  | [07118] |
|         | 伊藤仁斎「童子問」                                     | 城南高校     | 中島清   | [07122] |
|         | 本居宣長「玉くしげ」                                    | 城南高校     | 高橋正夫  | [07126] |
|         | 福沢諭吉「学問のすすめ」                                  | 荻窪高校     | 小川一郎  | [07130] |
|         | 福沢諭吉「福翁自伝」                                    | 三田高校     | 菊地克   | [07134] |
|         | 内村鑑三「キリスト信徒のなぐさめ」                             | 豊多摩高校    | 金井肇   | [07138] |
|         | 新渡戸稲造「武士道」(Bushido, the Soul of Japan 矢内原忠雄訳) | 足立工業高校   | 佐藤哲男  | [07142] |
|         | 西田幾多郎「善の研究」                                   | 羽田高校     | 吉原広明  | [07146] |
|         | 夏目漱石「こころ」                                     | 桜水商業高校   | 佐々木誠明 | [07150] |
| 第五分科会   | 現代の思想   |          |       |         |
|         | マルクス・エンゲルス「共産党宣言」(大内・向坂 訳)                    | 玉川高校     | 川瀬吉郎  | [07154] |
|         | W. ジェームズ「プラグマティズム」(榊田啓三郎 訳)                   | 赤城台高校    | 御厨良一  | [07158] |
|         | ロマン＝ロラン「ペーターベンの生涯」                            | 久留米高校    | 長竿明   | [07162] |
|         | 毛沢東「実践論・矛盾論」                                  | 都立城北高校   | 籠原幸一  | [07166] |
| 第六分科会   |   |          |       |         |
|         | 清水幾太郎「社会的人間論」                                 | 蔵前工業高校   | 木村正雄  | [07170] |
|         | C・ライト・ミルス「ホワイトカラー」(杉政孝 訳)                     | 紅葉川高校    | 山平昭之助 | [07174] |
|         | 清水幾太郎「社会心理学」                                  | 葛飾商業高校   | 川崎啓介  | [07178] |
|         | 川島武宜「日本社会の家族的構成」                              | 忍岡高校     | 伊藤駿二郎 | [07182] |
|         | 福武直「日本農村の社会的性格」                               | 向島工業高校   | 小川輝之  | [07186] |
| 東京都高等学校 | 「倫理・社会」研究会規約                                  |          |       | [07190] |
| 事務局より   |   |          |       | [07191] |
| あとがき    |   |          |       | [07192] |

### 第8集(昭和44年度)

「どう指導内容を精選するか」

|                      |        |            |         |
|----------------------|--------|------------|---------|
| はしがき                 | 会長     | 徳久鉄郎       | [08001] |
| 本年度の研究主題と研究組織        | 研究責任者  | 井原茂幸・高野啓一郎 | [08004] |
| 本年度の研究経過の概要          |        | 井原茂幸・高野啓一郎 | [08007] |
| 研究報告                 |        |            |         |
| 第一分科会・現代社会と人間についての精選 |        |            |         |
| 第一分科会の研究経過報告         | 世話人    | 小川輝之・高瀬康好  | [08009] |
|                      |        | 小川輝之・高瀬康好  | [08011] |
|                      |        | 高瀬康好       | [08016] |
| 青年期の課題               | 忍岡高校   | 高瀬康好       | [08016] |
| 大衆社会と人間疎外            | 蔵前工業高校 | 木村正雄       | [08020] |
| 大衆社会と人間存在            | 安田学園高校 | 香川弘        | [08024] |
| ヒューマニズムの探求           | 東京女学館  | 潮安         | [08028] |

|                          |          |           |         |
|--------------------------|----------|-----------|---------|
| 人格の発達                    | 一橋高校     | 塚田哲男      | [08033] |
| 第二分科会・思想内容による人物中心の精選     |          |           |         |
| 第二分科会の研究経過報告             | 世話人      | 佐藤哲男・渡辺浩  | [08037] |
| 「思想内容による人物中心の精選」の考え方     |          | 佐藤哲男・渡辺浩  | [08039] |
| ギリシャの思想－ソクラテス            | 江戸川高校    | 海野省治      | [08043] |
| キリスト教思想－イエス・パウロを中心として    | 赤城台高校    | 御厨良一      | [08047] |
| デカルト                     | 東村山高校    | 村松悌二郎     | [08051] |
| 啓蒙思想－ルソー                 | 両国高校     | 小平克       | [08055] |
| イギリス功利主義－ベンサム            | 東高校      | 杉原安       | [08059] |
| 社会主義思想－マルクスを中心として        | 三田高校     | 菊地堯       | [08063] |
| 実存主義－キルケゴールを中心に          | 江戸川高校    | 佐藤哲男      | [08067] |
| 仏教の思想－シャカ                | 豊多摩高校    | 金井肇       | [08071] |
| 親鸞・日蓮・道元                 | 竹早高校     | 石森勇       | [08075] |
| 国学－本居宣長                  | 玉川高校     | 川瀬吉郎      | [08079] |
| 日本の近代思想                  | 忍岡高校     | 渡辺浩       | [08083] |
| 第三分科会・主題・類型別観点からの指導内容の精選 |          |           |         |
| 第三分科会の研究経過報告             | 世話人      | 沼田俊一・寺島甲祐 | [08087] |
| 「主題・類型別観点からの指導内容の精選」の考え方 |          | 沼田俊一・寺島甲祐 | [08088] |
| 人間の行動                    | 四谷商業高校   | 永上肆朗      | [08091] |
| 人間と道徳                    | 小平高校     | 井原茂幸      | [08095] |
| 文化と人間                    | 荻窪高校     | 小川一郎      | [08099] |
| 家庭生活と人間                  | 井草高校     | 中村佑二      | [08103] |
| 国家と人間                    | 鷲宮高校     | 佐々木誠明     | [08107] |
|                          | 育英高専     | ガエタノコンプリ  | [08111] |
| 世界観、人生観の序章               | 駒場高校     | 鮎沢真澄      | [08111] |
|                          | 府中高校     | 沼田俊一      |         |
|                          | 育英高専     | ガエタノコンプリ  | [08112] |
| 宇宙における人間の地位（存在の問題）       | 駒場高校     | 鮎沢真澄      | [08112] |
|                          | 府中高校     | 沼田俊一      |         |
|                          | 育英高専     | ガエタノコンプリ  | [08114] |
| 世界、この妙なる存在（世界観の展望）       | 駒場高校     | 鮎沢真澄      | [08114] |
|                          | 府中高校     | 沼田俊一      |         |
|                          | 育英高専     | ガエタノコンプリ  | [08121] |
| 人間・この未知なるもの（人間観の展望）      | 駒場高校     | 鮎沢真澄      | [08121] |
|                          | 府中高校     | 沼田俊一      |         |
|                          | 育英高専     | ガエタノコンプリ  | [08124] |
| 宗教と人間                    | 駒場高校     | 鮎沢真澄      | [08124] |
|                          | 府中高校     | 沼田俊一      |         |
|                          | 町田高校     | 寺島甲祐      | [08131] |
| 弁証法的唯物論                  | 町田高校     | 寺島甲祐      | [08135] |
| 観念論                      | 町田高校     | 寺島甲祐      | [08135] |
| 創造論（ユダヤ教、キリスト教、イスラム教）    | 洗足学園第一高校 | 高野啓一郎     | [08139] |
| インドの世界観（仏陀と原始仏教）         | 墨田川高校    | 細谷斉       | [08143] |
| 特別分科会・学習指導要領の改定に関する研究    |          |           |         |
| 研究主題・研究経過の報告             | 世話人      | 中村新吉・金井肇  | [08147] |
| 事務局より・会則・事務局組織内規         |          |           | [08151] |

### 第9集（昭和45年度）

#### 「新学習指導要領の具体化」

|                   |                  |            |            |         |
|-------------------|------------------|------------|------------|---------|
| はじめに              | 倫理・社会は教育の総観的立場より | 会長         | 徳久鉄郎       | [09001] |
| 分科会参加者名簿          |                  |            |            | [09006] |
| 研究主題と研究体制         |                  | 研究部長・研究副部長 | 中村新吉・伊藤駿二郎 | [09008] |
| 研究主題の具体化（本紀要執筆要領） |                  |            |            | [09011] |
| 本年度の研究活動の概要       |                  |            |            | [09014] |
| 分科会研究活動経過報告       |                  |            |            |         |
| 第一分科会 現代と人間       |                  | 世話人        | 小川輝之・木村正雄  | [09018] |



|                     |                            |          |                |         |
|---------------------|----------------------------|----------|----------------|---------|
| 第二分科会               | 思想の源流                      | 世話人      | 渡辺梧郎・小笠原悦郎     | [09020] |
| 第三分科会               | 現代と思想                      | 世話人      | 渡辺浩・永上肆朗       | [09022] |
| 第四分科会               | 日本の思想                      | 世話人      | 細谷斉・吉澤正晶       | [09026] |
| 第1特別分科会             | 改訂学習指導要領                   | 世話人      | 佐々木誠明・菊池堯・御厨良一 | [09028] |
|                     | 高等学校学習指導要領案（「倫理・社会」）に関する意見 |          |                | [09031] |
| 第2特別分科会             | 高校生問題                      |          |                | [09040] |
| 年間学習指導計画案           |                            |          |                |         |
|                     | <現代と人間>                    |          |                | [09044] |
|                     | <思想の源流>                    |          |                | [09047] |
|                     | <現代と思想>                    |          |                | [09053] |
|                     | <日本の思想>                    |          |                | [09057] |
| 研究報告                |                            |          |                |         |
| 第一分科会               | <現代と人間>                    |          |                |         |
|                     | 人間・社会・文化                   | 荻窪高校     | 小川一郎           | [09063] |
|                     | 情報化社会におけるマスコミについて          | 東高校      | 杉原安            | [09068] |
|                     | 大衆社会の諸問題—問題点の指摘を中心として—     | 井草高校     | 中村佑二           | [09072] |
|                     | 巨大な組織と新中間層                 | 一橋高校     | 塚田哲男           | [09075] |
|                     | 家族—その人間関係を中心に—             | 向島工業高校   | 小川輝之           | [09079] |
|                     | 職業—職場の人間関係・職業倫理—           | 板橋高校     | 高橋定夫           | [09083] |
|                     | 地域—新しいコミュニティー              | 忍岡高校     | 伊藤駿二郎          | [09087] |
|                     | 人間形成の条件—パーソナリティの形成—        | 都立城北高校   | 松崎千秋           | [09091] |
|                     | 学校—その人間関係—                 | 葛飾野高校    | 木村正雄           | [09095] |
|                     | 現代の課題                      | 赤城台高校    | 御厨良一           | [09099] |
| 第二分科会               | <思想の源流>                    |          |                |         |
|                     | 思想のめばえ                     |          |                |         |
|                     | [1]キリシアにおける思想のめばえ          | 日本大学第二高校 | 小笠原悦郎          | [09103] |
|                     | [2]インドにおける思想のめばえ           | 井草高校     | 増田信            | [09107] |
|                     | 倫理と実践                      |          |                |         |
|                     | [1]キリシアの思想                 | 葛飾野高校    | 秋山明            | [09111] |
|                     | [2]儒学の思想                   | 国分寺高校    | 菊地堯            | [09115] |
|                     | 世界宗教の成立                    |          |                |         |
|                     | [1]キリスト教の考え方               | 文京高校     | 渡辺梧郎           | [09122] |
|                     | [2]仏教の考え方                  | 江戸川高校    | 海野省治           | [09128] |
|                     | 東洋と西洋                      |          |                |         |
|                     | [1]東洋人の考え方の特色              | 羽田工業高校   | 原崇雄            | [09132] |
| 第三分科会               | <現代と思想>                    |          |                |         |
|                     | 功利主義                       | 小平高校     | 井原茂幸           | [09137] |
|                     | 人生における宗教の意味                | 育英高専     | コンプリ=ガエタノ      | [09141] |
|                     | 人間的自由の確立—人為的な教会からの離反—      | 洗足学園第一高校 | 高野啓一郎          | [09145] |
|                     | 近代市民社会とカントの思索              | 大山高校     | 中村新吉           | [09150] |
|                     | 原典からみたデカルト                 | 東村山高校    | 村松悌二郎          | [09155] |
|                     | 実存主義—キルケゴール—               | 忍岡高校     | 渡辺浩            | [09159] |
|                     | 仮説と調和の真理観—ジェームズ・デューイ—      | 四谷商業高校   | 永上肆朗           | [09163] |
| 第四分科会               | <日本の思想>                    |          |                |         |
|                     | 古代日本人のころ                   | 羽田工業高校   | 吉沢正晶           | [09169] |
|                     | 和を以て貴しと為す—聖徳太子—            | 葛飾商業高校   | 浅香育弘           | [09173] |
|                     | 親鸞と他力—親鸞—                  | 豊多摩高校    | 金井肇            | [09177] |
|                     | 生きるとは学ぶことである—道元—           | 墨田川高校    | 細谷斉            | [09181] |
|                     | 近代日本の萌芽—佐久間象山・西郷隆盛—        | 羽田工業高校   | 吉澤正晶           | [09186] |
|                     | 新しい人間像を求めて—福沢諭吉—           | 江戸川高校    | 佐藤哲男           | [09190] |
|                     | 支えなき自己の不安—夏目漱石—            | 鷺宮高校     | 佐々木誠明          | [09194] |
| 事務局より               |                            |          |                | [09198] |
| あとがき                |                            |          |                | [09199] |
| 東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約 |                            |          |                | [09200] |

### 第10集（昭和46年度）

#### 改訂指導要領の具体化—「ものの考え方の基本的問題」—

|          |    |      |         |
|----------|----|------|---------|
| はじめに     | 会長 | 徳久鉄郎 | [10001] |
| 本年度研究体制  |    |      | [10004] |
| 本年度の研究主題 |    |      | [10004] |
| 研究主題のねらい |    |      | [10004] |

|                                |          |       |         |
|--------------------------------|----------|-------|---------|
| 研究体制 (参加者名簿)                   |          |       | [10006] |
| 研究会の全般的活動の概要                   |          |       | [10009] |
| 研究報告                           |          |       |         |
| 第一分科会 (現代と人間)                  |          |       | [10011] |
| 研究経過・主題のとらえ方・主題の構造的把握          |          |       | [10011] |
| 現代社会の特質                        | 井草高校     | 中村佑二  | [10014] |
| 宇宙における人間の価値                    | 駒場高校     | 鮎沢真澄  | [10017] |
| 現代の家庭                          | 羽田工業高校   | 小川輝之  | [10020] |
| 労働と余暇                          | 第四商業高校   | 川崎啓介  | [10023] |
| 第二分科会 (哲学的な考え方)                |          |       |         |
| 研究経過・主題のとらえ方・主題の構造的把握          |          |       | [10026] |
| 最初の哲学者たち                       | 江戸川高校    | 海野省治  | [10029] |
| ソクラテス                          | 豊多摩高校    | 金井肇   | [10032] |
| 梵我一如                           | 日本大学第二高校 | 小笠原悦郎 | [10035] |
| マルクス主義の哲学                      | 国分寺高校    | 菊地堯   | [10039] |
| 第三分科会 (倫理的価値と人格形成)             |          |       |         |
| 研究経過・主題のとらえ方・主題の構造的把握          |          |       | [10042] |
| 孔子                             | 白鷗高校     | 坂本清治  | [10045] |
| ソクラテスの倫理観                      | 東村山高校    | 村松悌二郎 | [10048] |
| ベンタムとミルの功利主義                   | 葛飾野高校    | 木村正雄  | [10051] |
| カント                            | 府中高校     | 永上肆朗  | [10054] |
| 実存主義における価値と人格形成                | 千歳高校     | 中村新吉  | [10057] |
| 第四分科会 (芸術と人生)                  |          |       |         |
| 研究経過・主題のとらえ方・主題の構造的把握          |          |       | [10060] |
| プラトンにおける美と芸術の問題                | 洗足学園     | 高野啓一郎 | [10062] |
| 芸術と人間の生き方                      | 王子工業高校   | 大木洋   | [10066] |
| 日本人のこころ                        | 羽田工業高校   | 吉沢正晶  | [10069] |
| 孔子における「詩と真実」                   | 葛飾商業高校   | 浅香育弘  | [10072] |
| 第五分科会 (人生における宗教の意味と科学的なものの考え方) |          |       |         |
| 研究経過・主題のとらえ方・主題の構造的把握          |          |       | [10075] |
| キルケゴール                         | 鷺宮高校     | 佐々木誠明 | [10079] |
| 社会科学の意味と方法                     | 墨田川高校    | 細谷齊   | [10082] |
| 宗教と科学                          | 永山高校     | 井原茂幸  | [10088] |
| 第六分科会 (個人と国家及び民主主義の倫理)         |          |       |         |
| 研究経過・主題のとらえ方・主題の構造的把握          |          |       | [10091] |
| われわれにとって「国家」とは何か               | 田無工業高校   | 清水洋三  | [10093] |
| ルソーの人間観・社会観                    | 荻窪高校     | 小川一郎  | [10096] |
| 国家有機体説                         | 江戸川高校    | 佐藤哲男  | [10099] |
| 社会主義の考え方                       | 北野高校     | 川瀬吉郎  | [10102] |
| アナーキズム                         | 小石川高校    | 田中正彦  | [10105] |
| 中江兆民の人間観・国家観                   | 東高校      | 杉原安   | [10108] |
| 民主主義国家における民主主義の倫理を考える          | 赤城台高校    | 御厨良一  | [10111] |
| 特別分科会 (高校校生問題)                 |          |       |         |
| 研究経過報告                         | 葛飾野高校    | 木村正男  | [10114] |
| 孤独について                         | 府中高校     | 永上肆朗  | [10115] |
| ホーム・ルーム集団の現状と問題点               | 戸山高校     | 渡部武   | [10116] |
| 生徒会について                        | 東高校      | 杉原安   | [10117] |
| 性意識について                        | 赤城台高校    | 御厨良一  | [10118] |
| 飲酒・喫煙について                      | 忍岡高校     | 伊藤駿二郎 | [10119] |
| 校内の遊戯化について                     | 江戸川高校    | 佐藤哲男  | [10120] |
| 生徒の生活意識について                    | 田無工業高校   | 清水洋三  | [10121] |
| 東京都高校等学校「倫理・社会」研究会規約           |          |       | [10122] |
| 東京都高校等学校「倫理・社会」研究会事務局内規        |          |       | [10124] |
| 事務局より 事務局長                     | 豊多摩高校    | 金井肇   | [10126] |
| あとがき 研究部長                      | 赤城台高校    | 御厨良一  | [10128] |

### 第11集 (昭和47年度)

授業へのさまざまな取り組みを中心として

|                        |        |       |         |
|------------------------|--------|-------|---------|
| はじめに                   | 会長     | 徳久鐵郎  | [11001] |
| 研究分科会参加者名簿             |        |       | [11004] |
| 研究主題と研究体制ならびに紀要の編集方針   |        |       | [11005] |
| 研究会の全般的活動の概要           |        |       | [11007] |
| 各分科会の研究経過報告            |        |       | [11009] |
| 研究報告                   |        |       | [11022] |
| 第一分科会 (現代と人間)          |        |       | [11023] |
| 現代社会と生きがい              | 葛飾野高校  | 木村正雄  | [11023] |
| 現代社会と青年                | 小平高校   | 伊藤駿二郎 | [11028] |
| 資料中心の「現代社会の特質」についての指導案 | 羽田工業高校 | 小川輝之  | [11033] |

|                              |            |       |         |
|------------------------------|------------|-------|---------|
| 余暇活動とマス・メディアについて             | 江北高校       | 宮崎宏一  | [11043] |
| 動機づけを重視した生徒の日常生活の資料化         | 荻窪高校       | 清水洋三  | [11048] |
| 「倫理・社会」自己展開学習論               | 駒場高校       | 鮎沢真澄  | [11053] |
| 自己展開学習の実践と課題                 | 育英高専       | 東木忠彦  | [11062] |
| 教授＝学習理論から見た自己展開学習            | 育英高専       | 木戸能史  | [11067] |
| 第二分科会〈思想の源流〉                 |            |       | [11072] |
| グループ研究の一方                    | 江戸川高校      | 海野省治  | [11072] |
| 荘子の相待観的世界観                   | 東京教育大学附属高校 | 別府 淳夫 | [11082] |
| 工業高校における「倫社」内容の取り扱い一案        | 羽田工業高校     | 吉沢正晶  | [11094] |
| 「倫理・社会と生徒」雑感                 | 墨田川高校      | 細谷 斉  | [11104] |
| 第3・4分科会〈現代と思想〉               |            |       |         |
| 倫社教育の一つの試み－青年の生き方をめぐって       | 王子工業高校     | 大木洋   | [11109] |
| 私立高校実業科生徒の倫社指導をどう考えるか        | 安田学園高校     | 香川弘   | [11114] |
| 資料を中心とした思想の学習について            | 富士見高校      | 津田信一郎 | [11119] |
| ヘーゲルの思想の学習について               | 青山高校       | 小川一郎  | [11124] |
| 「実存主義とは何か」、「空想より科学へ」をテキストとして | 小石川高校      | 田中正彦  | [11130] |
| マルクスの思想                      | 赤城台高校      | 御厨良一  | [11135] |
| カミュ「正義の人々」                   | 池袋商業高校     | 池上裕   | [11145] |
| 世界史教育と倫社との関連について             | 江北高校       | 茂野本史  | [11150] |
| 第五分科会〈日本の思想〉                 |            |       |         |
| 日本における女性思想家のとりあげ方についての試案     | 洗足学園第一高校   | 高野啓一郎 | [11156] |
| 「日本の思想」の取り扱いについて             | 江戸川高校      | 佐藤哲男  | [11166] |
| 道元－正法眼蔵随聞記を中心として             | 小平高校       | 山本清明  | [11169] |
| 道元－無常より打坐－                   | 井草高校       | 柳田学   | [11172] |
| 親鸞－「歎異抄」を中心にして－              | 白鷗高校       | 坂本清治  | [11175] |
| 親鸞の思想                        | 赤城台高校      | 野吾信雄  | [11183] |
| 福沢諭吉の思想（学問のすすめ）              | 府中高校       | 永上肆朗  | [11186] |
| 生徒に推薦する図書                    |            |       | [11192] |
| 東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約          |            |       | [11201] |
| 事務局より                        |            |       | [11203] |
| あとがき                         |            |       | [11206] |

### 第12集（昭和48年度）

#### 評価を中心とした授業研究

|                              |          |       |         |
|------------------------------|----------|-------|---------|
| はじめに                         | 会長       | 徳久鐵郎  | [12001] |
| 研究分科会参加者名簿                   |          |       | [12004] |
| 研究主題と研究体制ならびに紀要の編集方針         |          |       | [12005] |
| 研究会の全般的活動の概要                 |          |       | [12007] |
| 「教科書研究」特別分科会研究経過報告           |          |       | [12009] |
| 研究報告                         |          |       |         |
| 第一分科会〈現代と人間〉研究経過報告           |          |       | [12012] |
| 「現代社会と人間」における授業展開と評価問題       | 羽田工業高校   | 小川輝之  | [12014] |
| 自己展開学習の一実践と評価                | 育英高専     | 木戸能史  | [12018] |
| 自己展開学習の実践と課題（その2）『何をどう評価するか』 | 育英高専     | 東木忠彦  | [12023] |
| 多層評価への試み                     | 荻窪高校     | 清水洋三  | [12029] |
| とまどわせ、ハッとさせ、ニコニコと考えさせる       | 市ヶ谷商業高校  | 革名次夫  | [12032] |
| ○×式問題の試み                     |          |       |         |
| 各国人権宣言にみられる権利の問題の学習          | 王子工業高校   | 大木洋   | [12036] |
| 「巨匠ピカソの生涯」を倫社教材に使う           | 江北高校     | 宮崎宏一  | [12040] |
| 私の評価問題                       | 保谷高校     | 杉原安   | [12046] |
| 第二分科会〈思想の源流〉研究経過報告           |          |       | [12050] |
| 「ソクラテスの弁明」原典学習とその評価問題        | 墨田川高校    | 細谷 斉  | [12052] |
| ソクラテスの原典学習の試み                | 鷺宮高校     | 佐々木誠明 | [12057] |
| キリスト教－授業と評価－                 | 上野高校     | 海野省治  | [12061] |
| 仏陀                           | 葛飾野高校    | 吉沢正晶  | [12066] |
| 「孔子の考え方」の評価について－工業高校の生徒の反応－  | 田無工業高校   | 本間精   | [12071] |
| 「思想の源流」その導入のしかたと評価例          | 日本大学第二高校 | 小笠原悦郎 | [12076] |
| 第三分科会〈現代と思想〉研究経過報告           |          |       | [12080] |
| 「経験論」の学習にあたっての覚え書き           | 豊多摩高校    | 服部進治  | [12081] |
| 社会契約説                        | 安田学園高校   | 香川弘   | [12085] |
| 人間関係と思想のテスト                  | 大泉高校     | 沼田俊一  | [12090] |
| ルソーの人間観・社会観                  | 青山高校     | 小川一郎  | [12096] |
| カント                          | 永山高校     | 井原茂幸  | [12100] |

|                     |                   |          |       |         |
|---------------------|-------------------|----------|-------|---------|
|                     | マルクス主義            | 府中高校     | 永上肆朗  | [12104] |
|                     | キルケゴールの愛の弁証法      | 桜町高校     | 佐藤勲   | [12109] |
| 第四分科会               | 倫社学習における評価の諸問題    | 千歳高校     | 中村新吉  | [12116] |
|                     | 〈日本の思想〉研究経過報告     |          |       | [12120] |
|                     | 日本人の思考様式について      | 江戸川高校    | 佐藤哲男  | [12121] |
|                     | 倫理・社会における評価とその問題  | 本所高校     | 勝田泰次  | [12125] |
|                     | 古代日本人のこころ         | 葛飾商業高校   | 浅香育弘  | [12129] |
|                     | 親鸞                | 池袋商業高校   | 池上裕   | [12133] |
|                     | 石田梅岩              | 志村高校     | 木村正雄  | [12137] |
|                     | 福沢諭吉              | 国分寺高校    | 菊地堯   | [12141] |
|                     | キリスト教思想と日本—「内村鑑三」 | 洗足学園第一高校 | 高野啓一郎 | [12145] |
| 東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約 |                   |          |       | [12149] |
| 事務局より               |                   |          |       | [12153] |
| あとがき                |                   |          |       | [12154] |

### 第13集 (昭和49年度)

#### 「倫理・社会」への新たなとりくみ

|                     |   |          |       |         |
|---------------------|---|----------|-------|---------|
| はしがき                |   | 会長       | 徳久鐵郎  | [13001] |
| 研究分科会参加者名簿          |   |          |       | [13006] |
| 研究主題と研究体制および紀要の編集方針 |   |          |       | [13007] |
| 研究会の全般的活動の概要        |   |          |       | [13009] |
| 研究報告                |   |          |       | [13010] |
| 第一分科会               | Motivationのくふう                              |          |       | [13011] |
|                     | 研究経過報告                                      |          |       | [13011] |
|                     | 「倫・社」教科をどうとらえるか                             | 板橋高校     | 小河信國  | [13014] |
|                     | イエスの思想へのMotivation                          | 志村高校     | 木村正雄  | [13019] |
|                     | 図解を中心としたモチベーションのくふう                         | 両国高校     | 小平克   | [13023] |
|                     | 授業形態によるモチベーション (3分間スピーチの利用)                 | 鷺宮高校     | 佐々木誠明 | [13028] |
|                     | 授業形態によるモチベーション—グループ学習・アンケート調査—              | 保谷高校     | 杉原安   | [13032] |
|                     | 課題意識について (分科会レポートより)                        | 深川商業高校   | 田辺寅太郎 | [13036] |
|                     | 主知的倫理社会のMotivation—試論として—                   | 羽田高校     | 津田信一郎 | [13039] |
|                     | 自己展開学習の実践と課題 (その3) 『Motivationとしての：善悪の基準研究』 | 育英高専     | 東木忠彦  | [13044] |
|                     | 青年と思想—フォークソングによるモチベーション                     | 足立工業高校   | 山下順吉  | [13048] |
|                     | モチベーションのおもしろさ—仏教についての試み—                    | 洗足学園第一高校 | 高野啓一郎 | [13053] |
|                     | 近代絵画の巨峰『ポール・セザンヌ』を倫社のMotivationに使って         | 江北高校     | 宮崎宏一  | [13058] |
| 第二分科会               | 原典資料の研究                                     |          |       | [13062] |
|                     | 研究経過報告                                      |          |       | [13062] |
|                     | E・フロムの現代社会論をめぐって                            | 南葛飾高校    | 渡辺勉   | [13064] |
|                     | 現代青年の「家庭観」                                  | 清瀬高校     | 小川輝之  | [13071] |
|                     | ウパニシャッドの思想の指導について                           | 駒場高校     | 細谷斉   | [13076] |
|                     | 仏陀について—仏陀の根本思想をわかりやすくするために                  | 葛飾野高校    | 吉澤正晶  | [13080] |
|                     | 孔子の政治思想について                                 | 葛飾商業高校   | 浅香育弘  | [13085] |
|                     | ルネッサンス思想家 エラスムス                             | 桜町高校     | 佐藤勲   | [13089] |
|                     | 「道徳形而上学の基礎づけ」カント                            | 鷺宮高校     | 井原茂幸  | [13093] |
|                     | サルトル「実存主義とは何か」について                          | 墨田川高校    | 渋谷紀雄  | [13097] |
|                     | ハイデッカーについて                                  | 深川商業高校   | 田辺寅太郎 | [13101] |
|                     | ヤスパース「哲学入門」                                 | 千歳高校     | 中村新吉  | [13105] |
|                     | 宮尊徳の生涯と思想                                   | 田無工業高校   | 本間精   | [13109] |
|                     | 岡倉天心「茶の本」 (The book of tea)                 | 府中高校     | 永上肆朗  | [13113] |
| 第三分科会               | 授業形態のくふう                                    |          |       | [13117] |
|                     | 研究経過報告                                      |          |       | [13117] |
|                     | 「ソクラテスの思想」の授業展開                             | 赤城台高校    | 野吾信雄  | [13118] |
|                     | エンゲルスの思想—原典学習「空想から科学へ」                      | 王子工業高校   | 大木洋   | [13122] |
|                     | 受けとめ方の精神風土—比較文化社会学的な自己対象化の意味                | 市ヶ谷商業高校  | 葦名次夫  | [13126] |
|                     | 発表学習の一試案                                    | 戸山高校     | 沼田俊一  | [13132] |
|                     | ヨハネス・アルトジウス研究についての問題提起—                     | 大泉高校     | 津田晨吾  | [13140] |
|                     | 通説にもたれかかることの危険性—                            |          |       | [13144] |
| 第四分科会               | 年間計画・精選の視点                                  |          |       | [13144] |
|                     | 倫社自己展開学習における破局の問題                           | 国立高校     | 鮎沢真澄  | [13144] |
|                     | 私の年間計画                                      | 竹早高校     | 石森勇   | [13148] |
|                     | 私の年間計画                                      | 青山高校     | 小川一郎  | [13152] |

|                     |          |      |         |
|---------------------|----------|------|---------|
| 読書中心の年間計画           | 立川高校 (定) | 榊原恒雄 | [13156] |
| 七つの「考え方」を中心とした年間計画  | 国分寺高校    | 菊地堯  | [13161] |
| 東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約 |          |      | [13165] |
| 事務局より               |          |      | [13169] |
| あとがき                |          |      | [13170] |

### 第14集 (昭和50年度)

#### 教材内容の平明化

|                                |         |       |         |
|--------------------------------|---------|-------|---------|
| はしがき                           | 会長      | 中村義之  | [14001] |
| 研究分科会参加者名簿                     |         |       | [14006] |
| 研究主題と研究体制および紀要の編集方針            |         |       | [14007] |
| 研究会の全般的活動の概要                   |         |       | [14009] |
| 将来の「倫理・社会」を検討する特別分科会研究経過報告     |         |       | [14011] |
| 研究報告                           |         |       |         |
| 第一分科会 現代と人間                    |         |       |         |
| 研究経過報告                         |         |       | [14017] |
| ベンサムからウェブへー福祉国家論批判             | 王子工業高校  | 大木洋   | [14018] |
| 図説戦後世論史 (NHK放送世論調査所編)          | 国分寺高校   | 菊地堯   | [14022] |
| 「緑色革命」ー現代と青年, そのライフスタイルについて    | 小山台高校   | 山下順吉  | [14026] |
| 「青春」の生き方ー先人から学ぶ                | 清瀬高校    | 小川輝之  | [14030] |
| 自我のめざめーヘッセ「デミアン」から             | 青山高校    | 小川一郎  | [14034] |
| 青年と人間形成ー工業高校生としていかに生きたらよいのか    | 府中工業高校  | 関根荒正  | [14038] |
| 現代社会における人間の問題ーピカソ, M・ブーバーにみる   | 保谷高校    | 杉原安   | [14042] |
| 第二分科会 思想の原流                    |         |       |         |
| 研究経過報告                         |         |       | [14046] |
| 「ソクラテス」についての座談会                |         |       | [14050] |
| 「ソクラテス」学習指導についてのアンケート          |         |       | [14059] |
| 「ソクラテスの弁明」の学習方法について            | 駒場高校    | 細谷斉   | [14079] |
| ソクラテスにおける死                     | 上野高校    | 海野省治  | [14082] |
| 意味の覚醒 その喜びーイキイキした比喻・具体例による授業展開 | 市ヶ谷商業高校 | 葦名次夫  | [14087] |
| 人間尊重の精神をさぐるー罪責と煩惱を通して          | 千歳高校    | 中村新吉  | [14093] |
| 仏教と「いろは歌」とのかかわり                | 葛飾商業高校  | 浅香育弘  | [14099] |
| 老子の思想                          | 志村高校    | 木村正雄  | [14103] |
| 荘子の思想                          | 府中高校    | 永上肆朗  | [14107] |
| 「老子」の逆説的情熱を                    | 深川商業高校  | 田辺寅太郎 | [14110] |
| 第三分科会 現代と思想                    |         |       |         |
| 研究経過報告                         |         |       | [14113] |
| 現代思想の授業と高校生ー「自由と必然」            | 保谷高校    | 五味誠   | [14115] |
| 「事実」と「ことば」                     | 板橋高校    | 小河信國  | [14120] |
| 主に単純化を通しての「平明」化                | 羽田高校    | 津田信一郎 | [14125] |
| アダム・スミスの市民社会論についてーその平易な扱い方     | 南葛飾高校   | 渡辺勉   | [14129] |
| 思想と人間変革                        | 駒沢大学高校  | 市川仏乗  | [14133] |
| 「個人と国家」について考える                 | 白鷗高校    | 坂本清治  | [14137] |
| 第四分科会 日本思想                     |         |       |         |
| 研究経過報告                         |         |       | [14141] |
| 空海                             | 広尾高校    | 寺島甲祐  | [14142] |
| 吉田松陰                           | 葛飾野高校   | 吉澤正晶  | [14147] |
| 伝統と近代的自我                       | 江戸川高校   | 佐藤哲男  | [14151] |
| 明治啓蒙思想の形成について                  | 桜町高校    | 佐藤勲   | [14155] |
| 東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約            |         |       | [14159] |
| 事務局より                          |         |       | [14163] |
| あとがき                           |         |       | [14164] |

### 第15集 (昭和51年度)

#### テーマ学習を中心としたわかりやすい授業展開

|                             |    |      |         |
|-----------------------------|----|------|---------|
| はしがき                        | 会長 | 岡本武男 | [15001] |
| 研究分科会参加者名簿                  |    |      | [15007] |
| 研究主題と研究体制および紀要の編集方針         |    |      | [15009] |
| 研究会の全般的活動の概要                |    |      | [15012] |
| 特別分科会研究経過報告                 |    |      | [15014] |
| 将来の「倫理・社会」ー教育課程審議会の経過をふまえてー |    |      |         |
| 研究報告                        |    |      |         |
| 第一分科会「社会と青年」                |    |      |         |

|  |         |       |         |
|--|---------|-------|---------|
| 研究経過報告   |         |       | [15019] |
| チャップリンの「モダン・タイムス」と生徒の「モダン・タイムス(現代)」観               | 両国高校    | 小平克   | [15023] |
| 広告と私たちの生活  | 青山高校    | 小川一郎  | [15030] |
| 社会の退廃と民主主義の問題                                      | 王子工業高校  | 大木洋   | [15034] |
| 社会規範と遵法意識について                                      | 府中高校    | 永上肆朗  | [15038] |
| 小集団を考える  | 志村高校    | 木村正雄  | [15042] |
| 「劇」と「必然性」-「生きがい」をめぐって                              | 板橋高校    | 小河信國  | [15046] |
| 第二分科会「愛・芸術と青年」                                     |         |       |         |
| 研究経過報告   |         |       | [15053] |
| 「ゲーテのことば～愛と芸術について」                                 | 葛飾商業高校  | 浅香育弘  | [15055] |
| 「ドラクロワの日記」(二見書房)一画家の魂の記                            | 小金井工業高校 | 平沼千秋  | [15059] |
| 「美と崇高」-カントの『美と崇高との感情性に関する観察』[1501764]より            | 白鷗高校    | 徳久寛   | [15063] |
| 板業における美-棟方志功「板極道」(中公文庫)                            | 上野高校    | 海野省治  | [15067] |
| 高村光太郎-その愛と美-                                       | 江北高校    | 宮崎宏一  | [15071] |
| P・ゴーギャンにおける「愛と芸術」                                  | 駒込高校    | 鹿野貞一  | [15075] |
| 第三分科会「哲学と青年」                                       |         |       |         |
| 研究経過報告   | 目黒高校    | 渡辺道子  | [15081] |
| 倫・社の授業について思うこと                                     | 化学工業高校  | 矢島賢二  | [15084] |
| 倫理・社会と哲学   | 駒場高校    | 細谷斉   | [15088] |
| 利己心と利他心-ベンサム功利主義を通して-                              | 桜町高校    | 佐藤勲   | [15093] |
| 合理論と経験論への導入の試み                                     | 小石川高校   | 田中正彦  | [15097] |
| 第四分科会「宗教・自然と青年」                                    |         |       |         |
| 研究経過報告   |         |       | [15103] |
| 宗教教育のむずかしさ-特にキリスト教について-                            | 十文字高校   | 岡田春生  | [15105] |
| 仏陀のさとりについて-  |         |       |         |
| 源流思想にみられる自然観                                       | 清瀬高校    | 小川輝之  | [15110] |
| 東洋と日本の見なおし-人間と自然 必修「社会」のねらい「自己探究と自然愛・人間愛」のための教材研究へ | 大森高校    | 吉沢正晶  | [15114] |
| 「宗教学習における親鸞の意味づけ」-親鸞の授業における強調点、その一例                | 府中工業高校  | 関根荒正  | [15118] |
| 「俗」の構造   | 高島高校    | 葦名次夫  | [15123] |
| [特集]-『わたしはこのような課題を出している』                           |         |       |         |
| 「私の理想の生き方」と「ソクラテスの弁明」の読後                           | 清瀬高校    | 小川輝之  | [15131] |
| 昭和51・倫社夏季課題  | 葛飾商業高校  | 浅香育弘  | [15131] |
| 夏休み課題-テーマ読書から小論文へ                                  | 大森高校    | 吉沢正晶  | [15132] |
| 学習のまじめにふさわしい考查問題の作成                                | 国分寺高校   | 菊地堯   | [15134] |
| 「江戸時代以降の日本の思想」                                     | 白鷗高校    | 徳久寛   | [15134] |
| 写真課題   | 高島高校    | 葦名次夫  | [15135] |
| 単位修得小論文  | 上野高校    | 海野省治  | [15135] |
| 夏季読書課題   | 鷺宮高校    | 佐々木誠明 | [15136] |
| 「現代社会と青年」の分野における課題                                 | 府中工業高校  | 関根荒正  | [15136] |
| 思想の源流についてのレポート                                     | 桜町高校    | 佐藤勲   | [15137] |
| 「読書指導を併行した授業の展開」                                   | 成城高校    | 野村誠   | [15137] |
| 私の倫社課題   | 駒場高校    | 細谷斉   | [15138] |
| 研究発表・年間レポートなど                                      | 志村高校    | 木村正雄  | [15140] |
| わたしはこのような課題を出している                                  | 両国高校    | 小平克   | [15140] |
| 倫社ノートと学位論文   | 府中高校    | 永上肆朗  | [15141] |
| 高校生の意識・行動  | 本所高校    | 勝田泰次  | [15141] |
| 読書課題と研究論文課題  | 青山高校    | 小川一郎  | [15142] |
| 倫・社グループ研究報告書                                       | 江北高校    | 宮崎宏一  | [15142] |
| 夏休み読書課題  | 鷺宮高校    | 井原茂幸  | [15143] |
| 卒業を前にして(作文)  | 化学工業高校  | 矢島賢二  | [15143] |
| 読書課題   | 保谷高校    | 杉原安   | [15144] |
| 「倫・社」修了論文  | 板橋高校    | 小河信國  | [15145] |
| 自習時の「課題」   | 羽田高校    | 津田信一郎 | [15145] |
| 東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約                                |         |       |         |
| 事務局より  |         |       |         |
| あとがき   |         |       |         |

### 第16集(昭和52年度)

教材内容をどうしぼり深めていくか

|              |    |      |         |
|--------------|----|------|---------|
| はしがき         | 会長 | 岡本武男 | [16001] |
| 研究分科会参加者名簿   |    |      | [16006] |
| 研究主題と研究体制    |    |      | [16008] |
| 研究会の全般的活動の概要 |    |      | [16010] |

|   |        |      |         |
|---|--------|------|---------|
| 特別分科会「必須社会・選択倫理の内容を考える」－教育課程審議会の答申をふまえて |        |      | [16012] |
| 本年度研究例会における講師の講演集                       |        |      | [16016] |
| 研究報告                                    |        |      |         |
| 第一分科会「高校生と倫社」                           |        |      |         |
| 研究経過報告                                  |        |      | [16027] |
| 「高校生と倫社」                                | 王子工業高校 | 大木洋  | [16033] |
| 「平明さと深さの結びつきを求めて」                       | 高島高校   | 葦名次夫 | [16037] |
| 「高校生に考えさせるには」                           | 青山高校   | 小川一郎 | [16043] |
| 「今年の倫社ノートから」                            | 戸山高校   | 沼田俊一 | [16047] |
| 第二分科会「現代と人間」                            |        |      |         |
| 研究経過報告                                  |        |      | [16059] |
| 「核家族化と教育問題」                             | 東高校    | 井川哲夫 | [16066] |
| 「現代社会の病理」                               | 志村高校   | 木村正雄 | [16070] |
| 「現代社会をどうとらえるか」                          | 横須賀学院  | 松永農  | [16075] |
| 「現代と人間」の学習において、生徒とかみあう授業－教材をいかにつくるか     | 府中工業高校 | 関根荒正 | [16079] |
| ゼミ「甘えの構造」                               | 育英高専   | 木戸能史 | [16083] |
| 「視点設定の試み」                               | 駒大高校   | 市川仏乗 | [16088] |
| 第三分科会「先哲の教え」                            |        |      |         |
| 研究経過報告                                  |        |      | [16092] |
| 「高校生と論語」                                | 十文字高校  | 岡田春生 | [16104] |
| 「花伝書をどう教えるか」                            | 十文字高校  | 岡田春生 | [16108] |
| 「風姿花伝に学ぶ」                               | 葛飾商業高校 | 浅香育弘 | [16109] |
| 「風姿花伝の花について」                            | 京橋高校   | 飯岡祐保 | [16113] |
| 「東洋思想の源流－あなたの意見集」                       | 京橋高校   | 飯岡祐保 | [16117] |
| 「風姿花伝を読んで」                              | 本所高校   | 勝田泰次 | [16121] |
| 「一親鸞－絶望故の歓喜」                            | 池袋商業高校 | 池上裕  | [16123] |
| 「人は努力する限り迷う－倫理社会－私の反省と意見」               | 駒場高校   | 細谷斉  | [16127] |
| 「ギリシャ悲劇における倫理思想」－オイデプス王を中心として－          | 江戸川高校  | 泉谷まさ | [16133] |
| 東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約                     |        |      | [16137] |
| 事務局だより                                  |        |      | [16141] |
| あとがき                                    |        |      | [16142] |

### 第17集(昭和53年度)

#### 「倫理・社会」のねらいをどう生かしていくか

|  |        |      |         |
|--|--------|------|---------|
| はしがき   | 会長     | 岡本武男 | [17001] |
| 研究主題と研究体制                                      |        |      | [17004] |
| 研究分科会参加者名簿                                     |        |      | [17007] |
| 研究会の全般的活動の概要                                   |        |      | [17009] |
| 特別分科会「新指導要領の研究」他科目との関連                         |        |      | [17011] |
| 本年度研究例会に鑑ける講師の講演集                              |        |      | [17013] |
| 研究報告   |        |      |         |
| 第一分科会「教材の研究」                                   |        |      |         |
| 研究経過報告   |        |      | [17016] |
| 「きめ細かなねらいと具体例に基く倫社の再構成」                        | 高島高校   | 葦名次夫 | [17018] |
| 「アショカ王の政治思想について」                               | 葛飾商業高校 | 浅香育弘 | [17029] |
| 「親鸞の思想」  | 国分寺高校  | 菊地堯  | [17039] |
| 「ジョン・ロックの社会契約論」                                | 桜町高校   | 佐藤勲  | [17043] |
| 「大乘仏教における空思想」(「般若心経」の資料解説)                     | 蒲田高校   | 徳久寛  | [17047] |
| 手記にみる「青年の心理」考                                  | 府中高校   | 永上肆朗 | [17052] |
| 「ソクラテスの弁明」を授業に使用すること                           | 葛飾野高校  | 成瀬功  | [17056] |
| 「小アンケートにみる生徒の意識」                               | 駒場高校   | 細谷斉  | [17060] |
| 第二分科会「生徒の意識の研究」                                |        |      |         |
| 研究経過報告   |        |      | [17065] |
| 「現代女子高校生気質」                                    | 十文字高校  | 岡田春生 | [17067] |
| 「青少年の自殺の増加と倫社」                                 | 墨田川高校  | 渋谷紀雄 | [17075] |
| 「高校生の意識について－その消極的・否定的側面と指導について」                | 大森高校   | 寺島甲祐 | [17079] |
| 「倫・社グループ研究発表にみるある生徒たちの実践記録」－O・H・Pで学ぶ都市における交通問題 | 江北高校   | 宮崎宏一 | [17083] |
| 第三分科会「授業展開の研究」                                 |        |      |         |
| 研究経過報告   |        |      | [17088] |
| 「倫社学習指導のポイント」－ねらいをふまえた主体的な授業展開－                | 学大附属高校 | 秋元正明 | [17091] |

|                         |      |      |         |
|-------------------------|------|------|---------|
| 「死を見つめる心」を読んで考えたことをまとめる | 京橋高校 | 飯岡祐保 | [17095] |
| —あなたの意見集                |      |      |         |
| 「ヘレニズム・ローマ時代の思想」—エピクロス学 | 東高校  | 井川哲夫 | [17102] |
| 派・ストア学派                 |      |      |         |
| 「仏陀の倫理思想」—「ふれあい」の授業を求めて | 志村高校 | 木村正雄 | [17106] |
| 「わたくしの一学期の授業について」       | 両国高校 | 小平克  | [17110] |
| 「授業展開の方法のための試案(1)」      | 帝京高校 | 近藤卓  | [17119] |
| 東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約     |      |      | [17123] |
| 事務局だより                  |      |      | [17127] |
| あとがき                    |      |      | [17129] |

### 第18集 (昭和54年度)

|                         |        |       |         |
|-------------------------|--------|-------|---------|
| はしがき                    | 会長     | 増田信   | [18001] |
| 研究主題と研究体制               |        |       | [18004] |
| 研究分科会参加者名簿              |        |       | [18007] |
| 研究会の全般的活動の概要            |        |       | [18009] |
| 研究報告                    |        |       |         |
| 特別分科会『現代社会の研究』          |        |       |         |
| 研究経過報告                  |        |       | [18012] |
| 社会科における「現代社会」の位置づけ      | 青山高校   | 小川一郎  | [18014] |
| 第一分科会『現代と人間』            |        |       |         |
| 研究経過報告                  |        |       | [18019] |
| カミュ「シーシュポスの神話」をよむ—グループ読 | 京橋高校   | 飯岡祐保  | [18023] |
| 書—                      |        |       |         |
| 学力と生徒の意識構造—工業高校における数学の学 | 荒川工業高校 | 及川良一  | [18027] |
| 力を手がかりに                 |        |       |         |
| 現代社会と自我の確立—モラトリアム人間の時代  | 青山高校   | 小川一郎  | [18033] |
| 組織と人間—テープ教材による具体的展開例—   | 鷺宮高校   | 佐々木誠明 | [18038] |
| デカルト「方法序説」を読んで          | 府中高校   | 永上肆朗  | [18042] |
| 第二分科会『思想の源流』            |        |       |         |
| 研究経過報告                  |        |       | [18047] |
| 生徒の意識にレスポンスした指導の試み      | 大森東高校  | 木村正雄  | [18050] |
| 菩薩の慈悲について               | 田園調布高校 | 寺島甲祐  | [18054] |
| 「倫理・社会」と大学入試問題について      | 駒場高校   | 細谷斉   | [18060] |
| 個人の適性と能力に应ずる授業の工夫       | 大森高校   | 吉澤正晶  | [18066] |
| 第三分科会                   |        |       |         |
| 研究経過報告                  |        |       | [18069] |
| 倫社の基本概念をあらためて考える授業展開    | 豊島高校   | 葦名次夫  | [18072] |
| 中井正一と『美学入門』について—芸術と人生の試 | 玉川学園高校 | 新井徹夫  | [18085] |
| み—                      |        |       |         |
| 近代日本の思想<大正デモクラシー>吉野作造—民 | 東高校    | 井川哲夫  | [18089] |
| 本主義—                    |        |       |         |
| 「現代社会の特質」で用いる映画の話題の工夫   | 日野台高校  | 菊地堯   | [18093] |
| 授業展開の方法のための試案(その2)—現代思想 | 帝京高校   | 近藤卓   | [18097] |
| の位置づけをめぐる—              |        |       |         |
| 江戸時代の儒学の展開—荻生徂徠を中心として—  | 蒲田高校   | 徳久寛   | [18101] |
| 東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約     |        |       | [18105] |
| 事務局だより                  |        |       | [18109] |
| あとがき                    |        |       | [18110] |

### 第19集 (昭和55年度)

|                         |        |      |         |
|-------------------------|--------|------|---------|
| はしがき                    | 会長     | 増田信  | [19001] |
| 研究主題と研究体制               |        |      | [19004] |
| 研究分科会参加者名簿              |        |      | [19007] |
| 研究会の全般的活動の概要            |        |      | [19009] |
| 研究報告                    |        |      |         |
| 第一分科会「新しい教材化の研究」        |        |      |         |
| 研究経過報告                  |        |      | [19013] |
| 原始仏教と根本仏教の違い—人生における宗教の意 | 葛飾商業高校 | 浅香育弘 | [19015] |
| 義を考える                   |        |      |         |
| 本居宣長「初山踏」における学問論        | 蒲田高校   | 徳久寛  | [19022] |
| 生徒の興味を授業で反映させるには—昭和56年初 | 砧工業高校  | 三宅幸夫 | [19026] |
| 詣調査から—                  |        |      |         |
| 第二分科会「授業展開の工夫」          |        |      |         |
| 研究経過報告                  |        |      | [19030] |
| 工業高校における指導と展開—新任教師の試行錯誤 | 足立工業高校 | 亀田文保 | [19032] |
| 的授業—                    |        |      |         |



|                               |        |      |         |
|-------------------------------|--------|------|---------|
| 生徒の意見からの授業展開に関する一考察 - ある事     | 南高校    | 平栗幹子 | [19036] |
| 件に関する生徒の論述をもとに -              |        |      |         |
| 生徒の現状に即したプリント作りを求めて           | 四谷商業高校 | 和田倫明 | [19040] |
| 倫・社の選択授業を担当して                 | 三田高校   | 海野省治 | [19043] |
| 第三分科会『現代社会』授業内容の探究            |        |      |         |
| 研究経過報告                        |        |      | [19047] |
| 倫社と政経の接点を求めて - 「現代社会」的な学習とは何か | 豊島高校   | 葦名次夫 | [19049] |
| 人類と環境                         | 日野台高校  | 菊地堯  | [19056] |
| 倫理的価値と人格                      | 府中高校   | 永上肆朗 | [19060] |
| 「現代社会」を指しての授業展開               | 大森東高校  | 木村正雄 | [19064] |
| 『現代語訳 学問のすすめ』福沢諭吉著・伊藤正雄       | 大森高校   | 吉澤正晶 | [19068] |
| 訳(教養文庫)による演習                  |        |      |         |
| 「友情について」 - プラトン『リュシス』による -    | 京橋高校   | 飯岡祐保 | [19074] |
| マスコミュニケーションと民主社会 - ヒロシマをめぐって  | 松原高校   | 斉藤規  | [19078] |
| 東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約           |        |      | [19082] |
| 事務局だより                        |        |      | [19084] |
| あとがき                          |        |      | [19085] |

## 第20集(昭和56年度)

### 都倫研創立二十周年特集一歩みと展望一

|  |              |           |         |
|--|--------------|-----------|---------|
| はしがき   | 会長           | 佐藤勇夫      | [20001] |
| 研究主題と研究体制および紀要の編集方法                            |              |           | [20006] |
| 研究分科会参加者名簿                                     |              |           | [20010] |
| 研究会の全般的活動の概要                                   |              |           | [20012] |
| 都倫研総会講演要旨                                      |              |           |         |
| 「近代日本の宗教」                                      | 慶応義塾大学講師     | 村上重良      | [20015] |
| 都倫研総会研究発表                                      |              |           |         |
| 「学ぶことの意義 - 私の倫社教育観」                            | 葛飾商業高校       | 浅香育弘      | [20017] |
| 研究経過報告   |              |           |         |
| 都倫研創立二十周年特集「歩みと展望」                             |              |           |         |
| 東京都高等学校「倫理・社会」研究会の創立について                       | 初代都倫研会長      | 矢谷芳雄      | [20027] |
| 都倫研の歩み(私がスケッチとして描いてみる)                         | 文部省視学官       | 斎藤弘       | [20033] |
| 都倫研の思い出  | 文部省教科調査官     | 金井肇       | [20039] |
| 憶えていること  | 墨田川高校長       | 増田信       | [20043] |
| 都倫研の歩みによせて                                     | 豊多摩高校長       | 吉田道雄      | [20045] |
| 「倫理・社会」の回顧から「現代社会」に望む                          | 鷺宮高校         | 佐々木誠明     | [20047] |
| 都倫研でアイデンティティの確立を期する                            | 田園調布高校長      | 寺島甲祐      | [20049] |
| 紀要に見る都倫研20年の歩み                                 | 府中西高校長       | 井原茂幸      | [20054] |
| 都倫研発足のころ                                       | 大山高校長        | 御厨良一      | [20064] |
| 都倫研に師あり  | 東京都教育委員会指導主事 | 中村新吉      | [20066] |
| 都倫研創立20年に想う                                    | 青梅東高校        | 伊藤駿二郎     | [20072] |
| 「倫理・社会」から「現代社会」への課題 - 都倫研の歩みの中で -              | 小岩高校         | 小川一郎      | [20076] |
| 都倫研に育てられたわたし                                   | 清瀬高校         | 小川輝之      | [20080] |
| 何のために学ぶのか - 都倫研の歩みに寄せて                         | 板橋高校         | 小河信國      | [20082] |
| 「都倫研の歩みの中で」 - 私の都倫研の印象                         | 野津田高校        | 河野速男      | [20084] |
| 都倫研の歩みと私                                       | 日野台高校        | 菊地堯       | [20087] |
| 初心に帰って   | 保谷高校         | 杉原安       | [20091] |
| 石油ショックのころ                                      | 府中高校         | 永上肆朗      | [20093] |
| 都倫研の15年 - 私と都倫研                                | 駒場高校         | 細谷齊       | [20096] |
| 手づくりの味 - それは都倫研                                | 江北高校         | 宮崎宏一      | [20098] |
| 都倫研の歩みから新科目への展望                                | 大森高校         | 吉澤正晶      | [20104] |
| 研究報告   |              |           |         |
| 日本の伝統思想の学習に関する考察                               | 学芸大附属高校      | 秋元正明      | [20108] |
| 「わかりやすさ」の落とし穴 - 未知の魅力・発見の楽しさを「現代社会」にどう生かすか     | 豊島高校         | 葦名次夫      | [20117] |
| 「現代社会」に対する本校のとらえと授業展開例                         | 砧工業高校        | 有馬利一・三宅幸夫 | [20127] |
| 「自ら考え、問題を解決する能力の育成」を目指し                        | 大森東高校        | 木村正雄      | [20134] |
| 資源の再利用 - 「アルミ缶回収」の記事を使っ                        | 玉川聖学院        | 幸田雅夫      | [20138] |
| 授業   |              |           |         |
| 第二次世界大戦とファシズム                                  | 南高校          | 国分孝       | [20142] |
| 現代社会・第2章「青年と自己探究」・第1節「現代社会における青年」を扱うにあたって考えること | 青山高校         | 渡辺潔       | [20146] |
| 東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約                            |              |           | [20152] |

|                           |         |
|---------------------------|---------|
| 東京都高等学校「倫理・社会」研究会研究過程（記録） | [20154] |
| 事務局だより                    | [20171] |
| あとがき                      | [20172] |

### 第21集（昭和57年度）

|                              |        |       |         |
|------------------------------|--------|-------|---------|
| はじめに この一年を顧て                 | 会長     | 佐藤勇夫  | [21001] |
| 研究主題と研究体制および紀要の編集方法          |        |       | [21004] |
| 研究分科会参加者名簿                   |        |       | [21007] |
| 研究会の全般的活動の概要                 |        |       | [21008] |
| 研究例会報告                       |        |       |         |
| 第一回・公開 現代社会初年度の戸惑い           | 日野台高校  | 菊地堯   | [21011] |
| 第二回・公開 「物価とインフレ」をおこなって       | 江北高校   | 及川良一  | [21012] |
| 第三回・講演 私の体験から                | 鷺宮高校   | 佐々木誠明 | [21014] |
| 読書と私                         | 豊多摩高校  | 吉田道雄  | [21015] |
| 倫社の教師として                     | 府中高校   | 佐藤勇夫  | [21016] |
| 研究経過報告                       |        |       |         |
| 第一分科会 高校生の意識と現代社会            |        |       |         |
| 活動報告                         | 砧工業高校  | 三宅幸夫  | [21017] |
| 現代社会の文化の課題                   | 大森東高校  | 木村正雄  | [21019] |
| 小論文テストについて                   | 秋川高校   | 水谷禎憲  | [21022] |
| 思想の原典に挑戦させて—グループの学習の可能性を探る   | 国立高校   | 国府田貫一 | [21028] |
| 第二分科会 現代社会の内容構成と教材化          |        |       |         |
| 活動報告                         | 三鷹高校   | 工藤文三  | [21039] |
| 倫社の「現代社会」の展開例                | 城北高校   | 沼田俊一  | [21041] |
| 「現社」授業にひきつぐこと                | 松原高校   | 斉藤規   | [21048] |
| 倫社グループ研究、発表学習の実践例            | 九段高校   | 蕪木潔   | [21050] |
| 第三分科会 「現代社会」の授業展開と課題         |        |       |         |
| 活動報告                         | 玉川聖学院  | 幸田雅夫  | [21059] |
| ルネサンス時代の理想人—万能人レオナルド・ダ・ビンチ   | 玉川聖学院  | 幸田雅夫  | [21061] |
| 「現代社会」の授業へのパーソナル・コンピュータ導入の試み | 四谷商業高校 | 和田倫明  | [21066] |
| 「倫社」を通しての授業観                 | 田無工業高校 | 辻勇一郎  | [21071] |
| 「汝自身を知る」授業—本年度の「現代社会の授業から」   | 豊島高校   | 葦名次夫  | [21075] |
| 特集 現代社会への試み、倫社への想い           |        |       |         |
| 神の問題                         | 鷺宮高校   | 佐々木誠明 | [21085] |
| 倫社の授業と倫社を語る喜び                | 小岩高校   | 小川一郎  | [21087] |
| 倫社への思い—倫社の精神で生かし続けたいもの       | 葛飾商業高校 | 浅香育弘  | [21090] |
| 今年最後の試み                      | 府中高校   | 永上肆朗  | [21094] |
| 江北生と歩んだ「倫社」15年               | 江北高校   | 宮崎宏一  | [21097] |
| 倫社への思い                       | 野津田高校  | 河野速男  | [21099] |
| 教えることも学ぶこともできないものへ           | 足立工業高校 | 亀田文保  | [21104] |
| 東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約          |        |       | [21106] |
| 事務局だより                       |        |       | [21108] |
| あとがき                         |        |       | [21109] |

### 第22集（昭和58年度）

|                      |             |      |         |
|----------------------|-------------|------|---------|
| はじめに 困難を開拓する         | 会長          | 寺島甲祐 | [22001] |
| 研究主題と研究体制および紀要の編集方針  |             |      | [22004] |
| 研究分科会参加者名簿           |             |      | [22007] |
| 昭和58年度研究会活動の概要       |             |      | [22008] |
| 研究例会報告               |             |      |         |
| 総会                   |             |      |         |
| 研究発表 「現代社会」の目標と構成    | 駒沢大学高校      | 市川仏乗 | [22011] |
| 講演要旨 映画で世界をどう理解するか   | 映画評論家       | 佐藤忠男 | [22015] |
| 第一回研究例会              |             |      |         |
| 公開授業 日本の文化と伝統        | 白鷺高校        | 蛭田政弘 | [22018] |
| 研究発表 「現社」新聞をつくる      | 竹台高校        | 斉藤規  | [22019] |
| 講演要旨 近代哲学の今日的課題      | 東京大学名誉教授    | 山崎正一 | [22023] |
| 第二回研究例会              |             |      |         |
| 公開授業 キルケゴールと生きがいについて | 大崎高校        | 小林豊実 | [22025] |
| 研究発表 フッサールにおける基礎概念   | 白鷺高校        | 橋本克己 | [22026] |
| 講演要旨 社会学における人間像の変遷   | お茶の水女子大学助教授 | 宮島喬  | [22028] |
| 第四回研究例会              |             |      |         |
| 公開授業 わが国の平和主義について    | 小川高校        | 小島恒巳 | [22030] |

|                   |                                 |        |       |         |
|-------------------|---------------------------------|--------|-------|---------|
| 研究発表              | 高校生の生活と意識                       | 成瀬高校   | 成瀬功   | [22031] |
| 講演要旨              | ささやかな遍歴                         | 墨田川高校  | 増田信   | [22044] |
| 研究報告              |                                 |        |       |         |
| 第一分科会             | 指導内容と教材化の研究                     |        |       |         |
|                   | 研究経過報告                          | 片倉高校   | 増淵達夫  | [22047] |
|                   | 鎌倉時代の仏教の考え方                     | 大森東高校  | 木村正雄  | [22048] |
|                   | 読むことと書くことを目指した授業の試み             | 八王子東高校 | 井上勝   | [22056] |
|                   | 「社会」という言葉をめぐって                  | 荒川工業高校 | 富塚昇   | [22062] |
|                   | ポーログって知ってますか                    | 竹台高校   | 斉藤規   | [22064] |
|                   | 文化学習にあたっての留意点                   | 竹台高校   | 青山純子  | [22067] |
| 第二分科会             | 授業展開の研究                         |        |       |         |
|                   | 研究経過報告                          | 田無工業高校 | 辻勇一郎  | [22069] |
|                   | グループ研究を生かした現代社会の授業              | 江北高校   | 宮崎宏一  | [22072] |
|                   | 「自由」について                        | 駒場高校   | 細谷斉   | [22077] |
|                   | 「日本の生活文化と伝統」学習                  | 田無工業高校 | 辻勇一郎  | [22082] |
| 第三分科会             | 現代社会のグループ研究                     | 玉川聖学院  | 幸田雅夫  | [22086] |
|                   | 文献・資料による指導内容の研究                 |        |       |         |
|                   | 研究経過報告                          | 秋川高校   | 水谷禎憲  | [22091] |
|                   | 其角の仏陀観について                      | 葛飾商業高校 | 浅香育弘  | [22095] |
|                   | 性別役割分業について考える                   | 京橋高校   | 飯岡祐保  | [22101] |
|                   | 「現代社会」－夏休みの課題から－                | 北野高校   | 志村忠彦  | [22105] |
|                   | 現代社会「世界の諸地域の文化と文化交流」の類型化の方法について | 水元高校   | 大野精一  | [22109] |
| 特集                | 私にとっての「現代社会」                    |        |       |         |
|                   | 「現代社会」の授業をどう改善していくか             | 青梅東高校  | 伊藤駿二郎 | [22117] |
|                   | 「現代社会」を考える                      | 小岩高校   | 小川一郎  | [22120] |
|                   | いまだ試行中なり・現代社会                   | 共立女子高校 | 館入慧子  | [22123] |
|                   | <現代社会>から「現代社会」へつなぐもの            | 東村山高校  | 新井明   | [22126] |
|                   | 「現代社会」的私的体験                     | 秋川高校   | 水谷禎憲  | [22129] |
|                   | 「現代社会」授業覚え書き                    | 豊島高校   | 葦名次夫  | [22134] |
| 東京都高等学校倫理・社会研究会規約 |                                 |        |       | [22138] |
| 事務局だより            |                                 |        |       | [22140] |
| あとがき              |                                 |        |       | [22141] |

### 第23集 (昭和59年度)

|                     |                                |           |      |         |
|---------------------|--------------------------------|-----------|------|---------|
| はじめに                | 研究活動の充実・活性化を願う                 | 会長        | 寺島甲祐 |         |
| 研究主題と研究体制および紀要の編集方針 |                                |           |      | [23003] |
| 研究会報告               |                                |           |      |         |
| 総会                  | 昭和59年5月22日(火) 東京都教育会館          |           |      |         |
| 研究発表                | 「新設高と『現代社会』」                   | 田無高校      | 坂本清治 |         |
| 講演要旨                | 「現代社会と学問の再構成」                  | 東京大学講師    | 中山茂  | [23005] |
| 第一回研究例会             | 昭和59年6月22日(金) 玉川聖学院            |           |      |         |
| 公開授業                | 「水資源」                          | 玉川聖学院     | 幸田雅夫 | [23007] |
| 研究発表                | 「柳田国男と社会科教育」                   | 日野高校      | 杉本仁  | [23008] |
| 講演要旨                | 「空海の人と思想」                      | 東洋大学教授    | 金岡秀友 | [23009] |
| 第二回研究例会             | 昭和59年10月15日(月) 本所高校            |           |      |         |
| 公開授業                | 「F・ベーコンと経験主義の考え方」              | 本所高校      | 勝田泰次 | [23011] |
| 研究発表                | 「『韓国・朝鮮問題』を扱って」                | 青山高校      | 渡辺潔  | [23012] |
| 講演要旨                | 「私のカント像」                       | 東京都立大学助教授 | 久保元彦 | [23014] |
| 第三回研究例会             | 昭和59年11月17・18日 上野高校(全倫研紀要参)    |           |      |         |
| 第四回研究例会             | 昭和60年2月4日(月) 四谷商業高校            |           |      |         |
| 公開授業                | 「パーソナルコンピューターを使った資源エネルギー問題授業例」 | 四谷商業高校    | 和田倫明 | [23016] |
| 研究発表                | 「異端的『現代社会』論への試み」               | 東村山高校     | 新井明  | [23018] |
| 講演要旨                | 「教育とその思い出」                     | 田園調布高校    | 寺島甲祐 | [23025] |
| 講演要旨                | 「教倫研と私」                        | 葛飾商業高校    | 浅香育弘 | [23026] |
| 研究報告                |                                |           |      |         |
| 第一分科会               | 「現代社会」の基本的問題の研究                |           |      |         |
|                     | 研究経過報告                         | 清瀬東高校     | 上村肇  | [23027] |
|                     | 「現代社会」経済的内容におけるグループ学習の実        | 東高校       | 渡辺敦子 | [23029] |
|                     | 三人の少女たち－青年期の諸問題を考える私にとつ        | 豊島高校      | 岸本次司 | [23035] |
|                     | ての土台                           |           |      |         |
|                     | 1・2学期の授業から－生徒の授業感想を通して学        | 荒川工業高校    | 富塚昇  | [23039] |
|                     | ぶ「現代社会」－                       |           |      |         |
| 第二分科会               | 肢体不自由養護学校における社会科               | 清瀬東高校     | 上村肇  | [23045] |
|                     | 「現代社会と人間の生き方」の研究               |           |      |         |
|                     | 研究経過報告                         | 小金井北高校    | 古山良平 | [23049] |
|                     | 地域環境を考える                       | 竹台高校      | 斉藤規  | [23052] |

|                    |                             |        |       |         |
|--------------------|-----------------------------|--------|-------|---------|
|                    | チャート作成の指導                   | 府中高校   | 永上肆朗  | [23056] |
|                    | 現代社会「青年と自己探究」を授業でどのように構成するか | 水元高校   | 大野精一  | [23060] |
| 第三分科会              | 選択「倫理」の研究                   |        |       |         |
|                    | 研究経過報告                      | 八王子東高校 | 井上勝   | [23064] |
|                    | 視聴覚教材を通して生徒の意識の『社会化』を       | 京橋高校   | 宮澤眞二  | [23066] |
|                    | 内村鑑三と明治国家—戦争と植民地をめぐって—      | 八王子東高校 | 井上勝   | [23064] |
|                    | 「現代社会」「倫理」を担当するに当たって—産休     | 荻窪高校   | 藤田ナツ子 | [23076] |
|                    | 代替教員の立場から—                  |        |       |         |
| 特集 “MY PLAN「現代社会」” | 「則天去私」について                  | 葛飾商業高校 | 浅香育弘  | [23079] |
|                    | 「私の倫理」授業草稿—新渡戸稲造—           | 本所高校   | 勝田泰次  | [23084] |
|                    | 学習意欲のわく「現代社会」を目指して          | 大森東高校  | 木村正雄  | [23089] |
|                    | 生徒と読む—倫理の共同学習—              | 秋川高校   | 水谷禎憲  | [23093] |
|                    | 知る権利の保障について—情報公開制度—         | 北野高校   | 井川哲夫  | [23096] |
|                    | 「現代社会、こんな〇宿マルシュク」           | 江北高校   | 宮崎宏一  | [23101] |
| あとがき               |                             |        |       | [23104] |
| 東京都高等学校倫理・社会研究会規約  |                             |        |       |         |

### 第24集 (昭和60年度)

|                   |                           |           |      |         |
|-------------------|---------------------------|-----------|------|---------|
| 巻頭言               | 生徒から出発する研究を               | 会長        | 酒井俊郎 | [24001] |
| 研究主題と研究体制         |                           |           |      | [24004] |
| 紀要の執筆要項           |                           |           |      | [24006] |
| 研究会活動の概要          |                           |           |      | [24007] |
| 研究会報告             |                           |           |      |         |
| 総会                |                           |           |      |         |
| 研究発表              | 考える力生きる力を育てるために           | 江戸川高校     | 泉谷まさ | [24010] |
| 講演                | 学校教育と正論                   | 千葉大学教授    | 京極純一 | [24012] |
| 第一回研究会            |                           |           |      |         |
| 公開授業              | 他者との関係を考える                | 八王子東高校    | 井上勝  | [24015] |
| 研究発表              | 生徒の「気」をめぐって               | 田無工業高校    | 辻勇一郎 | [24016] |
| 講演要旨              | 「身」からの発想                  | 明治大学教授    | 市川浩  | [24019] |
| 第二回研究会            |                           |           |      |         |
| 公開授業              | 高校生にとっての労働問題              | 荒川工業高校    | 富塚昇  | [24022] |
| 研究発表              | 事例導入による「青年探究」の学習          | 水元高校      | 大野精一 | [24023] |
| 講演要旨              | 現代におけるテクノロジー—文化人類学の視点から   | 東京外語大学助教授 | 川田順三 | [24027] |
| 第四回研究会            |                           |           |      |         |
| 公開授業              | 仏教の思想について                 | 駒場高校      | 細谷斉  | [24029] |
| 研究発表              | 「イエス」をいかに教えるか             | 正則高校      | 紺野義継 | [24030] |
| 講演要旨              | 都立高校私の歩んだ道                | 蒲田高校校長    | 鮎沢真澄 | [24034] |
| 講演要旨              | 教育雑感                      | 国分寺高校校長   | 井原茂幸 | [24035] |
| 講演要旨              | 倫理・社会と学校経営                | 富士高校校長    | 道広史行 | [24036] |
| 研究報告              |                           |           |      |         |
| 第一分科会             | 現代社会の基本的な問題を探求させる指導方法の研究  |           |      |         |
|                   | 研究経過報告                    | 清瀬東高校     | 上村肇  | [24037] |
|                   | マンガから見る現代高校生の心象風景—あだち充    | 東村山高校     | 新井明  | [24039] |
|                   | 『タッチ』の世界を手がかりに            |           |      |         |
| 第二分科会             | 現代に生きるための倫理的自覚を深める指導方法の研究 |           |      |         |
|                   | 研究経過報告                    |           |      | [24044] |
| 第三分科会             | 文献・資料による指導内容の研究           |           |      |         |
|                   | 研究経過報告                    | 八王子東高校    | 井上勝  | [24045] |
|                   | 必修倫理の目指すもの                | 八王子東高校    | 井上勝  | [24048] |
|                   | 卒業生からの手紙—現代社会[240青年期]の導入の | 江北高校      | 宮崎宏一 | [24052] |
|                   | 資料に使う—                    |           |      |         |
| 特集 “現代社会 私の試み”    |                           |           |      |         |
|                   | B・タウトの嫌ったもの               | 竹台高校      | 斉藤規  | [24057] |
|                   | 林竹二                       | 秋川高校      | 水谷禎憲 | [24061] |
|                   | 現代社会 私の試み                 | 片倉高校      | 増淵達夫 | [24065] |
|                   | 情報社会の問題—過熱する事件報道を対象にした授   | 千歳丘高校     | 古澤英樹 | [24068] |
|                   | 業実践—                      |           |      |         |
|                   | 現代社会 私の試み                 | 四谷商業高校    | 影山洋  | [24072] |
| 事務局だより            |                           |           |      | [24075] |
| 編集後記              |                           |           |      | [24077] |
| 東京都高等学校倫理・社会研究会規約 |                           |           |      |         |

### 第25集 (昭和61年度)

|         |  |    |      |         |
|---------|--|----|------|---------|
| はじめに    |  | 会長 | 酒井俊郎 | [25004] |
| 本年度研究体制 |  |    |      |         |

|                   |                                     |                      |                             |
|-------------------|-------------------------------------|----------------------|-----------------------------|
| 昭和61年度研究活動報告      |                                     |                      | [25006]                     |
| 研究例会報告            |                                     |                      |                             |
| 総会                |                                     |                      |                             |
| 研究発表              | 面白い「現代社会」の授業を求めて                    | 石神井高校                | 仁科静夫 [25009]                |
| 講演                | 小泉八雲からみた日本の心ー比較倫理の試み                | 東京大学教授               | 平川祐弘 [25013]                |
| 第一回研究例会           |                                     |                      |                             |
| 公開授業              | 文化と人間ー罪責意識の東西比較                     | 千歳丘高校                | 古沢英樹 [25015]                |
| 研究発表              | 「現代社会」像の再検討ー「倫理」との関連におい             | 東大和南高校               | 滝澤秀一 [25016]                |
| 講演要旨              | 今、国際化とは何か                           | 慶応大学教授               | 鈴木孝夫 [25019]                |
| 第二回研究例会           |                                     |                      |                             |
| 公開授業              | 〈国際〉とは何か                            | 北多摩高校                | 吉野聡 [25021]                 |
| 研究発表              | 総合性を重視した〈現代社会〉の試み                   | 国分寺高校                | 関根荒正 [25022]                |
| 講演要旨              | ドイツ民主党の衰亡と遺産                        | 東京大学教授               | 長尾龍一 [25024]                |
| 第四回研究例会           |                                     |                      |                             |
| 公開授業              | イエスの思想                              | 九段高校                 | 蕉木潔 [25026]                 |
| 研究協議              | 倫理教育の充実・私はこう考えるー新教育課程の5年間を顧みて       | 本所高校<br>三田高校<br>成瀬高校 | 勝田泰次 [25027]<br>海野省治<br>成瀬功 |
| 講演要旨              | 心に残る安田武さんの言葉                        | 井草高校長                | 嶋森敏 [25029]                 |
| 講演要旨              | ふりかえって                              | 新宿高校長                | 酒井俊郎 [25031]                |
| 分科会報告             |                                     |                      |                             |
|                   | 研究部報告                               | 江北高校                 | 及川良一 [25035]                |
|                   | 第一分科会                               | 東村山高校                | 新井明 [25036]                 |
|                   | 第二分科会                               | 片倉高校                 | 増淵達夫 [25040]                |
|                   | 第三分科会                               | 青井高校                 | 吉村浩一 [25043]                |
| 個人研究報告            |                                     |                      |                             |
|                   | 「経済人仮説」考ー経済教育と倫理についての覚え書き           | 東村山高校                | 新井明 [25047]                 |
|                   | 「現代社会グループ研究発表」ーその評価と生徒の反応           | 江北高校                 | 宮崎宏一 [25052]                |
|                   | 意義・意味・価値を考えることが何故重要なのかー私の認知心理学ノートから | 墨田川高校堤校舎             | 大野精一 [25060]                |
|                   | グループワークトレーニングG・W・Tを活用した民主主義の学習      | 秋川高校                 | 水谷禎憲 [25064]                |
|                   | 弱者                                  | 青井高校                 | 吉村浩一 [25070]                |
|                   | 新人類雑考                               | 四谷商業高校               | 影山洋 [25074]                 |
|                   | 大衆社会の現在ー中流意識崩壊と大衆の分化、新階層化の現実        | 一橋高校                 | 平井啓一 [25076]                |
|                   | 理想の人間像について                          | 日大豊山高校               | 斉藤正克 [25079]                |
| 特集                | 年間計画をどう立てているか                       |                      |                             |
|                   |                                     | 東村山高校                | 新井明 [25087]                 |
|                   |                                     | 片倉高校                 | 増淵達夫 [25088]                |
|                   |                                     | 江北高校                 | 及川良一 [25089]                |
|                   |                                     | 東京家政大学附属女子高校         | 菊入三樹夫 [25090]               |
|                   |                                     | 荒川工業高校               | 宮原賢二 [25092]                |
|                   |                                     | 秋川高校                 | 水谷禎憲 [25093]                |
|                   |                                     | 東京学芸大学附属高校           | 古山良平 [25094]                |
|                   |                                     | 三田高校                 | 海野省治 [25095]                |
|                   |                                     | 玉川聖学院高校              | 幸田雅夫 [25096]                |
| 特別寄稿              | 「生き方」についての指導はこれでよいか                 | 会長                   | 酒井俊郎 [25097]                |
| 昭和61年度都倫研事務局日録    |                                     |                      | [25101]                     |
| 東京都高等学校倫理・社会研究会規約 |                                     |                      | [25105]                     |
| 事務局だより            |                                     |                      | [25107]                     |
| あとがき              |                                     |                      | [25108]                     |

### 第2.6集 (昭和62年度)

|                     |                            |      |              |
|---------------------|----------------------------|------|--------------|
| 巻頭言                 | 足もとを見つめ、未来を展望して            | 会長   | 御厨良一 [26001] |
| 研究主題と研究体制および紀要の編集方法 |                            |      | [26004]      |
| 研究分科会参加者名簿          |                            |      | [26007]      |
| 研究会活動報告の概要          |                            |      | [26008]      |
| 研究例会報告              |                            |      |              |
| 総会並びに研究発表大会         |                            |      |              |
| 総会                  |                            |      |              |
| 研究発表                | 規範意識の内面化をどう進めるかー全寮制教育を通じてー | 秋川高校 | 水谷禎憲 [26013] |

|                   |                             |            |       |         |
|-------------------|-----------------------------|------------|-------|---------|
| 講演要旨              | 福祉社会における「公」と「私」－福祉の総合的視点から－ | 中大教授       | 丸尾直美  | [26020] |
| 第一回研究例会           |                             |            |       |         |
| 公開授業              | 青年期における自己探究－欲求と行動について－      | 小松川高校      | 佐藤勲   | [26022] |
| 講演要旨              | 現代倫理学の動向と倫理教育の課題            | お茶の水女子大学教授 | 尾田幸雄  | [26024] |
| 第二回研究例会           |                             |            |       |         |
| 公開授業              | 西洋近代思想                      | 蒲田高校       | 徳久寛   | [26026] |
| 研究発表              | 松尾芭蕉「おくのぼそ道」をめぐって           | 四谷商業高校     | 小河信國  | [26028] |
| 講演要旨              | 現代青年の生き方                    | 東京理科大学教授   | 原田茂   | [26032] |
| 第四回研究例会           |                             |            |       |         |
| 公開授業              | 祖母・母・娘の時代                   | 保谷高校       | 瀬戸彰   | [26034] |
| 研究発表              | 道徳性の発達に関するコールバーグ理論について      | 東高校(定)     | 小嶋孝   | [26036] |
| 講演要旨              | 現代日本と宗教                     | 評論家        | ひろさちや | [26049] |
| 分科会報告             |                             |            |       |         |
|                   | 第一分科会                       | 一橋高校(定)    | 平井啓一  | [26051] |
|                   | 第二分科会                       | 青井高校       | 吉村浩一  | [26055] |
|                   | 第三分科会                       | 多摩工業高校     | 浅倉一臣  | [26059] |
| 個人研究報告            |                             |            |       |         |
|                   | 「経済教育と倫理」再考－今年の授業から－        | 南平高校       | 新井明   | [26063] |
|                   | 真実存在・現実存在について               | 日大豊山高校     | 斎藤正克  | [26068] |
|                   | 「定期考査」                      | 狛江高校       | 佐藤幸三  | [26076] |
|                   | 日本的「生」の原像とその展開に関する一考察       | 竹早高校       | 佐藤亮   | [26080] |
| 特集                | 「授業に役立つ文献・資料の紹介」            |            |       |         |
|                   | 「哲学をたたえて」他                  | 八王子東高校     | 井上勝   | [26087] |
|                   | 「海なお深く 太平洋戦争船員の体験手記」他       | 江北高校       | 上村肇   | [26088] |
|                   | 「日常生活の構成」他                  | 荒川工業高校     | 富塚昇   | [26089] |
| 東京都高等学校倫理・社会研究会規約 |                             |            |       | [26090] |
| 事務局だより            |                             |            |       | [26092] |
| あとがき              |                             |            |       | [26093] |

## 第27集(昭和63年度)

|                      |                         |          |       |         |
|----------------------|-------------------------|----------|-------|---------|
| 巻頭言                  |                         | 会長       | 御厨良一  | [27001] |
| 研究主題と研究体制、および紀要の編集方法 |                         |          |       | [27004] |
| 研究分科会参加者名簿           |                         |          |       | [27007] |
| 研究会活動報告の概要           |                         |          |       | [27008] |
| 研究例会報告               |                         |          |       |         |
| 総会ならびに研究発表大会         |                         |          |       |         |
| 総会                   |                         |          |       |         |
| 講演要旨                 | 倫理教育を考える                | 文部省教科調査官 | 安沢順一郎 | [27013] |
| 第一回研究例会              |                         |          |       |         |
| 公開授業                 | 風土と宗教                   | 羽田高校     | 町田紳   | [27015] |
| 研究発表                 | マンガにみる高校生の意識－視聴覚教材の可能性－ | 四谷商業高校   | 影山洋   | [27016] |
| 講演要旨                 | 内なるヨーロッパと外なるヨーロッパ       | 一橋大学教授   | 阿部謹也  | [27019] |
| 第二回研究例会              |                         |          |       |         |
| 公開授業                 | 老荘思想                    | 青井高校     | 吉村浩一  | [27023] |
| 研究発表                 | 他者の問題－現代思想の動向から－        | 広尾高校     | 古沢英樹  | [27025] |
| 講演要旨                 | 文化の重層性とダイナミックス          | 中央大学教授   | 丸山圭三郎 | [27029] |
| 第四回研究例会              |                         |          |       |         |
| 公開授業                 | 自由意志について                | 白鷗高校     | 橋本克巳  | [27033] |
| 講演要旨                 | 瑣事から大事へ                 | 本所高校     | 勝田泰次  | [27034] |
| 講演要旨                 | 宗教の理解                   | 府中高校     | 永上肆朗  | [27035] |
| 講演要旨                 | 学校経営における社会科－倫社、政経を中心として | 東大和南高校   | 山口俊治  | [27036] |
| 講演要旨                 | 音楽と人生                   | 南平高校     | 沼田俊一  | [27037] |
| 講演要旨                 | 36年の教師生活を振り返って          | 白鷗高校     | 御厨良一  | [27038] |
| 分科会報告                |                         |          |       |         |
|                      | 第一分科会                   | 荒川工業高校   | 富塚昇   | [27039] |
|                      | 第二分科会                   | 狛江高校     | 佐藤幸三  | [27043] |
|                      | 第三分科会                   | 清瀬養護学校   | 山本正   | [27047] |
| 個人研究報告               |                         |          |       |         |
|                      | 鎌倉仏教について                | 日大豊山高校   | 斎藤正克  | [27051] |
|                      | 「ベルツの日記」を読む             | 成瀬高校     | 成瀬功   | [27057] |
|                      | 視聴覚教材－ビデオ－を授業に使ってみて     | 玉川聖学院    | 幸田雅夫  | [27059] |
|                      | コメ自由化論をめぐる討論            | 秋川高校     | 水谷禎憲  | [27063] |
|                      | 現象学の周辺(1)               | 狛江高校     | 佐藤幸三  | [27068] |
|                      | エマニュエル・レヴィナスの思想         | 京橋高校     | 宮澤眞二  | [27073] |
| 特集                   | 新学習指導要領について             |          |       |         |

|                               |           |       |         |
|-------------------------------|-----------|-------|---------|
| 公民科の存在と価値                     |           | 齊藤弘   | [27078] |
| 新学習指導要領の中間発表を読んで              | 多摩市教育研究所  | 寺島甲祐  | [27080] |
| 今回の学習指導要領改訂の中間発表を読んで          |           | 井原茂幸  | [27082] |
| 不協和音ー公民科の理念についてー              | 山崎学園富士見高校 | 道廣史行  | [27085] |
| 新指導要領の中間発表を読んで                | 文教大学      | 酒井俊郎  | [27087] |
| 指導要領も変われば学校も変わるかー生徒のために       |           | 寫森敏   | [27089] |
| “既得権”を捨てよー                    |           |       |         |
| 学習指導要領案を読んで                   | 保谷高校      | 伊藤駿二郎 | [27091] |
| 強引すぎる社会科の解体と世界史の必修化           | 江北高校      | 宮崎宏一  | [27092] |
| 失われた日本                        | 正則高校      | 紺野義継  | [27094] |
| 野の畑から考える「公」と「私」ーフィールドワーク日記よりー | 工芸高校      | 大木洋   | [27096] |
| 公民科と意義と課題                     | 三鷹高校      | 工藤文三  | [27097] |
| 新しい指導要領案について                  | 八王子東高校    | 井上勝   | [27098] |
| 「人間としての在り方生き方を考えさせる倫理」        | 秋川高校      | 水谷禎憲  | [27099] |
| 新学習指導要領（案）によって学校は変わるか         | 北野高校      | 小島恒巳  | [27100] |
| 総則に「人間の尊厳」という言葉の明記を           |           | 藤田ナツ子 | [27104] |
| <資料>平成元年3月15日告示の高等学校学習指導要領（抄） |           |       | [27105] |
| 東京都高等学校倫理・社会研究会規約             |           |       | [27112] |
| あとがき                          |           |       | [27114] |

### 第28集（平成元年度）

|   |            |       |         |
|---|------------|-------|---------|
| 巻頭言                                     | 会長         | 小川一郎  | [28001] |
| 研究主題と研究体制、および紀要の編集方針                    |            |       | [28004] |
| 研究分科会参加者名簿                              |            |       | [28007] |
| 平成元年度研究会活動報告概要                          |            |       | [28008] |
| 研究例会報告                                  |            |       |         |
| 総会ならびに研究発表大会                            |            |       |         |
| 総会                                      |            |       |         |
| 講演要旨 現代若者論ーポスト・モラトリアムへの模索               | 日本青少年研究所   | 千石保   | [28013] |
|   | 長          |       |         |
| 第一回研究例会                                 |            |       |         |
| 公開授業 公開授業前後                             | 大崎高校       | 辻勇一郎  | [28015] |
| 研究発表 生徒の社会認識を深め社会の中で主体的に生きる力を育てる授業展開の工夫 | 千歳高校       | 増淵達夫  | [28016] |
| 講演要旨 現代日本政治の課題                          | 東京大学教授     | 佐々木毅  | [28022] |
| 第二回研究例会                                 |            |       |         |
| 公開授業 「豊かな人間関係」の育成のために                   | 東大和南高校     | 滝沢秀一  | [28024] |
| 研究発表 現代の消費者問題ー「契約」観念を中心にすえた消費者教育        | 忍岡高校       | 立石武則  | [28028] |
| 講演要旨 生産主義的理性批判の系譜ーハイディガーからフーコーまで        | 東京経済大学教授   | 今村仁司  | [28030] |
| 第四回研究例会                                 |            |       |         |
| 公開授業 地球環境問題                             | 江東工業高校     | 渡辺安則  | [28033] |
| 研究発表 エマニュエル・レヴィナスの倫理学ー第一哲学としての倫理学       | 京橋高校       | 宮澤眞二  | [28035] |
| 講演要旨 東欧の改革とペレストロイカのゆくえ                  | ソ連東欧研究所副所長 | 小川和男  | [28040] |
| 分科会報告                                   |            |       |         |
| 第一分科会                                   | 昭和高校       | 大谷いづみ | [28043] |
| 第二分科会                                   | 田園調布高校     | 佐良土茂  | [28046] |
| 第三分科会                                   | 千歳高校       | 増淵達夫  | [28049] |
| 個人研究報告                                  |            |       |         |
| わが国の近世前期の儒者たち                           | 日大豊山高校     | 斎藤正克  | [28054] |
| 現象学の周辺（2）                               | 狛江高校       | 佐藤餐霞室 | [28059] |
| 善のイデアー『国家篇』に即してー                        | 田園調布高校     | 佐良土茂  | [28064] |
| 公民科教育における「文化学習」の意義と構想                   | 航空高専       | 和田倫明  | [28069] |
| 用語としての「国際化」問題                           | 秋川高校       | 水谷禎憲  | [28074] |
| 遊び・仲間集団の変質と現代の青年ー文献的アプローチー              | 墨田川高校堤校舎   | 大野精一  | [28080] |
| サンタクロースっているんでしょうか                       | 四谷商業高校     | 影山洋   | [28085] |
| 現代の高校生像                                 | 成瀬高校       | 成瀬功   | [28089] |
| 東京都高等学校倫理・社会研究会規約                       |            |       | [28097] |
| 編集後記                                    |            |       | [28099] |
| あとがき                                    |            |       | [28100] |

### 第29集（平成2年度）

|     |            |    |      |         |
|-----|------------|----|------|---------|
| 巻頭言 | 「学習方法の開発を」 | 会長 | 小川一郎 | [29001] |
|-----|------------|----|------|---------|

|                   |                            |             |               |
|-------------------|----------------------------|-------------|---------------|
| 研究主題と研究体制         |                            |             | [29004]       |
| 研究分科会参加者名簿        |                            |             | [29006]       |
| 平成二年度研究会活動報告概要    |                            |             | [29007]       |
| 研究例会報告            |                            |             | [29009]       |
| 総会ならびに研究発表大会      |                            |             |               |
| 総会                |                            |             |               |
| 研究発表              | 自然と精神～現象学からの展望             | 狛江高校        | 佐藤幸三 [29011]  |
| 第一回研究例会           |                            |             |               |
| 公開授業              | 死と再生の儀礼～おくのほそ道を巡って～        | 四谷商業高校      | 小河信國 [29016]  |
| 公開授業              | 公開授業について                   | 四谷商業高校      | 影山洋 [29017]   |
| 研究発表              | 戦後社会科の実践と「現代社会」について        | 東京学芸大学附属高校  | 古山良平 [29019]  |
| 講演要旨              | 生命観の変革と翁童論                 | 国学院大学講師     | 鎌田東二 [29024]  |
| 第二回研究例会           |                            |             |               |
| 公開授業              | 代理母契約の背景～依頼者と代理母の関係        | 昭和高校        | 大谷いづみ [29026] |
| 講演要旨              | 先端医療革命と生命倫理                | 三菱化成総合科学研究所 | 米本昌平 [29028]  |
| 第四回研究例会           |                            |             |               |
| 公開授業              | 授業雑感                       | 千歳高校        | 増淵達夫 [29031]  |
| 講演要旨              | 教育の縦糸～わたしの受けた教育            | 保谷高校        | 伊藤駿二郎 [29033] |
| 講演要旨              | わたくしの初心                    | 大山高校        | 菊地堯 [29035]   |
| 講演要旨              | インドに学ぶ～ヒンドゥー・スワラージを通して～    | 保谷高校        | 杉原安 [29037]   |
| 分科会報告             |                            |             |               |
|                   | 第一分科会報告                    | 武蔵丘高校       | 佐藤由紀子 [29039] |
|                   | 第二分科会報告                    | 瑞穂農芸高校      | 本間恒男 [29042]  |
|                   | 第三分科会報告                    | 玉川高校        | 山本正 [29046]   |
| 個人研究報告            |                            |             |               |
|                   | 生命倫理への招待                   | 昭和高校        | 大谷いづみ [29050] |
|                   | 生物的に見た性                    | 田園調布高校      | 佐良土茂 [29055]  |
|                   | じゃばゆきさん物語～南北問題を考える～の授業     | 代々木高校       | 西尾理 [29060]   |
|                   | 環境問題～八木重吉展を見て～             | 鶴川第二中学校     | 藤田ナツ子 [29064] |
|                   | 人間関係を基軸とした倫理教育への新しいアプローチ   | 玉川高校        | 山本正 [29069]   |
|                   | アウトサイド・イン・インサイド・アウト        | 蔵前工業高校      | 功刀幸彦 [29074]  |
|                   | 日本文化の原質について～「遍歴する人々」から考える～ | 赤羽商業高校      | 三森和哉 [29079]  |
|                   | 「日本人のこころ」について              | 江東工業高校      | 渡辺安則 [29084]  |
|                   | 日本人の死生観からケガレの構造へ           | 四谷商業高校      | 小河信國 [29089]  |
|                   | 現象学の周辺(3)                  | 狛江高校        | 佐藤幸三 [29093]  |
| 小特集 新指導要領         | 「現代社会」「倫理」をこう構成する          |             |               |
|                   | 倫理学習の基本的課題と内容構成            | 国立教育研究所     | 工藤文三 [29098]  |
|                   | 新指導要領による「倫理」の授業をどう構成するか    | 久留米西高校      | 平井啓一 [29102]  |
|                   | 「国際化」をどう教材化するか             | 江北高校        | 上村肇 [29104]   |
|                   | 新「倫理」の評価と青年期の扱いの～私案        | 石神井高校       | 仁科静夫 [29106]  |
|                   | ビデオを使った生徒実態に合わせた授業         | 深川高校        | 渡辺潔 [29109]   |
| 特別寄稿              | 近代批判の諸問題                   | 東洋大学教授      | 新田義弘 [29111]  |
| 東京都高等学校倫理・社会研究会規約 |                            |             | [29120]       |
| 編集後記              |                            |             | [29121]       |
| あとがき              |                            |             | [29122]       |

### 第30集 (平成3年度)

|                |               |         |                     |
|----------------|---------------|---------|---------------------|
| 巻頭言            | 会長            | 小川一郎    | [30001]             |
| 研究主題と研究体制      |               |         | [30004]             |
| 研究分科会参加者名簿     |               |         | [30006]             |
| 平成三年度研究会活動報告概要 |               |         | [30007]             |
| 研究例会報告         |               |         | [30010]             |
| 総会ならびに研究発表大会   |               |         |                     |
| 講演要旨           | 少年法制における子供の人権 | 一橋大学教授  | 福田雅章 [30012]        |
| 第一回研究例会        |               |         |                     |
| 公開授業           | 現代社会と異文化理解    | 久留米西高校  | 平井啓一 [30017]        |
| 研究発表           | 研究発表のこと       | 蔵前工業高校  | 功刀幸彦 [30019]        |
| 講演要旨           | 湾岸戦争とその後の周辺諸国 | 拓殖大学助教授 | 佐々木良昭 [30022]       |
| 第二回研究例会        |               |         |                     |
| 公開授業           | 研究授業を終えて授業雑感  | 石神井高校   | 仁科静夫 [30024]        |
| 研究発表           | 「青年期」について     | 豊多摩高校   | 浅倉一臣 [30026]        |
| 講演要旨           | 差別と人権問題       | 上智大学教授  | ピセンテ・M・ボネット [30029] |
| 第四回研究例会        |               |         |                     |
| 公開授業           | 福沢論吉に学ぶ       | 豊島高校    | 徳久寛 [30031]         |



|                            |                        |                |               |         |
|----------------------------|------------------------|----------------|---------------|---------|
| 公開授業<br>講演要旨               | 方便にて真理を伝える<br>私と生徒指導   | 豊島高校           | 岸本次司          | [30032] |
| 講演要旨                       | 都倫研・全倫研で学んだこと          | 豊島高校           | 小川一郎          | [30034] |
| 講演要旨                       | 生徒の自主性と教師の指導性          | 竹早高校           | 木村正雄          | [30036] |
|                            |                        | 東京学芸大学附属高<br>校 | 秋元正明          | [30039] |
| 分科会報告                      |                        |                |               |         |
|                            | 第一分科会                  | 世田谷工業高校        | 増田和明          | [30041] |
|                            | 第二分科会                  | 江東工業高校         | 渡辺安則          | [30046] |
|                            | 第三分科会                  | 玉川高校           | 山本正           | [30049] |
| 都倫研創立30周年記念座談会             |                        |                |               | [30053] |
|                            | 都倫研顧問                  |                | 矢谷芳雄          |         |
|                            |                        |                | 佐藤勇夫          |         |
|                            |                        |                | 増田信           |         |
|                            | 都倫研会長                  |                | 小川一郎          |         |
|                            | 副会長                    |                | 中村新吉          |         |
| 特集 都倫研30周年記念－都倫研の歩みと展望－    |                        |                |               |         |
|                            | 「倫理・社会」創設の頃を振り返って      |                | 岡本武男          | [30065] |
|                            | 都倫研創立世代と倫理教育           |                | 斉藤弘           | [30067] |
|                            | 初心を引き継いでさらなる発展を        |                | 金井肇           | [30069] |
|                            | 戦後の倫理教育と都倫研との出会い       |                | 寺島甲祐          | [30071] |
|                            | 都倫研のピラミッド              |                | 伊藤駿二郎         | [30073] |
|                            | 都倫研と私                  |                | 菊地堯           | [30075] |
|                            | 雑感－10周年から20周年へ－        |                | 杉原安           | [30077] |
|                            | 都倫研・全倫研で出会った人々         | 日大二高           | 小笠原悦郎         | [30079] |
|                            | 草創の精神に学ぶ               | 光丘高校           | 中村新吉          | [30081] |
|                            | 都倫研 それは私の宝物            | 日比谷高校          | 宮崎宏一          | [30085] |
|                            | 都倫研と私－都倫研25年の思い出－      | 武蔵高校           | 細谷斉           | [30087] |
|                            | 「わかる」ということについて         | 足立西高校          | 大野精一          | [30089] |
|                            | 都倫研との関わり－公民科の発展を目指して   | 国分寺高校          | 関根荒正          | [30091] |
|                            | 都倫研と私                  | 南平高校           | 新井明           | [30093] |
|                            | 先哲学習の伝統を生かしたテーマ学習を求めて－ | 富士高校           | 葦名次夫          | [30095] |
|                            | 「倫・社」時代の都倫研から学んだこと－    |                |               |         |
| 個人研究報告                     |                        |                |               |         |
|                            | 現象学の周辺（4）              | 都立大付属高校        | 佐藤幸三(饗<br>霞室) | [30101] |
|                            | 高校生の宗教に関する意識調査         | 篠崎高校           | 藤野明彦          | [30107] |
|                            | 森林伐採による「環境と人権」         | 玉川聖学院高校        | 幸田雅夫          | [30113] |
|                            | 「現代社会」の授業の工夫について       | 桜水商業高校         | 大月郁夫          | [30117] |
|                            | 「基本的人権の尊重」とは           | 世田谷工業高校        | 増田和明          | [30119] |
|                            | 「在り方生き方」教育に対する疑問       |                | 酒井俊郎          | [30124] |
| 読書会報告                      | リップスの『倫理学の根本問題』を読む     |                |               | [30126] |
|                            |                        | 国立教育研究所        | 工藤文三          |         |
|                            |                        | 小松川高校          | 佐藤勲           |         |
|                            |                        | 千歳高校           | 増淵達夫          |         |
|                            |                        | 江東工業高校         | 渡辺安則          |         |
|                            |                        | 玉川高校           | 山本正           |         |
|                            |                        | 田園調布高校         | 佐良士茂          |         |
| 東京都高等学校倫理・社会研究会規約          |                        |                |               | [30130] |
| 都倫研研究活動（1）研究主題による都倫研30年の歩み |                        |                |               | [30132] |
|                            | （2）昭和57年～平成3年 研究活動の記録  |                |               | [30134] |
| 編集後記                       |                        |                |               | [30144] |
| あとがき                       |                        |                |               | [30145] |

### 第31集（平成4年度）

|                      |                      |                            |      |         |
|----------------------|----------------------|----------------------------|------|---------|
| 巻頭言                  | 新教育過程実施に向けての新しい課題と展望 | 会長                         | 中村新吉 | [31001] |
| 研究主題と研究体制、および紀要の編集方針 |                      |                            |      | [31006] |
| 研究分科会参加者名簿           |                      |                            |      | [31009] |
| 平成四年度研究会活動報告概要       |                      |                            |      | [31011] |
| 研究例会報告               |                      |                            |      |         |
| 總會ならびに研究発表大会         |                      |                            |      |         |
| 記念講話 都倫研30年の回顧と展望    |                      | 初代会長                       | 矢谷芳雄 | [31016] |
|                      |                      | 初代事務局長                     | 佐藤勇夫 | [31021] |
|                      |                      | 初代研究部長                     | 増田信  | [31025] |
| 講演要旨 現代社会と倫理の問題      |                      | 共立女子大学教授<br>(東京大学名誉教<br>授) | 城塚登  | [31030] |
| 第一回研究例会              |                      |                            |      |         |

|                   |   |            |      |         |
|-------------------|---|------------|------|---------|
| 公開授業              | 社会保障と豊かさー社会保障の充実は『豊かさ』への道？ー               | 忍岡高校       | 立石武則 | [31033] |
| 講演要旨              | エコフィロソフィの提唱                               | 慶応大学教授     | 間瀬啓允 | [31035] |
| 第二回研究例会           |   |            |      |         |
| 研究発表              | 価値の明確化ー理論と実践                              | 玉川高校       | 山本正  | [31037] |
| 講演要旨              | ポスト・モダンの哲学と日本の現在                          | 専修大学教授     | 市川宏祐 | [31042] |
| 第四回研究例会           |   |            |      |         |
| 公開授業              | 公開授業を終えて                                  | 蔵前工業高校     | 功刀幸彦 | [31044] |
| 研究発表              | 夜間定時制高校卒業生の生活・意識、キャリアの形成について              | 新宿高校       | 渡辺潔  | [31046] |
| 講演要旨              | 現代社会と倫理                                   | 跡見学園女子大学教授 | 川本隆史 | [31063] |
| 分科会報告             |   |            |      |         |
|                   | 第一分科会                                     | 忍岡高校       | 立石武則 | [31070] |
|                   | 第二分科会                                     | 京橋高校       | 宮澤眞二 | [31072] |
|                   | 第三分科会                                     | 練馬高校       | 渡辺安則 | [31075] |
|                   | 第四分科会                                     | 玉川高校       | 山本正  | [31079] |
| 個人研究報告            |   |            |      |         |
|                   | 経験と意味を可能にするもの                             | 都立大学付属高校   | 佐藤幸三 | [31084] |
|                   | 意味や価値を問う政経学習の可能性と課題ー選択自由講座『政治・経済』の試みと覚え書き | 富士高校       | 葦名次夫 | [31092] |
| 小特集：公民科           | としての『倫理』『現代社会』のねらいと構成                     |            |      |         |
|                   | 「公民科『倫理』」の授業の論理と倫理                        | 大泉学園高校     | 水谷禎憲 | [31097] |
|                   | 公民科としての『現代社会』『倫理』『政治・経済』のねらいと構成           | 北園高校       | 町田紳  | [31099] |
| 東京都高等学校倫理・社会研究会規約 |   |            |      | [31101] |
| 事務局だより            |   |            |      | [31103] |
| 編集後記              |   |            |      | [31104] |

### 第32集(平成5年度)

|                      |  |           |       |         |
|----------------------|--|-----------|-------|---------|
| 巻頭言                  |  | 会長        | 中村新吉  | [32001] |
| 研究主題と研究体制、および紀要の編集方針 |  |           |       | [32006] |
| 研究分科会参加者名簿           |  |           |       | [32009] |
| 平成5年度研究会活動報告概要       |  |           |       | [32011] |
| 研究例会報告               |  |           |       |         |
| 総会ならびに研究発表大会         |  |           |       | [32014] |
| 研究発表                 | 文化の存在拘束性について                           | 広尾高校      | 古澤英樹  | [32016] |
| 講演要旨                 | 哲学と反哲学                                 | 中央大学教授    | 木田元   | [32020] |
| 第一回研究例会              |  |           |       |         |
| 公開授業                 | 南北問題ー一枚のチラシからー～飢えのイメージと先入観～            | 玉川高校      | 山本正   | [32023] |
| 研究発表                 | 統一ドイツと外国人問題ー授業実践を中心にー                  | 羽田高校      | 田久仁   | [32025] |
| 講演要旨                 | ハイデッガーの『退屈』解釈                          | 早稲田大学名誉教授 | 川原栄峰  | [32028] |
| 第二回研究例会              |  |           |       |         |
| 公開授業                 | ありきたりでない人生とはー視聴覚教材を利用した授業展開の工夫ー        | 大泉北高校     | 富塚昇   | [32030] |
| 研究発表                 | 鎌倉仏教の教材化を見直すー栄西と臨済ー                    | 赤羽商業高校    | 三森和哉  | [32033] |
| 講演要旨                 | 変容する社会の社会科学(学)ーポスト冷戦世界と日本の選択ー          | 東京工業大学助教授 | 橋爪大三郎 | [32038] |
| 第四回研究例会              |  |           |       |         |
| 公開授業                 | エネルギー問題について                            | 桜水商業高校    | 大月郁夫  | [32041] |
| 講演要旨                 | 内面のフォーラムと自己相互作用についてー全倫                 | 法政大学教授    | 中川作一  | [32043] |
|                      | 研調査報告を踏まえてー                            |           |       |         |
| 講演要旨                 | 私の学んだ道                                 | 北野高校長     | 中村新吉  | [32046] |
| 分科会報告                |  |           |       |         |
|                      | 第一分科会                                  | 忍岡高校      | 立石武則  | [32050] |
|                      | 第二分科会                                  | 田無高校      | 宮澤眞二  | [32052] |
|                      | 第三分科会                                  | 玉川高校      | 山本正   | [32056] |
|                      | 第四分科会                                  | 北園高校      | 町田紳   | [32061] |
| 個人研究報告               |  |           |       |         |
|                      | 断想                                     | 北園高校      | 小嶋孝   | [32066] |
|                      | 学力問題について                               | 代々木高校     | 西尾理   | [32069] |
|                      | 「自然」とは何か                               | 狛江高校      | 小河信國  | [32074] |
|                      | 生徒の発想を生かす指導展開の工夫                       | 大泉北高校     | 富塚昇   | [32082] |
|                      | 公民科「倫理」と国語学習ー読む、書く、表現する力を高める原典作業学習の試みー | 富士高校      | 葦名次夫  | [32087] |
| 東京都高等学校倫理・社会研究会規約    |  |           |       | [32092] |
| 事務局だより               |  |           |       | [32094] |

第33集 (平成6年度)

|  |            |       |         |
|--|------------|-------|---------|
| 巻頭言  | 会長         | 坂本清治  | [33001] |
| 研究主題と研究体制、及び紀要の編集方針  |            |       | [33004] |
| 研究分科会参加者名簿   |            |       | [33007] |
| 平成6年度研究会活動報告概要   |            |       | [33009] |
| 研究例会報告   |            |       | [33012] |
| 総会ならびに研究発表大会   |            |       |         |
| 研究発表 人間としての在り方生き方を深く考えさせる学習指導の試みー『現代社会』における同時展開授業の実践とその報告ー | 練馬高校       | 渡辺安則  | [33014] |
| 講演要旨 現代倫理学の基本問題ー相手の身になって考えるこ                               | 専修大学教授     | 大庭健   | [33019] |
| 第一回研究例会  |            |       |         |
| 公開授業 平和を求める生き方を考える   | 南平高校       | 関根荒正  | [33021] |
| 研究発表 バブル崩壊後の日本経済   | 久留米西高校     | 平井啓一  | [33023] |
| 講演要旨 家族問題を再考する   | お茶の水女子大学教授 | 湯沢雅彦  | [33028] |
| 第二回研究例会  |            |       |         |
| 公開授業 経済成長と景気変動   | 羽田高校       | 黒須伸之  | [33030] |
| 研究発表 映画は人を裸体にする  | 福生高校       | 亀田文保  | [33032] |
| 講演要旨 19世紀における功利主義と日本ー福沢諭吉と西周                               | 国際基督教大学教授  | 小泉仰   | [33037] |
| 第四回研究例会  |            |       |         |
| 公開授業 戦後日本の思想ー大江健三郎ー  | 向島商業高校     | 渋谷紀雄  | [33040] |
| 研究発表 テーマ別討論中心学習9年目の現場から                                    | 南葛飾高校      | 飯島ふさ子 | [33042] |
| 分科会報告  |            |       |         |
| 第一分科会  | 北園高校       | 町田紳   | [33047] |
| 第二分科会  | 南野高校       | 功刀幸彦  | [33051] |
| 第三分科会  | 田無高校       | 宮澤眞二  | [33055] |
| 特集 「公民科『倫理』『現代社会』の教材化の工夫」                                  |            |       |         |
| local governmentの学習  | 江北高校       | 村上肇   | [33063] |
| 障害者問題を考える  | 大妻中野女子高校   | 楠本達治  | [33065] |
| ソフォクレス『オイディプス王』  | 筑波大学付属高校   | 斉藤規   | [33072] |
| 功利主義への私なりの紹介状  | 北野高校       | 鈴木一郎  | [33075] |
| 通学路清掃とカント、ベンサム、J.S.ミル                                      | 片倉高校       | 難波伸一  | [33078] |
| 選択倫理の授業  | 清瀬高校       | 原田健   | [33081] |
| 個人研究報告   |            |       |         |
| 倫社教師の教師冥利  | 東京女子体育大学   | 菊地堯   | [33084] |
| 信仰文化と社会について  | 羽田高校       | 黒須伸之  | [33089] |
| 教育考  | 明正高校       | 小島恒巳  | [33094] |
| 共感的理解を深める国際理解教育の実践   | 玉川高校       | 山本正   | [33099] |
| 東京都高等学校倫理・社会研究会規約  |            |       | [33106] |
| 事務局だより   |            |       | [33108] |
| 編集後記   |            |       | [33109] |

第34集 (平成7年度)

|                                   |                   |      |         |
|-----------------------------------|-------------------|------|---------|
| 巻頭言                               | 会長                | 坂本清治 | [34001] |
| 研究主題と研究体制及び紀要の編集方針                |                   |      | [34004] |
| 研究分科会参加者名簿                        |                   |      | [34007] |
| 平成7年度研究会活動報告概要                    |                   |      | [34009] |
| 研究例会報告                            |                   |      | [34012] |
| 総会並びに研究発表大会                       |                   |      |         |
| 研究発表 選挙制度の内容と課題ー学習指導の工夫ー          | 北野高校              | 廣末修  | [34014] |
| 講演要旨 高度情報通信社会の法的課題                | 一橋大学教授            | 堀部政男 | [34017] |
| 第一回研究例会                           |                   |      |         |
| 公開授業 阪神大震災から考えるーサバイバル教育の試みー       | 清瀬高校              | 原田健  | [34019] |
| 研究発表 経済のあり方についてのー考察ーロールズの正義論をもとにー | 北園高校              | 町田紳  | [34021] |
| 講演要旨 信じやすい心の行き着く先                 | 日本女子大学教授          | 島田裕巳 | [34024] |
| 第二回研究例会                           |                   |      |         |
| 公開授業 公開授業について                     | 井草高校              | 岩橋正人 | [34026] |
| 研究発表 家族関係教材化の試み                   | 大泉北高校             | 福田誠司 | [34028] |
| 講演要旨 生きがいと出会い                     | メンタルヘルス国際情報センター所長 | 小林司  | [34032] |
| 第四回研究例会                           |                   |      |         |
| 公開授業 帰国生学級生徒による新聞研究発表             | 三田高校              | 大木洋  | [34034] |
| 講演要旨 ヘーゲル思想と現代                    | 哲学者               | 長谷川宏 | [34036] |
| 講演要旨 私と倫社                         | 向国高校長             | 坂本清治 | [34038] |

|                           |  |          |       |         |
|---------------------------|--|----------|-------|---------|
| 分科会報告                     |  |          |       |         |
|                           | 第一分科会  | 北園高校     | 町田紳   | [34040] |
|                           | 第二分科会  | 青梅東高校    | 本間恒男  | [34043] |
|                           | 第三分科会  | 竹台高校     | 黒須伸之  | [34046] |
| 特集「新課程における『現代社会』の教材化の工夫」  |  |          |       |         |
|                           | より楽しい「調べ学習」                                    | 玉川聖学院高校  | 幸田雅夫  | [34049] |
|                           | 新教育課程における「現代社会」の教材化の工夫－生徒自身の自覚と行動を促す「環境学習」の試み－ | 農産高校     | 坂口克彦  | [34053] |
|                           | マスメディア社会を考える－社会の変化を通して人間の在り方生き方を問う－            | 台東商業高校   | 田久仁   | [34057] |
|                           | 日本神話を授業で取り上げて                                  | 大妻中野女子高校 | 諸橋隆男  | [34061] |
|                           | 現行教科書分析経過報告                                    | 玉川高校     | 山本正   | [34065] |
| 個人研究報告                    |  |          |       |         |
|                           | 「経済と倫理」再々考－特に稀少性と選択をめぐる－                       | 国立高校     | 新井明   | [34067] |
|                           | 情報・偏見・アイデンティティ(1)－AIDS表現をめぐる－                  | 国分寺高校    | 大谷いづみ | [34073] |
|                           | 「性表現の自由と公共の福祉」(現代社会)について                       | 文京盲学校    | 岡本重春  | [34084] |
|                           | 「かかわり」を教えるということ                                | 足立西高校    | 影山洋   | [34089] |
| 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会規約 |  |          |       | [34095] |
| 訃報                        |  |          |       | [34097] |
| 事務局だより                    |  |          |       | [34099] |
| 編集後記                      |  |          |       | [34100] |

### 第35集(平成8年度)

|                              |   |          |       |         |
|------------------------------|---|----------|-------|---------|
| 巻頭言                          | 他者との共生をめざす生き方と21世紀への課題                      | 会長       | 宮崎宏一  | [35001] |
| 研究主題と研究体制及び紀要の編集方針           |   |          |       | [35004] |
| 研究分科会参加者名簿                   |   |          |       | [35007] |
| 平成8年度研究会活動報告概要               |   |          |       | [35008] |
| 研究例会報告                       |   |          |       | [35011] |
| 総会並びに研究発表大会                  |   |          |       |         |
| 研究発表                         | インターネットを利用した授業の可能性                          | 学芸大附属高校  | 吉野聡   | [35014] |
| 講演要旨                         | 現代社会の課題と教育の在り方                              | 評論家      | 小浜逸郎  | [35018] |
| 第一回 研究例会                     |   |          |       |         |
| 公開授業                         | 薬害エイズ問題を例として国家賠償請求権について                     | 日本橋高校    | 山下亨   | [35020] |
| 研究発表                         | 福祉の視点での思想学習                                 | 筑波大学附属高校 | 斉藤規   | [35022] |
| 講演要旨                         | 現代社会と倫理の根拠                                  | 評論家      | 小坂修平  | [35026] |
| 第二回 研究例会                     |   |          |       |         |
| 公開授業                         | カント：永遠の平和の為に                                | 小川高校     | 成瀬功   | [35029] |
| 研究発表                         | 森田三郎の生き方から環境問題を考える                          | 小平西高校    | 西尾理   | [35031] |
| 講演要旨                         | 近代科学技術と現代日本                                 | 東京大学教授   | 佐々木力  | [35035] |
| 第四回 研究例会                     |   |          |       |         |
| 公開授業                         | 在日米軍と安保体制を考える－米軍機墜落事件を                      | 文京盲学校    | 岡本重春  | [35037] |
| 講演要旨                         | 教育における女性の役割                                 | 東京女子大学教授 | 林道義   | [35039] |
| 講演要旨                         | こころの日記帳                                     | 足立東高校    | 宮崎宏一  | [35041] |
| 分科会報告                        |   |          |       |         |
|                              | 第一分科会                                       | 竹台高校     | 黒須伸之  | [35043] |
|                              | 第二分科会                                       | 八王子東養護学校 | 功刀幸彦  | [35046] |
|                              | 第三分科会                                       | 赤羽商業高校   | 三森和哉  | [35066] |
| 特集「新課程における『倫理』『政治経済』の教材化の工夫」 |   |          |       |         |
|                              | 人間の顔が見える「政治・経済」をめざして－創造的な視点の開発と教材作成の工夫－     | 富士高校     | 葦名次夫  | [35052] |
|                              | 労働問題の視点から見た「政治・経済」－人間としての在り方生き方を労働問題と関連させる－ | 武蔵丘高校    | 佐藤由紀子 | [35058] |
|                              | 理性と哲学の教育について                                | 青梅東高校    | 本間恒男  | [35062] |
|                              | 生きる力としての「倫理」の学力形成と調査発表学                     | 赤羽商業高校   | 三森和哉  | [35066] |
| 公開講座報告                       |   |          |       |         |
|                              | 公開講座「私の生き方入門」開講に至るまで                        | 玉川高校     | 海野省治  | [35071] |
|                              | 第一回公開講座「人間らしく生きるとは」－「夜と霧」で人間を考える－           | 玉川高校     | 山本正   | [35072] |
|                              | 第二回公開講座「幸福への旅」                              | 小松川高校    | 佐藤勲   | [35074] |
|                              | 第三回公開講座「人間関係を考える」                           | 玉川高校     | 山本正   | [35076] |
|                              | 第四回公開講座「生と死を考える」－宗教の考え方を中心にして－              | 玉川高校     | 海野省治  | [35078] |
|                              | 第五回公開講座「現在を生きる」                             | 八王子東養護学校 | 功力幸彦  | [35080] |
|                              | 公開講座を終えて                                    | 玉川高校     | 海野省治  | [35082] |
| 個人研究報告                       |   |          |       |         |

|                            |          |       |         |
|----------------------------|----------|-------|---------|
| 情報・偏見・アイデンティティ(2) -情報と主体性- | 国分寺高校    | 大谷いづみ | [35083] |
| 病いへのまなざし-健康と病気をめぐる-考察-     | 麹町学園女子高校 | 小泉博明  | [35093] |
| 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究規約   |          |       | [35099] |
| 事務局だより                     |          |       | [35101] |
| 編集後記                       |          |       | [35102] |

### 第36集(平成9年度)

|                          |                                    |             |          |         |         |
|--------------------------|------------------------------------|-------------|----------|---------|---------|
| 巻頭言                      | 選択幅の拡大と自己責任                        | 会長          | 小川輝之     | [36001] |         |
| 研究主題と研究体制及び紀要の編集方針       |                                    |             |          | [36004] |         |
| 研究分科会参加者名簿               |                                    |             |          | [36007] |         |
| 平成9年度研究会活動報告概要           |                                    |             |          | [36009] |         |
| 研究会報告                    |                                    |             |          |         |         |
| 総会並びに研究発表大会              |                                    |             |          |         |         |
| 研究発表                     | 「現代社会」におけるジグソー学習法の実践事例             | 都立竹早高校      | 国府田貫一    | [36015] |         |
| 講演要旨                     | 哲学を「教える」とはいかなることか?                 | 電気通信大学教授    | 中島義道     | [36019] |         |
| 第一回研究会                   |                                    |             |          |         |         |
| 公開授業                     | ワークシート「MY LIFE ①」を使つての授業-自己理解を深める- | 豊多摩高校       | 西川一臣     | [36021] |         |
| 研究発表                     | アメリカの教育-現状と課題-                     | 竹台高校        | 黒須伸之     | [36023] |         |
| 講演要旨                     | 現代の教養とは何か                          | 東京大学教授      | 船曳健夫     | [36026] |         |
| 第二回研究会                   |                                    |             |          |         |         |
| 公開授業                     | コンビニエンスストアを探る-社会人を招聘して-            | 大泉学園高校      | 水谷禎憲     | [36029] |         |
| 研究発表                     | チームティーチングによる授業『国際理解』について           | 大泉学園高校      | 田中伸明     | [36032] |         |
| 講演要旨                     | 何が問題なのか-生命倫理を巡る内外の状況               | 三菱科学生命科学研究所 | 櫛島次郎     | [36036] |         |
| 第三回研究会(全倫研秋季大会と共催)       |                                    |             |          |         |         |
| 公開授業                     | 健康と病気-生命倫理の諸問題 別・排除                | ハンセン病への差    | 麹町学園女子高校 | 小泉博明    | [36038] |
| 第四回研究会                   |                                    |             |          |         |         |
| 公開授業                     | 一人称の死、二人称の死                        | 白鷗高校        | 及川良一     | [36040] |         |
| 講演要旨                     | 都倫研・全倫研で出会った人々                     | 日本大学第二高校    | 小笠原悦郎    | [36042] |         |
| 講演要旨                     | 無手勝流の都倫研35年                        | 上野高校        | 田中正彦     | [36044] |         |
| 分科会報告                    |                                    |             |          |         |         |
|                          | 第一分科会                              | 調布北高校       | 岡田信昭     | [36046] |         |
|                          | 第二分科会                              | 竹台高校        | 黒須伸之     | [36049] |         |
|                          | 第三分科会                              | 小平西高校       | 西尾理      | [36052] |         |
|                          | 合同分科会                              | 八王子東養護学校    | 功刀幸彦     | [36055] |         |
| 特集                       | ささやかな工夫                            |             |          |         |         |
|                          | 哲学・倫理学・宗教思想関係教材理解のための例話            | 東京女子体育大学    | 菊地堯      | [36057] |         |
|                          | など①<ギリシヤ編>                         |             |          |         |         |
|                          | 私の公民科『倫理』の授業実践                     | 千歳高校        | 増淵達夫     | [36061] |         |
|                          | 政治経済的内容の倫理的展開の試み                   | 富士高校        | 葦名次夫     | [36064] |         |
|                          | 「承認の欲望」にみる人間の在り方                   | 広尾高校        | 古澤英樹     | [36067] |         |
| 個人研究報告                   |                                    |             |          |         |         |
|                          | 『虞美人草』にみられる夏目漱石の倫理観                | 日本大学第二高校    | 小笠原悦郎    | [36070] |         |
|                          | 経済教育と人間『新しい経済教育のすすめ』をめぐって          | 国立高校        | 新井明      | [36073] |         |
|                          | ビートたけしの乗りこえかたについて-憲法批判とその批判        | 清瀬高校        | 原田健      | [36081] |         |
| 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究規約 |                                    |             |          | [36087] |         |
| 事務局だより                   |                                    |             |          | [36088] |         |
| 編集後記                     |                                    |             |          | [36089] |         |

### 第37集(平成10年度)

|                     |                             |        |      |         |
|---------------------|-----------------------------|--------|------|---------|
| 巻頭言                 | 学習指導要領の改訂と公民科教育             | 会長     | 小川輝之 | [37001] |
| 研究主題、研究体制および紀要の編集方針 |                             |        |      | [37004] |
| 研究分科会参加者名簿          |                             |        |      | [37007] |
| 平成10年度研究会活動の報告概要    |                             |        |      | [37009] |
| 研究会報告               |                             |        |      |         |
| 総会並びに研究大会           |                             |        |      |         |
| 研究発表                | 多様性を生かした授業-一定時制社会人のクラスでの試み- | 深川商業高校 | 杉浦理花 | [37015] |
| 講演要旨                | アジアに向かう若者たち-NGOでの活動を通して     | 上智大学教授 | 村井吉敬 | [37019] |
| 第一回研究会              |                             |        |      |         |
| 公開授業                | 「おとな」って何だろう 大人になることの難しさ     | 蒲田高校   | 泉谷まさ | [37021] |
|                     | -現代社会と青年の課題                 |        |      |         |

|                           |  |            |       |         |
|---------------------------|--|------------|-------|---------|
| 研究発表                      | 地図について考える                                      | 小石川高校(定)   | 多田統一  | [37025] |
| 講演要旨                      | 古典から読み解く日本人の死生観                                | 北里大学教授     | 立川昭二  | [37028] |
| 第二回研究例会                   |  |            |       |         |
| 研究発表                      | 経済教育の倫理的基礎について                                 | 国立高校       | 新井明   | [37030] |
| 講演要旨                      | 教育は教育でしか救えない                                   | ノンフィクション作家 | 吉岡忍   | [37035] |
| 公開授業                      | 幸せな人生とは何か～様々な世界の人々と文化より考える一定時制の視点から見た公民科学習の実践ー | 第五商業高校     | 藤野明彦  | [37037] |
| 第三回研究例会(全倫研秋季大会と共催)       |  |            |       |         |
| 公開授業                      | ドイツ観念論～カントの哲学                                  | 飛鳥高校       | 渡辺安則  | [37042] |
| 公開授業                      | 憲法第9条  | 飛鳥高校       | 川窪公道  | [37044] |
| 第四回研究例会                   |  |            |       |         |
| 公開授業                      | 生命科学の進展と人間の在り方                                 | 台東商業高校     | 田久仁   | [37046] |
| 講演要旨                      | 都倫研と私  | 都立武蔵高校     | 細谷斉   | [37048] |
| 講演要旨                      | 私の倫理「授業」キーワード集                                 | 小松川高校      | 佐藤勲   | [37048] |
| 講演要旨                      | 都倫研での30年                                       | 晴海総合高校     | 小川輝之  | [37049] |
| 分科会報告                     |  |            |       |         |
|                           | 第一分科会  | 墨田工業高校     | 岡田博彰  | [37050] |
|                           | 第二分科会  | 麹町学園女子高校   | 小泉博明  | [37052] |
|                           | 第三分科会  | 竹台高校       | 黒須伸之  | [37055] |
|                           | 合同分科会  | 竹台高校       | 黒須伸之  | [37058] |
| 特集                        | 公民科「倫理」「現代社会」の教材化の工夫                           |            |       |         |
|                           | 現行高等学校学習指導要領下における教科書「倫理」「現代社会」にみられる宗教の扱い       | 目白学園高校     | 金広茂昭  | [37060] |
|                           | やさやかな工夫 哲学・倫理学・宗教思想関係教材理解のための例話など②<東洋編>        |            | 菊地堯   | [37065] |
|                           | 倫理「国際化の時代」の授業実践～高校生は外国人をどの様に見ているのか?            | 墨田工業高校(定)  | 小橋一久  | [37069] |
| 個人研究                      |  |            |       |         |
|                           | 宇宙叡智の原点ーインド哲学からー                               | 江北高校       | 小賀野勝芳 | [37075] |
|                           | 仏教における女人救済についてー日本思想の新視点                        | 麹町学園女子高校   | 小泉博明  | [37080] |
|                           | 西田哲学の周辺  | 北園高校(定)    | 小嶋孝   | [37088] |
| 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会規約 |  |            |       | [37094] |
| 事務局だより                    |  |            |       | [37095] |
| 編集後記                      |  |            |       | [37096] |

### 第38集(平成11年度)

|                       |  |             |       |         |
|-----------------------|--|-------------|-------|---------|
| 巻頭言                   | 学習効果   | 会長          | 海野省治  | [38001] |
| 研究主題、研究体制および紀要の編集方針   |  |             |       | [38004] |
| 研究分科会参加者名簿            |  |             |       | [38007] |
| 平成11年度研究活動の報告概要       |  |             |       | [38009] |
| 研究例会報告                |  |             |       | [38012] |
| 総会並びに研究大会             |  |             |       |         |
| 研究発表                  | 文部省教科書『宗教と社会生活』に見られる宗教の扱い                            | 目白学園高校      | 金広茂昭  | [38015] |
| 講演要旨                  | 裁判から浮かび上がる人間像  | 作家          | 佐木隆三  | [38019] |
| 第一回研究例会               |  |             |       |         |
| 公開授業                  | プラトンのアイデアについて  | 日大二高        | 小林和久  | [38021] |
| 研究発表                  | 西田哲学について   | 北園高校(定)     | 小嶋孝   | [38023] |
| 講演要旨                  | 人工知能と哲学の間  | 東京女子大学教授    | 黒崎政男  | [38027] |
| 第二回研究例会               |  |             |       |         |
| 公開授業                  | 憲法学習ー基本的人権「自由権とは」ー                                   | 福生高校        | 萩尾慎亮  | [38029] |
| 研究発表                  | 家庭の中の暴力ー児童虐待と夫婦間暴力ー                                  | お茶の水女子大附属高校 | 村野光則  | [38031] |
| 講演要旨                  | 学校教育とジェンダー   | 東京大学教授      | 上野千鶴子 | [38035] |
| 第三回研究例会(全倫研秋季研究大会と共催) |  |             |       |         |
| 第四回研究例会               |  |             |       |         |
| 公開授業                  | 地球環境問題   | 小川高校        | 成瀬功   | [38037] |
| 研究発表                  | 今日の高等学校「社会科(地歴科・公民科)」において宗教を扱うーバリ島をめぐる指導を通して「宗教」を考える | 第五商業高校(定)   | 藤野明彦  | [38042] |
| 講演要旨                  | 現代宗教の問題点ー人権教育としてのカルト対策                               | 元東北学院大学教授   | 浅見定雄  | [38048] |
| 分科会報告                 |  |             |       |         |
|                       | 第一分科会  | 小平西高校       | 西尾理   | [38049] |
|                       | 第二分科会  | 目黒高校        | 坂口克彦  | [38051] |
|                       | 第三分科会  | 調布北高校       | 岡田信昭  | [38052] |
| 特集                    | 公民科「倫理」「現代社会」の教材化の工夫                                 |             |       |         |
|                       | 「社会参加」学習の試行的実践                                       | 八潮高校        | 宮崎猛   | [38056] |

|      |  |         |      |         |
|------|--|---------|------|---------|
|      | 多角的、多面的な考察を促す「ディベートを取り入れた授業」－ 論題「死刑制度の是非」の試行 | 早稲田実業高校 | 楢原毅  | [38062] |
|      | 多文化理解教育における音楽の応用について                         | 竹台高校    | 黒須伸之 | [38068] |
| 個人研究 | 「政治・経済」の特質－『中等教育資料』に掲載された大杉昭英氏の論考を探究の素材として   | 明星学園高校  | 横田数弘 | [38074] |
|      | 西田哲学－一般者の自覚的体系                               | 北園高校    | 小嶋孝  | [38080] |
|      | 金解禁問題について－井上財政についての評価をめぐって                   | 帝京高校    | 魚山秀介 | [38089] |
|      | 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会規約                    |         |      | [38094] |
|      | 事務局だより                                       |         |      | [38095] |
|      | 編集後記   |         |      | [38096] |

### 第39集 (平成12年度)

|                          |                                       |                |       |         |
|--------------------------|---------------------------------------|----------------|-------|---------|
| 巻頭言                      | 生き方を問う                                | 会長             | 海野省治  | [39001] |
| 研究主題、研究体制および紀要の編集方針      |                                       |                |       | [39004] |
| 研究分科会参加者名簿               |                                       |                |       | [39007] |
| 平成12年度研究活動の報告概要          |                                       |                |       | [39008] |
| 研究例会報告                   |                                       |                |       | [39010] |
| 総会並びに研究大会                |                                       |                |       |         |
| 研究発表                     | ディベートを取り入れた授業の改造－自己批判を込めて－            | 早稲田大学系属早稲田実業学校 | 楢原毅   | [39013] |
| 講演要旨                     | 現代宗教の問題点－人権教育としてのカルト対策                | 元東北学院大学教授      | 浅見定雄  | [39019] |
| 第一回研究例会                  |                                       |                |       |         |
| 公開授業                     | 初級手話教室(2)                             | お茶の水女子大学附属高校   | 村野光則  | [39021] |
| 研究発表                     | 病気をテーマとした生命倫理学習                       | 麹町学園女子高校       | 小泉博明  | [39024] |
| 講演要旨                     | 歴史のイエスとキリスト教の発生－キリスト教はイエスの創唱によるのか－    | 法政大学教授         | 高尾利数  | [39028] |
| 第二回研究例会大会 (全倫研秋季研究大会と共催) |                                       |                |       |         |
| 第三回研究例会                  |                                       |                |       |         |
| 公開授業                     | 人間関係を考える－カウンセリング的手法を生かして－             | 墨田川高校堤校舎       | 山本正   | [39030] |
| 研究発表                     | 学校における政教分離－日・米・独の判例を比較し               | 秋川高校           | 松澤徹   | [39032] |
| 講演要旨                     | 言語文化の視点からの『正法眼蔵』『反論と答弁』               | 三田高校           | 大木洋   | [39036] |
| 講演要旨                     | 高校生の意識と生活                             | 小川高校           | 成瀬功   | [39038] |
| 分科会報告                    |                                       |                |       |         |
|                          | 第一分科会                                 | 葛西南高校          | 多田統一  | [39040] |
|                          | 第二分科会                                 | 調布北高校          | 岡田信昭  | [39041] |
|                          | 第三分科会                                 | お茶の水女子大附属高校    | 村野光則  | [39043] |
| 特集                       | 公民科「倫理」「現代社会」の教材化の工夫                  |                |       |         |
|                          | 生徒に自ら考えさせ調べさせる学習の工夫                   | 井草高校           | 平井啓一  | [39045] |
|                          | 「癒し系『倫理』」の授業展開のポイント                   | 晴海総合高校         | 富塚昇   | [39049] |
|                          | 資料収集・解析・総括と意見表明能力の養成を目指す「懸賞公募論文」指導の実践 | 目黒高校           | 坂口克彦  | [39057] |
|                          | 承認誘導の原理を学ぶ学習の工夫－簡単に「イエス」と言わないために－     | 南野高校           | 近藤千洋  | [39063] |
| 個人研究                     |                                       |                |       |         |
|                          | アジア通貨危機への一考察                          | 葛西工業高校         | 町田紳   | [39069] |
|                          | 生命倫理教育のく学力>とは何か－市場原理と優生学の観点から－        | 国分寺高校          | 大谷いづみ | [39072] |
|                          | 『倫理』で宗教をあつかう－事例－ウパニシャッドの思想－           | 九段高校           | 佐良土茂  | [39079] |
|                          | 「民族」に係わるターミノロジーと、概念の問題の再考             | 竹台高校           | 黒須伸之  | [39084] |
|                          | 本校の中3の修了論文の指導について                     | 玉川聖学院          | 幸田雅夫  | [39092] |
|                          | 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会規約             |                |       | [39100] |
|                          | 事務局だより                                |                |       | [39101] |
|                          | 編集後記                                  |                |       | [39102] |

### 第40集 (平成13年度)

|                     |      |    |      |         |
|---------------------|------|----|------|---------|
| 巻頭言                 | 心を一に | 会長 | 海野省治 | [40001] |
| 研究主題、研究体制および紀要の編集方針 |      |    |      | [40004] |
| 研究分科会参加者名簿          |      |    |      | [40007] |
| 平成13年度研究活動の報告概要     |      |    |      | [40008] |
| 研究例会報告              |      |    |      | [40010] |

|                           |  |                          |               |                    |
|---------------------------|--|--------------------------|---------------|--------------------|
| 総会並びに研究大会                 |  |                          |               |                    |
| 研究発表                      | 癒し系『倫理』の授業展開の限界  | 晴海総合高校                   | 富塚昇           | [40013]            |
| 講演要旨                      | 「階層と教育」問題から教育を考える  | 東京大学教授                   | 荻谷剛彦          | [40017]            |
| 第一回研究例会                   |  |                          |               |                    |
| 公開授業                      | 人身の自由  | 砂川高校                     | 川窪公道          | [40019]            |
| 講演要旨                      | 日本の社会科学とヴェーバー体験  | フェリス女学院大学                | 山之内靖          | [40022]            |
|                           |  | 教授                       |               |                    |
| 第二回研究例会                   |  |                          |               |                    |
| 研究発表                      | キャリアガイダンスと公民教育   | 国分寺高校                    | 原田健           | [40024]            |
| 講演要旨                      | 伝統と近代－西田哲学を中心として－  | 北園高校                     | 小嶋孝           | [40028]            |
| 講演要旨                      | 〈切れ〉をめぐる一断想  | 町田高校                     | 小河信國          | [40030]            |
| 分科会報告                     |  |                          |               |                    |
|                           | 第一分科会  | 葛西南高校                    | 多田統一          | [40031]            |
|                           | 第二分科会  | お茶の水女子大学附<br>属高校         | 村野光則          | [40033]            |
| 特集                        |  |                          |               |                    |
|                           | 公民科「倫理」「現代社会」の教材化の工夫<br>考察を深め、発信する授業を目指して－ディベート<br>「国民の司法参加は是か非か」－                         | 早稲田大学系属早稲<br>田実業学校       | 榎原毅           | [40035]            |
|                           | 新しい視点からのボランティア教育の実践を－ボラ<br>ンティア活動の問題点を教育現場から考える－   | 青山学院大学大学院                | 浅野麻由          | [40042]            |
|                           | 総合的学習におけるグループワーク・トレーニング<br>－自己理解のための一方法として－  | 目黒高校<br>お茶の水女子大学附<br>属高校 | 坂口克彦<br>村野光則  | [40049]            |
| 個人研究                      |  |                          |               |                    |
|                           | 仏教における経済倫理－鈴木正三を中心に<br>「メディア・リテラシー」教育・事始め(1)実践<br>報告－「情報」とどのようにつきあっていくか？－<br>「安楽死・尊厳死」論の現在 | 麹町学園女子高校<br>文京高校         | 小泉博明<br>杉岡道夫  | [40055]<br>[40061] |
|                           | アメリカの歴史教科書問題－ポール・ギャニオンに<br>よる分析－   | 国分寺高校<br>竹台高校            | 大谷いづみ<br>黒須伸之 | [40072]<br>[40081] |
| 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会規約 |  |                          |               | [40086]            |
| 事務局だより                    |  |                          |               | [40087]            |
| 編集後記                      |  |                          |               | [40088]            |

#### 第41集(平成14年度)

|             |  |                           |                      |                               |
|-------------|--|---------------------------|----------------------|-------------------------------|
| 巻頭言         | 14年度の終わりに  | 会長                        | 海野省治                 | [41001]                       |
| 平成14年度      | 研究主題と研究体制  |                           |                      | [41004]                       |
| 平成14年度      | 研究活動報告の概要  |                           |                      | [41006]                       |
| 研究例会報告      |  |                           |                      | [41008]                       |
| 総会並びに研究大会   |  |                           |                      |                               |
| 研究発表        | 参加型学習の実践報告   | 竹台高校                      | 黒須伸之                 | [41011]                       |
| 講演要旨        | これからの公民科教育を考える   | 東京工業大学大学院<br>教授           | 橋爪大三郎                | [41012]                       |
| 第一回研究例会     |  |                           |                      |                               |
| 公開授業        | ブッダの教え－空と無我－   | 工芸高校                      | 山口通                  | [41017]                       |
| 研究発表        | 新しい視点からボランティア教育を考える－ボラン<br>ティア活動の問題点を教育現場から考える－                                    | 佛泉放送制作・青山<br>学院大学大学院      | 浅野麻由                 | [41018]                       |
| 講演要旨        | 哲学ってなんだ－自分と社会を知る－  | 目黒高校<br>明治学院大学教授          | 坂口克彦<br>竹田青嗣         | [41019]                       |
| 第二回研究例会     |  |                           |                      |                               |
| 公開授業<br>・講演 | 「時代を越える思想の探求」の途上にて   | 青山高校                      | 鈴木宣雄                 | [41033]                       |
| 研究発表        | 生と死の語り方－生命倫理教育の組み換えのために  | 東京学芸大学教育学<br>部附属高校大泉校舎    | 大谷いづみ                | [41035]                       |
| 講演要旨        | 私の60年  | 青山高校長                     | 海野省治                 | [41038]                       |
| 分科会報告       |  |                           |                      |                               |
|             | 第一分科会  | 葛西南高校                     | 多田統一                 | [41044]                       |
|             | 夏季合同分科会  | 足立高校                      | 渡辺範道                 | [41048]                       |
| 特集 公民科      |  |                           |                      |                               |
|             | 「倫理」「現代社会」の教材化の工夫<br>。エコライフ実践者からのメッセージを教材化する－<br>グローバルな視野の育成とともに身近な生活からの<br>エコ活動を－ | 佛泉放送制作・青山<br>学院大学大学院      | 浅野麻由                 | [41052]                       |
|             | 就業指導・進路指導を意識した現代社会の授業<br>ドキュメンタリービデオでつくる「政治・経済」の授                                  | 目黒高校<br>大森高校<br>田柄高校      | 坂口克彦<br>小賀野勝芳<br>松澤徹 | [41060]<br>[41064]            |
| 個人研究        |  |                           |                      |                               |
|             | 精神障害の分類と関わりかた<br>デューイのシカゴ実験学校のイメージ<br>参加型学習の社会問題への応用について                           | 芝中学・高等学校<br>小平西高校<br>竹台高校 | 石塚健大<br>西尾理<br>黒須伸之  | [41072]<br>[41078]<br>[41086] |



|                           |   |                    |       |         |
|---------------------------|---|--------------------|-------|---------|
|                           | アメリカにおける「死の要請」の推移：「尊厳死」の登場－生命倫理教育／デス＝エデュケーションのための研究ノート－ | 東京学芸大学教育学部附属高校大泉校舎 | 大谷いづみ | [41090] |
|                           | 落語をテーマとした倫理学習－仏教・落語・生命の三題噺－                             | 麹町学園女子高校           | 小泉博明  | [41103] |
|                           | 『都鄙問答』『性理問答の段』覚え書き                                      | 九段高校               | 佐良士茂  | [41110] |
|                           | ディベート学習の可能性と限界  | 国立高校               | 新井明   | [41116] |
| 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会規約 |   |                    |       | [41122] |
| 事務局だより                    |   |                    |       | [41123] |
| 研究分科会参加者名簿                |   |                    |       | [41124] |
| 執筆のお願い                    |   |                    |       | [41125] |
| 編集後記                      |   |                    |       | [41126] |

#### 第42集 (平成15年度)

|                           |  |           |       |         |
|---------------------------|--|-----------|-------|---------|
| 巻頭言                       | 15年度の終わりに  | 会長        | 喜多村健二 | [42001] |
| 平成15年度                    | 研究主題と研究体制  |           |       | [42004] |
| 平成15年度                    | 研究活動報告の概要  |           |       | [42006] |
| 研究例会報告                    |  |           |       | [42008] |
| 総会並びに                     | 研究発表大会   |           |       |         |
| 研究発表                      | 地域と学校の連携を深めた土曜日の活動について－市民活動学習推進センター“いたばし”の取り組み、及び帝京高校との連携を事例として－ | 帝京中学高等学校  | 魚山秀介  | [42012] |
| 講演要旨                      | 技術と倫理  | 鳥取環境大学学長  | 加藤尚武  | [42014] |
| 第一回研究例会                   |  |           |       |         |
| 公開授業                      | 高校「倫理」における「宗教と人生」の取り扱いと評価  | 航空高専      | 和田倫明  | [42026] |
| 講演要旨                      | なぜ人は倫理を必要とするのか   | 評論家       | 小浜逸郎  | [42029] |
| 第二回研究例会                   |  |           |       |         |
| 公開授業                      | 地球時代・地球社会の倫理－差異と平等・公平であること－                                      | 墨田川高校     | 泉谷まさ  | [42031] |
| 研究発表                      | 観点別評価の評価規準－指導・学習と評価の一体化を考える                                      | 府中西高校     | 大山敏   | [42036] |
| 講演要旨                      | 『倫理』への一試論  | 墨田川高校     | 泉谷まさ  | [42041] |
| 分科会報告                     |  |           |       |         |
|                           | 第一分科会  | 葛西南高校 (定) | 多田統一  | [42049] |
|                           | 夏季合同分科会  | 調布南高校     | 栗本学   | [42052] |
| 特集 公民科                    | 「倫理」「現代社会」の教材化の工夫  |           |       |         |
|                           | 高校生生の「生」と「死」の認識について－「生命倫理」の授業－                                   | 新宿山吹高校講師  | 小橋一久  | [42058] |
|                           | 公民科「現代社会」における空き缶リサイクル学習の今後の展望                                    | 葛西南高校 (定) | 多田統一  | [42064] |
|                           | 「テレビゲーム」のメディアリテラシー   | 小岩高校      | 杉岡道夫  | [42067] |
|                           | 「総合的な学習の時間」を「倫理」が奪う、という  | 国分寺高校     | 原田健   | [42078] |
|                           | 日本の思想を取り扱うなかで  | 飛鳥高校      | 渡辺安則  | [42082] |
| 個人研究                      |  |           |       |         |
|                           | 東京大空襲の課題と今日的意義   | 墨田工業高校    | 小林秀利  | [42088] |
|                           | 日本仏教と福祉思想－鎌倉仏教を中心に－  | 麹町学園女子高校  | 小泉博明  | [42093] |
|                           | 『都鄙問答』『性理問答の段』覚え書き2  | 九段高校      | 佐良士茂  | [42098] |
| 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会規約 |  |           |       | [42106] |
| 事務局だより                    |  |           |       | [42107] |
| 編集後記                      |  |           |       | [42109] |

#### 第43集 (平成16年度)

|         |   |            |       |         |
|---------|---|------------|-------|---------|
| 巻頭言     | 「状況倫理」の必要性                              | 会長         | 喜多村健二 | [43001] |
| 平成16年度  | 研究主題と研究体制                               |            |       | [43003] |
| 平成16年度  | 研究活動報告の概要                               |            |       | [43005] |
| 研究例会報告  |   |            |       | [43007] |
| 総会並びに   | 研究発表大会                                  |            |       |         |
| 研究発表    | 高校における政治教育に関する一考察－「田中角栄と戦後政治」の教材開発を通して－ | 六郷工科高校     | 西尾理   | [43010] |
| 講演要旨    | 「よのなか科」の実践から見てきた教育の未来                   | 杉並区立和田中学校長 | 藤原和博  | [43015] |
| 第一回研究例会 |   |            |       |         |
| 公開授業    | 女性と仏教                                   | 麹町学園女子高校   | 小泉博明  | [43024] |
| 資料      | 仏教とジェンダー                                | 麹町学園女子高校   | 小泉博明  | [43029] |
| 講演要旨    | 生命倫理と医療人類学                              | お茶の水女子大学教授 | 波平恵美子 | [43032] |
| 第二回研究例会 |   |            |       |         |

|                          |                                |            |      |         |
|--------------------------|--------------------------------|------------|------|---------|
| 講演要旨                     | イスラーム世界と日本：理解の接点をさぐるー比較と交流の視点ー | お茶の水女子大学教授 | 三浦徹  | [43034] |
| 公開授業<br>分科会報告            | 法と人権を守る裁判所                     | 戸山高校(定)    | 廣末修  | [43040] |
|                          | 第一分科会                          | 葛西南高校(定)   | 多田統一 | [43043] |
|                          | 第二分科会                          | 芝学園中学・高校   | 石塚健大 | [43047] |
| 東京都高等学校公民科「倫理」<br>事務局だより | 「現代社会」研究会規約                    |            |      | [43048] |
| 編集後記                     |                                |            |      | [43049] |
|                          |                                |            |      | [43051] |

#### 第44集(平成17年度)

|                              |                              |                              |       |         |
|------------------------------|------------------------------|------------------------------|-------|---------|
| 巻頭言                          |                              | 会長                           | 喜多村健二 | [44001] |
| 総会ならびに研究発表大会次第               |                              |                              |       | [44003] |
|                              | 平成16年度会務報告                   |                              |       | [44004] |
|                              | 平成16年度決算                     |                              |       | [44005] |
|                              | 平成17年度役員・事務局構成               |                              |       | [44006] |
|                              | 平成17年度事業計画・規約改正              |                              |       | [44007] |
|                              | 平成17年度予算案                    |                              |       | [44008] |
|                              | 平成17年度研究主題と研究体制              |                              |       | [44009] |
| 研究発表                         | 公民科におけるディベートの試み              | 西高校                          | 岡田信昭  | [44011] |
| 講演要旨                         | 公共哲学：古くて新しい学問                | 東京大学教養学部総合社会科学科・大学院総合文化研究科教授 | 山脇直司  | [44017] |
| 第一回研究例会                      |                              |                              |       |         |
| 公開授業                         | 雇用と労働問題                      | 文京高校(定)                      | 小牟礼和人 | [44020] |
| 講演要旨                         | 遺伝子改造論をめぐって                  | 東京大学大学院教育学研究科教授              | 金森修   | [44025] |
| 第二回研究例会                      |                              |                              |       |         |
| 公開授業                         | 心理学をどのように教えるのか               | 国分寺高校                        | 原田健   | [44028] |
| 講演要旨                         | 倫理教育の在り方                     | 国分寺高校長                       | 喜多村健二 | [44029] |
| 研究報告・研究論文                    |                              |                              |       | [44031] |
|                              | 私の未来、社会の未来を考えるー年金教室を取り入れた授業ー | 八潮高校                         | 宮崎猛   | [44032] |
|                              | 高校『倫理』における日本思想を扱った学習指導の研究    | 文京学院大学                       |       | [44034] |
|                              | ソクラテスの死                      |                              | 小泉博明  |         |
|                              | プラトンとアリストテレスをどう教えるか          | 産業技術高専                       | 海野省治  | [44036] |
|                              | 生活・社会科学的探究を通して生きる力を育成する      | 目黒高校                         | 和田倫明  | [44041] |
|                              | NIEの授業実践ースーパーのチラシからみる世界と日本   | 墨田工業高校(定)                    | 坂口克彦  | [44043] |
|                              | 『倫理』における日本思想の取り扱いーその普遍性を求めて  | 青梅東高校                        | 小橋一久  | [44051] |
|                              |                              |                              | 本間恒男  | [44056] |
| 分科会記録                        |                              |                              |       | [44059] |
| 東京都高等学校公民科「倫理」<br>事務局便り・編集後記 | 「現代社会」研究会規約                  |                              |       | [44060] |
|                              |                              |                              |       | [44061] |

#### 第45集(平成18年度)

|                 |                                   |              |       |         |
|-----------------|-----------------------------------|--------------|-------|---------|
| 巻頭言             |                                   | 会長           | 及川良一  | [45001] |
| 総会ならびに研究発表大会 次第 |                                   |              |       | [45003] |
|                 | 平成17年度会務報告                        |              |       | [45004] |
|                 | 平成18年度役員・事務局構成                    |              |       | [45005] |
|                 | 平成18年度事業計画                        |              |       | [45006] |
|                 | 平成17年度決算                          |              |       | [45007] |
|                 | 平成18年度予算案                         |              |       | [45008] |
|                 | 平成18年度研究主題と研究体制                   |              |       | [45009] |
| 講演要旨            | 意識の神秘は存在するか?                      | 千葉大学文学部教授    | 永井均   | [45011] |
| 第一回研究例会         |                                   |              |       | [45014] |
| 公開授業            | 合理的精神の確立                          | 都立山崎高校       | 中村康英  | [45015] |
| 講演要旨            | 哲学の誤読ー大学入試問題を素材としてー               | 青山学院大学文学部助教授 | 入不二基義 | [45017] |
| 第二回研究例会         |                                   |              |       | [45021] |
| 公開授業            | 情報と現代社会                           | 上野高校         | 杉岡道夫  | [45022] |
| 講演要旨            | 中世の異端としての親鸞思想ー『歴史に埋め込まれた親鸞』の視点からー | 東京農工大学教授     | 亀山純生  | [45024] |
| 分科会記録           |                                   |              |       | [45027] |
| 実践報告・論文         |                                   |              |       | [45028] |
|                 | 定時制における公民科教育の現状と課題                | 葛西南高校(定)     | 多田統一  | [45029] |

|                                  |      |         |
|----------------------------------|------|---------|
| 公民科『現代社会』におけるバイオテクノロジーの葛西南高校 (定) | 多田統一 | [45031] |
| 取り扱い                             |      |         |
| 情報とのつきあい方教育：メディア・リテラシーの上野高校      | 杉岡道夫 | [45033] |
| 授業を構築する                          |      |         |
| デカルトと哲学 - 『哲学原理』の仏訳者への手紙 九段高校    | 佐良土茂 | [45048] |
| を中心に                             |      |         |
| 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会規約        |      | [45056] |
| 事務局便り・編集後記                       |      | [45057] |

#### 第46集 (平成19年度)

|                           |   |                        |         |
|---------------------------|---|------------------------|---------|
| 巻頭言                       | 会長  | 辻勇一郎                   | [46001] |
| 総会ならびに研究発表大会 次第           |   |                        | [46003] |
| 平成18年度会務報告                |   |                        | [46004] |
| 平成18年度決算・監査報告             |   |                        | [46006] |
| 平成19年度役員・事務局構成            |   |                        | [46007] |
| 平成19年度事業計画                |   |                        | [46008] |
| 平成19年度予算案                 |   |                        | [46009] |
| 平成19年度研究主題と研究体制           |   |                        | [46010] |
| 講演要旨                      | 哲学の考え方  | お茶の水女子大学教授 土屋賢二        | [46012] |
| 第一回研究例会                   |   |                        | [46017] |
| 公開授業                      | 仏教と日本人の思想形成                                     | 調布北高校 三森和哉             |         |
| 講演要旨                      | 動物化とはなにか  | 東京工業大学世界文明センター特任教授 東浩紀 | [46018] |
| 第二回研究例会                   |   |                        | [46022] |
| 公開授業                      | ディベートを利用した授業 - 日本はスーパーやコンビニの24時間営業をやめるべきである。是か非 | 西高校 岡田信昭               |         |
| 研究発表                      | 経済と倫理の間 - NCEEの最近の教材マニュアルを巡って -                 | 西高校 新井明                |         |
| 講演要旨                      | 授業と能楽 - 「倫理」の授業とのかかわり -                         | 葛飾野高校長 辻勇一郎            | [46023] |
| 分科会報告                     |   |                        | [46025] |
| 実践報告・論文                   |   |                        | [46026] |
|                           | 脱アイデンティティ - エリクソンからミード、そしてフーコーへ -               | 立川高校 菅野功治              | [46027] |
|                           | 大学学部課程における哲学・倫理学教育と高等学校における「倫理」との連携について         | 国土舘大学文学部倫理学専攻主任 木阪貴行   | [46033] |
| 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会規約 |   |                        | [46047] |
| 事務局便り・編集後記                |   |                        | [46048] |

#### 第47集 (平成20年度)

|                           |                        |                 |         |
|---------------------------|------------------------|-----------------|---------|
| 巻頭言                       | 会長                     | 立石武則            | [47001] |
| 総会ならびに第一回研究例会 次第          |                        |                 | [47003] |
| 平成19年度会務報告                |                        |                 | [47004] |
| 平成19年度決算・監査報告             |                        |                 | [47005] |
| 平成20年度役員・事務局構成            |                        |                 | [47007] |
| 平成20年度事業計画                |                        |                 | [47008] |
| 平成20年度予算案                 |                        |                 | [47009] |
| 平成20年度研究主題と研究体制           |                        |                 | [47010] |
| 講演要旨                      | 『戦後日本社会』再考             | 東京経済大学教授 桜井哲夫   | [47012] |
| 第二回研究例会                   |                        |                 | [47015] |
| 公開授業                      | 高3「政治・経済」              | 山崎高校 宮路みち子      |         |
| 研究発表                      | 『アガペー』は神の愛を表す言葉か?      | 山崎高校 中村康英       | [47017] |
| 講演要旨                      | 鎌倉仏教の新しい見方             | 東京大学大学院教授 末木文美士 | [47027] |
| 第三回研究例会                   |                        |                 | [47031] |
| 公開授業                      | 高1「現代社会」               | 板橋高校 渡辺安則       |         |
| 講演要旨                      | 都倫研の思い出 - 人と事業 -       | 井上勝             | [47032] |
| 講演要旨                      | 意味の探究 - 都倫研から学び考えたこと - | 白鷺高校 葦名次夫       | [47038] |
| 分科会報告                     |                        |                 | [47044] |
| 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会規約 |                        |                 | [47045] |
| 事務局便り                     |                        |                 | [47047] |
| 編集後記                      |                        |                 | [47048] |

#### 第48集 (平成21年度)

|                  |                                       |         |         |
|------------------|---------------------------------------|---------|---------|
| 巻頭言              | 巻頭言に代えて 現代における哲学・思想、倫理にかかわる教育の可能性について | 会長 立石武則 | [48001] |
| 総会ならびに第一回研究例会 次第 |                                       |         | [48003] |
| 平成20年度会務報告       |                                       |         | [48004] |
| 平成20年度決算・監査報告    |                                       |         | [48005] |

|                           |                                |           |      |         |
|---------------------------|--------------------------------|-----------|------|---------|
|                           | 平成21年度役員・事務局構成                 |           |      | [48006] |
|                           | 平成21年度事業計画                     |           |      | [48007] |
|                           | 平成21年度予算案                      |           |      | [48008] |
|                           | 平成21年度研究主題と研究体制                |           |      | [48009] |
| 講演要旨                      | 「『おのずから』と『みずから』のあわい」           | 東京大学大学院教授 | 竹内整一 | [48011] |
| 第二回研究例会                   |                                |           |      |         |
| 公開授業                      | 高3「倫理」                         | 立川高校      | 菅野功治 | [48020] |
| 講演要旨                      | 「クリティカル・シンキングと戦争論理学」           | 和洋女子大学教授  | 三浦俊彦 | [48023] |
| 第三回研究例会                   |                                |           |      |         |
| 公開授業                      | 高1「現代社会」                       | 西高校       | 新井明  | [48035] |
| 講演要旨1                     | 「自決の哲学 日本人の自己肯定感」              | 小平高校      | 山口通  | [48046] |
| 講演要旨2                     | 「人はいかに公民科教師となるか」               | 西高校       | 新井明  | [48054] |
| 分科会報告                     |                                |           |      |         |
|                           | 平成21年度定通研地歴、公民部の活動から           | 荒川商業高校(定) | 多田統一 | [48058] |
|                           | 財政・税制についての授業実践報告               | 青山高校      | 富塚昇  | [48059] |
|                           | アウシュビッツの授業に取り組んで30年            | 国分寺高校     | 原田健  | [48066] |
| 寄稿論文                      |                                |           |      |         |
|                           | 幾度も公民科の問いを                     |           | 井上勝  | [48069] |
|                           | 徳倫理学 Virtue Ethics の可能性と危険性ー腎臓 | 立川高校      | 菅野功治 | [48074] |
|                           | 移植を題材としてー                      |           |      |         |
| 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会規約 |                                |           |      | [48088] |
| 事務局便り                     |                                |           |      | [48089] |
| 編集後記                      |                                |           |      | [48090] |

#### 第49集(平成22年度)

|                           |                                       |                        |      |         |
|---------------------------|---------------------------------------|------------------------|------|---------|
| 巻頭言                       | 倫理教師の思い                               | 会長                     | 及川良一 | [49001] |
| 総会ならびに第一回研究例会次第           |                                       |                        |      | [49003] |
|                           | 平成21年度会務報告                            |                        |      | [49004] |
|                           | 平成21年度決算・監査報告                         |                        |      | [49005] |
|                           | 平成22年度役員・事務局構成                        |                        |      | [49006] |
|                           | 平成22年度事業計画                            |                        |      | [49007] |
|                           | 平成22年度予算                              |                        |      | [49008] |
|                           | 平成22年度研究主題と研究体制                       |                        |      | [49009] |
| 講演要旨                      | 他なるものを肯定することへーレヴィナスを手がかりにー            | 東京大学教授                 | 熊野純彦 | [49011] |
| 第二回研究例会                   |                                       |                        |      |         |
| 公開授業                      | 高1「現代社会」                              | 青山高校                   | 富塚昇  | [49018] |
| 講演要旨                      | 古代ギリシャ哲学を教える／研究する                     | 慶応義塾大学教授               | 納富信留 | [49024] |
| 第三回研究例会(次第)               |                                       |                        |      | [49028] |
| 公開授業                      | 高2「倫理」                                | 八潮高校                   | 佐良土茂 |         |
| 講演                        | 「私の経験からー教育、倫理、都倫研」                    | 八潮高校                   | 佐良土茂 |         |
| 講演                        | 「自殺の現状と自殺対策の取り組みー遺族支援を通じてー」           | NPO法人白死遺族支援ネットワークRe理事長 | 山口和浩 |         |
| 分科会報告                     |                                       |                        |      |         |
|                           | 平成22年度定通研地歴、公民部の活動から                  | 荒川商業高校(定)              | 多田統一 | [49030] |
|                           | 高等学校公民科「倫理」改訂のポイント                    | お茶の水女子大学附属高校           | 村野光則 | [49031] |
|                           | 高校公民科で若者の「議論」を教材化するーNHK「青春リアル」を題材としてー | 総合工科高校                 | 坂口克彦 | [49036] |
| 寄稿文                       |                                       |                        |      |         |
|                           | 「文芸広場」の話題からー取材、インタビューを通じてー            | 荒川商業高校(定)              | 多田統一 | [49044] |
|                           | 公民科教育と地図                              | 荒川商業高校(定)              | 多田統一 | [49045] |
|                           | 新学習指導要領「政治・経済」をいかに読むか                 | 小石川中等教育学校              | 新井明  | [49046] |
| 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会規約 |                                       |                        |      | [49049] |
| 事務局便り                     |                                       |                        |      | [49050] |
| 編集後記                      |                                       |                        |      | [49051] |

#### 第50集(平成23年度)

|                 |                             |                        |      |         |
|-----------------|-----------------------------|------------------------|------|---------|
| 巻頭言             | 「自我逸失時代」の「ムラムラ」する若者たちへ      | 会長                     | 及川良一 | [50001] |
| I 平成22年度第三回研究例会 |                             |                        |      |         |
| 公開授業            | 「仏陀の思想」～縁起と四諦八正道～(高2「倫理」)   | 八潮高校                   | 佐良土茂 | [50003] |
| 講演I             | 「私の経験から～教育、倫理、都倫研～」         | 八潮高校                   | 佐良土茂 | [50005] |
| 講演II            | 「自殺の現状と自殺対策の取り組み～遺族支援を通じて～」 | NPO法人白死遺族支援ネットワークRe理事長 | 山口和浩 | [50009] |

|  |           |      |       |         |
|--|-----------|------|-------|---------|
| II 平成23年度総会並びに第一回研究例会                        |           |      |       |         |
| 平成22年度 会務報告(資料1)                             |           |      |       | [50014] |
| 平成22年度 決算・監査報告(資料2)                          |           |      |       | [50015] |
| 平成23年度 役員・事務局構成(資料3)                         |           |      |       | [50016] |
| 平成23年度 事業計画(資料4)                             |           |      |       | [50017] |
| 平成23年度 予算(資料5)                               |           |      |       | [50018] |
| 平成23年度 研究主題と研究体制(資料6)                        |           |      |       | [50019] |
| 講演 「日本の公立学校での宗教教育の可能性と課題」                    | 筑波大学大学院教授 | 山中弘  |       | [50021] |
| III 第二回研究例会                                  |           |      |       |         |
| 公開授業 「日本人の美意識」(高3「倫理」)                       | 福生高校      |      | 本間恒男  | [50030] |
| 講演 「西田哲学と『善の研究』」                             | 日本大学教授    |      | 小坂国継  | [50031] |
| IV 夏季研究協議会                                   |           |      |       |         |
| 映画上映 『哲学への権利』                                |           |      |       |         |
| 講演 「フランスの高校における哲学教育」                         | 首都大学東京准教授 | 西山雄二 |       | [50039] |
| V 冬季研究協議会                                    |           |      |       |         |
| 都内・近郊の宗教施設見学案内                               | 産業技術高専    |      | 和田倫明  | [50045] |
| 公民科の授業内容を書き取らせまとめさせるための<br>試行                | 板橋高校      |      | 渡邊安則  | [50047] |
| VI 授業実践報告                                    |           |      |       |         |
| 「日本人を辞める」は新しい解決策か? - 「現代社<br>会」での一授業実践 -     | 松戸高校      |      | 内久根直樹 | [50053] |
| 授業: 地震を考える、地震から考える                           | 三田高校      |      | 原田健   | [50059] |
| 文字・活字文化の推進と教員の研修 - 各種研究会活<br>動と新聞の活用を中心として - | 荒川商業高校(定) |      | 多田統一  | [50062] |
| 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会規約                    |           |      |       | [50064] |
| 事務局便り  |           |      |       | [50065] |
| 編集後記   |           |      |       | [50066] |

### 第50集別冊(平成23年度)

#### 都倫研50年の歩みと展望

|  |    |               |         |
|--|----|---------------|---------|
| 巻頭言 教養教育としての可能性                            | 会長 | 及川良一          | [50501] |
| 一 都倫研の歩み                                   |    |               |         |
| 矢谷先生からの手紙                                  |    | 井上勝           | [50507] |
| 都倫研の発足について                                 |    | 酒井俊郎          | [50511] |
| 歴史の一端                                      |    | 増田信           | [50514] |
| 「都・全倫研の人々」と私                               |    | 小川輝之          | [50516] |
| 思いつくままに - 哲学なき情況 -                         |    | 杉原安           | [50521] |
| 都倫研の理念をどう生かすか - 1980年代の都倫研                 |    | 葦名次夫          | [50527] |
| 「都倫研」の想い出                                  |    | 鈴木昭逸          | [50531] |
| 今思いおこすこと                                   |    | 小笠原悦郎         | [50532] |
| 都倫研わが人生 - 第一部 都倫研世に問う自己表現                  |    | 中村新吉          | [50534] |
| 活動の歩み - 回顧                                 |    |               |         |
| 都倫研わが教育人生 - 第二部 忘れ得ぬ師友群像 -<br>回顧           |    | 中村新吉          | [50541] |
| 二 ひとこと・近況                                  |    |               |         |
| 倫・社と共に                                     |    | 浅川熙信          | [50549] |
| 先哲という世界遺産の次世代への継承                          |    | 石川久博          | [50550] |
| 近況・偶感                                      |    | 鈴木昭逸          | [50550] |
| 私と都倫研と教員生活42年                              |    | 平沼千秋          | [50551] |
| ひとこと                                       |    | 紺野義継          | [50552] |
| ひとこと                                       |    | 菊地堯           | [50553] |
| これまでの「都倫研」、これからの「都倫研」                      |    | 小泉博明          | [50554] |
| 都倫研50周年に寄せて                                |    | 多田統一          | [50554] |
| 水仙・菜の花・ひぐらし                                |    | 小河信國          | [50555] |
| 今、記しておきたいこと 二言 三言                          |    | 泉谷まさ          | [50556] |
| 三 論文・実践報告                                  |    |               |         |
| 倫理・道徳教育の根本を理解するために                         |    | ガエタノ・コ<br>ンプリ | [50563] |
| 倫理科の位置づけと性格をめぐって                           |    | 工藤文三          | [50573] |
| ジョン・ウィクリフ(John Wycliffe)に学ぶ                |    | 三宅幸夫          | [50574] |
| 新生児医療の立場から「生命倫理」を考えさせる                     |    | 浅野麻由・<br>坂口克彦 | [50578] |
| 「いのちのライン」の授業 - 東京都における「生命<br>倫理」教育史の視座から - |    |               |         |
| 失われた「問い」を求めて                               |    | 上野太祐          | [50584] |
| 「倫理(学)」について再び考える                           |    | 渡邊洋           | [50593] |
| 現代の高校生の意識                                  |    | 成瀬功           | [50597] |
| 哲学的思考力育成のために                               |    | 村野光則          | [50603] |
| 宗教教育について                                   |    | 渡辺勉           | [50607] |

|                      |      |         |
|----------------------|------|---------|
| 必修「倫理」のための覚え書き       | 菅野功治 | [50611] |
| 「倫理」と公民科教育法          | 河村敬一 | [50616] |
| 生と死についての授業内容の一考察     | 小川一郎 | [50622] |
| 倫理的内容の指導の焦点化         | 金井肇  | [50629] |
| 四 再録・昭和の巻頭言          |      |         |
| はじめに                 | 矢谷芳雄 | [50644] |
| はじめに                 | 徳久鐵郎 | [50644] |
| はしがき                 | 中村義之 | [50645] |
| はしがき                 | 岡本武男 | [50646] |
| はじめに                 | 増田信  | [50647] |
| はじめに                 | 佐藤勇夫 | [50648] |
| 研究活動の充実・活性化を願う       | 寺島甲祐 | [50649] |
| 生徒から出発する研究を          | 酒井俊郎 | [50650] |
| 巻頭言                  | 御厨良一 | [50651] |
| 五 都倫研活動記録・『都倫研紀要』総目次 |      | [50655] |
| 編集後記                 |      | [50697] |

\* 50集別冊の頁は便宜上501頁からとしている。

## 編集後記

ようやく、この記念誌の原稿を、すべて打ち込み終わりました。原稿をお寄せいただいた皆様に深く感謝申し上げます。

50周年を迎えるにあたり、事務局として何ができるか、昨年度から拡大事務局会も開くなどして検討してまいりました。当初は何とか、記念出版ができないか模索し、出版社にも協力していただけるという返事をいただいていたのですが、私自身がこれまで記念出版に関わってきた経験から判断しても、現在の事務局にそれだけの余力がないことは明らかでした。一方で、昨年度から、研究成果の公表に関しては都が一定の金額を助成する仕組みができ、紀要が50集を数えるのに合わせて、別冊として50年間の研究活動を総括する記念誌を作ることならできそうだと判断しました。そこで、「都倫研に関する内容」・「教科・科目に関する内容」・「ひとこと」という3つのカテゴリーを設け、広くご寄稿を呼び掛けさせていただきました。第二回師友の会の場をお借りして、かつて全倫研でお付き合いいただいた先生方にもお願いすることができました。

一つ心配していたのは、諸先輩方のご寄稿は都倫研の「これまで」についての内容が多いものと思われましたから、現役世代中心に都倫研の「これから」を見通せるような論考がある程度集まらないと、記念誌として物足りないものになるのではないかということでした。しかしそれはまったくの杞憂でした。現役・若手のご寄稿を戴いたのは勿論ですが、諸先輩方からも「これから」を見通した論考を数多いただいたのです。

なおご寄稿の最終的な分類や掲載順序については、いろいろ作法もあることは承知の上で、私なりの読みの流れで決めさせていただきました。事実上、順不同ということでご理解賜りたいと思います。「紀要総目次」は、本誌掲載に先立って、まず都倫研ホームページにアップロードしました。インターネット上でタイトルや執筆者名から検索することができるので、埋もれていた論文も活用できるようになることを期待してのことですが、嬉しいことに、本誌に掲載した浅野・坂口論文に、早速利用していただくことができました。また、師友の会で作成された「都倫研活動録」も掲載させていただきました。

今回、この編集作業を通じて、頂戴した原稿に目を通し、また紀要目次を作りながらつい引き込まれて古い紀要の中身を読んでいたら、人を呼び寄せ会を活気づけることができない自らの人品骨柄に悩み、後継者不足で先行きに感じている不安はさておいて、これはもう、自分にできることを、自分にできるうちは、やるしかないな、というところまで、気持ちが来てしまいました。伝統の重みが苦しみに感じられることもしばしばですが、何よりも、会に参加して下さる若い先生方の姿や、今回呼びかけに応じてお寄せ下さった原稿は、励みです。この論集にご執筆いただいたり、その中に登場されたかつての諸先輩方のような、人格も学識も備えていない自分を顧みながらも、せめてもの貢献として、若い先生方が都倫研を研修や発表の場として活用し、大きく育って行けるように、私もしばらくは頑張らなければいけないようです。

事務局長 和田 倫明

『都倫研紀要』第50集別冊  
都倫研の歩みと展望

平成23年3月31日 発行

発行者・著作者 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会

代表 会長 及川良一

事務局 公立大学法人首都大学東京 東京都立産業技術高等専門学校荒川キャンパス内

事務局長 和田倫明

〒116-0003 東京都荒川区南千住8-17-1

電話 03(3801)0145 ファックス 03(3801)9898

メール mwada@gakushikai.jp

URL <http://www.torinken.org/>

印刷所 大和印刷

〒165-0034 東京都中野区大和町4-31-12

電話 03(3717)0610 ファックス 03(3338)1669